上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書14

—中野市内その3・豊田村内—

牛出遺跡（うしで）
韮山遺跡（にらやま）
風呂屋遺跡（ふろや）
対面所遺跡（たいめんじょ）
飛山遺跡（とびやま）
大谷地遺跡（おおやち）
八号堤遺跡（はちごうつつみ）

1998

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

平成１０年３月３０日

各　位

（財）長野県埋蔵文化財センター
理事長　　戸 田 正 明

刊行物の送付について

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。日頃より、当センターの事業につきまして格別のご理解と、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

このたび、下記の発掘調査報告書を刊行いたしましたのでお送りいたします。資料としてご活用いただければ幸いです。

記

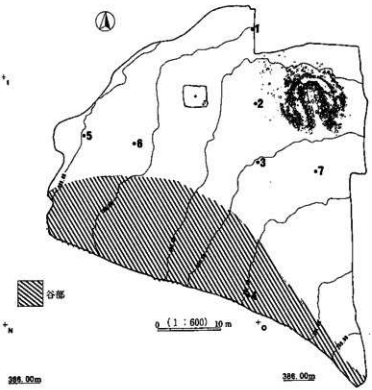
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書１４』－中野市内その３・豊田村内－
『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書２』－上田市内・坂城町内－
『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書３』－更埴市内－

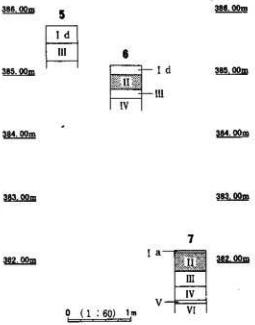
連絡先
（財）長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007 長野県更埴市屋代字清水 260-6
TEL　026-274-3891

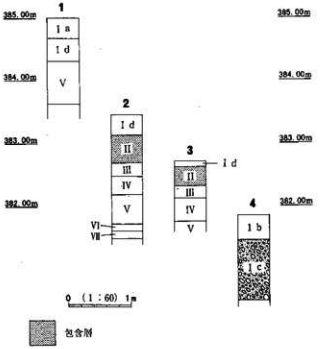
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書２８
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書１４』正誤表

下記の箇所に誤りが入りましたので、訂正くださいますようお願いいたします。

頁・図版番号	誤	正
31頁上から２行目	切り合	切り合い
33頁第14図土層注記	５：黒色が強い黒褐色で	５：黒色が強い黒褐色
３９頁下から１１行目	切り合関係	切り合い関係
４５頁第２５図土層注記	３：ＰＯ１覆土。（中略）土師器杯（第　図７）が伏せた状態で出土。	３：Ｐ１覆土。（中略）土師器杯（第２３図７）が伏せた状態で出土。
５２頁下から２０行目	6.5m×(4.5)m	6.5m×4.5m（調査区内の長さ）
５７頁下から１３行目	掘方面	掘り方面
６３頁下から３行目	褐色交じり	褐色混じり
４２頁第４２図土層注記	21：（中略）サンドイッチ状に混在に。	21：（中略）サンドイッチ状に混在。
９５頁下から１６行目	器面は荒い。	器面は粗い。
９５頁下から１１行目	器面は荒く、	器面は粗く、
９７頁下から４行目	器面が荒く	器面が粗く
９９頁下から８行目	荒い器面	粗い器面
１０１頁上から４行目	２２８から２３４には、	２２８から２３４は、
１０１頁下から１２行目	荒く施文され	粗く施文され
１２２頁上から７行目	荒いもの	粗いもの
１５２頁上から１１行目	９は須恵器の１０は灰釉陶器の短頸壺である。	９は須恵器の短頸壺、１０は灰釉陶器の短頸壺である。
１７６頁上から１２行目	切合	切り合い
１８６頁下から８行目	（長野県埋蔵文化財センター1998）	（長野県埋蔵文化財センター1997）
１９７頁下から１行目	『長野県埋蔵文化財センター年報９』	『長野県埋蔵文化財センター年報９』
２０６頁１１行目	２　出土遺物	２　出土遺物（第１１８図）
２４０頁第１３３図	清水山窯跡	清水山窯跡







Ⅰa層：Hue10YR5/6　黄褐色土
粒状像小の砂混じり粘土
堅く締まっているが粘りは少ない
母指頭大の礫を含む。（表土）

Ⅰb層：Hue2.5YR3/3　暗オリーブ褐色土
粒子の細かな砂質
しまりはよいが粘りは少ない
母指頭大の礫を含む（表土）

Ⅰc層：Hue10YR3/3　におい褐色土
砂質、こぶしから人頭大の礫を多量に含む

Ⅰd層：Hue7.5YR4/2　灰褐色土
砂混じりの粘土層
母指頭大の礫を含む（表土）

Ⅱ層　：Hue10YR3/2　黒褐色土
砂混じりの粘土
締まりはよいが粘りは少ない（包含層）

Ⅲ層　：Hue10YR4/4　褐色土
砂を少し含む粘土　粘りは少ない

Ⅳ層　：Hue10YR5/3　におい黄褐色土
粘土層だが粘りは少ない

Ⅴ層　：Hue10YR5/8　黄褐色土
細粒砂、母指頭大の小礫をまれに含む

Ⅵ層　：Hue10YR3/2　黒褐色土
細粒砂　締まりは良好だが粘性はない

Ⅶ層　：Hue10YR3/4　暗褐色土
細粒砂　締まりは良好だが粘性はない

包含層

こぶし大から人頭大の礫を多量に含む層

第52図　風呂屋遺跡　基本土層

上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書14

―中野市内その3・豊田村内―

牛出遺跡（うしで）
韮山遺跡（にらやま）
風呂屋遺跡（ふろや）
対面所遺跡（たいめんじょ）
飛山遺跡（とびやま）
大谷地遺跡（おおやち）
八号堤遺跡（はちごうつつみ）

1998

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

（Ⅲ群２類土器）

（Ⅲ群４類土器）

（Ⅲ群１類土器）

風呂屋遺跡出土土器

序

東北信を貫いて北上する上信越自動車道も、その長期にわたる工事の完成の時期を迎え、信州の大地にその全貌をあらわし、新しい時代の着実な到来を告げているかのようです。

その上信越自動車道は、善光寺平を走り抜け、信州中野インターチェンジの北で高丘丘陵を通り千曲川を渡り豊田村に入ります。しばらくはさらに北上し豊田飯山インターで大きく進路を西に変えます。ここで、佐久以来ともに北上を続けた千曲川に別れを告げ、信濃町の野尻湖のほとりを抜けて黒姫山の麓を新潟県へと向かいます。この自動車道の建設工事に先立って中野市内、豊田村では平成３年度から平成７年度まで遺跡の発掘調査が実施されました。本書はこのうちの中野市内１遺跡、豊田村６遺跡の発掘調査報告書となります。

これらの調査の中では、中野市牛出遺跡において古墳時代前期と平安時代の集落址を調査しました。豊田村では風呂屋遺跡において、縄文時代中期の土器や石器を発見することができました。これまで北信においては、縄文時代中期の資料は少なく、今回の調査によって得られた資料は、この時期の北信の縄文時代解明にとって貴重なものと言えます。またこの調査中に終末期の古墳一基を新たに発見し「風呂屋古墳」と命名いたしました。この古墳は豊田村教育委員会のご熱意によって付近の公園に移築保存がなされ、貴重な資料が残されることになりました。さらに対面所遺跡において、中世の墓地を調査しました。これは上今井地区の居館址や城跡など中世の歴史をとどめるこの地域の歴史の解明にとって貴重な資料となると思われます。

これらのほかに、菲山遺跡、飛山遺跡、大谷地遺跡、八号堤遺跡を調査し、縄文時代から中世・近世に至る貴重な資料を得ることができました。これらの資料は、北信濃の歴史の研究にとって重要な手掛かりを与えてくれるものと確信いたします。

最後になりましたが、発掘作業から本書刊行に至るまで深いご理解とご協力を戴いた、日本道路公団名古屋建設局・同中野工事事務所・長野県高速道局・中野高速道事務所・中野市・同教育委員会・豊田村・同教育委員会、対策委員会をはじめとする地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業にご協力いただいた多くの方々、直接ご指導を賜った長野県教育委員会の皆様にたいし、心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

平成10年３月31日

財団法人　長野県埋蔵文化財センター

理事長　　戸田　正明

例　言

1　本書は上信越自動車道建設工事にかかわる、中野市牛出遺跡、下水内郡豊田村韮山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷地遺跡・八号堤遺跡の発掘調査報告書である。

2　上記遺跡の概要は、㈶長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』11・12他で紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は本報告を持って訂正する。

3　本書に使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図（1：1,000）、下水内郡豊田村・中野市基本図（1：2,500、1：10,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：50,000）を使用した。

4　巻首図版及び写真図版の航空写真は株式会社こうそく・国際航業株式会社・㈱ジャスティク・株式会社パスコに撮影を委託したものである。

5　執筆分担は次のとおりである。

土屋　積　第1章1節1項、第3章6節

中島英子　第2章、第3章1・2・4・5節、第6章

石原州一　第5章1・2・5節

鶴田典昭　第1章（1節1項以外）、第3章3、第4章、第5章2節3項、第5章3・4節、第7章、第8章、第10章

6　本書の編集は鶴田典昭が行い、土屋積が全体を校閲した。

7　遺物番号は本文・挿図・表・実測図・写真のすべてに共通する。

8　註および参考文献は各章あるいは節の末にまとめたが、執筆者ごとに適宜挿入した部分がある。

9　発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのかたがたのご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。

10　本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、報告書刊行後長野県立歴史館に移管し保管する。

凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記の通りで、該当箇所のスケールの上に記してある。ただし地形図・調査区全体図・遺構配置図などは任意である。

1）主な遺構実測図

竪穴住居址・掘立柱建物址　　1：60　　住居内施設　　1：30

2）主な遺物実測図

土器拓本　1：3　　土器・土師器・須恵器実測図　1：4　　陶磁器　1：3

五輪塔・石臼　1：8　　縄文・弥生時代石器　2：3と1：3と1：6

2　本書に掲載した遺物写真の縮尺は、原則として実測図と同一としたが、必ずしもそうでないものもある。

3　遺物の出土地点の表記は、図版の表題に示すか、図版中の遺物番号の下に出土遺構名またはグリッド名を表記した。図中に表記のないものは観察表に出土地点を示している。

4　実測図中のスクリーントーン等は下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

1）遺構実測図

焼土・火床

炭化物層

2）遺物実測図

赤色塗彩

黒色処理

古代の土器は、土師器を断面白抜き、須恵器を断面黒塗り、灰釉陶器を断面網点とし区別した。

本 文 目 次

序

例言

凡例

第1章　発掘調査の概要

第1節　調査の経過……1

1 発掘調査に至る経緯　2 調査体制と調査期間　3 指導者・協力者

第2節　調査方法……3

1 発掘調査の方法

(1)遺跡名称と遺跡記号　(2)グリッドの設定と呼称法　(3)遺構記号

2 整理の方法

(1)遺物整理の方法と収納　(2)遺物の分類について

第3節　遺跡周辺の環境……5

1 遺跡位置と概要　2 周辺の遺跡

第2章　牛出遺跡第1地点

第1節　遺跡と調査の概要……13

1 遺跡の概要　2 調査の概要

第2節　中世・近世の遺構と遺物……15

1 掘立柱建物址　2 井戸址　3 溝　4 出土遺物

第3節　まとめ……19

第3章　牛出遺跡第2地点

第1節　遺跡と調査の概要……23

1 遺跡の概要　2 調査の概要

第2節　縄文時代・弥生時代の遺構と遺物……27

第3節　古墳時代の遺構と遺物……31

1 竪穴住居址・竪穴状遺構　2 土坑　3 小結

第4節　平安時代の遺構と遺物……39

1 竪穴住居址　2 土坑　3 金属器

第5節　中世の遺構と遺物……64

第6節　成果と課題―善光寺平北部の古墳出現前夜―……66

牛出遺跡遺物観察表……76

第4章　韮山遺跡

第1節　遺跡と調査の概要……82

1 遺跡の概要　2 調査の概要

第2節　出土遺物……84

第3節　まとめ……84

第5章　風呂屋遺跡
第1節　遺跡と調査の概要……85
1遺跡の概要　2調査の概要
第2節　縄文時代の遺物……90
1土器　2土製品　3石器
第3節　古墳時代の遺構と遺物（風呂屋古墳）……142
第4節　平安時代他の遺構と遺物……150
第5節　成果と課題―風呂屋遺跡縄文時代中期の土器について―……153
第6章　対面所遺跡
第1節　遺跡と調査の概要……166
1歴史的環境　2調査の概要
第2節　遺構……173
第3節　出土遺物……183
第4節　成果と課題―対面所遺跡の五輪塔群―……191
対面所遺跡遺物観察表……198
第7章　飛山遺跡
第1節　遺跡と調査の概要……203
1遺跡の概要　2調査の概要
第2節　遺構と遺物……206
1遺構　2出土遺物
第3節　まとめ……206
第8章　大谷地遺跡・八号堤遺跡
第1節　遺跡と調査の概要……210
1遺跡の概要　2調査の概要
第2節　大谷地遺跡の調査……214
1縄文時代の遺物　2平安時代の遺物
第3節　八号堤遺跡の調査……214
1縄文時代・弥生時代の遺物　2平安時代の遺物
第4節　名立神社跡等の確認調査……216
第5節　まとめ……216
第9章　自然科学分析による成果
第1節　樹種同定による成果……219
第2節　清水山窯跡④区の花粉化石群集……229
第3節　清水山窯跡④区産出の大型植物化石……237
第4節　清水山窯跡④区の放射性炭素年代測定結果……238
第5節　リン酸・カルシウム分析……239
第6節　長野県内窯跡出土須恵器および瓦胎土の化学組成……241
第7節　風呂屋遺跡・牛出遺跡の土器の胎土材料……255
第10章　結語……272

挿 図 目 次

第１図　グリッド呼称法
第２図　中野市・豊田村周辺の遺跡分布図
第３図　牛出遺跡　位置図
第４図　牛出遺跡　第１地点遺構配置図
第５図　牛出遺跡　第１地点井戸址
第６図　牛出遺跡　第１地点出土遺物（中世）
第７図　牛出遺跡　第１地点建物址群推定図
第８図　牛出遺跡　第２地点の土層
第９図　牛出遺跡　第２地点遺構配置図
第10図　牛出遺跡　第２地点ＳＫ17・ＳＫ19
第11図　牛出遺跡　第２地点縄文・弥生時代出土土器
第12図　牛出遺跡　第２地点出土石器
第13図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ03
第14図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ10
第15図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ11
第16図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ15
第17図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ17・ＳＢ18とその周辺の出土遺物
第18図　牛出遺跡　第２地点ＳＫ02
第19図　牛出遺跡　第２地点遺構外の遺物
第20図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ01
第21図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ02・ＳＫ14
第22図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ02遺物出土状況
第23図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ02出土遺物(1)
第24図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ02出土遺物(2)
第25図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ04・ＳＫ09
第26図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ04・ＳＫ09出土遺物
第27図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ05・ＳＫ04・05・07
第28図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ05・ＳＫ04・05・07出土遺物
第29図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06・ＳＫ15遺物出土状況
第30図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06ｃ
第31図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06出土遺物(1)
第32図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06出土遺物(2)
第33図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ07・ＳＫ20
第34図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ07出土遺物と出土状況
第35図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ08・ＳＢ09
第36図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ14
第37図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ14出土遺物(1)
第38図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ14出土遺物(2)
第39図　牛出遺跡　第２地点ＳＫ01・06・10・11・12
第40図　牛出遺跡　第２地点出土金属器
第41図　牛出遺跡　第２地点ＳＥ01
第42図　牛出遺跡　第２地点中世出土遺物
第43図　１・２・３・４段階の土器
第44図　４段階の土器
第45図　４・５・６段階の土器
第46図　６段階の土器
第47図　各遺跡の動向
第48図　韮山遺跡　調査範囲
第49図　韮山遺跡　出土遺物
第50図　風呂屋遺跡　調査区とグリッド配置図
第51図　風呂屋遺跡　遺構配置図
第52図　風呂屋遺跡　基本土層
第53図　風呂屋遺跡　縄文時代土器出土分布図
第54図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(1)
第55図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(2)
第56図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(3)
第57図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(4)
第58図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(5)
第59図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(6)
第60図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(7)
第61図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(8)
第62図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(9)
第63図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(10)
第64図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(11)
第65図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(12)
第66図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(13)

第67図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(14)
第68図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(15)
第69図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(16)
第70図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(17)
第71図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(18)
第72図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(19)
第73図　風呂屋遺跡　土偶のｘ線写真
第74図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(1)
第75図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(2)
第76図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(3)
第77図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(4)
第78図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(1)
第79図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(2)
第80図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(3)
第81図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(4)
第82図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(5)
第83図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(6)
第84図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(7)
第85図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(8)
第86図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(9)
第87図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(10)
第88図　風呂屋遺跡　古墳平面図(1)
第89図　風呂屋遺跡　古墳平面図(2)
第90図　風呂屋遺跡　古墳石室
第91図　風呂屋遺跡　古墳出土及び古墳関連遺物
第92図　風呂屋遺跡　ＳＢ01
第93図　風呂屋遺跡　平安時代出土遺物(1)
第94図　風呂屋遺跡　平安時代出土遺物(2)
第95図　風呂屋遺跡　遺構外の出土遺物（弥生時代・中世）
第96図　深沢タイプ土器の分布(1)
第97図　深沢タイプ土器の分布(2)
第98図　対面所遺跡　調査範囲
第99図　対面所遺跡　調査地点割図
第100図　対面所遺跡　遺物出土状況
第101図　対面所遺跡　第１五輪塔群上段部遺物出土状況
第102図　対面所遺跡　第１五輪塔群上段部火葬骨埋納ピットの配列と土層
第103図　対面所遺跡　第１五輪塔群下段
第104図　対面所遺跡　ＳＫ02
第105図　対面所遺跡　ＳＫ03・04
第106図　対面所遺跡　第２五輪塔群
第107図　対面所遺跡　ＳＫ01
第108図　対面所遺跡　出土遺物(1)
第109図　対面所遺跡　出土遺物(2)
第110図　対面所遺跡　出土遺物(3)
第111図　対面所遺跡　出土遺物(4)
第112図　豊田村小字地名図
第113図　五輪塔各部位計測凡例
第114図　飛山遺跡　調査範囲
第115図　飛山遺跡　塚測量図
第116図　飛山遺跡　塚の積み石出土状況
第117図　飛山遺跡　塚最下段の石列・ＳＨ01
第118図　飛山遺跡　出土遺物
第119図　大谷地遺跡・八号堤遺跡　調査範囲
第120図　大谷地遺跡　全体図
第121図　大谷地遺跡　出土遺物（縄文時代）
第122図　大谷地遺跡　出土遺物（平安時代）
第123図　八号堤遺跡　全体図
第124図　八号堤遺跡　出土遺物（縄文・弥生時代）
第125図　八号堤遺跡　鉄器
第126図　八号堤遺跡　出土遺物（平安時代）
第127図　材組織とその名称
第128図　清水山窯跡・飯田古屋敷遺跡出土植物遺体の顕微鏡写真(1)
第129図　清水山窯跡・飯田古屋敷遺跡出土植物遺体の顕微鏡写真(2)
第130図　清水山窯跡④区低湿地地点のセクション図と分析試料採取層準
第131図　清水山窯跡④区の主要花粉分布図
第132図　清水山窯跡④区から出土した花粉化石
第133図　全リン酸・全カルシウム含量
第134図　化学組成図(1)
第135図　化学組成図(2)
第136図　化学組成図(3)
第137図　化学組成図(4)
第138図　化学組成図(5)
第139図　化学組成図(6)

第140図　土器胎土中の粒子組成図
第141図　相関行列による第１—第２主成分散布図
第142図　土器胎土中の粒子顕微鏡写真(1)
第143図　土器胎土中の粒子顕微鏡写真(2)
第144図　土器胎土中の粒子顕微鏡写真(3)

挿表目次

第１表　中野市・豊田村周辺の遺跡地名表
第２表　牛出遺跡　第２地点出土鉄製品一覧表
第３表　風呂屋遺跡　土製円盤一覧表
第４表　風呂屋遺跡　古墳関係金属器一覧表
第５表　「深沢タイプ」の編年的位置づけ
第６表　「指頭圧痕文のある土器」の編年的位置づけ
第７表　「斜行沈線文土器」の編年的な位置づけ
第８表　対面所遺跡　出土地点別五輪塔と遺構数
第９表　対面所遺跡　火葬骨埋納ピット一覧表
第10表　対面所遺跡　空風輪の形態と出土地点別個数
第11表　対面所遺跡　火輪の形態と出土地点別個数
第12表　対面所遺跡　水輪の形態と出土地点別個数
第13表　対面所遺跡　地輪の形態と出土地点別個数
第14表　豊田村小字名一覧表
第15表　飛山遺跡　出土銭貨一覧表
第16表　清水山窯跡④区出土木材の層位別樹種
第17表　出土木材及び炭化材の遺構別樹種
第18表　花粉分析試料の含水比と灼熱減量
第19表　清水山窯跡④区から産出した花粉化石の組成表(1)
第20表　清水山窯跡④区から産出した花粉化石の組成表(2)
第21表　清水山窯跡④区の大型植物化石一覧表
第22表　清水山窯跡④区の放射性炭素年代測定結果
第23表　化学分析を行った須恵器・瓦および参考試料
第24表　須恵器・瓦及び参考試料の化学組成(1)
第25表　須恵器・瓦及び参考試料の化学組成(2)
第26表　須恵器・瓦及び参考試料の化学組成(3)
第27表　材料分析を行った土器試料
第28表　土器胎土中の粒子一覧表
第29表　土器胎土中粒子を対象とした主成分分析結果
第30表　土器胎土の材料と特徴

写真図版目次

牛出遺跡第１地点
ＰＬ１　空撮全景
ＰＬ２　ＳＥ02・03・04・07、中世の遺物
牛出遺跡第２地点
ＰＬ３　空撮全景、基本土層、ＳＢ02
ＰＬ４　ＳＢ06・07・15、ＳＫ01・02・03・06・15
ＰＬ５　縄文・弥生時代の遺物
ＰＬ６　古墳時代の遺物
ＰＬ７　平安時代の遺物(1)
ＰＬ８　平安時代の遺物(2)
風呂屋遺跡
ＰＬ９　空撮全景、調査前風景、土層断面、縄文時代遺物出土状況
ＰＬ10　縄文時代遺物出土状況、風呂屋古墳
ＰＬ11　風呂屋古墳
ＰＬ12　風呂屋古墳、ＳＢ01
ＰＬ13　縄文時代土器(1)

ＰＬ14　縄文時代土器(2)
ＰＬ15　縄文時代土器(3)
ＰＬ16　縄文時代土器(4)
ＰＬ17　縄文時代土器(5)
ＰＬ18　縄文時代土器(6)
ＰＬ19　縄文時代土器(7)
ＰＬ20　縄文時代土器(8)
ＰＬ21　縄文時代土器(9)
ＰＬ22　土偶(1)
ＰＬ23　土偶(2)
ＰＬ24　石器(1)
ＰＬ25　石器(2)
ＰＬ26　石器(3)
ＰＬ27　古代の須恵器・土師器

対面所遺跡

ＰＬ28　空撮全景、第１五輪塔群
ＰＬ29　第１～第４五輪塔群
ＰＬ30　出土遺物(1)
ＰＬ31　出土遺物(2)

飛山遺跡

ＰＬ32　空撮全景、塚
ＰＬ33　塚、出土遺物

大谷地遺跡・八号堤遺跡

ＰＬ34　空撮全景、遺物出土状況、調査風景、名立神社址試掘

各遺跡をまとめたもの

ＰＬ35　諸遺跡の金属器他（牛出遺跡・風呂屋遺跡・八号堤遺跡）

第１章　調査の概要

第１節　調査の経過

１　調査に至る経緯

本書所収遺跡の発掘調査は、日本道路公団（以下、公団）による中野市内の一部および豊田村における上信越自動車道建設に関連して行われたものである。須坂長野東インター以北では、小布施町・中野市内７遺跡の報告書を『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―小布施町内・中野市内その１・その２―』として平成８年度に刊行済みである。また、中野市内のいわゆるオリンピック道路関連の栗林・七瀬遺跡の報告書は平成５年度末に刊行済である。本書の刊行によって、平成３年以来、当センターが実施してきた小布施町・中野市・豊田村における上信越道関連の事業は終了する。なお、須坂市内では上信越道関連の発掘調査は行われなかった。

従来より、長野県においては、高速道にかかわる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応してきた。また、その発掘調査は（財）長野県埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施してきた。また、側道拡幅などこれらと一体的に行われる開発についても市町村と協議の上、センターが調査を行うことが多い。

信州中野インターチェンジ以北の中野市・豊田村の路線内では、周知の遺跡として、牛出窯跡（報告書既刊）・牛出遺跡・鬼坂（後に、「韮山」に名称変更）遺跡・風呂屋遺跡・飛山古墳（調査後、「飛山遺跡」に名称変更）・大谷地遺跡・八号堤遺跡が知られていた。これらは、高速道の基本計画策定以来、県教委の踏査等によって把握されたものであるが、試掘をともなう確認が行われたわけではないので、その範囲は未確定であり、また、未周知遺跡の存在も予想されるところであった。これら周知の遺跡の内容および範囲を把握するための試掘調査は、センターにより前年度および本調査と並行して実施され、未周知遺跡の存否を確認するための試掘調査は県教委を主体にセンターも参加して行われた。しかし、用地買収から着工までの期間が短く、試掘対象地の選定も制限されざるを得なかった。

試掘などによって、発掘調査の前年および実施段階に、牛出遺跡においては当初の周知範囲を縮小する一方、新たに第２地点を調査対象としたが、工事工程が迫っており、やや変則的調査を行わざるを得なかった。韮山遺跡は、内容不明なまま調査に入ったが、非常に密度の薄い遺跡であった。風呂屋遺跡は周知範囲とやや異なる地点が主な調査対象地となった。飛山古墳は古墳ではなく塚であったため名称を変更することとなった。大谷地遺跡・八号堤遺跡は２年次にわたる調査が予定されていたが、密度が薄く単年度で終了した。大谷地遺跡・八号堤遺跡周辺では範囲外に遺物の散布を見た地点があり、入念な試掘を行ったが遺構・遺物は確認されず、当初範囲にとどまった。一方、工事中の遺物の発見により対面所遺跡が新たに加わった。

発掘調査は平成６年度を中心としたが、牛出遺跡第２地点・対面所遺跡は平成７年度に実施した。また、それぞれの冬期間および平成８・９年度に整理作業を実施した。

センターでは、長野自動車道・上信越自動車道などの調査に対応するために、昭和62年度より長野調査

事務所をおいて、須坂長野東インターチェンジ以南の調査に対応してきた。平成3年、中野市内のいわゆるオリンピック道路に関してもセンターが調査を行うことになり、須坂以南より遅れて着工した上信越道の調査も本格化するため、中野市立ケ花に中野支所を設置した。中野支所は翌4年から中野調査事務所となったが、平成7年度、新潟県境までの上信越自動車道の発掘調査を終えて、8年3月、閉所された。以後の整理作業は長野調査事務所に引き継がれている。

各遺跡の調査年次は次項に記したが、発掘および整理は年度ごとに公団が県教委に委託し、県教委がセンターに再委託して実施された。発掘調査の契約面積は下記のとおりである。

（年　度）	（遺　跡）		（調査契約面積）
平成6年度	中野市	牛出遺跡	3,500㎡
	豊田村	韮山遺跡	2,000㎡
	同	風呂屋遺跡	4,000㎡
	同	飛山遺跡	1,000㎡
	同	大谷地遺跡	4,800㎡
	同	八号堤遺跡	3,000㎡
平成7年度	中野市	牛出遺跡	2,000㎡
	同	対面所遺跡	1,500㎡

2　調査体制と調査期間

調査体制及び調査期間は以下のとおりである。

(1)　平成6年度

調査体制　事務局長　峯村忠司
事務局総務部長　神林幹生
同　調査部長　小林秀夫
中野調査事務所長　関　孝一
同　庶務課長　高野幹郎　6月より村山茂美
同　調査課長　土屋　積
同　調査研究員・調査員　酒井健次　石原州一　前田利彦　中島英子

調査期間　牛出遺跡　平成6年9月12日～同年10月24日
韮山遺跡　平成6年4月11日～同年4月15日
風呂屋遺跡　平成6年6月22日～同年9月30日
飛山遺跡　平成6年10月31日～同年12月15日
大谷地遺跡　平成6年4月18日～同年6月21日
八号堤遺跡　平成6年4月18日～同年6月21日

(2)　平成7年度

調査体制　事務局長　峯村忠司
事務局総務部長　西尾紀雄
同　調査部長　小林秀夫
中野調査事務所長　関　孝一
同　庶務課長　村山茂美

同　調査課長　　土屋　積

同　調査研究員・調査員　臼田広之　中島英子

調査期間　牛出遺跡　平成7年5月15日～同年8月23日

対面所遺跡　平成7年4月5日～同年5月12日

(3)　平成8年度

整理体制　事務局長　　青木　久

事務局総務部長　　西尾紀雄

同　調査部長　　小林秀夫（兼長野調査事務所長）

長野調査事務所長　小林秀夫

同　庶務課長　　外谷　功

同　調査第2課長　土屋　積

同　調査研究員・調査員　鶴田典昭　中島英子　石原州一

整理作業内容　遺物の接合と実測・トレース、遺構図のトレースを行う。

(4)　平成9年度

整理体制　事務局長　　青木　久

事務局総務部長　　山崎悦雄

同　調査部長　　小林秀夫（兼長野調査事務所長）

長野調査事務所長　小林秀夫

同　庶務課長　　外谷　功

同　調査第2課長　土屋　積

同　調査研究員・調査員　鶴田典昭　中島英子　石原州一

整理作業内容　遺物実測図・遺構図の図版組、原稿執筆、編集、校正を行う。

3　指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導ご協力を得た。お名前を記して感謝したい。
(敬称略・五十音順)
岸本雅敏　久保浩美　小島俊彰　小山丈夫　酒井重洋　神保孝造　寺崎裕助　傳田伊史　中島庄一
平川南　福島正樹　藤沢高広　望月静雄　綿田弘美

第2節　調査の方法

1　発掘調査の方法

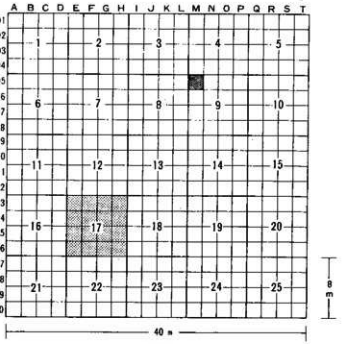
(1)　遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡名には下記の略号を用いた。遺物、写真他の記録類の注記などはこれによる。

牛出遺跡	AUD	韮山窯跡	ANR
風呂屋遺跡	AFR	対面所遺跡	ATM
飛山遺跡	ATB	大谷地遺跡	AOY
八号堤遺跡	AHT		

(2)　グリッドの設定と呼称法（第1図）

グリッドの設定は、国土座標を利用し大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。まず調査区全体にかかる200m×200mの区画を設定し、これを大々地区としⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・とローマ数字で表記した。この大々地区を40m×40mの25区画に分割し大地区とした。大地区の呼称は北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いた。その大地区を8m×8mの25区画に分割し中地区とした。中地区の呼称は、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。同じく大地区を2m×2mの400区画に分割して小地区とした。小地区は、大地区の北西角を起点とし、X軸上に西から東へAからTまでのアルファベット、Y軸上に北から南へ01から20の数字を付して、両者の組み合わせで「A01」のように小地区名とした。これらの呼称を組み合わせ、例えば、大々地区「Ⅱ区」のうち、大地区「L区」の中の中地区「17区」（8m×8m）は「ⅡL17」と表記される。また、大地区「L区」を小地区に分割した「M05」（2m×2m）の場合は、「ⅡLM05」と表記される。



第1図　グリット呼称法

グリッドの設定に際し、大谷地遺跡と八号堤遺跡は一括して大々地区の設定を行い、他の遺跡は単独で大々地区の設定を行った。また、飛山遺跡では塚の形状に沿ってグリッドを設定したため国家座標とは一致しない。

(3)　遺構記号と遺構番号

記録・注記等の便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況等を指標としたもので、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。混乱を避けるため原則として遺構記号・遺構番号の変更は行わず、本報告書は発掘時に付した遺構記号・遺構番号を使用している。このため整理段階で遺構とは認められないものがあった場合、遺構番号に欠番が生じている。また、遺構番号が重複してしまったものについてのみ整理作業段階で遺構番号の変更を行っている。

なお、本書で用いた遺構記号は当埋文センターで共通に用いているもので、以下のとおりである。

［SB］2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。（竪穴住居址、竪穴状遺構）

［SK］単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さな掘り込み。（土坑、落とし穴貯蔵穴、井戸、粘土採掘址等。）

［SA］SBより小さな落ち込みや石が、列として配置されるもの。柵、築地。

［ST］SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの。（掘建柱建物址、礎石を利用した建物址）

［SD］帯状の掘り込み。（溝、河道他）

［SF］単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。（火床、炉址）

［ＳＨ］石が面的に集中するもの。（集石）

［ＳＱ］遺物が面的に集中するもの。（ごみ捨て場、祭祀址、旧石器時代石器製作址他）

［ＳＸ］以上の遺構記号及びＳＬ（水田・畑跡）、ＳＣ（道路）、ＳＭ（古墳・墳墓）の諸記号に該当しない不明遺構。

さらに、ＳＢ・ＳＴ内の掘り込み（柱穴等）、五輪塔に関わる小土杭にはＰを付した。

２　整理作業の方法

(1)　遺物整理の方法と収納

遺物への注記は、白色で書いたものと黄色で書いたものがある。白色の注記は発掘時の出土地点（遺構名、グリッド名など）と遺物取り上げ番号を示す。黄色の注記は整理時の整理番号を示す。整理番号は実測図、拓本などの資料化したすべてに付し、遺跡ごとの通し番号とした。この整理番号は実測図番号とも一致している。また整理番号は、遺物の種類または時期によって原則として以下の番号を用いた。また、整理番号を付した後に、異なる番号のものが接合するなど、整理番号に欠番が生じている。

古代土師器・須恵器	No.0001　～　No.1000
弥生時代・古墳時代の土師器	No.1001　～　No.2000
縄文土器	No.2001　～　No.3000
石器・石製品	No.3001　～　No.4000
金属製品	No.5001　～　No.6000
中・近世陶磁器	遺跡により異なり、不統一

金属製品は、保存処理を施し収納した。遺物・記録類は当埋蔵文化財センター「整理収納システム要項」に従い整理収納した。なお、遺物類は整理番号を付し図化を行ったものとそれ以外のものを分け、それぞれを遺構単位に収納した。遺物記録類のすべては整理終了後、長野県立歴史館に移管する。

(2)　遺物の分類について

古墳時代前期の土師器、奈良平安時代の土師器・須恵器の分類については『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』によった。その他の遺物については当該遺跡で分類の基準を示した。

第３節　遺跡周辺の環境

１　遺跡の位置と概要

本書で報告する牛出遺跡は中野市に、韮山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・八号堤遺跡・大谷地遺跡は下水内郡豊田村に所在する（詳細は各章を参照）。

善光寺平を北上した千曲川は鳥居川と篠井川が合流する中野市立ケ花で川幅を狭め、東側は高丘・長丘丘陵、西側は奥手山丘陵・米山山塊に挟まれて蛇行し、さらに北へと流れる。牛出遺跡は千曲川東岸の高丘丘陵に、韮山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡は対岸の米山山塊の千曲川に面した斜面地に、八号堤遺跡・大谷地遺跡は奥手山丘陵の千曲川とは反対側の斜面地に立地する（第２図）。

いずれの遺跡も今回が初めての発掘調査であり、遺跡全体を調査したものではなく、遺跡全体の評価はできないが、以下に発掘調査で得られた成果の概要をまとめてみたい。

旧石器時代では韮山遺跡でスクレイパーと疑われる石器が出土したのみである。

縄文時代では風呂屋遺跡で中期前葉から中葉の所謂「深沢タイプ」の土器を主体とした遺物が出土し、牛出遺跡では晩期の土器がわずかに出土したが遺構は確認されていない。特に、風呂屋遺跡では中期中葉の土器・石器・土製品・石製品が多量に出土した。竪穴住居址などの遺構は検出されなかったものの、当該期には集落として機能した遺跡であると思われる。大谷地遺跡でも中期中葉の土器・石器がわずかに出土した。

弥生時代では牛出遺跡で土器がわずかに出土したのみである。

古墳時代では、牛出遺跡第2地点で千曲川に面した前期の集落跡が、風呂屋遺跡で後期から奈良時代初頭の古墳が発見された。

中世では、牛出遺跡第1地点で集落跡、対面所遺跡では多量の五輪塔を伴う墓址群、飛山遺跡では積み石を伴う塚状の遺構を調査した。なお、対面所遺跡と飛山遺跡は隣接し、互いに見通せる遺跡であり、成立時期も重複することから、飛山遺跡の塚は対面所遺跡の中世墓址群に関連する施設である可能性がある。

2　周辺の遺跡

周辺の遺跡分布を第2図に示した。これらの内、発掘調査が行なわた遺跡を中心に本報告書に関る時期の遺跡を概観したい。

旧石器時代　今回の発掘調査では豊田村韮山遺跡で当該期とおもわれる石器が2点出土したのみである。周辺の丘陵上には中野市沢田鍋土遺跡・がまん淵遺跡、豊野町南曽峯遺跡など県内最古級の石器群が発見されている。また、飯山市の丘陵上に立地する遺跡群、信濃町の野尻湖遺跡群など多数の遺跡が調査されている。これらの遺跡には韮山遺跡で発見された石器と同質の安山岩の石器が見られる。なお、豊田村では旧石器時代の発掘調査事例はない。

縄文時代中期　風呂屋遺跡では中期前葉から中葉の土器群が出土した。風呂屋遺跡と同時期と思われる中野市姥ケ沢遺跡、飯山市深沢遺跡でも類似する土器が出土している。この他に、豊野町上浅野遺跡・上赤塩遺跡でも中期前葉から中葉の資料が出土しており、善光寺平北辺の奥信濃では縄文時代中期の前半期の遺跡が集中して発見されている。しかしながら、 周辺地域の縄文時代中期後葉の遺跡はあまり調査例がなく、中野市栗林遺跡・沢田鍋土遺跡などがあげられる。

古墳時代前期　弥生時代後期末から古墳時代前期の遺跡が周辺で多数調査され、奥信濃における当該期の考古学的様相が明らかとなりつつある。中野市がまん淵遺跡・七瀬遺跡・牛出古窯遺跡・安源寺遺跡・間山遺跡、小布施町中条堀廻遺跡・大道下遺跡などの集落址、安源寺遺跡前方後方形周溝墓、中野市沢田鍋土遺跡の大規模な粘土採掘址などが発掘調査によって明らかとなってきた。特に、弥生時代末から古墳時代初頭には中野市周辺への北陸系土器や東海系土器の流入が指摘されており、弥生時代末のがまん淵遺跡の防御的集落の存在などと合わせて、弥生時代から古墳時代への変換期を探る上で重要な位置を占める地域と見られる。

奈良・平安時代　高丘丘陵古窯址群、髻山古窯址群では7世紀末から9世紀前半にかけて須恵器生産が行なわれており、多数の窯址が調査され、奥信濃における須恵器生産に関する資料は蓄積されつつある。しかしながら、奥信濃では奈良時代から平安時代にかけての集落跡の資料は極めて断片的である。奈良時代では、竪穴住居などの集落域の遺構の調査例は少なく、中野市沢田鍋土遺跡・牛出古窯遺跡など須恵器生産の工房址と思われるもののみである。平安時代では、中野市栗林遺跡・間山遺跡・安源寺遺跡・宮反遺跡などにわずかに調査例があるが、集落の全体像を明らかにする資料は現在のところ得られていない。なお、第2図の範囲外ではあるが、中野市の北に隣接する飯山市の屋株遺跡・北原遺跡・鍛冶田遺跡・小

佐原遺跡・岡峯遺跡・上野遺跡などで数棟の竪穴住居址が調査されている。また、周辺の山間地には弥生時代以降遺跡はあまり見られず、平安時代に再び遺跡が多く見られるようになる。信濃町丸谷地遺跡・貫ノ木遺跡・針ノ木遺跡、東裏遺跡・七ツ栗遺跡などで竪穴住居址が調査されており、平安時代の山間地での資料の蓄積もされつつある。これらの遺跡では平地の大集落とは異なり、一から数棟の竪穴住居を単位としたものであるが、山間地への生活圏の拡大を何わせる。

中世　中野市周辺には斜面地に立地する五輪塔を伴う中世墓址群が存在しており、中野市清水山中世墓址群・西山中世墓址遺跡、本書報告の対面所遺跡が発掘調査されており、いずれも重複した時期に形成されてたものであると推定されている。この他、中野市高梨城跡、同牛出館跡などの発掘調査が報告されており、奥信濃における中世の考古学的資料も蓄積されつつある。

参考文献

長野県史刊行会　1981『長野県史』考古資料編 全1巻(1)遺跡地名表

文化庁　1983『全国遺跡地図　長野県』

豊野町教育委員会　1984『北土井』

豊野町教育委員会　1985『旗塚遺跡』

飯山市教育委員会　1986『飯山市の遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第14集

中野市教育委員会　1989『中野市遺跡詳細分布図』

飯山市誌編纂委員会　1993『飯山市誌』歴史編上

長野県埋蔵文化財センター　1993『長野県埋蔵文化財センター年報』10

長野県埋蔵文化財センター　1994『長野県埋蔵文化財センター年報』11

信濃町教育委員会　1994『丸谷地遺跡・大道下遺跡』

第1表　中野市・豊田村周辺の遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文早	縄文前	縄文中	縄文後	縄文晩	弥生中	弥生後	古墳	奈良・平	中世	近世
A	牛出遺跡	中野市牛出・北原						○	○		○	○	○	
B	五社遺跡(飯塚遺跡)	豊田村上今井・五山	○											○
C	風呂敷遺跡	豊田村上今井・風呂屋		○	○	○	○				●			○
D	対面所遺跡	豊田村豊津												○
E	狐山遺跡	豊田村豊津・狐山				○							○	○
F	大谷地遺跡	豊田村穴田・相沢			○	○							○	○
G	八号遺跡	豊田村穴田・相沢				○							○	
J	南大原遺跡	豊田村上今井・南大原			○					○			○	
J	山根遺跡	豊田村上今井・山根				○				○			○	
J	寺畑遺跡	豊田村上今井・寺畑								○			○	
K	北城山城跡	豊田村上今井											○	○
L	風呂屋荒屋遺跡	豊田村上今井・荒屋												○
M	南大屋遺跡	豊田村豊津・南大屋				○	○			○				○
N	千田遺跡	豊田村豊津・曽佐・千田				○				○	○			
O	柳佐城址	豊田村豊津・曽佐											○	
P	堀越遺跡	豊田村豊津・曽佐・堀越								○				
Q	南大塚遺跡	豊田村豊津・曽佐・南大塚								○				
R	沖浄遺跡	豊田村豊津・曽佐・雲神									○			
S	観鏡平遺跡	豊田村豊津・曽佐・観鏡平				○							○	
T	観鏡平北遺跡	豊田村豊津・曽佐・観鏡平				○								
U	笠倉遺跡	豊田村豊津・笠倉				○				○	○			
V	笠倉遺跡	豊田村豊津・笠倉・笠倉				○				○	○			
W	柳久保遺跡	豊田村豊津・石谷・柳久保											○	
X	大日影遺跡	豊田村豊津・大日影	○											
Y	相沢遺跡	豊田村穴田・相沢		○		○								
Z	北水江遺跡	豊田村水江・北水江				○								
a	熊田遺跡	豊田村上今井北・北上・熊田												
b	高上遺跡	豊田村高石・堅石保			○	○								
c	諏訪遺跡	豊田村水江・諏訪											○	
d	原遺跡	豊田村穴田・横川											○	
e	長沢遺跡	豊田村水江・横川												
f	月夜台遺跡	豊田村水江・横路		○	○									
g	横路遺跡	豊田村水江・横路			○									
h	池の下遺跡	豊田村水江・諏訪									○			
i	池の平遺跡	豊田村水江・諏訪											○	
j	大塩遺跡	豊田村水江・諏訪				○							○	
k	南山根遺跡	豊田村水江・諏訪												
l	江坪遺跡	豊田村横倉・江坪										○	○	
m	宮の腰遺跡	信濃町腰高・宮の腰							○		○			
n	柳町遺跡	信濃町平岡・上の山											○	
o	中島遺跡	信濃町腰高・北中島											○	
E	北中島遺跡	信濃町腰高・北中島											○	
q	道新(五社)遺跡	信濃町北の原・道新山											○	○
r	上の山遺跡	信濃町腰高・上の山											○	
s	戸草城跡	信濃町古間・戸草												○
t	大道下遺跡	信濃町	○	○		○								
u	丸井坪遺跡	信濃町	○	○										
v	向原遺跡	信濃町			○									
w	鎌場遺跡	信濃町大井・鳴井												
x	宮が原Ⅰ遺跡	信濃町大井・宮が原											○	
y	宮が原Ⅱ遺跡	信濃町大井・宮が原												
z	宮が原Ⅲ遺跡	信濃町大井・鳴井											○	
A	仁之倉遺跡	信濃町			○	○	○	○					○	
B	仁之倉Ⅱ遺跡	信濃町柏原・仁之倉			○	○	○	○					○	
C	仁之倉A遺跡	信濃町柏原・仁之倉		○	○	○	○	○					○	
D	新田川遺跡	信濃町											○	
E	熊倉遺跡	信濃町											○	
F	北ノ原B遺跡	信濃町平岡・上の山											○	
G	北ノ原A遺跡	信濃町平岡・上の山											○	
H	岡馬B遺跡	信濃町											○	
I	岡馬A遺跡	信濃町	○											
J	柳原遺跡	信濃町	○										○	
K	一里塚遺跡	信濃町											○	○
L	五龍堂遺跡	信濃町前原・五龍堂		○	○	○	○	○						
M	小古間遺跡	信濃町											○	
N	清水東遺跡	信濃町	○	○										
O	清水北遺跡	信濃町											○	
P	吹野原A遺跡	信濃町古間・原											○	
Q	吹野原B遺跡	信濃町古間・原	○										○	
R	山根遺跡	信濃町古間・山根											○	
T	下山条A遺跡	信濃町野尻・下山条												
T	戸草遺跡	信濃町		○	○	○	○							
U	向ノ原遺跡	信濃町											○	
V	鹿ノ神遺跡	信濃町古間・鹿倉・雲ノ神・鹿倉												
W	赤谷遺跡	〃											○	
X	鹿倉ノ原遺跡	〃			○	○	○							
Y	日向林A遺跡	〃				○								
Z	日向林B遺跡	〃		○	○	○	○	○						

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文早	縄文前	縄文中	縄文後	縄文晩	弥生中	弥生後	古墳	奈良・平	中世	近世
79	七ツ栗遺跡	信濃町古間・富倉・東ノ神・鹿倉												
80	番光原遺跡	〃												
81	南原A遺跡	〃												
82	南原B遺跡	〃												
83	乙原遺跡	信濃町古間・荒湯原				○							○	○
84	西久保遺跡	信濃町											○	
85	水又遺跡	信濃町											○	
86	富倉原遺跡	信濃町古間・富倉・東ノ神・鹿倉・東												
87	大日向遺跡	〃												
88	西富倉遺跡	信濃町											○	
89	鹿ヶ谷遺跡	信濃町古間・富倉・東ノ神・鹿倉											○	
90	入平遺跡	信濃町古間・富倉	○											
91	針ノ木遺跡	信濃町											○	
92	柴山遺跡	信濃町柏原・五輪堂												
93	沒蔵敷遺跡	信濃町柏原・五輪堂		○									○	○
94	宮表遺跡	信濃町柏原・五輪堂		○									○	○
95	小丸山公園遺跡	信濃町野尻・向新田	○	○									○	○
96	野尻湖団地遺跡	信濃町柏原											○	
97	鉢ヶ丘遺跡	信濃町柏原		○									○	
98	上ノ原遺跡	信濃町		○									○	
99	伊勢丸山遺跡	信濃町柏原		○									○	
100	大久保海道遺跡	信濃町柏原		○										
101	大久保B遺跡	信濃町柏原											○	
102	大久保A遺跡	信濃町柏原				○							○	
103	大久保C遺跡	信濃町柏原				○							○	
104	神出A遺跡	信濃町野尻・神出											○	
105	弘久保遺跡	信濃町		○		○		○			○			
106	貫ノ木遺跡	信濃町野尻・貫ノ木		○	○								○	
107	神出B遺跡	信濃町野尻・神出											○	
108	神出北遺跡	信濃町野尻・神出											○	
109	仲郷遺跡	信濃町野尻		○	○		○	○				○	○	○
110	塩城遺跡	信濃町柏原		○	○						○	○		
111	立ケ鳥遺跡	信濃町柏原		○									○	
112	荒熊ヶ崎遺跡	信濃町古間・富倉・西原		○	○				○	○				
113	砂張遺跡	信濃町古間・富倉・西原	○											
114	蟻ヶ崎遺跡	信濃町野尻	○		○	○	○							
115	駒場遺跡	信濃町野尻	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	
116	弁慶遺跡	信濃町野尻										○	○	
117	野尻A遺跡	信濃町古間・雷洞				○								
118	横久保遺跡	信濃町				○					○			
119	宮沢遺跡	信濃町			○									
120	向新田A遺跡	信濃町野尻・向新田	○	○	○									
121	博明台遺跡	信濃町野尻	○		○									
122	下桔梗ヶ遺跡	信濃町野尻・下桔梗												
123	南曽崎遺跡	豊野町豊沢・南曽崎	○							●	○			
130	下條遺跡	豊野町豊沢・下條	○											
131	小船井遺跡	豊野町豊沢・小船井											○	
132	緊張山遺跡	豊野町											○	
133	どうろく神遺跡	豊野町大倉・蟻ヶ崎											○	
134	堀上遺跡	豊野町大倉・堀上											○	
135	北原遺跡	豊野町大倉・蟻ヶ崎											○	
136	日影川谷遺跡	豊野町川谷											○	
137	向平遺跡	豊野町上倉・向平											○	
138	立ガッ広遺跡	豊野町大倉・立石広				○			○	○	●			
139	上浅野遺跡	豊野町浅野・上浅野									●	○		
140	大川端・町尻遺跡	豊野町大川端・町尻											○	
141	大道原遺跡	豊野町大道原											○	
142	鍛冶屋敷遺跡	豊野町大倉・鍛冶屋・蟻場								○	○	○		
143	中島遺跡	豊野町大倉・中島											○	
144	西坪遺跡	豊野町西坪								○				
145	二ツ石遺跡	豊野町箭沢・二ツ石												
146	小柳遺跡	豊野町豊野・小柳												
147	ゴンボ山遺跡	豊野町豊野・小柳												
148	月夜下古墳	豊野町豊野・小柳									●			
149	泉平古墳2	豊野町豊野・泉平									●			
150	泉平古墳1	豊野町豊野・泉平									●			
151	泉平遺跡	豊野町豊野・泉平											○	
152	根岸古墳	豊野町豊野・大久保									●			
153	西編帝遺跡	豊野町豊野・大久保										○	○	
154	大久保遺跡	豊野町豊野・大久保										○	○	
155	大久保古墳	豊野町豊野・大久保									●			
156	八雲台古墳	豊野町豊野・上伊豆毛									●			
157	上伊豆毛古墳	豊野町豊野・上伊豆毛									●			
158	宮立遺跡	豊野町豊野・上二城										○		
159	豊野遺跡	豊野町豊野・上伊豆毛									●	●		
160	豊野遺跡	豊野町豊野・上伊豆毛											○	
161	東平山古墳	豊野町豊野・東平山									●			
162	竹入原古墳	豊野町豊野・東平山									●			

第１表　中野市・豊田村周辺の遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文早	縄文前	縄文中	縄文後	縄文晩	弥生中	弥生後	古墳	古代	中世	近世
163	ナベ山遺跡	豊野町豊野・ナベ山									○			○
164	堂ヶ遺跡	豊野町西保									○			○
165	甘地遺跡	本札村坂口字甘地			○	○					○			○
166	上ノ原遺跡	本札村坂口・上ノ原									○	○		
167	東久保遺跡	本札村地之山・東久保	○											
168	かつら風遺跡	本札村地之山・かつら原												
169	丸山遺跡	本札村高牧・丸山									○	○		
170	本石山遺跡	本札村野村・上本石山			○		○	○						
171	桜清水遺跡	本札村野村・上桜清水									○	○		
172	本厚ヶ遺跡	本札村野村・上本石山					○	○						
173	修道遺跡	本札村横手・修道									○			
174	南遺跡	本札村・博荒・南												
175	大岩遺跡	本札村横手・大岩												
176	下向山遺跡	本札村古町・下向山									○	○		
177	関原遺跡	本札村横手												
178	上ノ山遺跡	本札村古町・上ノ山									○	○	○	
179	大浦遺跡	本札村古町												
180	殿原敷遺跡	本札村五町・殿原敷									○	○	○	
181	前田遺跡	本札村西鳥河・前田			○	○					○	○	○	
182	鳥町遺跡	本札村鳥町・鳥町									○	○		
183	唐申坂遺跡	本札村鳥河原・唐申坂									○	○	○	
184	七熊遺跡	本札村鳥河・七熊									○	○		
185	梅神山遺跡	本札村												
186	笹菊原遺跡	本札村												
187	西屋敷遺跡	本札村・西屋敷					○					○		
188	小木遺跡	本札村小玉										○		
189	霞ノ沢ミ号洞穴	本札村												
190	関堀址	本札村												
191	宮町遺跡	本札村平札・宮町			○	○	○				○			
192	橋詰遺跡	本札村平札・中高山									○			
193	宮の下遺跡	本札村福井・宮の下					○		○	○				
194	大久保遺跡	本札村福井・大久保	○								○			
195	山王平遺跡	本札村平札・山王									○			
196	前高山遺跡	本札村平札・古山									○			
197	中高山遺跡	本札村平札・高山									○			
198	東岸遺跡	本札村平札・東岸									○			
199	中村遺跡	本札村平札・中村									○			
200	西北遺跡	本札村平札・西北									○			
201	小丸山古墳	本札村平札・西南										●		
202	平田南遺跡	本札村平札・食山			○	○					○			
203	高岳不明	本札村平札												
204	東坪原遺跡	本札村平札・西浦									○			
205	柳沿久保古墳	本札村平札・柳沿久保									●			
206	春松海原址	本札村												
207	春松北原址	本札村												
208	鈴の木１号洞穴	本札村												
209	鈴の木２号洞穴	本札村												
210	山沢１号窯址	中札村												
211	大日前遺跡	中野市南大熊・大日前												
212	八重日向遺跡	中野市南大熊・日向									○			
213	大熊日和遺跡	中野市北大熊・日和									○			
214	平屋下野遺跡	中野市北大熊・日向									○			
215	上ゲヤ山古墳	中野市北大熊・熊田・前狭田									●			
216	三ヶ和遺跡	中野市北大熊・熊田									○			
217	金塊山ヶ窯	中野市新野・金塊山									●			
218	新野１号古墳	中野市新野・金塊山									●			
219	新野２号古墳	中野市新野・金塊山									●			
220	行人塚遺跡	中野市新野・行人塚・宮道・金塊												
221	高原遺跡	中野市北大熊・高原・赤沼									○			
222	横井塚遺跡	中野市横井・新沢									○	○		
226	新野遺跡	中野市新野・新野・川野入・宮下			○						○			
227	新野上・東遺跡	中野市新野・上東・宮道下									○			
228	岡山遺跡	中野市岡山・唐松・石堂道下・宮前・四下			○	○					○	○		
229	岩鼻遺跡	中野市岡山・岩鼻・酒水路									○			
230	横入敷遺跡	中野市岡山・横入									○			
231	金塊坂伝跡	中野市須山・興台・道入									○			
232	鉄沢山一東跡群	中野市更科・鉄沢									○			
233	上の山古墳	中野市更科・上の山・野鹿									●			
234	鳳岡城跡	中野市鳳岡・古城・鳳岡・山神下												
235	北越色遺跡	中野市更科・北越色												
236	伊勢山下遺跡	中野市更科・黒山・御陣石下・上小田中・城懸	石											
237	新保遺跡	中野市新保・中野西									○			
238	西山仮跡	中野市鳥居・西山・東大橋北ノ窪									○			

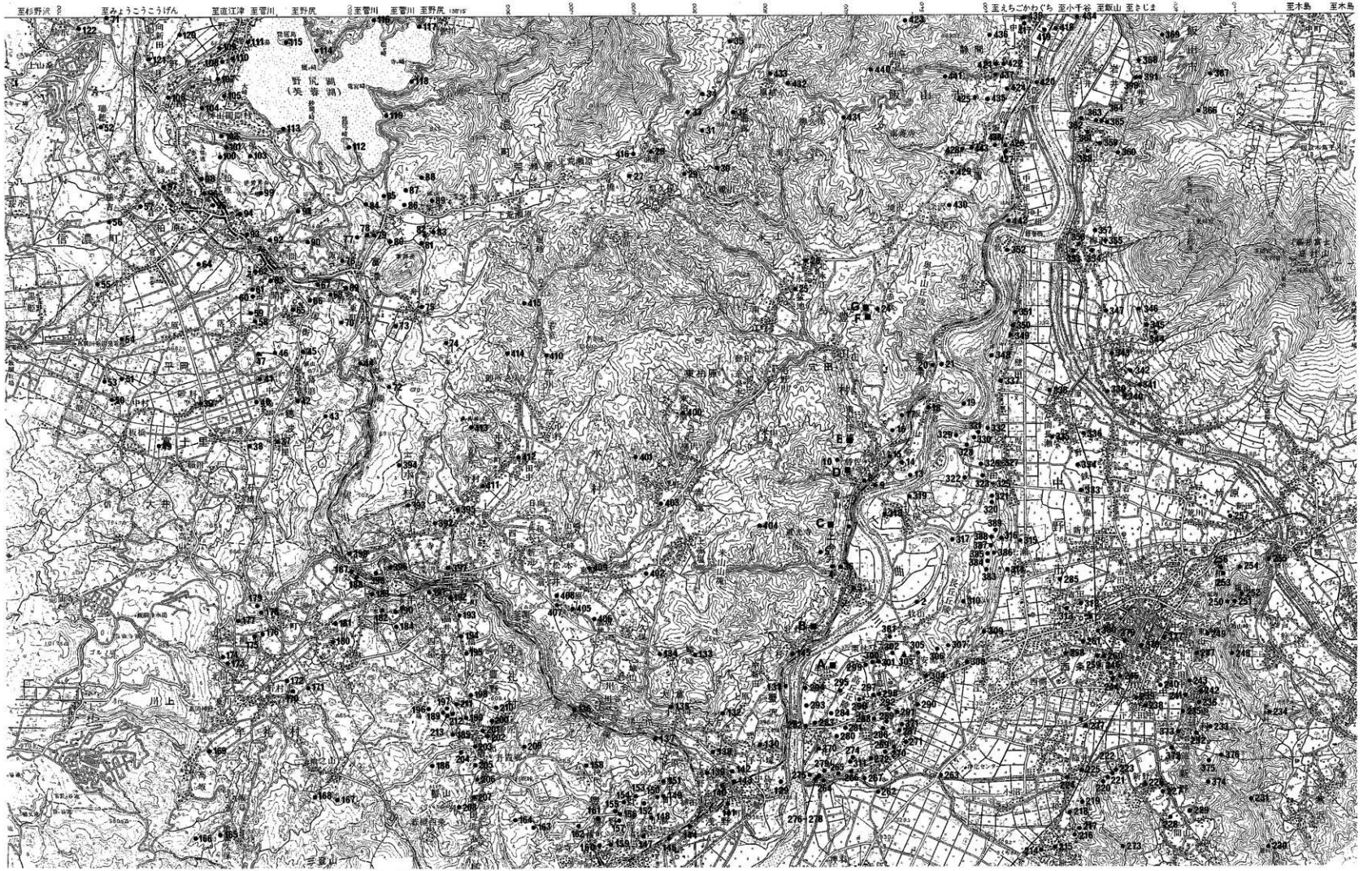
番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文早	縄文前	縄文中	縄文後	縄文晩	弥生中	弥生後	古墳	古代	中世	近世
239	下小田中遺跡	中野市下小田中・東原敷・西原敷・北沖はか									○	○	○	
240	上小田中遺跡	中野市上小田中・倉屋・冨益・東田はか								○		○		○
241	建徳山古墳	中野市上小田中・建徳									●			
242	建徳遺跡	中野市上小田中・建徳											○	
243	上小田中遺跡	中野市上小田中・建徳											○	
244	西条黒屋敷遺跡	中野市西条・東屋											○	
245	五加遺跡	中野市中野・五加高地・寺崎跡											○	
246	西条黒屋敷遺跡	中野市西条・長屋敷											○	
247	豊代遺跡	中野市中野・豊代・姫逆寺				○					○	○	○	
248	鴨ヶ島城跡	中野市中野・大平山・鹿ヶ島												
249	豊之瀬城跡	中野市中野・豊之瀬・鳴尾下												
250	飯塚	中野市中野・長瀬山												
251	飯塚	中野市中野・長山												
252	殿山城跡	中野市中野・殿山・小山・長岡山												
253	第和田２号古墳	中野市中野・小山									●			
254	第和田３号古墳	中野市中野・浅間山									●			
255	殿塚古墳	中野市中野・殿塚山									●			
256	第和田１号古墳	中野市中野・小山									●			
257	竹原遺跡	中野市竹原・十二ノ木												
258	笛松遺跡	中野市笛松・中島・屋敷添									○			
259	沿松氏居館跡	中野市笛松・西条塊											○	
260	西条遺跡	中野市西条・笛屋敷・殿屋敷												
261	若松石水神社遺跡	中野市石郷・高橋・宮下・西条塊								○	○			
262	川端遺跡	中野市草岡・川端									○			
263	殿塚遺跡	中野市仁蓮・殿塚・大野									○			
264	島町割遺跡	中野市立ヶ花・島町割・袁									○	○	○	
265	がまん洞遺跡	中野市駒郷・四谷・西郷高									○	○		
266	竜塚寺遺跡	中野市草岡・西山												
267	長岡城跡	中野市草岡・堀												
268	草岡竹鼠遺跡	中野市草岡・長敷添								○		○		
269	御殿山古墳	中野市草岡・上の山									●			
270	牡丹町古墳	中野市草岡・上の山									●			
271	高梨敷遺跡	中野市草岡・高梨敷								○	○			
272	秋葉山古墳	中野市草岡・西山									●			
273	小笠原城跡	中野市新野・西山・後山はか												○
274	西山古墳	中野市草岡・西山									●			
275	立ヶ花城跡	中野市立ヶ花・長山・表					○				●			
276	立ヶ花３号古墳	中野市立ヶ花・表									●			
277	立ヶ花２号古墳	中野市立ヶ花・表									●			
278	立ヶ花１号古墳	中野市立ヶ花・表									●			
279	立ヶ花高遺跡	中野市立ヶ花・城の越	○								○		○	
280	諸太山窯跡	中野市立ヶ花・袁太山・窯駄												
281	地蔵堂遺跡	中野市立ヶ花・唐木山遺跡												
282	立ヶ花遺跡	中野市立ヶ花・西袁	○		○							○		
283	本堂寺遺跡	中野市立ヶ花・南原												
284	草岡西原遺跡	中野市草岡・西原はか												
285	原黒遺跡	中野市吉田原								○		○		
286	上の山窯址	中野市草岡・上の山												
287	高山１号古墳	中野市草岡・東山									●			
288	大久保遺跡	中野市草岡・大久保												
289	大久保梅神	中野市草岡・大久保												
290	鳥角遺跡	中野市安塚ヶ・鳥角・日向										○	○	○
291	茶臼峯窯址	中野市草岡・茶臼峯										○	○	○
292	茶臼峯遺跡	中野市草岡・茶臼峯												
293	牛山城跡	中野市牛出・西峯・上河端										○		○
294	立ヶ花上河端遺跡	中野市立ヶ花・上河端	○											
295	牛出窯跡	中野市牛出・芝野												
296	中原窯跡	中野市草岡・中原												
297	東地田保跡	中野市草岡・東地田												
298	東原遺跡	中野市草岡・東原												
299	第林２号古墳	中野市第林・西原									●			
300	第林１号古墳	中野市第林・西原									●			
301	第林２号古墳	中野市第林・西原									●			
302	小丸山古墳	中野市安塚中・長塚									●			
303	安塚寺窯跡	中野市安塚寺・窯跡											○	
304	安塚寺遺跡	中野市安塚寺・安塚・笠・辻道・禅寺はか			○	○				○	○	○	○	○
305	安塚寺跡	中野市安塚寺・北原・山神												
306	安塚寺城跡	中野市安塚寺・城山												
307	から沢遺跡	中野市安塚寺・赤地・城山											○	○
308	片張遺跡	中野市片張・鳴瀬・鳴瀬・倉下・宮前												
309	大塚寺遺跡	中野市片張・鳴瀬寺・鳴ヶ子・宮前								○	○	○		
310	浜諸ヶ地遺跡	中野市新保・大内平・市場・地蔵・地蔵	○											
311	原城古墳	中野市原間・西山									●			
312	五里原遺跡	中野市吉原・五里原												
313	吉田馬場遺跡	中野市吉田・馬場・馬場前・金下はか												

第１表　中野市・豊田村周辺の遺跡地名表(3)

番号	遺跡名	所在地	田石器	縄文早	縄文前	縄文中	縄文後	縄文晩	弥生中	弥生後	古墳	奈良・平安	中世	近世
314	七瀬遺跡	中野市七瀬・笛節・種脇・長野原								○	○			
315	種脇遺跡	中野市七瀬・種脇											○	○
316	神楽寺跡	中野市七瀬・種脇											○	○
317	城ヶ沢遺跡	中野市大俣・城ヶ沢			○	○	○		○		○			
318	宮反遺跡	中野市大俣・宮反・東反				○				○	○	○		
319	大俣城跡	中野市大俣・大林											○	
320	林畑１号古墳	中野市田麦・林畑									●			
321	林畑２号古墳	中野市田麦・林畑									●			
322	三ツ又遺跡	中野市田麦・三ツ又・北山				○								
323	中観１号古墳	中野市田麦・中観									●			
324	中観４号古墳	中野市田麦・中観									●			
325	中観５号古墳	中野市田麦・中観									●			
326	中観１号古墳	中野市田麦・中観									●			
327	中観２号古墳	中野市田麦・中観									●			
328	山の神六塚	中野市厚村・畑山									●			
329	峯遺跡	中野市厚村・峯	○											
330	神明遺跡	中野市厚村・赤畑・袖山	○			○			○	○				
331	赤畑古墳	中野市厚村・赤畑・袖山									●			
332	峯墓古墳	中野市厚村・峯									●			
333	新清内原遺跡	中野市新井・倉井・関・下新井・土井・袖山											○	
335	関長瀬遺跡	中野市関長瀬・清水瀬・野地畑・大野地畑											○	
336	笠原河戸原遺跡	中野市笠原・角丁原・中溝									○			
337	ねこや遺跡	中野市笠原・山際・谷地											○	
338	笠原遺跡	中野市笠原・谷地・南									○			
339	きつね堰	中野市笠原・向七原											○	
340	屋敷坂遺跡	中野市高・屋敷坂									○			
341	岡上遺跡	中野市高・屋敷坂・反畑											○	
342	笠大遺跡	中野市赤岩・笠大・馬場西・長場西・赤望橋	○											
343	神宮寺下遺跡	中野市赤岩・神宮寺下・馬場西・長反畑中									○	○		
344	神宮寺遺跡	中野市赤岩・神宮寺										○	○	
345	村秋遺跡	中野市赤岩・神宮寺	○											
346	赤岩古墳	中野市赤岩・屋平・北久保									●			
347	七ツ鉢遺跡	中野市赤岩・大道上												○
348	壁田城跡	中野市壁田・城原・石屋ほか												○
349	三原寺跡	中野市硯田・社口												○
350	硯遺跡	中野市壁田・宮下・社口							○	○			○	○
351	高井稲荷神社跡	中野市壁田・社口												○
352	乙牧遺跡	中野市古牧・西之台												○
353	柳沢遺跡	中野市柳沢・蛍穴・八幡原遺跡				○			○	○				
354	蛍大古墳	中野市柳沢・蛍穴									●			
355	櫻平踊無遺跡	中野市柳沢・櫻平									●			
356	八幡城古墳	中野市柳沢・八幡原									●			
357	小丸山古墳	中野市柳沢・丸久保									●			
358	田上寺の前遺跡	中野市田上寺の前・塩場・寺の浦		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
359	田上寺の前遺跡	中野市田上寺の前・中の岩	○			○				○	○			
360	大黄遺跡	中野市田上・大黄										○	○	
361	田上日向遺跡	中野市田上・苅の前				○				○		○	○	
362	日向塚	中野市田上・日向											○	
363	日向３号古墳	中野市田上・日向									●			
364	日向２号古墳	中野市田上・日向									●			
365	日向１号古墳	中野市田上・日向									●			
366	木島氏山城跡	中野市田上・殿ノ山・苅田・天山												○
367	中木城	中野市田上・殿ノ山・苅田・八田												○
368	月岡遺跡	中野市岩井・月岡								○				
369	岩井城址	中野市岩井・下林												○
370	辻ヶ花遺跡	中野市辻ヶ花・金山・城ノ越										○		
371	高山２号古墳	中野市草間・東山									●			
372	高遺山古墳	中野市新野・高遺山・広瀬敷									●			
373	中郷遺跡	中野市更科・中郷・南郷		○										
374	道光碑跡	中野市間山・道光・松木立											○	
375	寺上遺跡	中野市更科・寺上										○		
376	関無塚遺跡	中野市更科・関無塚									○			
377	高田古城跡	中野市中野・小館											○	
378	中野県庁跡	中野市中野・県庁・中町丁												○
379	三好町遺跡	中野市西条・長照坂											○	○
380	物町遺跡	中野市中野・物町塊・岩上												○
381	聖殿遺跡	中野市東科・北原・殿都山ヶ		○	○				○	○				
382	七瀬武子城古墳	中野市七瀬・南原									●			
383	七瀬１号古墳	中野市七瀬・中原									●			
384	七瀬２号古墳	中野市七瀬・中原									●			
385	前山古墳	中野市七瀬・中原									●			
386	七瀬３号古墳	中野市七瀬・前山									●			
387	七瀬５号古墳	中野市七瀬・北原									●			

番号	遺跡名	所在地	田石器	縄文早	縄文前	縄文中	縄文後	縄文晩	弥生中	弥生後	古墳	奈良・平安	中世	近世
388	七瀬北原墓址	中野市七瀬・北原												○
389	岩井２号古墳	中野市岩井・下林									●			
390	岩井１号古墳	中野市岩井・下林									●			
391	沢新１号古墳	中野市岩井・下林												○
392	柳の内遺跡	三木村・雲光寺・久世島											○	
393	雲光寺跡	三木村・雲光寺											○	○
394	前林遺跡	三木村・雲光寺・久世島	○										○	
395	高畑田遺跡	三木村雲光寺・高畑田				○								○
396	古浜遺跡	三木村雲光寺・浜袋								○			○	○
397	雲光寺東遺跡	三木村雲光寺・東原											○	○
398	五輪塔遺跡	三木村雲光寺・五輪塔												○
399	川ノ遺跡	三木村雲光寺・川入												○
400	東前原遺跡	三木村東原原				○								
401	上中田遺跡	三木村赤堀・上今田				○	○							
402	上赤堀遺跡	三木村赤堀・上赤堀				○						○		
403	毛呂遺跡	三木村赤堀・毛呂					○							
404	櫻原敷遺跡	三木村赤堀・櫻原敷										○		
405	大原遺跡	三木村倉井・大原										○		
406	桜原遺跡	三木村倉井・桜原										○		
407	中隠遺跡	三木村倉井・中隠												○
408	与四郎屋敷遺跡	三木村倉井・中隠											○	
409	関取場遺跡	三木村倉井・関取場												○
410	伊ヶレヶ遺跡	三木村平岡			○	○								
411	寺村遺跡	三木村平岡・寺村				○								
412	宇田氏館跡遺跡	三木村平岡・田中										○		
413	島原城跡	三木村平岡・小野												○
414	大神遺跡	三木村平岡・大神											○	
415	岩宮城跡	三木村平岡・岩宮												○
416	入土鍛遺跡	三木村平岡・入土鍛												○
417	勝間神社遺跡	飯山市勝間												○
418	中町郭内遺跡	飯山市静間・鶴谷										○	○	○
419	宮ノ町遺跡	飯山市静間・中町												○
420	田原川尻遺跡	飯山市鵜之瀬(鵜船)・下鳥居野			○	○			○	○	○			
421	山の神遺跡	飯山市静間・法花寺					○	○						
422	山の神３遺跡	飯山市静間・宮下	○											
423	雨屋オマナ遺跡	飯山市静間	○											○
424	伍位野遺跡	飯山市南							○	○				○
425	荒船遺跡	飯山市静間・荒船												○
426	五里久保遺跡	飯山市南・五里久保	○	○	○	○	○							
427	山根遺跡	飯山市高・山平			○	○	○							
428	鈴宮遺跡	飯山市南・鈴宮												○
429	茂右ヱ門新田遺跡	飯山市南・北原												○
430	原沢遺跡	飯山市南・原沢												○
431	飯山遺跡	飯山市南・寺脇											○	
432	地蔵尻遺跡	飯山市上・地蔵											○	
433	城跡入遺跡	飯山市南・城跡											○	○
434	沓川居遺跡	飯山市南・町尻											○	
435	鵜洞山古墳	飯山市静間・鵜洞山										●		
436	法花寺古墳群	飯山市静間・法花寺										●		
437	舟山古墳	飯山市静間・荒船										●		
438	五里久保古墳群	飯山市高・五里久保										●		
439	静岡城址	飯山市静間・中町												○
440	田平城址	飯山市静間・田平・背負岩												○
441	小原寨城址	飯山市静間・櫻・小田寨												○
442	深城址	飯山市高・城山												○

●は古墳



第2図　中野市・豊田村周辺の遺跡分布図(1：50,000)

第２章　牛出遺跡第１地点

第１節　遺跡と調査の概要

１　遺跡の概要

牛出遺跡は長野県中野市大字北原191・他に所在する。ＪＲ飯山線立ヶ花駅の北東1.3Kmの千曲川に面する地点にある。立ヶ花の狭隘部まで千曲川の川幅は広大であるが、遺跡地付近では川幅を急に狭め、高丘丘陵と豊田村の間を蛇行しながら北流している。高丘丘陵と千曲川の間には、いくつかの段丘面が発達する。第１地点は最低位面の東端にあたり、約２ｍの比高差で中位面に続く。

第１地点は、従来、牛出遺跡として周知されていた部分である。周辺は大正末期に耕地整理・用水路整備が行われ、畑地から水田化され、その後、水田転作により、再度、畑作地となり、暗渠排水設備等も施行された。これらのうち、水田化にともなう削平は基盤層に達し、とくに遺構の存在が予想される微高地が削られ、谷部が埋められたことが予想される。なお、今回の調査以前に発掘調査は行われていない。

1994年度に当センターが調査した牛出古窯遺跡では中世墓が３基確認されており、第１地点の集落跡との関連が想定される。また、1995年度と1996年度には中野市教育委員会が、牛出遺跡の西側の千曲川新堤防敷を発掘調査している。報告書は未完であるが、中世を主に、平安時代後期・縄文時代の土器片などが出土している。中世を中心とする遺構が、周辺の微地形に沿って、広範囲に存在することを予想させる。

２　調査の概要

(1)　調査範囲と調査方法

調査範囲（第３図）　周知の牛出遺跡の範囲は第３図のように第１地点を中心とするものであったが、前年度の試掘調査でその範囲がかなり異なることが予想された。本調査では、試掘で遺構・遺物が確認された地点を中心に調査範囲を設定したが、以後の調査によって試掘時の所見と異なった点がある。しかし、工事工程が迫っていたため、調査区の周辺部で充分な調査を行えなかった部分がある。

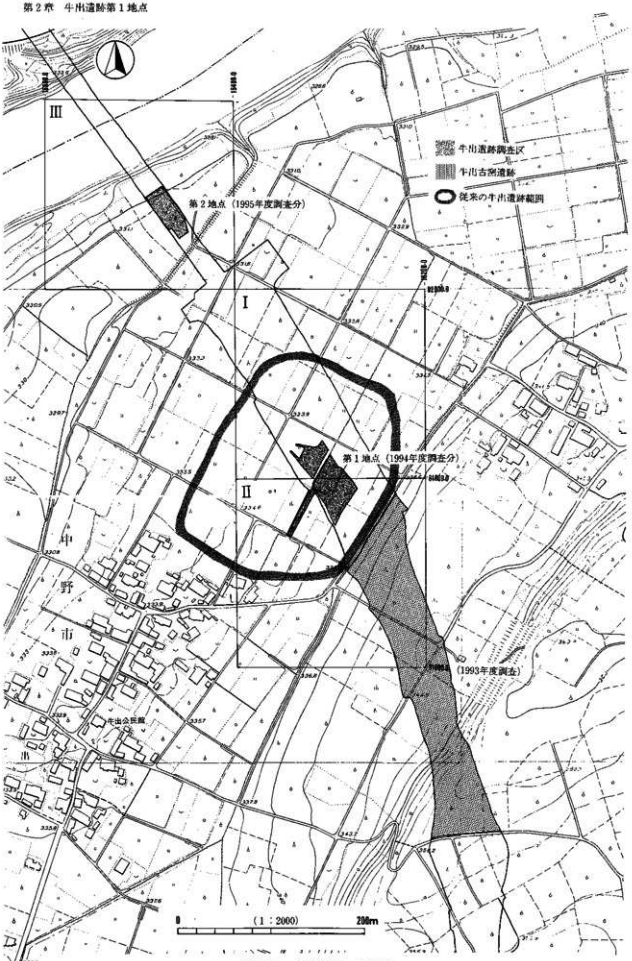
調査方法　検出面の確認および検出面までの掘り下げを重機によって行った。検出面での出土遺物は８ｍグリットごとに一括して取り上げ、遺構を検出した場合は遺構単位で取り上げた。また、掘立柱建物址などのピットは空中写真測量を併用して実測を行った。

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様（第１章２節２項）により設定し、大々地区と調査区との関係を第３図に示した。

(2)　調査経過（調査日誌抄）

調査期間　平成６年９月８日～同年10月31日

９月８日　重機による表土剥ぎ開始。
９月12日　風呂屋遺跡から発掘機材などの移転作業。
９月14日　遺構調査を開始。
９月26日　掘立柱建物址と思われる遺構を３棟確認する。
９月28日　前日の雨のため半裁した柱穴は埋まり、検出した遺構が不明となってしまい、再度遺構検出を行う事となる。柱穴は多く検出されるが、掘立柱建物址が確認できない。
９月29日　グリッド杭の設定。（株式会社こうそくに委託）
10月３日　中島調査員が調査に加わる。


牛出遺跡調査区
牛出古墳遺跡
従来の牛出遺跡範囲
第２地点（1995年度調査分）
第１地点（1994年度調査分）
（1993年度調査）
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
中
野
市
牛出公民館
(1：2000)
200m

第３図　牛出遺跡　位置図

10月６日　ＳＥ０３（３号井戸址）よりかわらけ、珠洲焼き片が出土。
10月13日　ＰＩＴ265より青磁碗の破片が出土。
10月14日　ローリングタワー上から掘立柱建物址を探すが、確認できない。
10月20日　空撮の準備。
10月21日　雨のため空撮中止。
10月24日　空撮・空測（株式会社こうそくに委託）。信濃町上ノ原遺跡に機材移動。
10月27日　井戸址の断割り。作業員は２人を残し、上ノ原遺跡の調査に移る。
10月31日　井戸址断割り部の埋め戻しを行い調査終了。

(3)　調査結果の概要

第１地点では耕地整理や耕作によって生活面は失われている。中世の掘立柱建物の柱穴多数と溝１条・井戸址１２基を調査した。柱穴と思われるピットが多数検出されたが、同一の建物の柱穴を認識するのは困難であり、確実に認識できた掘立柱建物址はない。また、調査はできなかったが、調査区中央を横切るコンクリートで固められた現在の用水に沿って地山が溝状に窪んでおり、用水が中世からの溝の上に構築されている可能性がある。中世遺構の検出面で縄文時代早期条痕文系土器数片、石鏃２点、打製石斧１点、弥生時代太型蛤刃石斧１点が出土したが、遺構は検出されなかった。

(4)　基本土層（第４図）

基本層序を以下に示す。遺構検出はⅣ層上面でおこない、縄文時代と中世の遺物がⅢ層より出土した。

Ⅰ層　表土耕作土層
Ⅱ層　暗褐色土層（10YR3/3）。しまった粘りのある粘土層。
Ⅲ層　黒褐色土層（10YR2/2）。粘性有り。
Ⅳ層　黄褐色土層（2.5YR5/4）。粘性が非常に強く鉄分を含む。

第２節　中世・近世の遺構と遺物

1　掘立柱建物址

掘立柱建物址と推定されるピットを結線して第７図に示した。掘立建物址は一定範囲に多数重複したと思われ、確実に１棟の建物址となるものを確認することはできなかった。

2　井戸址

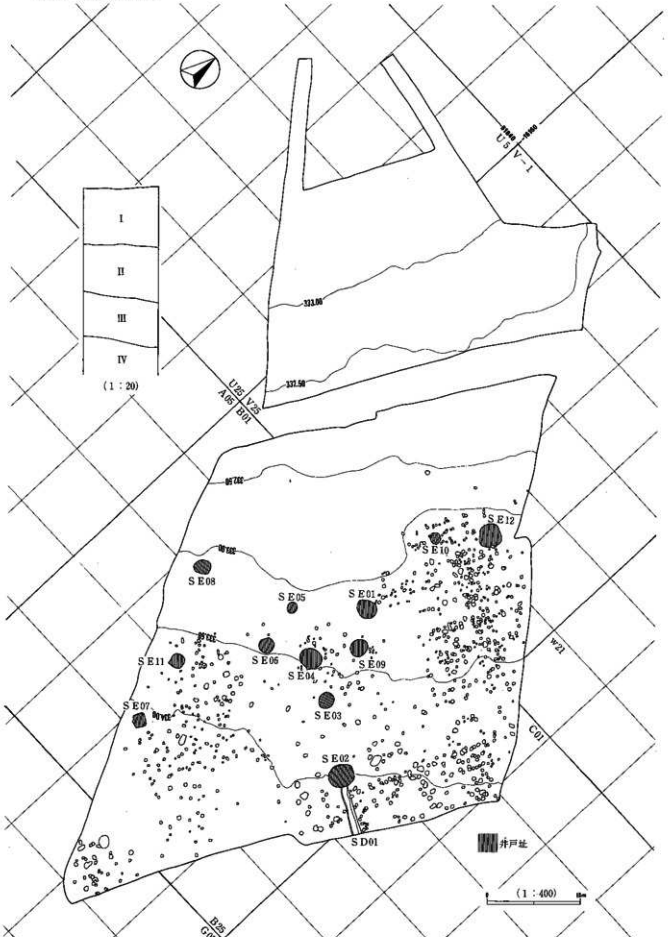
ＳＥ０１（第５図）　直径195cm～220cm、深さ450cmの円筒形を呈する。遺構底面は礫層を掘り抜き、砂層まで達する。水は砂層の上の礫層より湧き出す。１層より打製石斧、石皿片、内耳鍋（第６図17）、珠洲焼きの甕が出土した。井戸枠等の構築物は確認されなかった。

ＳＥ０２　直径240cm～270cm、深さ476cmの円筒形を呈し、底面は砂層まで達する。なお、ＳＤ０１が本遺構のところで切れており、溝はＳＥ０２にかかわる施設と考えられる。検出面より75cmまでのところから珠洲焼の甕（第６図14）、内耳鍋（第６図16）、かわらけ（第６図１）、青磁片が出土した。

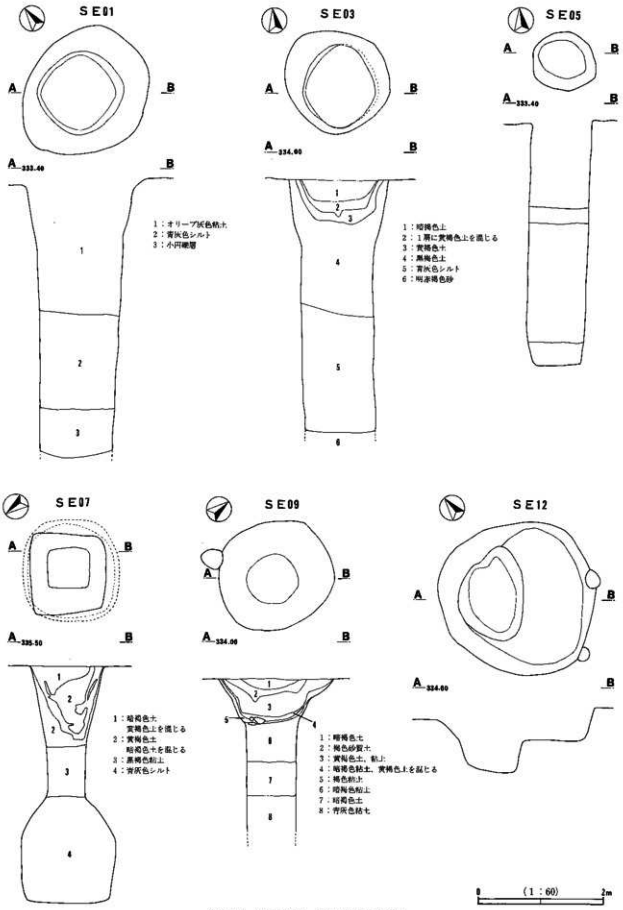
ＳＥ０３（第５図）　直径170cm、深さ400cmの円筒形を呈し、底面は砂層まで達する。検出面から86cm～136cmの深さでかわらけ（第６図３）、珠洲焼の破片が出土した。

ＳＥ０４　直径170cm、の円筒形を呈する。底面までの深さは不明。底部より常に水がわいている。検出面より珠洲焼破片が出土した。

ＳＥ０５（第５図）　直径120cm～110cm、深さ380cmの円筒形を呈する。底面は砂層まで達しており、水がしみ出しており常に土坑内に水が溜まる。出土遺物なし。



第４図　牛出遺跡　第１地点遺構配置図

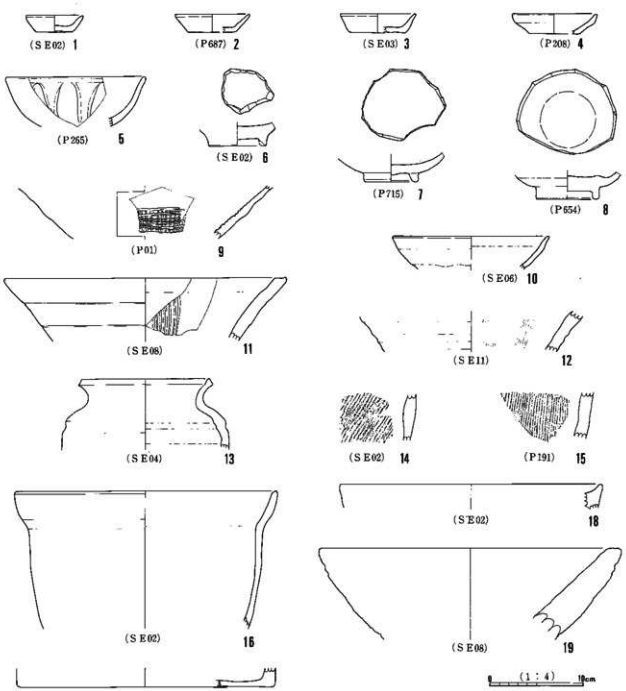


第５図　牛出遺跡　第１地点井戸址

ＳＥ０６　上部では直径150cm～160cmの円形を呈し、検出面からの深さ約160cmで平面形が方形を呈するようになる。深さ472cmで底面は透水層である礫層まで達する。検出面より石鏃と古瀬戸（第６図10）が出土した。

ＳＥ０７（第５図）　深さ374cm、検出面では130cm×130cmの方形で、深さ約２ｍで平面形は円形になる。下半部の壁面が崩落したためオーバーハングした断面形になったものと推定される。検出面より約130cmの深さで人頭大の礫２点と拳大の礫１点が出土したのみ。

ＳＥ０８　直径約160cm、深さ99cmの円筒形を呈する。覆土中より珠洲焼破片、石皿片と磨石３点、石鉢（第６図19）が出土し、底面で摺鉢（第６図11）が出土した。



第６図　牛出遺跡　第１地点出土遺物（中世）

ＳＥ０９（第５図）　検出面での直径170㎝～200㎝の円形、深さ250㎝まで掘り下げたが、壁面が崩落したため、調査を断念した。深さ約75㎝で９個の礫が出土し、大きなものは径20㎝である。他に出土遺物はない。

ＳＥ１０　直径110㎝の円形。深さ145㎝まで掘り下げたがそれ以下は調査不能であった。水がしみ出しており、検出面より50㎝まで水位があがる。出土遺物なし。

ＳＥ１１　直径150㎝の円形。深さ135㎝まで掘り下げたが、それ以下は調査不能であった。珠洲焼きの摺り鉢（第６図12）が出土した。

ＳＥ１２（第５図）　直径200㎝、深さ106㎝の円形を呈する。出土遺物なし。

３　溝

ＳＤ０１（第４図）　幅70㎝～105㎝、深さ13㎝～14㎝のＵ字状の断面形を示す。ＳＥ０２の関連施設と推定される。ＳＥ０２から南東方向に延びており、調査区外へと続く。須恵器甕片が２点出土したが、ＳＥ０２との関りから、中世以降の溝と判断される。

４　出土遺物（第６図）

１～４はかわらけ。５～８は青磁で７の底面にはスタンプ文が確認される。９は古瀬戸の鉢、10は古瀬戸の平碗である。11は暗褐色の内耳鍋の胎土に類似する在地産の摺鉢である。12～15は珠洲焼きで、摺鉢（12）・壺（13）・甕（14・15）がみられる。16～18は内耳鍋である。19は石鉢で片口である痕跡を確認できる。図示したものは全て遺構より出土したものであり、いずれも14世紀末から15世紀の製品である。この事から遺構は14世紀末から15世紀代のものが中心になると推定される。なお、図示したもの以外に古瀬戸鉢１点、かわらけ８点、珠洲焼き甕破片６点、在地系の摺鉢２点、内耳鍋破片３点、近世陶磁器９点が出土している。(註1) なお、近世陶磁器はいずれも遺構外の出土遺物である。

第３節　まとめ

牛出遺跡の南西側700ｍに牛出居館址と900ｍに本誓寺跡がある。牛出居館址では井戸・建物などが確認されている（中野市教育委員会1995）。牛出遺跡の南東側1.2㎞には大久保館址・茶臼山砦跡、東側1.5㎞には安源寺居館址の伝承地、南西側1.6㎞の丘陵の南西端部には立ヶ花城址があり、1.2㎞南側には清水山中世墓群、1.6㎞南東側に西山中世墓群が確認されている。牛出遺跡周辺は中世の遺跡が多く存在する。

牛出村の初出は中世本誓寺の由緒書に本誓寺が関東布川から中野に移り、更に高梨氏に迫われて笠原へと移り、更におわれて高梨領牛出へ移転したという記録がある（本誓寺文書）。また文禄３年（1594年）に牛出村の備後分の内20貫400文を舟丸某に宛てがっているという記載がある（「高梨頼親宛行状案」諸家古案）。この様に文献によって、中世末には村落が形成されていたことが窺われる。牛出の字名に北原、東原、上原、西原、南原、屋敷添が残り、牛出遺跡は字北原に位置する。

牛出遺跡第１地点の建物址は、牛出の居館址と屋敷（屋敷添え）を取り巻く村落が形成していたことを窺わせる。

第１地点の建物址群（第７図）は柱穴の様子から西側に開いたコの字状に配置された建物群が想定される。北側柱穴群は柱穴列が約４ｍ間隔で東西に２列みられ、それと直交する形で約２ｍ間隔で７列ある。その約１ｍ外周には柱穴列がみられる。これらの中でも、北半の柱穴は建て替えが激しかったために多くの柱穴がみられる。南北約10ｍ東西約20ｍ程度の東西棟が立替えを重ねた結果と思われる。

東側の柱穴群は、これらに対して直角に建てられた南北棟であろう。しかし柱穴が多く、その先後関係は切合・覆土の違いから明らかにできず、２棟の建物が若干方向を変えて建て替えられたことが推定できる程度である。南側にも３棟前後の建物があったと思われる。

井戸址ＳＥ０２、ＳＥ１０などは建物址を切る形であるが、建物も立替によって位置を移動しており、建物群と井戸は全体としてみれば同時期のものであろう。ただし、建物群に断絶期間がなかったとはいえないので、時期の遅れる建物に伴う井戸が含まれる可能性は残る。建物址に囲まれた中央部に位置するＳＥ０１・ＳＥ０３～ＳＥ０６・ＳＥ０９・ＳＥ０８は建物址に関わる水源であったと思われる。しかし、ここの建物と井戸との組み合わせは復元できない。コの字形に配置された建物群とこれらの井戸が、ひとつの屋敷地を示すものとすれば、６・７回の井戸の掘り直しが行なわれたことになり、屋敷地の継続期間も長期であったと考えられる。それは建物の立替が２～３回以上と推定されることにも示されている。井戸が同じ透水層を利用するために同じ位置に繰返し掘り直されたのは、おそらく崩壊あるいは洪水等によって使用不能となっても、屋敷地そのものは維持される必要があったからであろう。井戸の埋没状況は、強い流れをともなわない溢水による洪水を推測させる。このタイプの洪水は家屋を流失させるようなことはない。建物の立替回数に比べ井戸の数が多すぎるように思われる点は、現代でも時に見られる千曲川の増水の特性によって説明できるかもしれない。また中央部の円形井戸跡とは形態の異なる方形のＳＥ０７は遺跡の南側に位置し、他の井戸跡とは異なる。

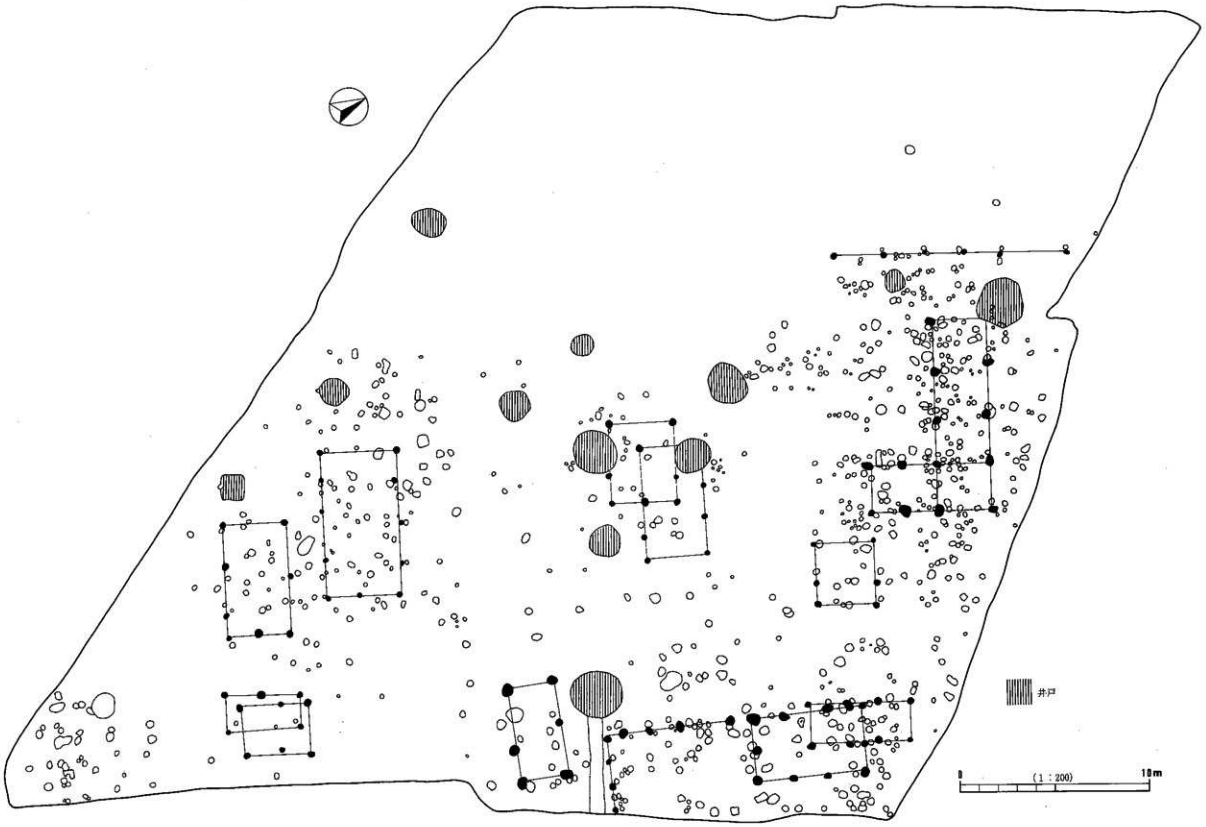
出土遺物から推定すると、これらの建物址群と井戸址はおもに14世紀末から15世紀代の年代が与えられる。

註

(1)　中近世の遺物の分類と年代は市川隆之調査研究員による。

参考文献

中野市教育委員会　1995　『牛出城跡遺跡』



第７図　牛出遺跡　第１地点建物址群推定図

第３章　牛出遺跡第２地点

第１節　遺跡と調査の概要

１　遺跡の概要

牛出遺跡第２地点は中野市大字牛出北原191ほかに所在し、同遺跡第１地点の北西約200ｍにあたる。第１地点と同じ段丘低位面の西端に立地し、さらに約２ｍ低い平坦面をはさんで千曲川水面に至る。第２地点と水面との比高差は約５ｍとなる。

圃場整備等により、現状で本来の微地形をうかがうことは困難であるが、第１地点との間を小川が北流し浅い谷状に低くなるので、第２地点は一見、自然堤防状を呈する。段丘面上の開析地形に、時には千曲川本流からの溢流による堆積も受けた結果であろう。遺構が残されていたのは、微高地状になって周囲より高い部分である。

試掘によって遺跡範囲の拡大として取り扱うこととなった第２地点は、第１地点とは位置・遺跡内容が隔たり、別遺跡の内容を示しているため、第１地点とは別章で報告することとした。

なお、1994年度に当センターが調査した牛出古窯遺跡は第２地点の南東約500ｍの距離にあり、本遺跡とほぼ同時期の古墳時代初頭の集落が確認されている。

２　調査の概要

(1)　調査範囲と調査方法

調査範囲（第３図）　第２地点は周知の範囲外であったが、試掘の結果、調査対象とした。調査に並行して擁壁工事が行われたため、調査区を縦に２分割する調査工程となった。また、調査区の幅が狭かったこともあり、安全対策等により、用地際などで調査ができなかった部分がある。この部分は擁壁間であって、構造物が構築されたわけではないので遺構は残されている。

調査方法　検出面の確認および検出面までの掘り下げを重機によって行った。遺構の範囲が切り合いや覆土の土層区分が困難であったことにより、遺構ごとの区分は確実とはいえない。そのため、古墳時代以前の遺物は全点出土位置を記録した。

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様（第１章２節２項）により設定し、大々地区と調査区との関係を第３図に示した。

(2)　調査経過（調査日誌抄）

調査期間　平成７年５月10日～同年８月23日

５月10日　表土剥ぎ開始。
５月16日　Ⅲ層上部で遺構検出開始。
５月18日　平安時代の竪穴住居址を確認（ＳＢ０１・０２）。グリッド設定（株式会社こうそくに委託）。
５月25日　調査区東側トレンチで古墳時代の竪穴住居址（ＳＢ０３）を確認し、その下層から縄文時代の土器が出土。
５月30日　遺構が無い部分を重機でⅣ層上部まで掘り下げ、ＳＢ０７・０８を確認。
６月５日　調査区南側を重機でⅤ層上面まで掘り下げたところ、古墳時代前期のタタキ目の土師器甕が出土（ＳＫ０２）。

6月27日　調査区北側をV層上面まで掘り下げる。牛出地区の住民約30名見学に訪れる。
7月5日　3日間雨により調査が中断する。
7月10日　週末の雨により調査区は水没し、ポンプで水抜きを行う。SB11のプラン確認。
7月12日　大雨のため調査区は水没する。
7月19日　調査区北側縄文時代遺物包含層まで掘り下げ、土器2点出土。
7月27日　調査区東側のトレンチで縄文時代の遺物散点が確認されたが、遺構は確認できなかった。
7月28日　グリッド杭設定。調査区東側をVI層以下を掘り下げ、縄文土器が出土。周辺を調査したが他に遺物は確認されなかった。
8月8日　L25グリッドで　小形丸底土器など多数の土師器出土。後に、試掘坑で一部破壊された竪穴住居址であることが判明（SB15）。
8月21日　調査区西側を重機でX層まで掘り下げる。IX層で石皿などの石器が出土するが、遺構は検出されない。
8月23日　機材を撤収し調査終了。

(3) 調査成果の概要

第2地点では、縄文時代の土坑2基、古墳時代初頭の竪穴住居址7棟、平安時代後半の竪穴住居址11棟、中世の溝2条を調査した。中世、平安時代、古墳時代、縄文時代晩期及び中期の文化層が確認されており、縄文時代中期の遺物は地表下約2mから出土した。この他に栗林式土器が調査区の南側に数片散在していた。

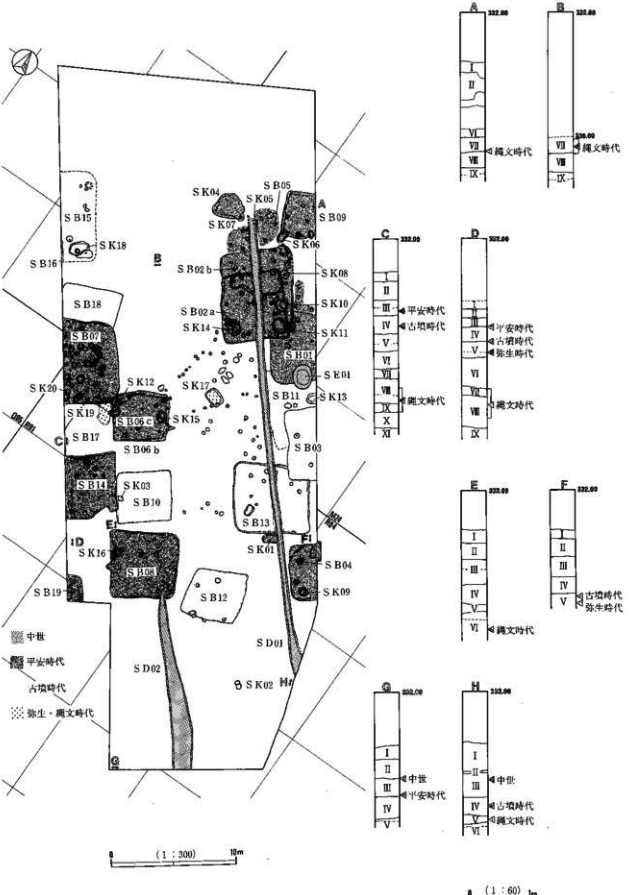
縄文時代では狩猟・漁猟のキャンプ地、古墳時代初頭には牛出古窯遺跡で確認された集落と関係する川辺の剔火的な小集落、平安時代後半期には自然堤防の微高地上に集落が広がっていたと思われる。

(4) 基本土層

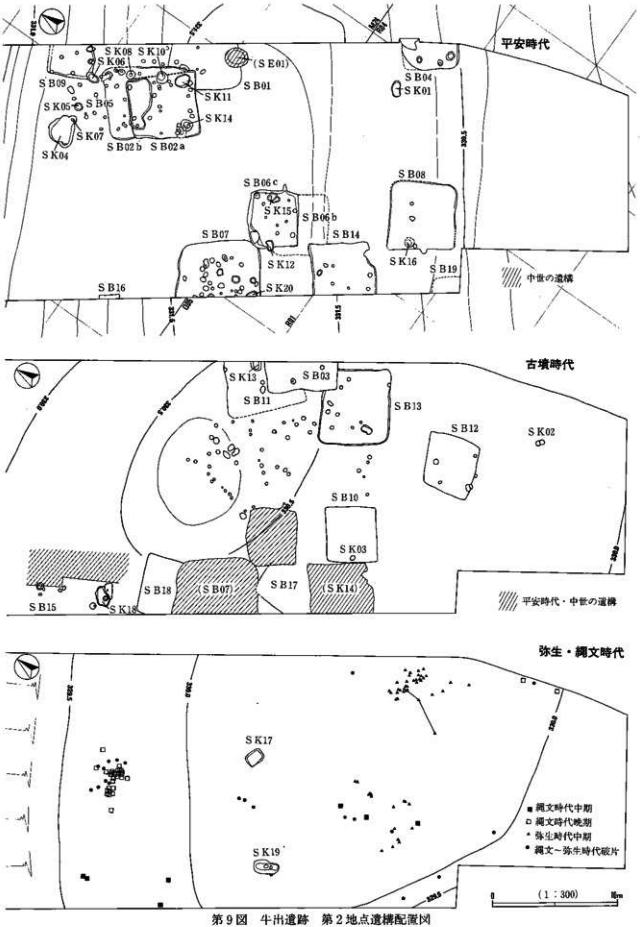
第2地点は第1地点に比べ堆積層が厚く縄文時代の遺物包含層まで深さ2m以上あり、最も多いところで5枚の文化層が認められる。第8図に土層と文化層との関係を示した。

調査区は千曲川河岸にあり、特に本遺跡付近は川幅が狭くなり洪水が起こりやすい場所である。遺跡は微高地上にはあるものの水につかりやすい立地条件であり、千曲川の増水により堆積したシルト・砂質土が複数の文化層を形成していると考えられる。また、平安時代の床面のみを残す竪穴住居址も認められることから生活面は削られ失われている。他の時期の生活面も同様な状況と推定される。

I層　表土耕作層
II層　褐色砂層（10YR4/4）。表土下一面に確認。非常にきめが細かくサラサラしており、乾燥すると硬くしまる。千曲川の洪水の際の堆積層である。
III層　暗褐色砂質層（10YR3/4）。乾燥するとカチカチになる。きめが細かい。
IV層　黒褐色土層（10YR3/2）。粘性有り。粒子密である。
V層　黒褐色土層（10YR2/3）。IV層より色調が濃くきめが細かく粘性有り。
VI層　鈍い黄褐色粘質層（10YR5/4or10YR4/6）。粘質層。一部ボソボソしている。
VII層　褐色土層（10YR4/4）。かなりの粘性を持つ。土器や炭化粒が多く混入している。
VIII層　黒褐色土層（10YR2/3or7.5YR2/2）。硬くしまった層。白色砂粒子が混入。
IX層　褐色粘土層（10YR4/6）。粘性を持ち褐灰色の色調の縦位筋状の部分がみられる。
X層　黄褐色粘土層（10YR5/8）。粘性を持ち褐灰色の色調部分もみられる。
XI層　黄褐色粘土層（10YR5/6）粘性が非常に強く、この層より地下水が浸出する。鉄分を含む鈍い黄褐色の部分もみられる。



第8図　牛出遺跡　第2地点の土層



第９図　牛出遺跡　第２地点遺構配置図

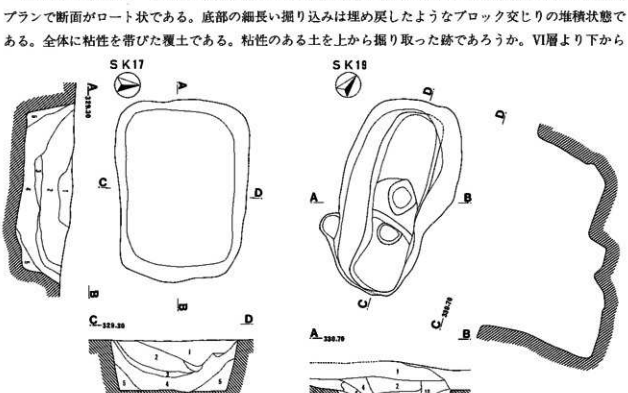
第２節　縄文時代・弥生時代の遺構と遺物

１　遺構

縄文時代と思われる土坑が２基検出されたのみである。

ＳＫ１７（第10図）　Ⅹ層を掘り下げ中、方形のプランを確認したが、覆土より掘り込み面はⅥ層中と推定される。0.1m×1.45m、深さ0.4mで長方形のプランである。覆土は全体に粘土質で、炭化物が混入している。出土遺物はないが検出層位より縄文時代の遺構と推定される。

ＳＫ１９（第10図）　ＳＢ０７の竈の床下部分で検出した。1.6m×0.9m、深さ0.9mの隅丸長方形のプランで断面がロート状である。底部の細長い掘り込みは埋め戻したようなブロック交じりの堆積状態である。全体に粘性を帯びた覆土である。粘性のある土を上から掘り取った跡であろうか。Ⅵ層より下から



ＳＫ17
1：黒褐色（10YR3/1）に灰褐色シルト混じり。
2：黒褐色（10YR3/3）に灰褐色シルト混じり。
3：黄褐色（10YR5/6）に灰褐色シルト混じり。
4：褐色（10YR6/4）に灰褐色シルト混じり。
5：黄褐色粘土層（10YR5/6）。
全体に僅かな炭化物粒子を含有する。粘土質出水が湧き出す。

ＳＫ19
1：黒褐色土に褐色小粒子混入。炭化物・焼土含有。
2：炭化物ブロック混じりの黒褐色土。（柱根？）
3：黒褐色土に炭化物ブロックと褐色土粒子混在。（柱根？）
4：黒褐色土に褐色土ブロック混在。（柱根？）
5：黒褐色土に褐色土ブロック混在。４よりもブロックが少ない。
6：黒褐色に大粒の褐色ブロックが斑に混入。（柱根？）
7：黒褐色土に褐色土粒子が20%混入。
8：褐色土に褐色上粒子が40%混入。
9：黒褐色上に褐色土粒子が60%混入。（柱根？）
10：７と類似
11：７と類似するが褐色粒子が多い。
12：11より褐色が強く褐色ブロックも多く混入。
13：暗褐色土に褐色や灰褐色のブロックが混入。
14：黒褐色土に褐色ブロックが斑に混入。
15：褐色土層斑に暗褐色土ブロックが斑に混入。
16：暗褐色土で褐色ブロックが斑に混在。
17：灰褐色土で粘性を帯びている。
18：暗灰褐色土で粘質層

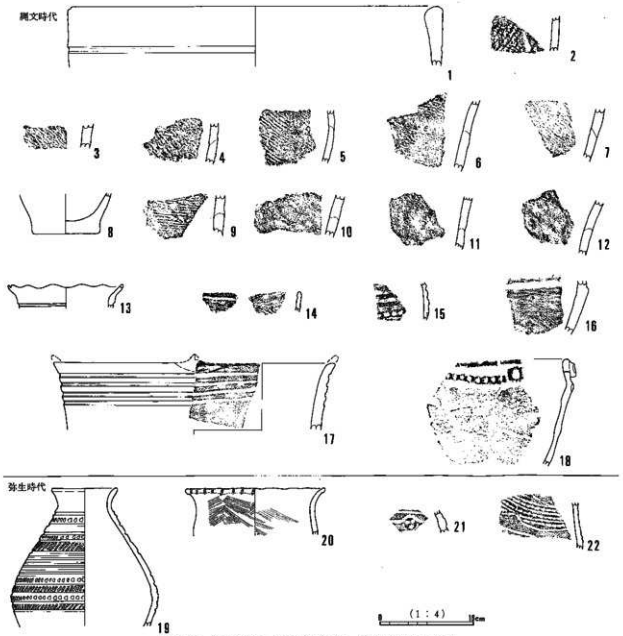
第10図　牛出遺跡　第２地点ＳＫ17・ＳＫ19

検出されたことから縄文時代の遺構と思われる。出土遺物なし。

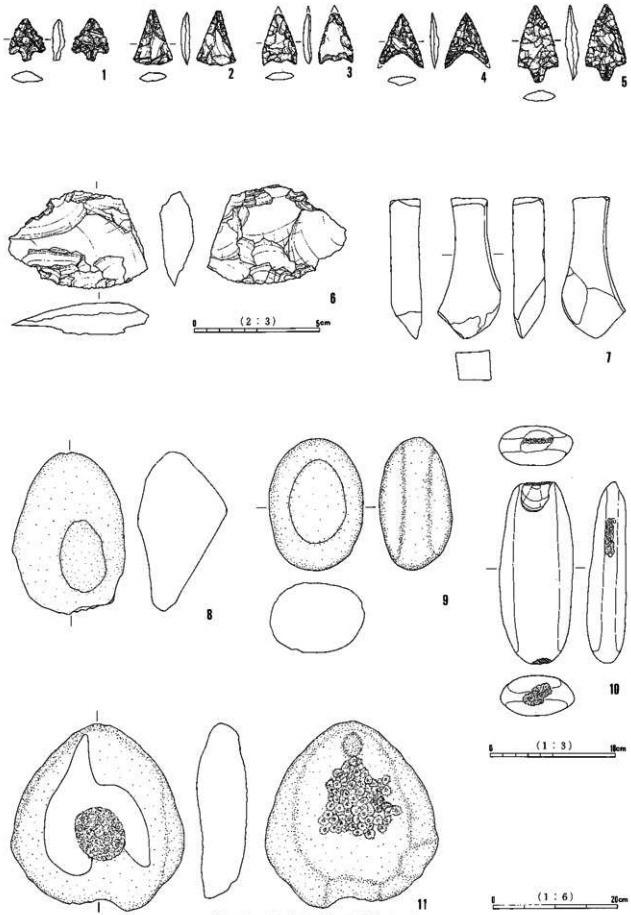
2　出土遺物（第11図1～22）

1は深鉢形土器口縁部である。口縁下に太い沈線が巡る。胎土は粗く砂粒子が多く含まれている。色調は橙色。2はＬＲの縄文地文の間に懸垂する沈線がある、深鉢形土器の胴部破片である。色調は橙色。1・2は縄文中期後半のものと思われる。

3～11は同一個体と思われ、無節の太い撚りの縄文を縦方向に転がした深鉢形土器である。胎土は砂粒子が多く含有しており焼成は良好で硬い。内面は丁寧にナデ調整されている。色調は鈍い橙色。12は底部である。胎土は細かい砂粒子が多く含有している。色調は褐色である。13は波状口縁部である。口縁下に沈線が巡る。口径が小さく壺型土器と思われる。14は無文土器口縁部である内面に沈線が巡る。胎土は細かい砂粒子を多量に含み、色調は褐色である。焼成は良好で硬くしまっている。15は小型の土器の胴部で



第11図　牛出遺跡　第２地点縄文・弥生時代出土土器



第12図　牛出遺跡　第２地点出土石器

ある。太い沈線が平行して巡り、その下に列点文が巡る。やや湾曲した胴部である。胎土は砂粒子を多量に含み色調は黒褐色である。16は鉢型土器の口縁下の破片である。口縁下に太い沈線が巡る。体部には条痕文がみられる。色調は明赤褐色で、胎土は砂粒子を多く含む。器壁は厚く焼成は良好である。17は口縁部下に４本の太めの沈線が平行して巡る。胎土は暗褐色で器壁が厚く、内外面丁寧にナデられている。４単位の波状口縁と思われる。18は口縁下に刻み目のある隆帯を巡らし、その上にボタン状の貼付文が施されている。胎土は粒子の粗い砂粒子を含む。色調は暗赤褐色で、表面がビスケット状にボロボロし、割れ面が壊れ易くなっている。

３～18は縄文晩期の土器である。３～11は地元産の土器と思われる。晩期後半の13は大洞Ｃ２式土器、15は大洞Ｃ１～Ｃ２式土器、17は佐野式のいわゆる粗製無文土器である。18は晩期初頭の宮崎遺跡２号住居類似の土器で大洞Ｂ－Ｃ併行期の土器である。

19は口縁部が小さく開き、ナデ肩で、胴部が下膨れになった壺形土器である。地文は縄文で、太い箆描沈線文と刺突文と櫛描沈線文で、頸部から胴部下半まで帯状に文様が施されている。20は折り返した口唇部に櫛状工具による烈点文で刻みがなされ、胴部に櫛描羽状文が施文されている。21・22は壺型土器のナデ肩部の破片である。19～22は弥生中期栗林式の土器である。

遺物出土状況　弥生時代の遺物はＶ層中で古墳時代の遺構検出を行った際、古墳時代遺物と同レベルで出土した。遺構はなく、遺物が所々にまとまって出土した（第11図下）。遺物量は少なく同一個体の破片が散在している。

縄文時代晩期の遺物は、Ｖ層から出土したもの（第11図16・17）と、M16グリッドのⅦ層から集中して出土した（第11図3～15・18）ものがある。また、R02・07のⅧ層から縄文時代中期後半の土器片が散乱して出土し、Ｌ20グリッドのⅨ層中から石皿と磨石が出土した。

弥生時代から縄文時代の遺物は長期的居住としての明確な遺構をともなわず、調査地が集落の周辺部にあたるか、あるいは千曲川の水辺での狩猟採集活動等の一時的居住を示すものと思われる。

第３節　古墳時代の遺構と遺物

１　竪穴住居址・竪穴状遺構

ＳＢ０３（第13図）

遺構の構造：土層観察のために Ⅲ層上面に設定した調査区東壁のトレンチを掘り下げたところ、Ⅳ層上面あたりから完形の土師器小型甕（第13図）と潰れた状態の赤彩壺が出土した。他遺構との切り合などにより、地山と覆土の区別がつきにくく、遺物分布範囲・出土状況から遺構範囲を推定しながら検出を行った。北西側のＳＢ１１を切っている。ＳＢ１３はＳＢ０３の床面精査中に黒色土の広がりとして検出されており、ＳＢ１３の覆土と思われ、ＳＢ１３の方が古い遺構と思われる。

一辺約5.4ｍの方形と思われるが、東側半分は調査区外のため不明である。覆土は黒褐色土（Ⅳ層）に焼土と炭化物粒が混入している。柱穴はＰ１とＰ２が確認され、覆土は褐色土が僅かに混入し竪穴の覆土と同様のものであった。炉、周溝などは検出されなかった。

出土遺物：住居の中央部分にほぼ完形の小型甕（１）が床面上に置いたような状態で出土した。赤彩された壺（６）は破片が住居全体に散っていた。なお、箱清水式の系譜上にある土器は他に見られない。その他の遺物は破片資料のみである。また、平安時代の内面黒色処理された土師器小片が数点出土した。

遺構の時期：本遺構の時期は出土土器から古墳時代初頭期のものと思われる。

ＳＢ１０・ＳＫ０３（第14図）

遺構の構造：ＳＫ０３を検出中にＳＫ０３を取り巻く方形の黒褐色のプランを確認し、ＳＢ１０とした。しかし、地山と遺構覆土の識別が困難で実測図に示した遺構の形状が明確に確認された訳ではない。また、床面の検出も困難であった。ＳＢ１０は4.05ｍ×4.4ｍ、検出面からの深さ15cmの方形を呈する。柱穴・炉址が認められないことから竪穴状遺構とする。遺物出土状況からＳＫ０３はＳＢ１０に付属する施設と考えられ、0.42ｍ×0.37ｍ、深さ0.14ｍの円形を呈する。

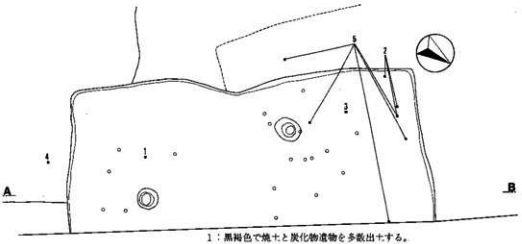
出土遺物：　図示した高杯（１）・壺（２～４）の他にハケ調整の甕・壺と高杯の破片が少量出土したのみである。１は口唇部内面を面取りしており、外面はケズリがみられる。２は口唇部を面取りしており、外面にハケ調整が認められる。本遺構内より出土した同一個体とおもわれる胴部破片から、胴下半部にわずかな稜をもつ４に類似する器形と推定される。３・４は同一個体とおもわれ、いずれもＳＫ０３とその周辺から出土した。胴下半から底部にかけてはＳＫ０３から出土したものとＳＢ１０の覆土上層の破片と接合していることから、ＳＫ０３には赤彩された壺が正位に立った状態で置かれていたものと思われる。

遺構の時期：古墳時代初頭。

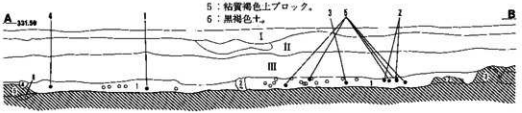
ＳＢ１１（第15図）

遺構の構造：ＳＢ０１の調査終了後、ＳＢ０３北側壁面を検出中にＳＢＯ３の立ち上がりの上の部分から１個体の壺が潰れた状態で出土。その回りを精査したところ北西側に一辺の立ち上がり部分を検出。しかし、北東側はＳＥ０１やＳＢ０１に、南東側はＳＢ０３によって破壊されておりプラン全体の規模などは不明である。柱穴は不明。ＳＫ１３としたものが炉と思われ、0.85ｍ×0.65ｍ、深さ0.15ｍで上部に焼土・炭化物層がある。なお、ＳＢ１１はＳＢ０３によって切られる。

出土遺物：ハケメ調整の壺（１）の破片が床面より出土した。図示したものの他に赤彩された壺、遺構外出土の第19図４・５のような胴下半部に屈曲をもつ壺などの破片が見られ、器形を知りうるものは古墳時代初頭の土器の様相を示す。また、平安時代の土師器小破片を数点混入している。

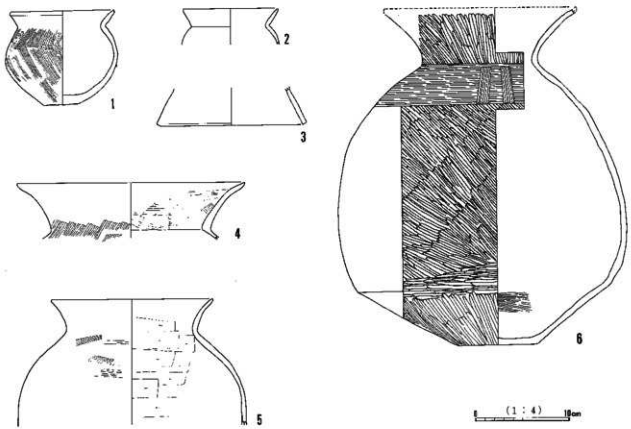


1：黒褐色で焼土と炭化物遺物を多数出土する。
2：褐色粘土ブロック。
3：黄褐色粘土ブロック。
4：暗褐色土ブロック。
5：粘質褐色土ブロック。
6：黒褐色土。

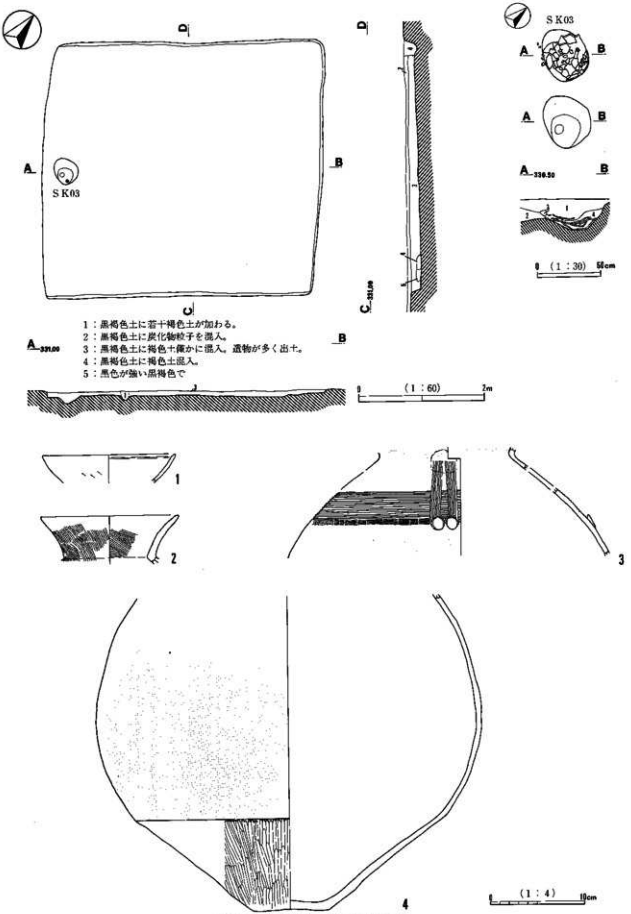


● No.1 ～No.5の出土地点

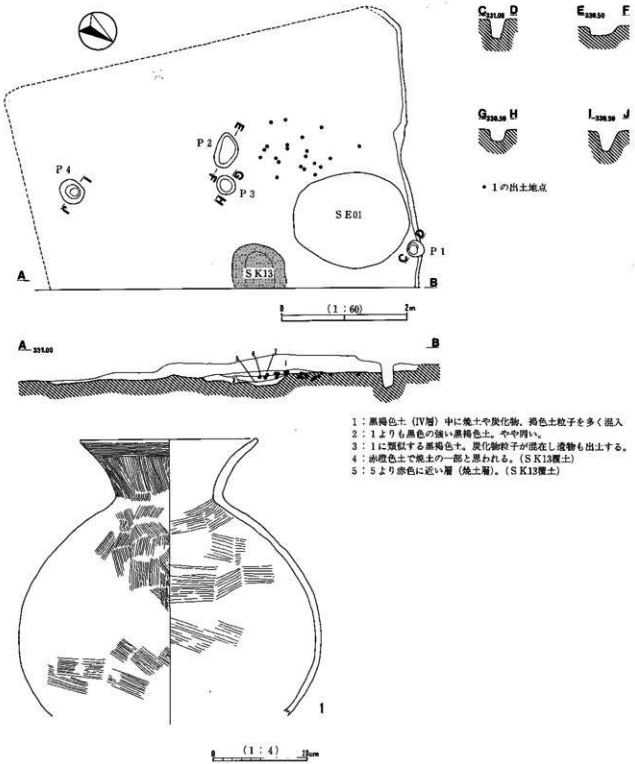
○ No.6の出土地点



第13図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ03



第14図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ10



第15図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ11

遺構の時期：古墳時代初頭。

ＳＢ１２

4.1m×4.45mの方形。立ち上がりや床面は明確に確認できず、地山と区別が難しい覆土で黒褐色土中に炭化粒が混入する。ピットを５ヶ所確認したが柱穴は特定できず、炉址も検出されない。出土遺物は少なく、竪穴状遺構とする。

Ⅴ層中から検出されたため古墳時代の遺構と思われる。

ＳＢ１３

ＳＢ０３の床面を検出中に南東側に黒色を帯びたプランの一部を検出した。5.92m×5.52m、深さ10cmの方形を呈する。覆土は黒褐色土に炭化ブロックを混じる。ピットを11ヶ所確認したが柱穴は特定できず、炉址も検出されず、竪穴状遺構とする。検出面では古墳時代の遺物が出土したが、覆土中にはほとんど遺物がみられない。出土遺物より古墳時代初頭の遺構と思われる。

ＳＢ１５・ＳＫ１８（第16図）

遺構の構造：調査区壁面の断面で深さ60cm掘りこみを確認したが、床面まで重機で削ってしまったため平面形を捉えることができず、炉址と柱穴の掘り方と思われるピットのみ確認した。ＳＫ１８は1.3m×1.8m深さ8cmの不定形な形状で、中にＳＢ１５の柱穴Ｐ１、Ｐ３がみられた。なお、ＳＫ１８は平安時代の遺物も出土しており、不定形な土坑部分は平安時代の遺構の可能性がある。遺物は完形に近いものが多く、いずれも床面の遺物である。平安時代の住居ＳＢ１６が覆土中に掘りこまれていることが調査区壁面の土層断面で確認された。

出土遺物（第16図１～11）：甕（１・３）、壺（２・７・８）、内湾口縁鉢（４）、小型土器（６・９～11）などが出土した。１は頸部と胴部の境に５条の櫛描直線文を、胴部には櫛描波状文を施文する。７は赤彩されており、胴部内面に指頭圧痕がみられる。本遺構に伴う遺物は図示したもののみである。

遺構の時期：古墳時代初頭

ＳＢ１７・ＳＢ１８（第17図）

ＳＢ１７とＳＢ１８は発掘現場では明確なプランは捉えることができず、遺物の分布状況から整理作業段階で遺構名を付したものである。炉・柱穴等は不明で住居址であるかどうかはわからないが、遺物の出土状態・依存状況は一定のまとまりを示している。

ＳＢ１７はＳＢ０７とＳＢ１４のプラン確認中に調査区の西側壁に多くの土器片が散在していた部分である。この遺物集中部分は東側がＳＢ０６Ｃ、南側はＳＢ１４、北側はＳＢ０７の平安時代の住居により破壊されていて、これらの住居内の覆土にも古墳時代の土師器が散在している。発掘中には遺構がはっきりせず、遺物の出土位置のみを記録することに努めた。上層の暗褐色土（炭化物と焼土粒を多く含む）では古墳時代と平安時代の土器片が出土し、下層の黒褐色土（炭化物粒を多く含む）では古墳時代の遺物が出土した。

ＳＢ１８はＳＢ０７のプラン確認中にＳＢ０７の北側にあたるⅣ層上面レベルから古墳時代の遺物が多数検出された部分である。平安時代の竪穴住居址のＳＢ０７の覆土からも赤彩壺などの古墳時代の土師器が出土している。ＳＢ０７がＳＢ１８を破壊したためＳＢ１８の覆土中の遺物がＳＢ０７の覆土にまとまって混入したと思われる。

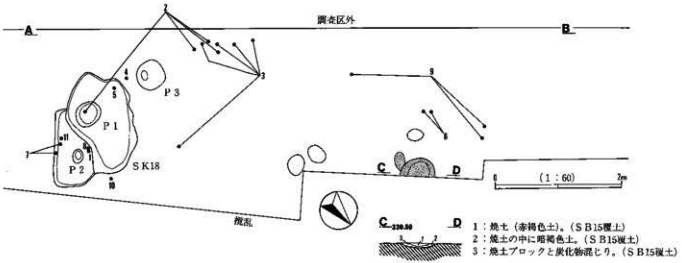
第17図にＳＢ１７・１８及びその周辺の平安時代の遺構内より出土した古墳時代土器を示した。遺物分布図の番号は実測図の図版番号に一致する。これらの遺物の多くは古墳時代前期のものであるが、３・５・６は古墳時代中期の遺物と思われ、混和材をあまり含まない胎土で他の遺物と区別される。また、３・６は内面黒色である。土器の詳細は遺物観察表に示した。

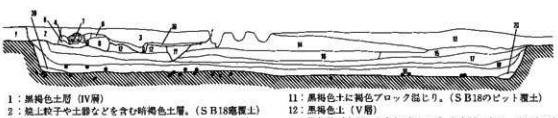
遺構の時期：ＳＢ１７・ＳＢ１８ともに古墳時代初頭のものが多く見られることから、古墳時代初頭の遺構と推定される。

２　土坑

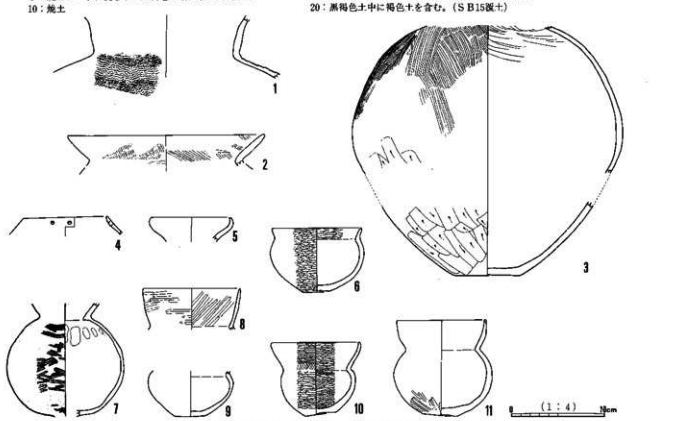
ＳＫ０２（第18図）

Ｒ０９の南東側はⅢ・Ⅳ層では遺物がほとんど出土せず、Ⅴ層面まで掘り下げて遺物が出土した部分を

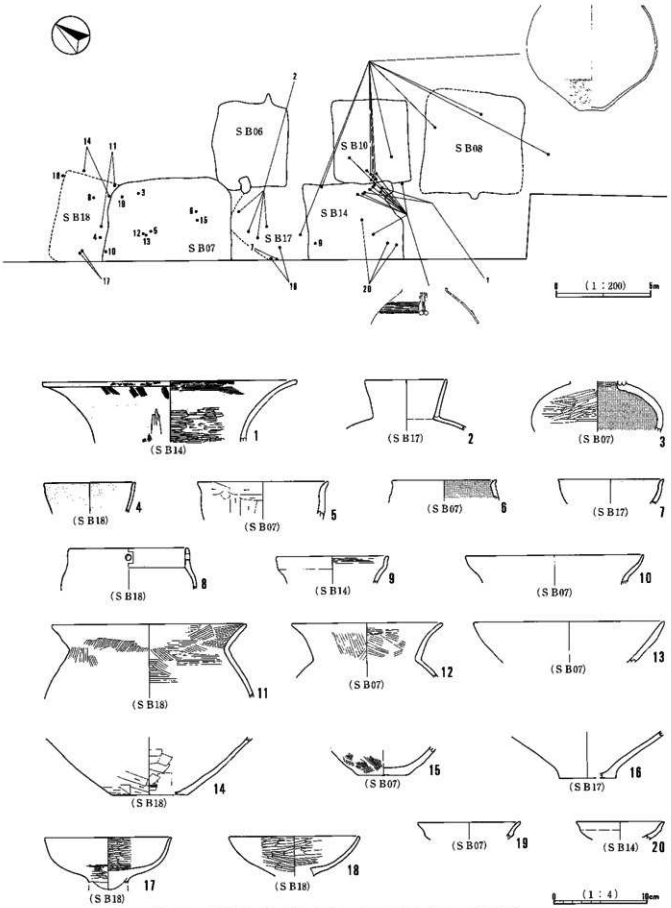




1：黒褐色土層（Ⅳ層）
2：焼土粒子や土器などを含む暗褐色土層。（ＳＢ18覆土）
3：焼土、土器、炭化物を含む暗褐色土。（ＳＢ18覆土）
4：焼土に炭化物混じり層。（ＳＢ18覆土）
5：黒褐色土層。（ＳＢ18覆土）（ＳＢ18覆土）
6：焼土ブロック。（ＳＢ18覆土）
7：焼土。（ＳＢ18覆土）
8：焼土ブロック混じりの暗褐色土層。（ＳＢ18覆土）
9：焼土ブロック混じりの黒褐色土層。（ＳＢ18覆土）
10：焼土
11：黒褐色土に褐色ブロック混じり。（ＳＢ18のピット覆土）
12：黒褐色土（Ⅴ層）
13：炭化物（木炭のようなブロック）を多量に含む。暗褐色砂層。攪乱層。
14：黒褐色土（Ⅴ層）
15：暗褐色土層（砂質）。
16：Ⅴ層とⅥ層の中間にあたる地層で砂質。
17：黒褐色土中に土器や炭化物を含む。（ＳＢ15覆土）
18：黒褐色土に褐色ブロックを含む。（ＳＢ15覆土）
19：黒褐色土中に土器や炭化物を含む。（ＳＢ15覆土）
20：黒褐色土中に褐色土を含む。（ＳＢ15覆土）

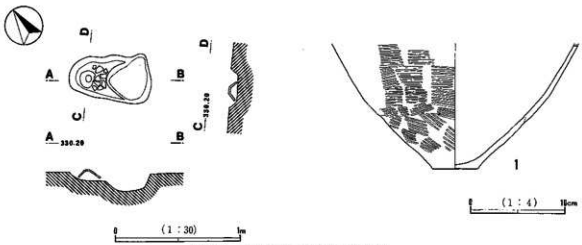


第16図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ15

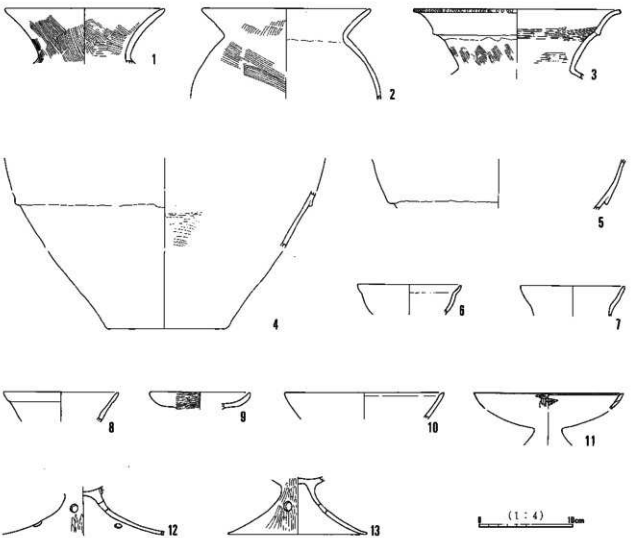


第17図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ17・ＳＢ18とその周辺の出土遺物

精査した。不整形で、円形と楕円形のピットを２つ合わせたような形態。規模は0.7m×0.35m、検出面からの深さ14cmである。浅い部分からは胴下半部を伏せた甕が出土している。覆土は黒褐色土に焼土と炭化粒が多量に混入している。甕はタタキ調整で、底部には木葉痕がみられる。



第18図　牛出遺跡　第２地点ＳＫ02



第19図　牛出遺跡　第２地点遺構外の遺物

3　小結

竪穴住居址３棟、竪穴状遺構２基、遺構と思われる遺物集中箇所２、土坑１基が検出された。いずれも古墳時代前期である。遺構外の出土遺物（第19図）も竪穴住居址と同時期のものであり、出土遺物からは古墳時代前期の比較的短期間に営まれた集落址と考えられる。しかし、ＳＢ０３とＳＢ１１のように切り合う遺構もあり、ある程度の時間的な差は考慮する必要もある。また、炉址が確認された竪穴住居址は２棟で柱穴も確認されない竪穴状の遺構もある。また、調査区中央部のピット群が竪穴住居址に隣接するなど遺構のありかたが牛出古窯遺跡の集落と類似する。牛出古窯遺跡の集落は一段上の段丘面に立地しており、約500ｍ離れている（第３図）。時期もほぼ同時期と考えられ、両遺跡の関係が注目される。

第４節　平安時代の遺構と遺物

1　竪穴住居址

ＳＢ０１（第20図）

遺構の構造：Ⅲ層上面より炭化物と遺物を多く含むプランを検出。ＳＢ０２ａの壁面を破壊しており、西側のＳＥ０１によって破壊されている。東北側は調査区外になるが一辺約5.2ｍ、深さ約0.2ｍの方形と思われる。Ｐ１・Ｐ６が柱穴と思われる。なお、Ｐ２・３・７・８は本遺構の施設ではないと思われる。

表土剝ぎ後、中世の溝であるＳＤ０１検出の際に土師器の杯と椀が完形のまま出土。遺物は４層中から出土しており、４層下面が床面であったと思われる。土層断面によれば床面のわずかな覆土を残して上部の覆土は消失していると判断される。

出土遺物（第20図１～７、第40図３）：土師器杯（１～３）、椀（４・５）、灰釉陶器段皿（６）、白磁皿（７）が出土した。1は底部回転糸切りを失敗し、底部を補強している。5は内面黒色処理されており、４・５とも外傾が強く、椀身外面のロクロ痕が明確である。

紡錘車の軸と想定される棒状鉄製品１点（第40図３）、鉄滓２点が出土した。

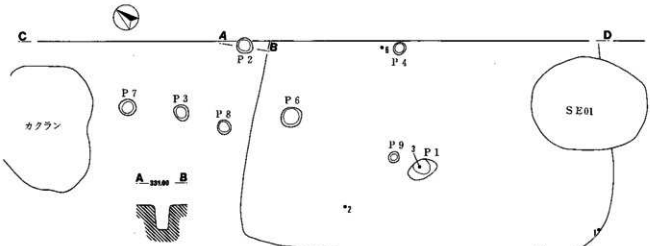
ＳＢ０２ａ・ｂ（第21～24図）

遺構の構造：Ⅲ層上面で遺物が集中し焼土が多く含まれる部分を確認。当初一つの遺構と思われたが、２棟の竪穴住居址が重複していることが判明した。ＳＢ０２ａの壁の立上りがＳＢ０２ｂの覆土中に認められ、ＳＢ０２ｂの方が古い。遺構の切り合関係からＳＫ０８・ＳＫ１０・ＳＫ１１→ＳＢ０２ｂ→ＳＢ０２ａ→ＳＢ０１の新旧関係が確認された。ＳＢ０５はＳＢ０２ｂの覆土中に構築されており、ＳＢ０２ｂより新しいことは確認されるが、ＳＢ０２ａとの前後関係は明らかではない。ｂ住居の北側の攪乱部分の下には深い柱穴（Ｐ８・Ｐ９）が残存していたが本遺構の施設か否か解らない。

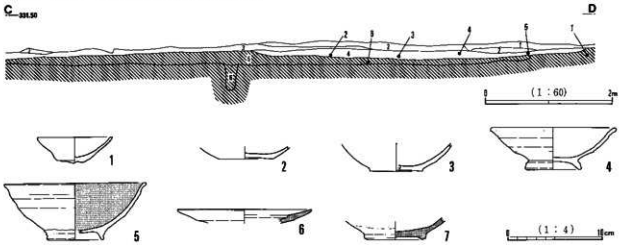
ＳＢ０２ａは5.5ｍ×5.3ｍ、深さ25～30cmの方形を呈する。竈は西壁に認められ、主柱穴はＰ１、P15、P29、P28、P26である。床面は炭化物交じりの暗褐色土で硬くない。

ＳＢ０２ｂは一辺5.8ｍ、深さ25～30cmである。竈は不明である。主柱穴はＰ30、Ｐ32、Ｐ12、Ｐ29、ＳＢ０１－Ｐ５、Ｐ12、P31である。床下が茶褐色砂層なため床面との差が明確である。床面は軟質である。

ＳＫ１４は竈を調査中に竈口南東側に確認された。0.94ｍ×0.9ｍ、深さ0.35ｍの平面円形で、摺り鉢状の土坑である。ＳＢ０２ａ・ｂの付属施設と考えられる遺構で、黒褐色土に焼土や大きめの炭化物と平



1：暗褐色土に焼土と炭化物と褐色粒子が多く混じった層。
2：1の暗褐色土に比べ焼土や炭化物が細かい粒子となって混入。
3：暗褐色土に焼土と炭化物が多量に混入。
4：暗褐色土に多量の炭化物ブロックを含み、焼土ブロックが入り交じる。部分的に焼土ブロックが多いところがある。
5：暗褐色土に黒褐色土が混入して焼土や炭化物の小粒子を多量に含み、遺物が多く出土する。
6：黒褐色土に褐色ブロックが混じる。炭化物や焼土粒を含む。



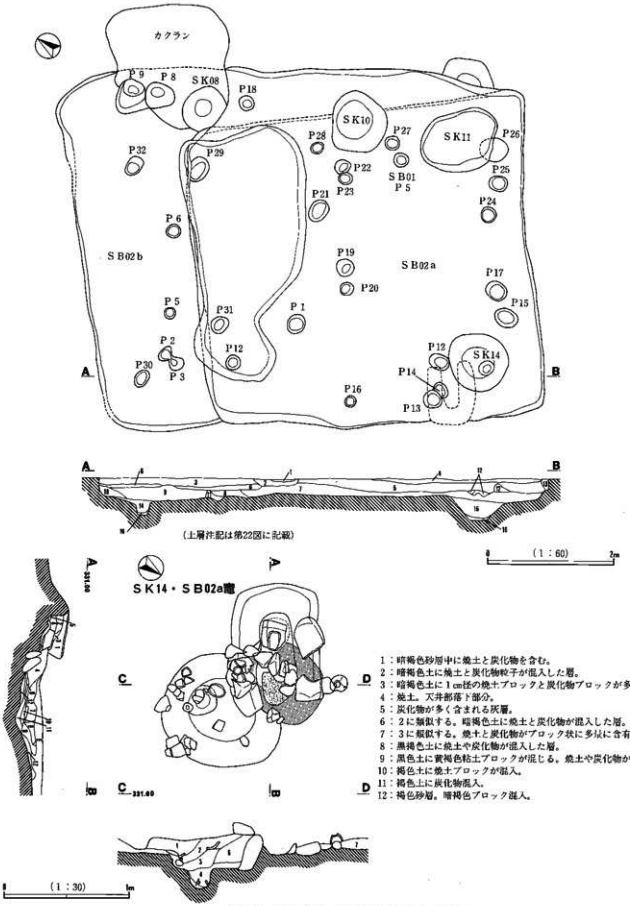
第20図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ01

安時代の土器片が混在しており、ＳＢ０２ａの床下に確認された。竈の灰捨て場と思われる。

遺物出土状況：10・17の杯と椀が竈の横に並んだ状態で出土し、27・28の甕が竈内で潰れた状態で出土している。31・32は現代攪乱層から出土しておりＳＢ０１あるいはＳＢ０５の羽釜の可能性もある。８・11・24・29はＳＫ１４下層、３・４・14・24は同上層より出土した。35はＰ21から、12はＰ26から出土した。22はＳＢ０５に伴う遺物の可能性もある。なお、13はＳＫ１１の検出面から出土した。

出土遺物（第23・24図1～36、第40図１・９・11・13）：土師器では杯（１～13）、椀（14～20）、鉢（24）、小型甕（21～23）、甕（25～30）、羽釜（31～33）、甑（34）が、須恵器では甕口縁破片（35）が出土した。この他に土師質土錘（36）が出土した。ＳＢ０２ａ覆土から緑釉陶器の皿破片２点も出土している。

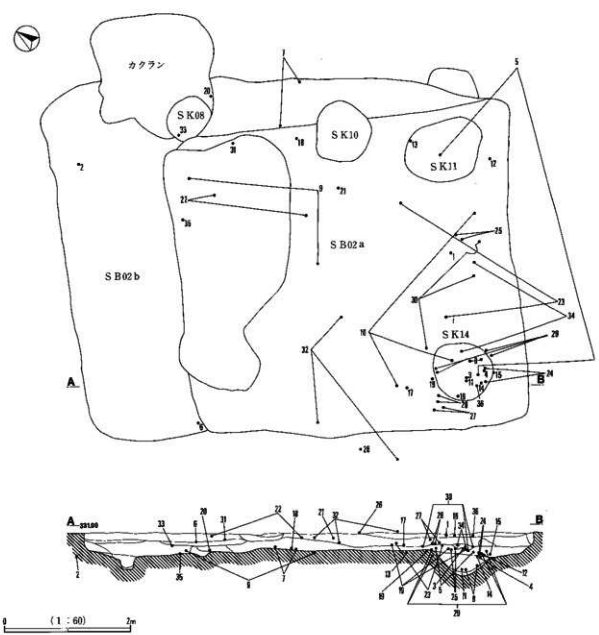
杯は約３法量あり底部は回転糸切り無調整である。椀は３法量あって、そのうちには黒色処理をほどこすものとそうでないものがある。17～20の椀は内面黒色処理されており、19は十字形の暗文がみられ、20は十字に区切られた暗文の中に木の葉状の暗文と綾杉状の暗文がみられる。甕・鉢・羽釜・甑類はすべてロクロ整形である。24の鉢は胴下半部がケズリである。27～29の胴下半部にはタタキ調整がみられる。30・32は胴下半部にタタキ調整の痕跡がみられる。35の須恵器破片は酸化焔焼成である。36はＳＢ０７の土



第21図　牛出遺跡　第2地点SB02・SK14

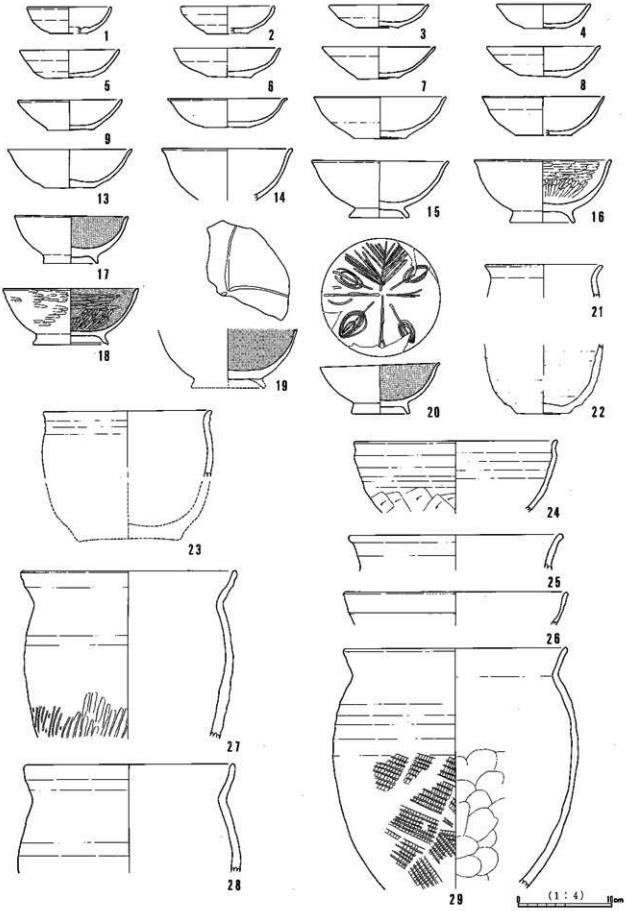
錘（第34図10～26）よりも大きく重い。同じ形態のものが長野市石川条里遺跡や松原遺跡で発見されており、伴出遺物は古墳時代前期のもので、土錘は古墳時代前期のものと推定される。

鉄製品では、鉄鏃1点（第40図1）、刀子1点（9）、鉸具（かこ）1点（11）、紡錘車の軸と推定される棒状鉄製品、用途不明のリング状の断面方形の鉄製品（13）が出土した。

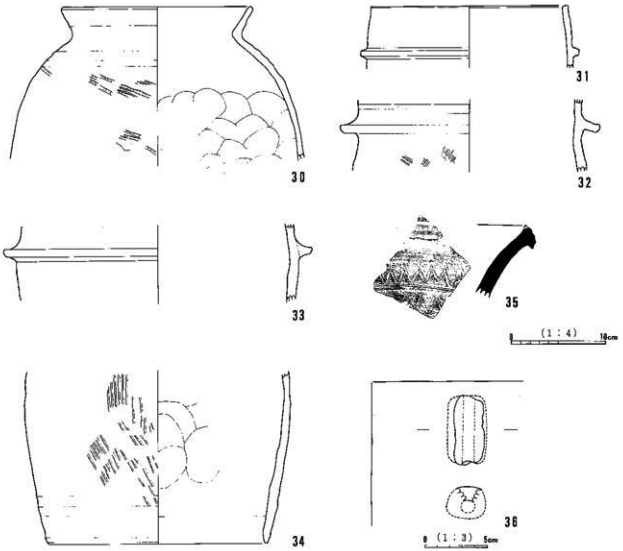


1：焼土と炭化物ブロック。
2：暗褐色土焼土と炭化物が多数混入。
3：暗褐色土にわずかな焼土と炭化物混入。遺物包含層。
4：暗褐色土（III層）
5：暗褐色土中に焼土と炭化物が多数混入。遺物が多数包含している。
6：黒褐色土に焼土と炭化物ブロックが混入し、やや固くなった層。
7：3より黒褐色に近い色調の層で遺物が多数混入している。
8：黄褐色砂層と暗褐色のブロックがまだらに混じった層。
　黄褐色の方の割合が多い、さらさらしたした層である。
9：8に類似するそうで暗褐色土の割合が多い層。
10：褐色10YR4/6の砂質層。
11：黄褐色粘土ブロック。
12：褐色粘土ブロック。
13：暗褐色土の5に類似する層。遺物の混入が少ない。
14：黒褐色土中に暗褐色ブロックが斑に混入。
15：黒褐色土に焼土や大粒の炭化物、土器が混入。
16：黒褐色土に褐色ブロックが斑に混入。
17：黒褐色土に褐色小ブロックが斑に混入。少量の焼土と炭化粒子を含む。
18：焼土ブロックに炭化物混入。
19：黒褐色土に炭化物と焼土ブロック混入。（SB01の覆土）
20：黒褐色土に20mm径の焼土や炭化物ブロックが混入。
21：黒褐色土（10YR2/2）に褐色ブロックが多く含む薄い層。

第22図　牛出遺跡　第2地点ＳＢ02遺物出土状況



第23図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ02出土遺物(1)



第24図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ02出土遺物(2)

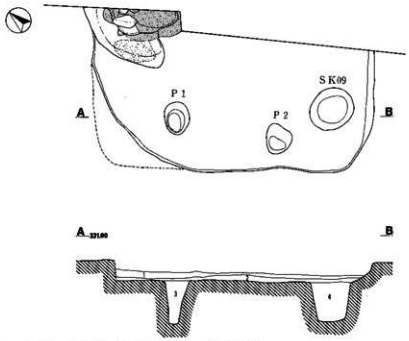
時期と性格：ＳＢ０２のａ・ｂ住居とも時期差の少ない建て替えられた住居と思われる。遺物から平安時代後半のものと思われる。

ＳＢ０４・ＳＫ０９（第25・26図）

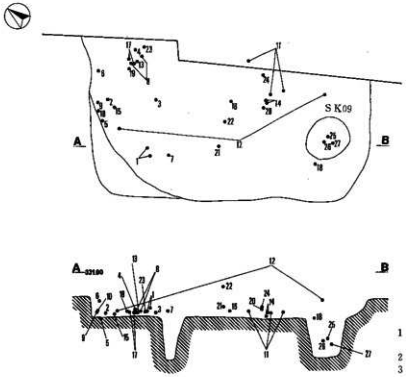
遺構の構造：Ⅲ層上面より炭化物や焼土微粒子と遺物を多く含む層を確認。住居址覆土と考えたが、Ⅲ層と非常に類似して区別できないため、東側にトレンチを入れたところ、床面と壁面を確認した。遺物の出土状況などからプラン全体を把握した。西北壁は明確なプランがつかめなかった。壁面に粘土ブロックを混入した様子が土層では確認できたが、覆土とⅢ層の違いが明確でなく、壁面を面で追うことができなかった。東側は調査区外のため未調査。

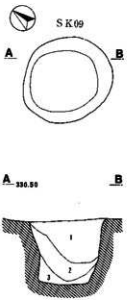
一辺約4.4ｍ、深さ約30cmの方形と思われる。竈は北壁にあり、石組竈と思われるが、東側が未調査なため全形は不明。柱穴はＰ１、Ｐ２、ＳＫ０９（調査中は土坑として登録）である。ＳＫ０９は直径0.7ｍの円形で深さ0.52ｍである。

遺物出土状況：竈内からは23の甕が出土した。完形品の土師器杯・椀が多く、竈中からは４・６・８・17・13・19、竈周辺の北西側からは２・３・５・９・10・15が出土し、竪穴住居址中央部には11・14・20の椀が出土した。Ｐ１上面からは7が、ＳＫ０９では25～27が出土している。ＳＫ０９が柱穴とすれば、



１：黒褐色土に黄褐色土ブロックと焼土・炭化物粒子混じり。土器多数出土。
２：黒褐色土。
３：ＰＯ１覆土。黒褐色土に褐色ブロックが斑に混入。底部付近に土師器杯（第　図７）が伏せた状態で出土。
４：ＳＫ０９覆土。褐色土に褐色ブロック混入。

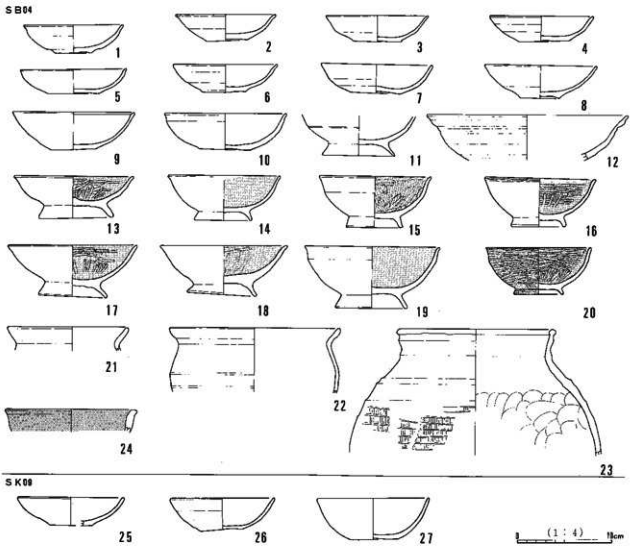




１：黒褐色土に褐色ブロックをごく薄かに混入。炭化物や焼土粒子を含む。
２：１に大粒な褐色ブロックが混入。
３：黒褐色土に濃に褐色ブロック（30%）混入。

0　(1：60)　2m　　0　(1：30)　1m

第25図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ04・ＳＫ09



第26図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ04・ＳＫ09出土遺物

住居廃絶時に柱を抜いた後、意識的に入れられたものではないかと思われる。22の甕は検出面のⅢ層より出土した。

出土遺物（第26図１～24・25～27）：土師器杯（１～10）は１～６、７・８、９・10の３法量に分けられる。土師器椀（11～20）は13、14～16・20、17・18、19の４法量に分けられる。13～19は内面、20は両面が黒色処理される。12は口縁部が非常に大きく体の可能性もある。外面のロクロ痕が顕著で、ＳＢ０１の第20図4・5の椀に形態が類似する。13は高台がやや高めであるが全器高は低く、外傾する。法量は異なるが17・18と同形態である。これらは土師器盤に類似する器形である。14～16・19・20は腰の部分がやや丸みを帯びる形態であり、前者の形態の椀とは異なる。

21～24は土師器甕である。21は小型甕であり、22は口縁部が外反する長胴の甕である。23は口縁部が直立し胴部の張る器形で、胴部下半にタタキ調整がみられる。24は両面黒色処理された甕である。22と23の甕の形態差は時期差と思われ、23の方が時期を新しくする。

25～27はＳＫ０９内出土の土師器杯で、25は６に、26は7に類似し、27は９・10に法量が類似する。

時期：ＳＢ０２と同様の平安時代後半の様相を持つ住居址である。12の椀と同形態の椀を出土するＳＢ０１も時期を同じくすると思われる。

ＳＢ０５・ＳＫ０４・０５・０７（第27・28図）

調査経過と遺構の構造：Ⅲ層上面で杯など完形品に近い形のものが出土。トレンチなど縦横に入れ精査したが、プランが明確できず、Ⅲ層の検出面をわずかに掘り下げた時点で住居址床面が露出した。壁が残存せず、千曲川の洪水によって覆土が流されたものと思われる。東側はＳＢ０９によって破壊されている。ＳＢＯ５の床面の検出中にＳＫＯ４、ＳＫ０５が検出された。これらの土坑はＳＢ０５と関連する可能性がある。

柱穴はＳＫ０７（発掘時に土坑として登録）、Ｐ10、Ｐ５、Ｐ７、Ｐ６と思われる。石組の竈が南東側にみられるが、焼け石が散乱しており破壊されている。床面は黒褐色土に焼土炭化物が混入している貼り床である。柱穴と遺物出土状況から一辺約５ｍの方形の竪穴住居址と推定する。

ＳＫ０４は2.2ｍ×2.2ｍの不整形土坑で底面も凸凹である。深さは0.3ｍ。覆土上面にＳＢ０５の床面が一部残存しており、下層は黄褐色土ブロックを混在させた暗褐色土の砂質層である。

ＳＫ０５は0.5ｍ×0.7ｍ、深さ0.17ｍの円形を呈する。上層に焼土が混入しているが、下層は暗褐色土に褐色ブロックが交じり焼土がなく、ＳＢ０５の床面の土とは異なる。遺物はほとんど上面より出土する。20cm大の偏平な礫がＳＢ０５床下にみられ、その脇に甕が潰れた状態でみられた。下層に遺物はない。

ＳＫ０７は1.2ｍの円形プランで内径0.5ｍ×0.7ｍの断面ロート状で、深さ0.3ｍである。ＳＫ０４によって半分破壊されていた。覆土はＳＢ０５の他の柱穴と同様な覆土である。ＳＢ０５の柱穴である。

遺物出土状況：10はＳＫ０５の上面やＳＢ０５の床面からも出土している。3はⅡ層中から完形で出土している。洪水の際千曲川方向に流されたものと思われる。11の羽釜は竈から出土している。ＳＫ０４の上面や、ＳＫ０７の上面にあった遺物はＳＢ０５床面の遺物と思われる。1・6・7・11出土状況からＳＢ０２の遺物の可能性がある。

出土遺物（第28図１～19）：ＳＢ０５出土の土師器は杯（１～６）・椀（７・８）・片口鉢・甕（９・10）・羽釜（11）がみられる。杯は、１・２（9.6～10：2.5cm）、３・４（11:3cm）、５（14：4cm）の３法量みられる。６は内面黒色処理、8は両面黒色処理されている。ＳＫ０５出土の土師器小型甕（17）はＳＢ０５の甕と違い口縁部が外傾している。ＳＫ０７より出土した土師器杯（18・19）はＳＢ０５の杯５に法量が類似する。

ＳＫ０４では黒色処理された杯（12）、黒色処理された片口鉢（13）、小型甕（14）、長胴の甕（15・16）が出土した。15・16は同一個体の可能性がある。

ＳＫ０５では小型甕（17）、ＳＫ０７では杯（18・19）などが出土した。

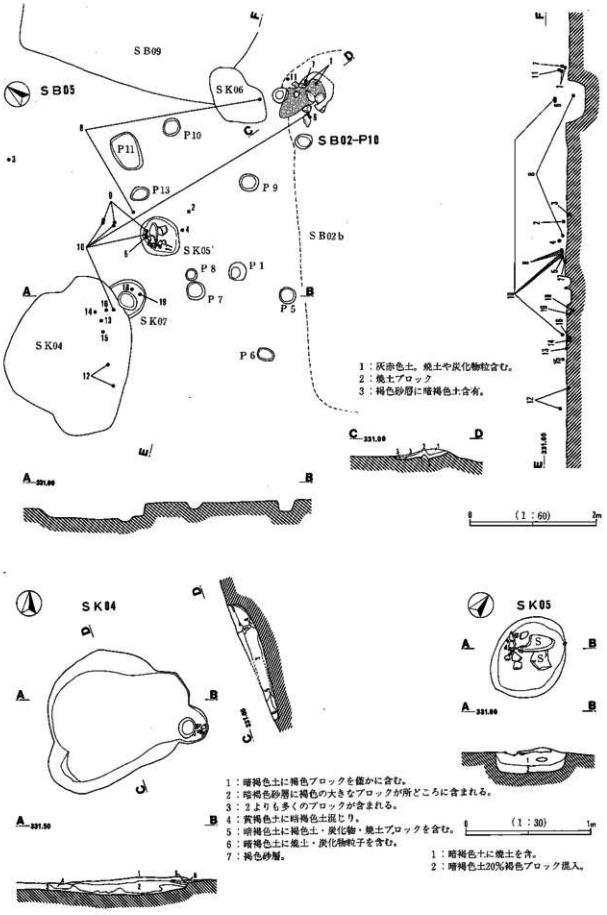
時期と性格：遺物から平安時代後半期の住居址と思われる。

ＳＢ０６（第29～32図）

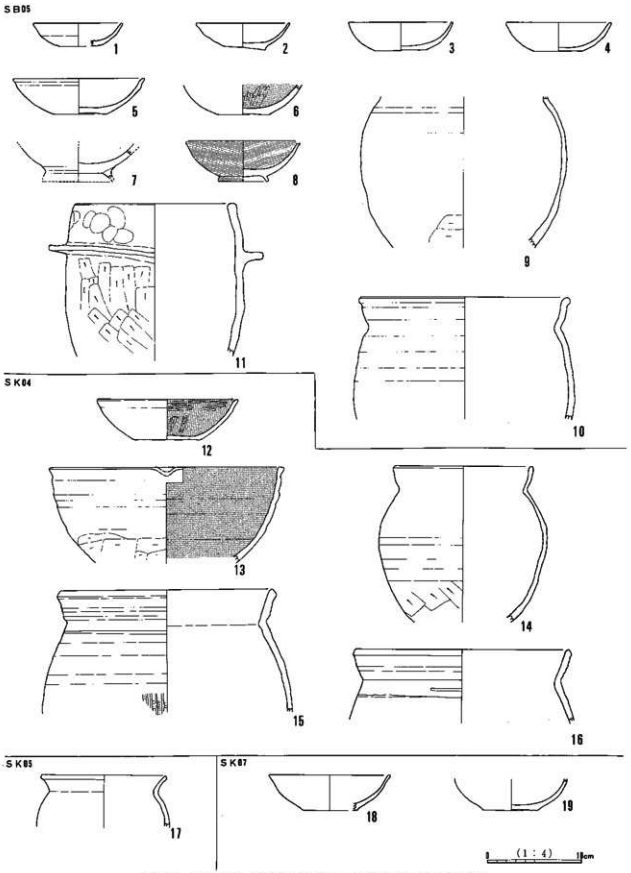
調査経過：Ⅲ層上面よりＲ０２の北西側に焼土の部分を確認。周辺に遺物が集中出土し、またＲ０１の南東側にも完形の土師器杯が多く、プラン確認を行った。しかし住居址の明確な範囲をつかめなかった。さらに掘り下げた段階では、北東側に遺物の集中部分が見られ、破片の遺物が多くなり、遺構のプランを確認した。

遺構の平面形状と竈と思われる複数の火床面から、３棟の竪穴住居址の重複したものと判断し、整理作業の段階でＲ０２の焼土部分をＳＢ０６ａ、南側に確認された方形プランをＳＢ０６ｂ、北側のものをＳＢ０６ｃとした。遺物は分布範囲と高低差で所属する遺構を区別した。ＳＢ０６ａ・ｂは遺物とその分布状況のみ提示した。

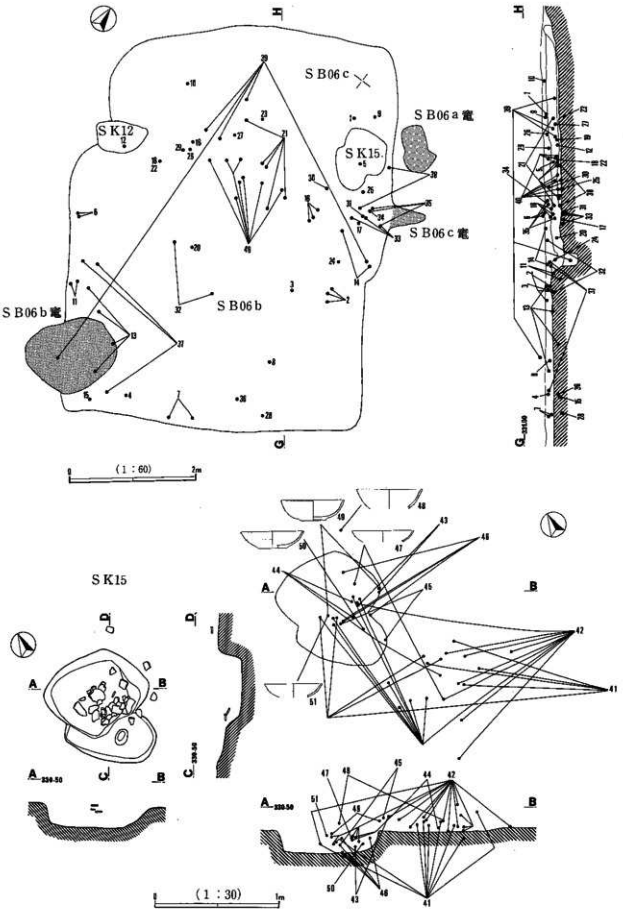
遺構の構造：ＳＢ０６ａは焼土のみである。ＳＢ０６ｂは床面と南西側の端に竈の底面が検出された。



第27図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ05・ＳＫ04・05・07



第28図　牛出遺跡　第2地点SB05・SK04・05・07出土遺物



第29図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06・ＳＫ15遺物出土状況

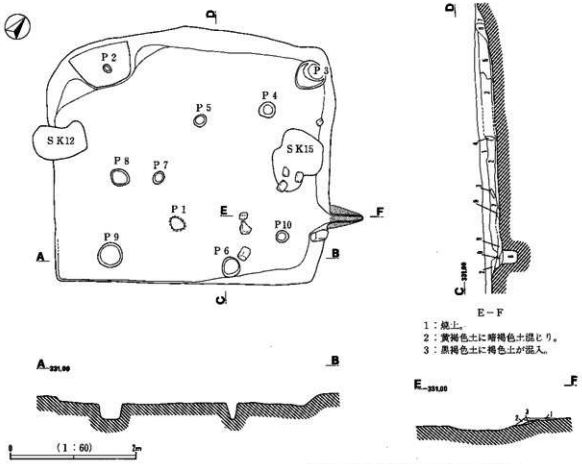
ＳＢ０６ｂの床下からＳＢ０６ｃのプランが検出された。ＳＢ０６ｃは4.35ｍ×4.1ｍ、深さは25㎝の方形を呈する。北東壁の東隅寄りに煙道と竈の心材に用いられた思われる石が破壊された状態で確認された。竈の口はやや凹んでおり、甕などが多くみられる。主柱穴はP3,P12,P9,P11の４本と思われる。覆土は暗褐色土中に黄褐色粘土ブロックを斑に含有する。

ＳＢ０６ｃの付属施設と思われるＳＫ１５は約0.6ｍ×0.7ｍ×0.2ｍの深いものと、0.7ｍ×0.4ｍ×0.08ｍの浅いものが切り合った不定形である。ＳＫ１５内にＳＢ０６ｃの竈付近の遺物が流れ込んでおり（第29図右下）、竈の灰を一時置くための土坑に土器が流れ込んだと推測される。土師器杯・長胴甕等（第32図41～46）が出土した。

ＳＢ０６ｃの覆土中にＳＢ０６ｂの床が構築されていることから、ＳＢ０６ｃ→ＳＢ０６ｂの構築順が明らかとなったが、これらとＳＢ０６ａとの構築順は確認できなかった。

遺物出土状況（第29図）：1～8・11～15はＳＢ０６ｂ床面から出土した。29も層位的にＳＢ０６ｂの可能性がある。ＳＫ１５の45は16と形態が類似しており、ＳＫ１５上面より出土した。15・28・36は平面分布ではＳＢ０６ｂであるが、床面より深い層で出土した。

ＳＢ０６ｃの竈では31・33・34・35・38の甕が、竈周囲では17・24・25が出土した。ＳＢ０６中央部からは39・40の甕と甑が出土している。第32図41・42の甕の接合破片の多くはＳＢ０６ｃの竈口元から出土



C－D
1：暗褐色土に１～２㎝の炭化物ブロックを多量に含む。
2：黄褐色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土層。炭化物粒子を含む。
3：粘土ブロック
4：暗褐色土に大粒の黄褐色粘土ブロックが斑に多量に含有。
5：３に類似するが黄褐色粘土ブロックが少ない。
6：黒褐色土に細かな褐色ブロックを多量に含む。
7：黒褐色土。
8：黄褐色粘土ブロックの中に暗褐色土が斑に混入。床面。
9：黒褐色粘質層。

第30図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06ｃ

しその一部がＳＫ１５の下部から出土している。

出土遺物（第31・32図１～46）：１～28・30～46は土師器、29は灰釉、30は緑釉である。１～８・11～13・15は外傾度がきつく、器壁厚手の杯であり、１～８、11～13、15の大きさで３分類できる。14は内面黒色処理されている杯であり、器壁が薄い。17～25は器壁の薄い杯で腰部が少し湾曲する形態である。24・25は内面黒色処理で12～14の大きさに類似する。26～28は椀であり、26・27は内面黒色処理されている。27は口縁部と底部が欠損しているが、26より大きいと思われる。29は灰釉の皿で、30は緑釉の稜皿である。31～33は小型甕。34・35は鍋型土器で同一個体と思われるが、接合せず器高は不明。36は羽釜で、鍔が一巡りせず3～4カ所に短く切れるタイプである。37は鍔が一巡りする羽釜である。

38・39・41～45は長胴甕、40は甑である。38の口縁部は肥厚し内湾する。39は口縁部が玉縁状である。41・42は口唇部に丸みがあり、肉厚で類似する。43・44も口縁形態が類似する。同一個体の可能性がある。45はＳＢ０６の16・39の口縁形態に類似する。40は上越地方（旧正善寺川遺跡　図版161　新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　1994）にみられる甑である。甕の口縁部のようにくの字状の器形を甑の底部開口部としている。２孔一対で４つの穿孔部分を持ち、胴部は膨らみを持ち、胴部から口縁部まで余りつぼまらず、口縁部は底部開口部よりも大きい。口縁部は折り曲げ口縁で肥厚する。

41～45は長胴甕である。41・42は口唇部に丸みがあり、肉厚で類似する。43・44は同一個体の可能性がある。45は16・39に口縁形態が類似する。46は椀であり、内面と口縁部に赤彩されている。

棒状鉄製品１点（第40図５）と鉄滓１点が出土した。

遺構の時期：出土遺物より何れも平安時代後期と思われる。ＳＢ０６ｃは10世紀代、ＳＢ０６ｂは11世紀代と思われる。ＳＢ０６ａは伴う遺物が限定できず、時期は不明である。

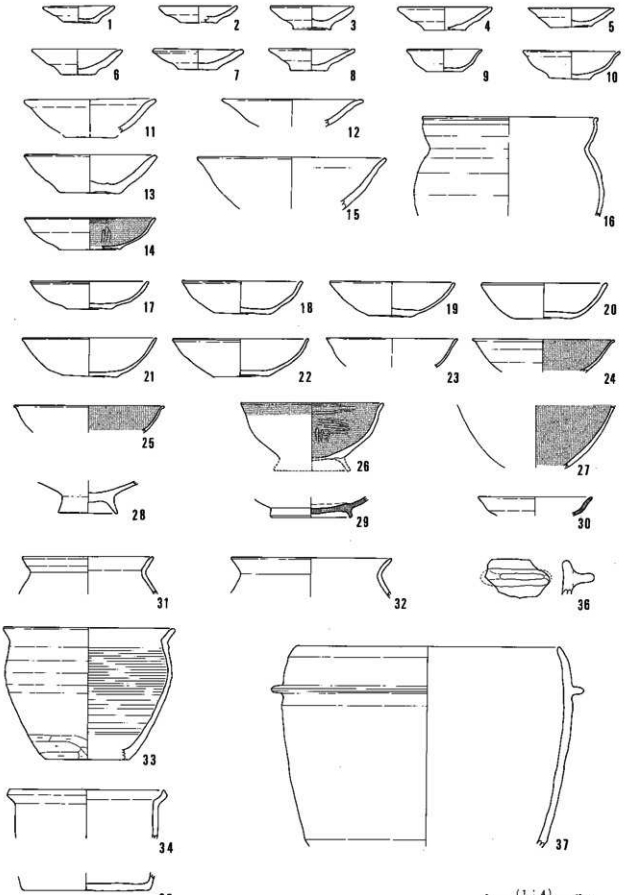
ＳＢ０７（第33・34図）

遺構の構造：西側は調査区外のため未調査。方形で規模は6.5ｍ×（4.5）ｍであるが、遺構の北西側には柱穴がなく、砂質土が貼られ他の床部分よりも約６㎝高くなっている。床面上は全体に大粒の炭化物が多くみられた。Ｐ１・Ｐ５・Ｐ11・Ｐ20・Ｐ23・Ｐ25・Ｐ26・Ｐ27は深く掘りこまれていることから柱穴と思われる。他にもピットが多数検出されており柱穴であることも考えられる。このように柱穴の数が多いことから、上部構造の建て直しがあったと推定される。主柱穴は、配置関係からＰ１・Ｐ19・Ｐ24・Ｐ25、またはＰ５・Ｐ11・Ｐ19・Ｐ26などの組み合わせが考えられるが、建て直しによる柱穴の変遷を実証するデータは得ることができなかった。柱穴の掘り方は上方が太い円柱状で、下方は細い円柱形態であった。また柱穴の部分は床面で焼土が確認され、柱が建ったままで火を受けた状態が窺えた。南東壁に焼土と焼け礫が纏まって出土した。竈と思われるが、破壊されていてはっきりした構造がつかめなかった。ＳＫ２０は長軸0.75ｍ深さ0.45ｍの楕円形のような形状の土坑で、上面にＳＢ０７の覆土がみられる。下半部は南北に堆積状況が違い、北側は埋め戻したような堆積であり、南側は柱穴のような部分がみられる。ＳＢ０７の施設と考えた。

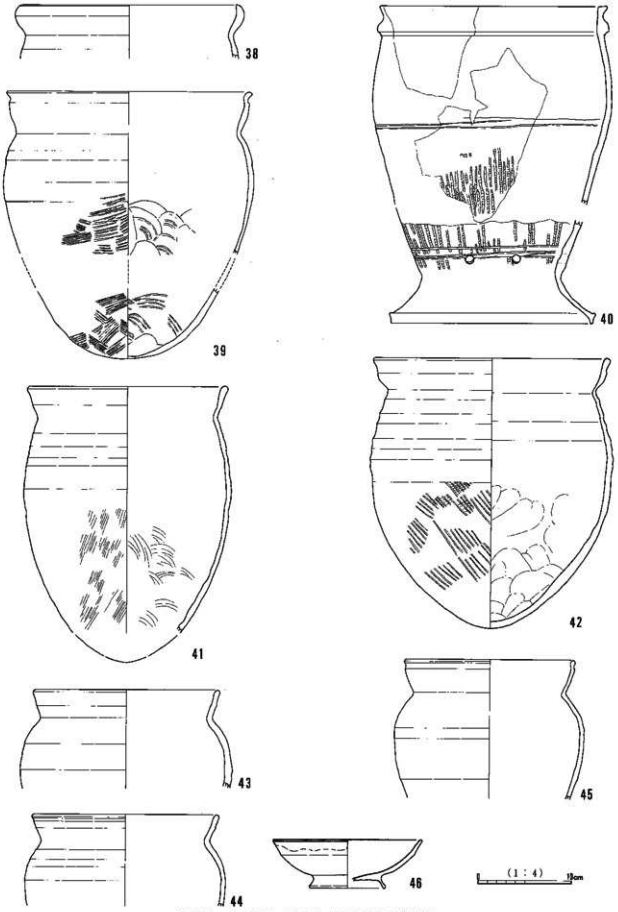
遺物出土状況：１の杯と７の羽釜は下層覆土中から出土し、２・３の杯は柱穴内から出土。８は床下壁際から出土。土錘はほとんどがまとまり、覆土下層から出土している。

出土遺物（第34図１～26）：１～８は土師器、９は須恵器、10～26は土錘である。１～４は杯で、１～３は器壁が薄く、４は器壁がやや厚く口縁部が外反している。５・６は椀で、６は内外面黒色処理されている。７は鍔が巡る小型の羽釜である。８は手づくねの小型甕で、丸底であり、出土状況から時期の違いも考えられる。９は須恵器の凸帯付四耳壺である。10～25は同形態の土錘である。なお、26は遺構外（R18グリッド）出土の土錘で、ＳＢ０７出土の土錘より約２倍の長さがある。

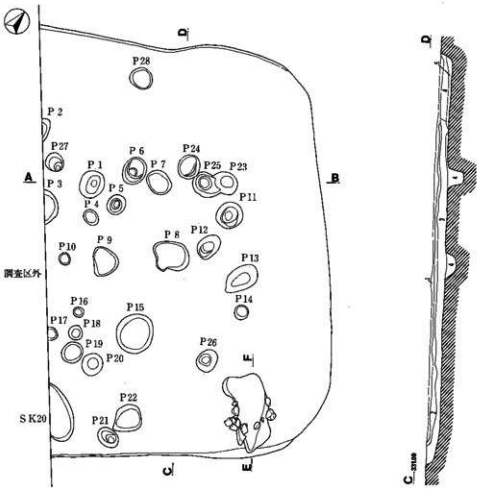
鉄鏃１点（第40図２）、棒状鉄製品１点（４）、楔形鉄製品１点（７）、鎌？１点（８）、用途不明の鉄製



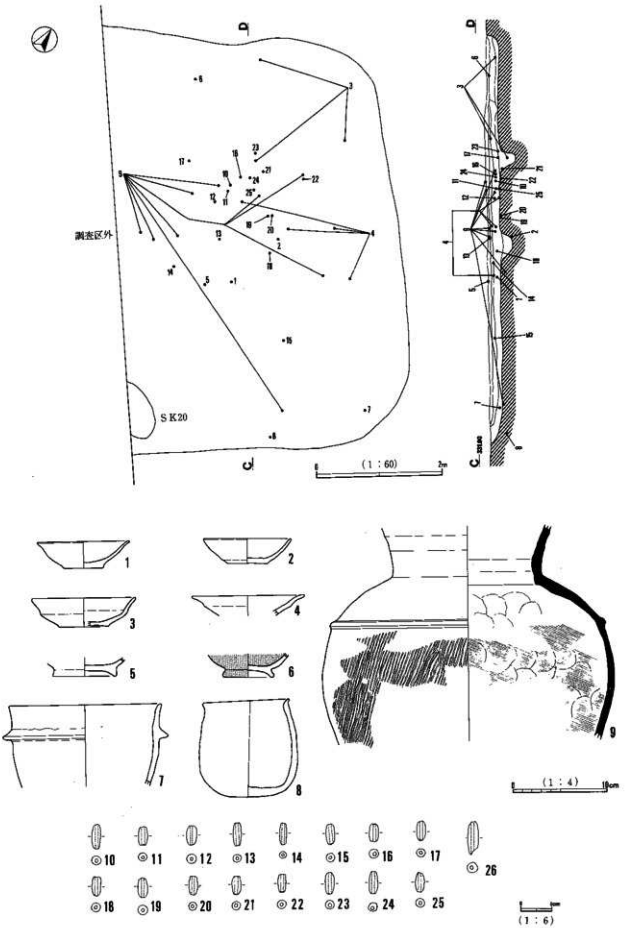
第31図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06出土遺物(1)



第32図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ06出土遺物(2)



第33図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ07・ＳＫ20



第34図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ07出土遺物と出土状況

品１点（12）、鉄滓２点が出土した。

時期と性格：出土した遺物がほとんど破片であり、竈内にも遺物が残っていない。柱穴上面が火を受けたような状態であるが、遺物の状況から火災によるものではなく廃棄した後に焼失した可能性があろう。また、北西側から南東側に位置をずらして立て直しを行った住居と思われる。

時期は平安時代後期の住居と思われる。

ＳＢ０８（第35図）

遺構の構造：ほとんど床面も残存しないような状態であったが、5.2ｍ×5.25ｍの方形と思われる。竈は西側中央にあり、石組竈であったと思われ、礫が散乱している。Ｐ２・Ｐ３は浅い柱穴と思われる。ＳＫ16は竈脇の焼土灰捨て土坑と思われる。

遺物出土状況：覆土が失われており遺物は少ない。１・２は床下、３はＳＫ１６と竈内から出土した。１はほぼ完形品である。

出土遺物（第35図１～３）：１～３は土師器の杯である。３は内外面黒色処理されている。１・２は器壁が厚い外傾の強い杯である。１はＳＢ０６の第31図２に法量や形態が類似し、２はＳＢ０６の第31図18～20の法量や形態が類似している。他に鉄滓１点が出土した。

時期：出土遺物より平安時代後半の住居址である。

ＳＢ０９（第35図）

遺構の構造：東側は発掘区域外にて未調査。一辺3.8ｍの方形であると思われる。ＳＢ０５の床面確認中にＳＢ０５の床を切った形でＳＢ０９のプランを確認。南コーナー部分のＳＫ０６はＳＢＯ５より古い土坑である。竈は確認されず、ピットは６ヶ所確認しており、深くはない。床面は砂層ブロックが混入した硬くない面である。壁高は13cmで地山が砂層で崩れ易い。

遺物出土状況：Ｐ１上面に墨書された杯（第35図５）が潰れて出土。6は壁面で出土している。

出土遺物（第35図４～６）：４～６は土師器の杯である。５は内面黒色処理されている。外面に「今」の墨書がみられる。６も内面黒色処理されている。

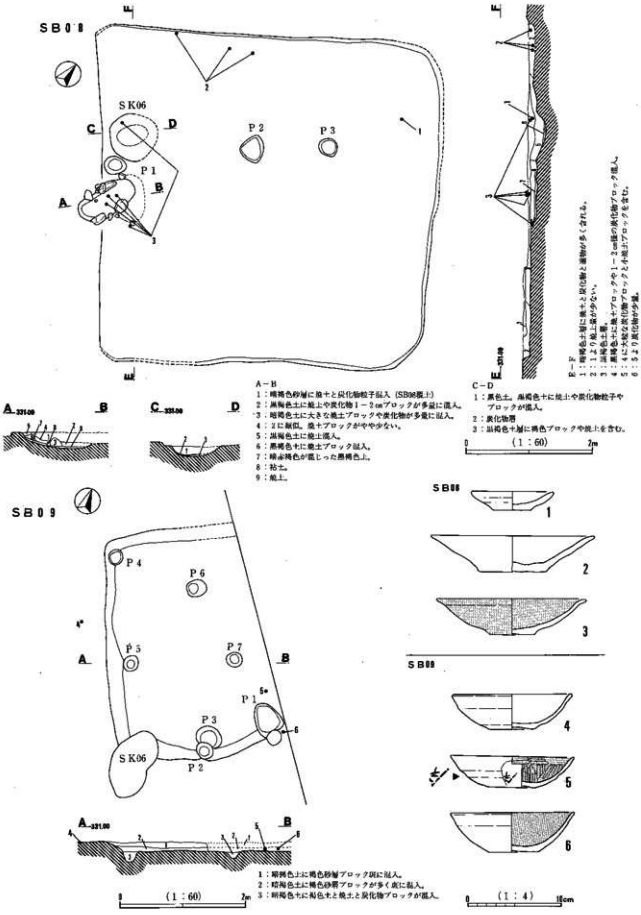
時期：ＳＫ０６、ＳＢ０５よりも新しいが、大きな時期差のない平安時代後半の住居と思われる。

ＳＢ１４（第36～38図）

遺構の構造：5.0ｍの方形のプランで、西側部分が調査区域外。北東側部分はＳＢ０６ｂによって壁面が壊されている。竈は砂岩と粘土で築かれた石組の竈であったと思われるが原形をとどめない。ピットを７ヶ所確認した。床面は軟らかく、同一面として検出できなかったが、床面形成前の掘方面が確認できた。

遺物出土状況：竈付近から甕や羽釜など多くの煮沸具が出土した。竈の回りには椀や杯などの食膳具が多くみられる。平安時代の土器に交じって多数の古墳時代の土器片が混入している。

出土遺物（第37・38図１～43）：１～17・21・23～43は土師器、18は須恵器、19・20・22は灰釉陶器である。１～６・14・16・17は杯である。２・３以外は法量が一定ではない。５・６は他の杯よりも法量が大きい。６は内面ミガキがみられ黒色処理されていたと思われ、底部外周ケズリがみられる。16は内外面黒色処理されている。17は内面赤彩されている。７～13・15は椀である。７～13は内面黒色処理されている。18は高台付き杯である。19の灰釉陶器は光ヶ丘産の皿と思われる。20は漬け掛けの皿である。22は短頸の瓶である。21は内面ミガキのある鉢。23は内面黒色処理された口頸がくの字状になる鉢である。24は小型甕。25～28・32～35・38～39は長胴の甕である。35は胴部にケズリがみられる。39～43の拓本は長胴甕のタタキ目である。39は大きめの格子目であり、40～43は横位の平行タタキ目である。38は平行タタキ目を縦位に施している。36は平底の小型甕の底部と思われる。29は鍔が巡るタイプの羽釜である。30・31



第35図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ08・ＳＢ09

は飯底部の開口部である。他に、鍬・鋤先の破片（第40図６）１点、砥石（第12図７）が１点出土した。

時期と性格：遺物の様相から平安時代後半のものと思われる。

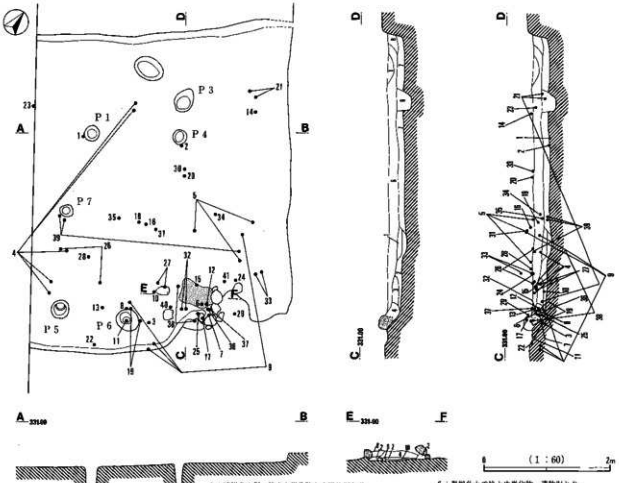
ＳＢ１６

調査区の西壁際のＳＢ１５覆土上層に竈の一部分を確認した。しかし、竪穴住居の大半は調査区外にあり、地層断面によって位置を把握するのみに終わった。この遺構を調査後の整理作業中にＳＢ１６として登録した。土師器の甕、土師器の杯・椀、黒色処理された杯・椀・甕の破片が出土した。

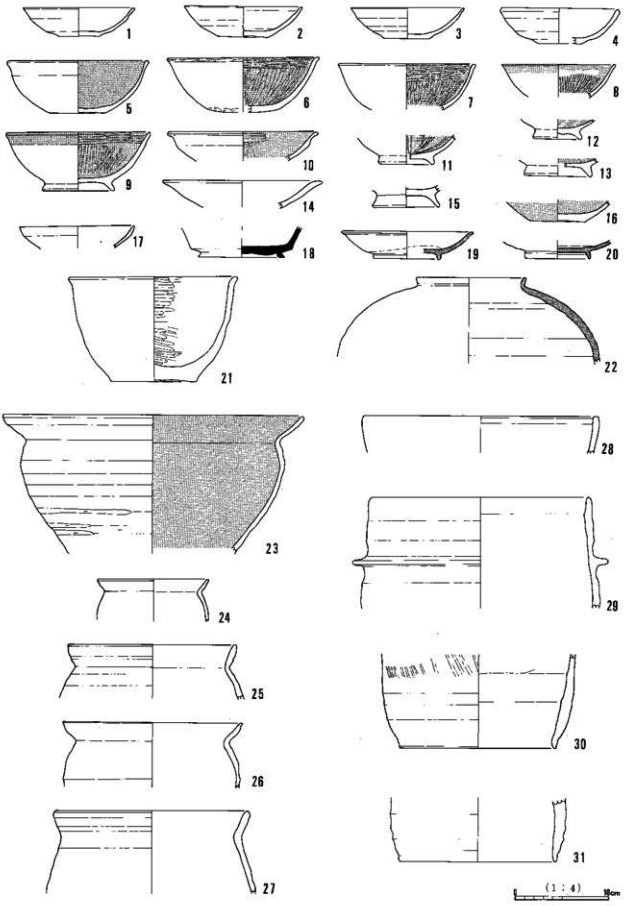
ＳＢ１９

調査区南隅の調査区域外との境の壁面付近のⅢ層下面からⅣ層上面にかけて、小さな破片遺物が集中出土した。明確な遺構の確認ができないため遺物の出土位置を全て記録した。地層断面にもはっきりした遺構の立ち上がりを確認できなかったが、遺物の出土位置はほぼ方形の範囲を示し、竪穴状の遺構があった可能性を認めて、整理作業時にＳＢ１９とした。全体図に遺物分布範囲のみを示した。

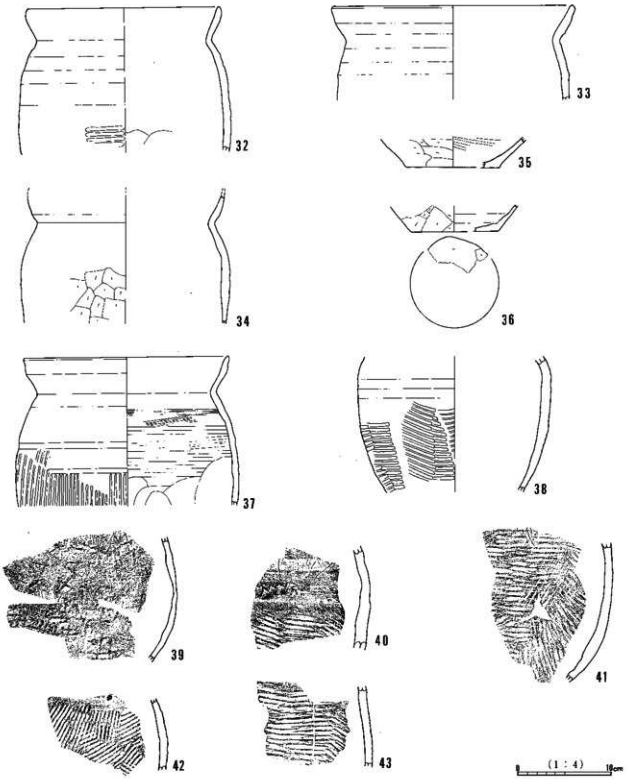
出土遺物は土師器の杯・椀・甕、黒色処理された杯・椀などの破片である。平安時代半ばから後半の時期の遺構と思われる。



第36図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ14



第37図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ14出土遺物(I)

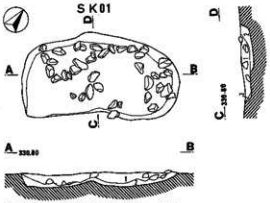


第38図　牛出遺跡　第２地点ＳＢ14出土遺物(2)

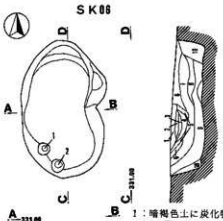
2　土坑

ＳＫ０１（第39図）

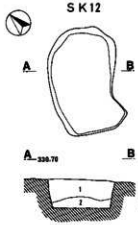
1.3m×0.6mの隅丸の長方形。深さ約10cmである。覆土中には拳大の河原石が配列される。覆土には焼土や炭化物粒が混在しているが、河原石は火を受けていない。火葬骨などの埋葬が推察される。断面中央



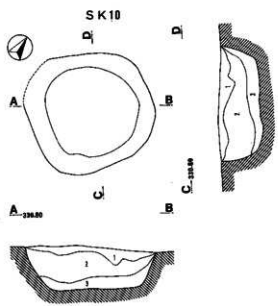
1：暗褐色砂層。焼土炭化物ブロック混合
2：１と旧層中間層的



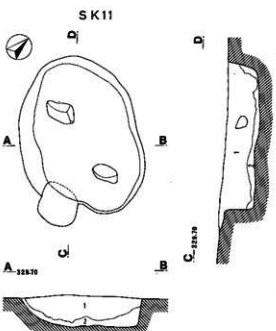
1：暗褐色土に炭化物ブロック混入。褐色土粒子も含む。（土層05の竈横の小土坑と思われる）
2：焼土層（土層05の竈横の小土坑と思われる）。
3：炭化物層（土層05の竈横の小土坑と思われる）。
4：焼土層（土層05の竈横の小土坑と思われる）。
5：暗褐色土に褐色土粒子が20%混入（土層05の竈横の小土坑と思われる）。
6：暗褐色土土層（盛層）。
7：暗褐色土に褐色土粒子20%混入。
8：暗褐色土に焼土・褐色ブロック（20%）が混入。
9：黒褐色土に炭化物粒子が混入。
10：暗褐色土に褐色土（10%）が混入。（壁が崩れたものと思われる。）



1：黒褐色土に炭化物（1cm）を含。
2：褐色土層に黒褐色土が斑に混入。



1：暗褐色土に褐色土が30%混入。炭化物を含む。（SB02床面）
2：黒褐色土に褐色土40%混入。焼土や炭化物含。
3：黒褐色土に褐色土40%を混入。焼土や炭化物含。



1：黒褐色土（7.5YR2/2）。黒褐色土の粒子は粗くぼそぼそしている。土器が多く含有。
2：黒褐色土に褐色土（VI層）ブロックが混入。

(1：30)

第39図　牛出遺跡　第２地点ＳＫ01・06・10・11・12

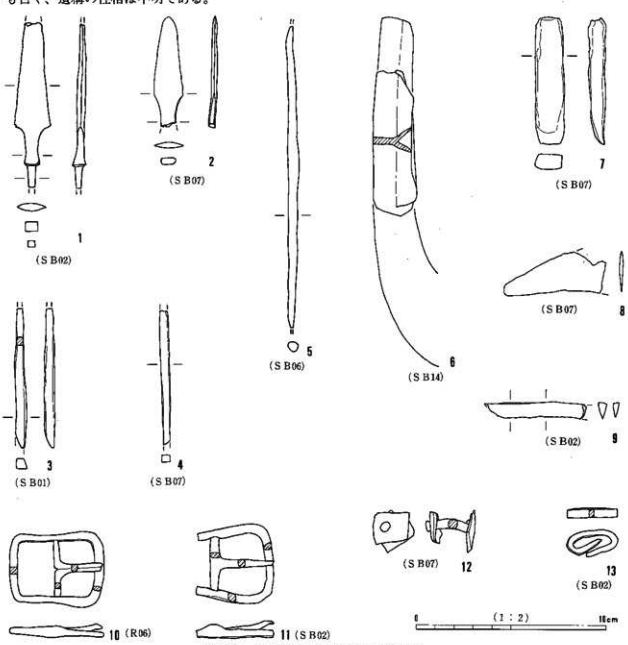
部にはやや高まりがみられ、全体的に底面は凸凹している。河原石以外、全く出土遺物はない。Ⅲ層中位の土層から検出されたのでＳＫ０６などと同様平安時代後半の土坑と推定される。

ＳＫ０６（第39図）

ＳＢ０５竈下のＳＢ０９の住居床面より土坑プランを検出。2.2ｍ×1.3ｍの楕円形で、底面は平らな断面箱型である。覆土下部は埋め戻したような褐色ブロックと暗褐色土が混在する。土坑の下半部壁際に杯２個が伏せられて出土した。出土遺物より平安時代後半のものと思われる。杯が伏せた状態で置かれていたことなど、土坑墓の可能性がある。

ＳＫ１０（第39図）

ＳＢ０２の床面検出中に暗褐色土の円形プランを確認。1.0ｍ×0.88ｍ深さ0.35ｍの円形の土坑で、断面箱型で底面が平らである。覆土下部は褐色交じりの黒褐色土で焼土や炭化物が混入しており、埋め戻したような層である。１層に平安時代後半の遺物破片が出土した。下部からは出土遺物無し。ＳＢ０２よりも古く、遺構の性格は不明である。



第40図　牛出遺跡　第２地点出土金属器

ＳＫ１１（第39図）

ＳＢ０２の床面検出中に確認。切り合いはＳＢ０２の柱穴Ｐ26がＳＫ１１を切っており、ＳＢ０２よりも古い土坑と思われる。1.3m×9.5m深さ0.25mの楕円形を呈している。覆土上部より平安時代の遺物や大きな礫が出土した。平安時代後半で性格不明の土坑である。

ＳＫ１２（第39図）

ＳＢ０６ｃの西側プランを確認中楕円形のようなプランを確認。0.85m×0.53m、深さ0.25mの不定形な断面箱型の土坑である。平安時代の遺物と古墳時代の遺物が混在している。ＳＢ０６ｃの遺構を切っておりそれよりも新しい遺構である。ＳＢ１２から出土した遺物はＳＢ０６ｃとＳＢ１７の遺物が攪乱されて混入したものと思われる。

3　金属器（第40図、第２表）

牛出遺跡第２地点では鉄鏃２点、紡錘車の軸と推定される棒状鉄製品５点、鋤・鋤先１点、楔形鉄製品１点、鎌？１点、刀子１点、鉄具（かこ）２点、用途不明の鉄製品２点が出土した。その他鉄滓が13点出土した。鉄滓はＳＢ０１・０６・０７・０８の遺構内と、Ｒ０２・０６・０７グリッドより出土した。

第２表　牛出遺跡　第２地点鉄製品一覧表

図版番号	出土地点	器種名	整理番号	取上番号	備　考	図版番号	出土地点	器種名	整理番号	取上番号	備　考
第40図３	SB01	棒状鉄製品	5001	295		第40図２	SB07	鉄鏃	5008	277	
	SB01	鉄滓		106		第40図４	SB07	棒状鉄製品	5007	254	
	SB01	鉄滓		140		第40図７	SB07	楔形鉄製品	5011	241	
第40図１	SB02	鉄鏃	5005	731		第40図８	SB07	鎌？	5009	14	
第40図11	SB02	帯金具	5004	573			SB07	鉄滓		40	
第40図13	SB02	不明	5002	455			SB07	鉄滓		124	
第40図９	SB02	刀子	5003	519			SB08	鉄滓		61	
	SB02	不明（鉄片）		548		第40図６	SB14	鋤・鋤先	5012	415	Pit1内出土
	SB02	棒状鉄製品		354			R02グリッド	鉄滓		79	5点
	SB02	不明（鉄片）		529			R06グリッド	不明（鉄片）			
第40図５	SB06	棒状鉄製品	5006	285	断面出土、断面方形の部分もみられる。		R06グリッド	鉄滓		112	
	SB06	鉄滓		279		第40図10	R06グリッド	帯金具	5013	213	
第40図12	SB07	不明	5010	14			R07グリッド	鉄滓		61	

第５節　中世の遺構と遺物

1　遺構

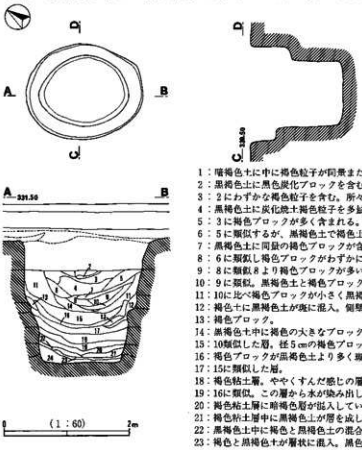
ＳＥ０１（第41図）

Ⅲ層中では明確なプランがつかめず、ＳＢ０１検出中に床レベルから明確な円形プランが検出された。南北約1.9m、東西1.5m、深さは検出面より1.4mの楕円形を呈する。覆土上部は側壁が壊れて堆積した後に埋め戻した様子が窺える。覆土上層よりＳＢ０１の覆土に包含されていたと思われる平安時代の遺物が出土したが、他に出土遺物はなく遺構の時期は不明確であるが、ＳＢ０１の覆土や遺物が混入している様子からＳＢ０１以降で基本土層Ⅱ層堆積以前の遺構と思われる。第１地点の井戸址に類似し、その関連から中世の井戸と推定される。

ＳＤ０１・ＳＤ０２（第８図）

ＳＤ０１とＳＤ０２は約9.6mの間隔で平行して走る溝である。褐色砂層（Ⅱ層）中に暗褐色土の帯状の部分を検出した。ＳＤ０１は幅50cm前後、深さ６～10cm、長さ約37mを確認した。ＳＤ０２は幅80～

140cm、深さ約10cm、長さ14.4ｍを確認した。ＳＤ０２より青磁・珠洲焼きの甕（第42図２・３）が出土した。出土遺物より中世の溝と推定され、第１地点の中世の建物址群と関連する遺構と思われる。

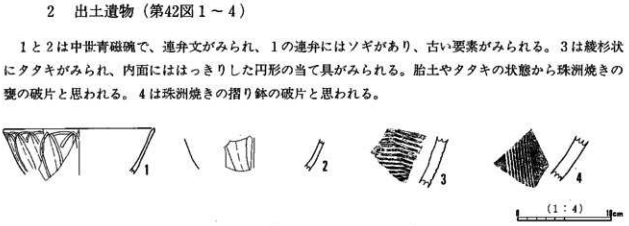


1：暗褐色土に中に褐色粒子が同質まだらに混入。
2：黒褐色土に黒色炭化ブロックを含む。一部に褐色土粒子が含まれる。
3：２にわずかな褐色粒子を含む。所々に炭化物粒子が含まれる。固くしまっている。
4：黒褐色土に炭化焼土褐色粒子を多量に混入させている。ボソボソしている。
5：３に褐色ブロックが多く含まれる。３より暗褐色土に近い色調であり、炭化物が含まれる。
6：５に類似するが、黒褐色土で褐色土ブロックが含まれ斑である。
7：黒褐色土に同質の褐色ブロックが含まれ、焼土や炭化物が含まれる。
8：６に類似し褐色ブロックがわずかに多い。
9：８に類似より褐色ブロックが多い。
10：９に類似。黒褐色土と褐色ブロックの量が同量で斑。
11：10に比べ褐色ブロックが小さく黒褐色である。
12：褐色土に黒褐色土が斑に混入。側壁が崩れたものと思われる。
13：褐色ブロック。
14：黒褐色土中に褐色の大きなブロックが詰まった層。
15：10類似した層。径５cmの褐色ブロックが含まれ、10よりもぼそぼそしている。
16：褐色ブロックが黒褐色土より多く斑な層。ボソボソした層。
17：15に類似した層。
18：褐色粘土層。ややくすんだ感じの層。
19：16に類似。この層から水が染み出してくる。
20：褐色粘土層に暗褐色層が混入している。
21：褐色粘土層中に黒褐色土が層を成してサンドイッチ状に混在に。
22：黒褐色土中に褐色と黒褐色土の混合した層がサンドイッチ状に混在。
23：褐色と黒褐色土が層状に混入。黒色の植物炭化層が見られる。
24：黒褐色土に褐色土が斑に混入。

第41図　牛出遺跡　第２地点ＳＥ01

２　出土遺物（第42図１～４）

１と２は中世青磁碗で、連弁文がみられ、１の連弁にはソギがあり、古い要素がみられる。３は綾杉状にタタキがみられ、内面にははっきりした円形の当て具がみられる。胎土やタタキの状態から珠洲焼きの甕の破片と思われる。４は珠洲焼きの摺り鉢の破片と思われる。



第42図　牛出遺跡　第２地点中世出土遺物

第６節　成果と課題―善光寺平北部の古墳出現前夜―

中野市・飯山市・長野市北部など、善光寺平北半部では、近年、畿内庄内式に並行する段階の資料の蓄積が進展した。当センターでも中野市内の大規模開発に伴う調査の結果、当該期の遺跡として、七瀬・栗林遺跡の報告書刊行以来、先年には沢田鍋土遺跡・牛出古窯遺跡などを報告し、本書でも牛出遺跡を掲載している。本書が一連の調査の最後の報告であるため、これらの相互関係についてまとめておきたい。

１　段階設定

七瀬・栗林・安源寺・牛出・牛出古窯・沢田鍋土・がまん淵の各遺跡は、中野市内の高丘丘陵に位置し、半径２㎞程度の範囲に所在する。後述するように各遺跡のおかれた歴史的状況によって外来系土器との関わり方が異なることは予想されるものの、土器様相がほぼ同一の状況を示す範囲は、ここで取り上げる諸遺跡の分布範囲を越え、少なくとも飯山市・長野市北部には及びそうである。中野市内の間山遺跡は当然それに含まれるであろう。

七瀬遺跡では、在来器種の様相に基づいて１～３段階を設定し、そのうち第２段階を古・新に二分し、第３段階も二分できる可能性が指摘された。この段階設定の他地域との並行関係は、搬入土器あるいは外来系土器の型式を基準として、おおむね第２段階を加賀の漆町編年３・４群、濃尾の廻間編年Ⅰ式に、第３段階をそれぞれ５・６群、Ⅱ式にあてた。さきの牛出古窯などの報告においては、同様の視点から各遺跡の時期的位置について、おおむね、がまん淵の後に沢田鍋土・牛出古窯を置き、がまん淵を七瀬第２段階（新）、沢田鍋土を第３段階、牛出古窯を第３段階後半に、それぞれ中心を置くものとした。いずれの遺跡も継続期間が短く、遺跡内において土器様相に大きな変化はない。

以上の遺跡に牛出遺跡他の資料を加えて、次のように段階設定する。なお、この段階設定は土器の様式的検討を目的とするものではないが、この地域における歴史事象を位置付けるための前提として行うものであり、必然的に様式変遷に対する理解を含んでいる。ここでそれを示すだけの準備がないため、その内容については別稿で提示したい。

第１段階（七瀬ＳＢ４・１３・がまん淵ＳＤ０１）

七瀬第２段階（古）に相当する。七瀬ＳＢ４・１３・がまん淵ＳＤ０１には在来甕の球胴化傾向や北陸系土器の様相に違いが認められる。初めて北陸系土器が組成に一定の比率を占めることから、これを第１段階として、それ以前との間に画期を見た。しかし、この段階の土器交流は、以後の庄内並行期の土器の広域交流に対する一般的評価とは、意味が異なるものと思われる。これ以前の検討を行っていない今、この段階をもって土器の様式的画期と主張するつもりではない。七瀬の報文では北陸系甕の比率の多寡が、時期的変遷と相関することを明らかにしたが、外来系土器のありかたは遺跡・遺構によって異なることも予想される。外来系の漸増のみを新古の根拠とはできないであろうが、資料がそろえば、在来器種の形態・組成によって、古相・新相に細分し得ることが予想される。

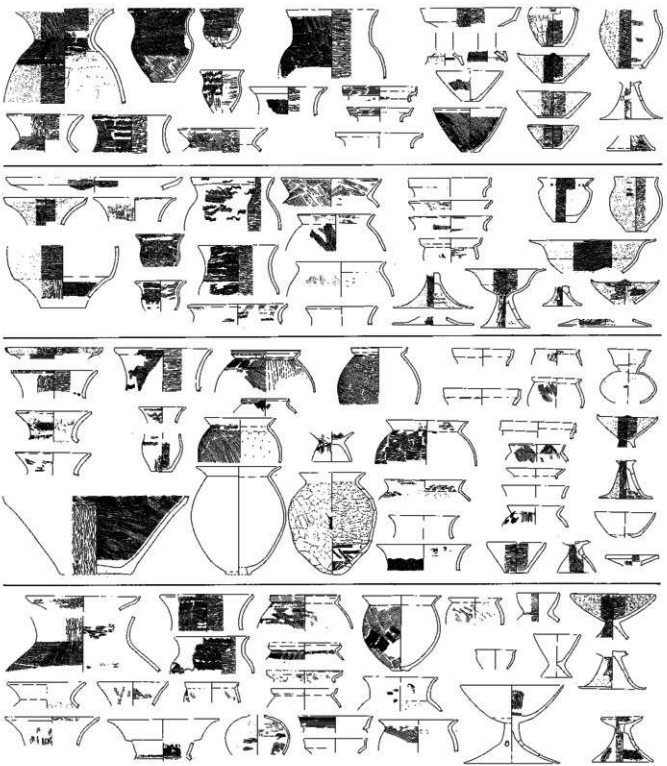
がまん淵ＳＤ０１は集落を画する環濠であり、出土土器は集落廃絶時に一括投棄されたと考えられるものであり、以後のものが含まれる可能性はほとんどない。がまん淵遺跡の住居址資料も同様である。これらのなかには、前段階にさかのぼる可能性のあるものも含まれるが、集落の継続期間は短期間であったと考えられる。

第２段階（七瀬ＳＢ１４・栗林28住）

七瀬第2段階（新）に相当する。七瀬ＳＢ１４では北陸系の甕が一定量存在し、在来の高坏の低脚化等が見られる。甕以外では外来系土器は目立たないが、高坏・鉢等の小型器種が少数存在する。

第3段階（七瀬ＳＢ１６）

七瀬第3段階の前半に相当する。外来系甕、とくに東海系の比率が高い。小型器台・小型高坏等は少ないが、確実に存在する。壺・甕類は多様であり、七瀬ＳＢ１６ではＳ字甕Ａ類を伴う。櫛描文の在来系壺・甕類の比率は外来系を下回る。



第43図　（上から）１・２・３・４段階の土器（七瀬遺跡）１：８

七瀬ＳＢ１６・ＳＢ１７は細分の可能性を考えながらも一括されたが、在来甕・高坏、外来系の壺・甕・高坏・器台等の様相が異なることをもって前者をこの段階にあてる。

第４段階（七瀬ＳＢ１７、牛出古窯ＳＢ０８・１０）

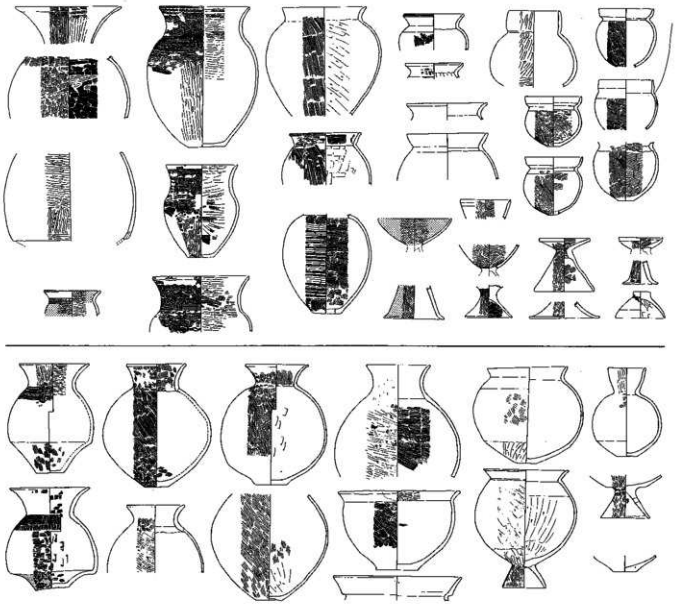
これ以後定着する小型器台等が一定の組成を占めるものを第４段階とする。七瀬３段階の新しい部分を含む。多様な小型器種が存在するが、組成は定着していない。

在来甕・高坏・器台の形態、甕の組成から、七瀬ＳＢ１７を古相、牛出古窯ＳＢ０８・１０を新相として細分できる。

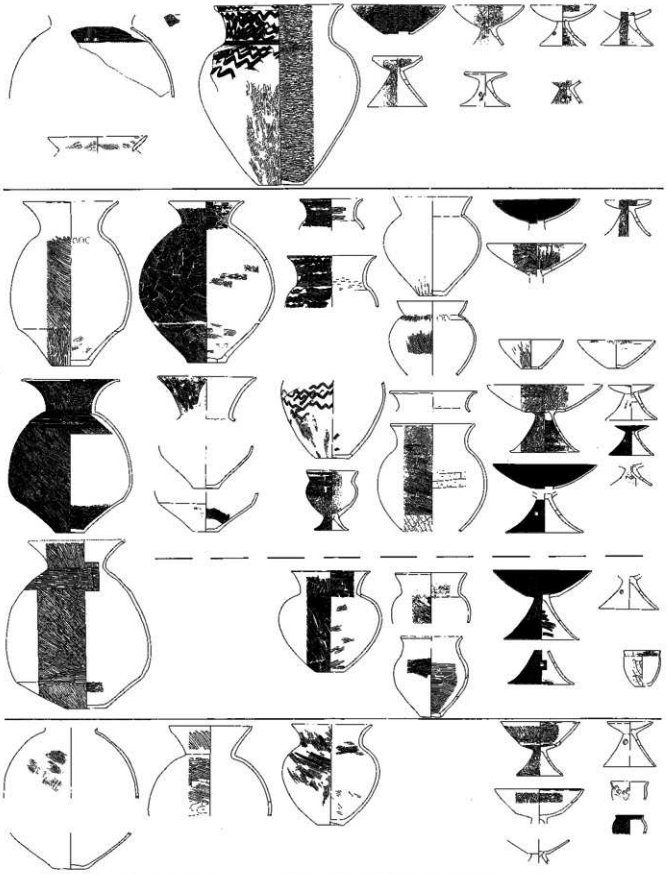
第５段階（牛出ＳＢ０３・１８、牛出古窯ＳＢ０４・０５・０６・０７・０９）

梅描文の在来系壺・甕類はさらに減少し、在来甕はこの段階半ばで消滅する。甕は多様となり、布留傾向甕類似の甕も見られる。赤彩の大型壺は伝統的構成を残すが、パレス壺などの影響の下に再構成されたものであろう。これもこの段階をもって消滅する。

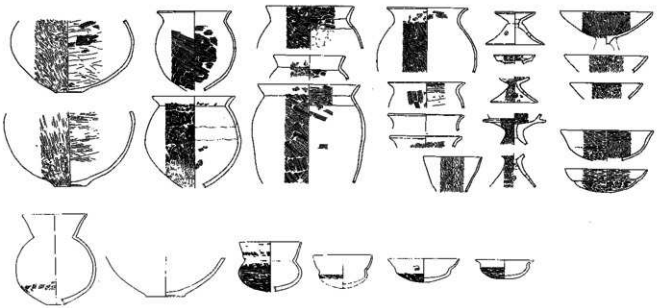
在来甕の有無、高坏・器台等の変化から、牛出古窯ＳＢ０５・０６を古相、ＳＢ０４・０７・０９を新



第44図　４段階の土器（上：柳町遺跡ＳＩ22、下：柳町遺跡ＳＤ１）１：８



第45図　（上から）４・５・６段階の土器（牛出古墳遺跡・牛出遺跡）１：８



第46図　６段階の土器（上：須多ヶ峯遺跡ＳＩ６、下：安源寺遺跡前方後方形周溝墓）１：８

相として細分できる。牛出ＳＢ０３・１８は後者となろう。

第６段階（牛出古窯ＳＢ０３、間山27住）

櫛描文の壺・甕類は存在しない。壺・甕・高坏・器台・鉢等で多様性が失われ、定型化の傾向がつよまる。間山27住では東海系有段口縁壺・Ｓ字甕が見られる。二重口縁壺は七瀬ＳＢ１７（第４段階古相）で北陸系として存在が指摘されたが、第５段階では有段あるいは二重口縁壺は明瞭でない。

牛出古窯ＳＢ０３と間山27住を比べると、前者の方が古相となろうか。

第７段階

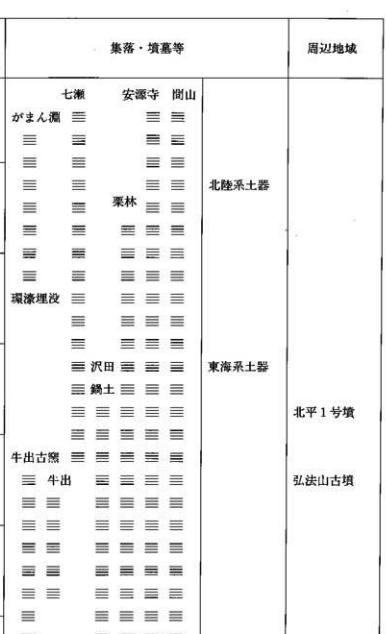
第７段階は具体的資料をあげられないが、第６段階に後続する畿内系小型土器群の定着期である。

以上の段階設定において、様式的画期がどの時点に認められるか検討の余裕がないが、第１段階は北陸系土器の流入と在地甕の球胴化等、第２段階は北陸系甕等の定着、第３段階は東海系土器の流入、甕の軽薄・球胴化、在来の有稜高坏の消滅、小型器台等の登場、第４段階は外来系小型高坏・小型器台の定着、第５段階は在来系の壺・甕の消滅とそれに変わる多様化、新器種の登場、第６段階は多くの器種における定型化というような点で特徴を指摘できる。これらのうち、新形式の登場という点で、他より大きな変化がうかがえるのは、１とそれ以前、２と３の間、４と５の間、６とそれ以後であろうか。しかし別の視点から見れば、５と６の間の変化も大きい。東海系土器は小型器種・甕を中心に第３～４段階に目立ち、検討を経ていないが、新器種導入の主因と見える。また、直接的系譜ははっきりしないが、５段階に布留式系の要素の登場が目立つ。一方、北陸系土器は甕・壺類を中心に、１段階以降継続的に影響を与えており、在来系土器の変容の主因となっている。

これらの段階設定は、箱清水式前後の千野・青木編年、他地域の編年とは表のように対応するという見通しを持つ。他地域との並行関係の細部については検討不十分であるが、結果的には、各段階はおおむね畿内庄内式の細別に、各段階の新古は濃尾の廻間編年Ⅰ～Ⅲ式の各段階にほぼ対応する可能性があろう。

２　集落の様相

前項で取り上げた集落遺跡は、現在「延徳田んぼ」と通称される低湿地帯周囲の扇状地・丘陵上に所在



第47図　各遺跡の動向

する。しかし、遺跡に隣接して水田地帯が存在するのは、七瀬・安源寺・がまん淵であり、間山は扇状地の扇央部にあって、低湿地に直接は接していない。また、栗林・牛出古窯・牛出は河岸段丘上にあり、千曲川には近いが水に恵まれない。現状の水田域が、当時も同様であったとはいえないにしても、七瀬遺跡での水田遺構存在の可能性からも、七瀬・安源寺・間山など、比較的規模が大きく継続的な集落遺跡の周辺に水田遺地が存在したことは確実であろう。一方、栗林・牛出古窯・牛出は竪穴住居数棟程度からなり、継続期間も短い小集落と考えられる。立地の点で千曲川の河川交通などとの関係を考えさせる。また、がまん淵はいわゆる防御的集落であるが、規模・継続期間から見て拠点的集落ではない。千曲川との

関係においては、栗林などと同様であり、加えて、善光寺平南部を遠望する位置は示唆的である。低地帯の西北部では、七瀬・安源寺が中核的集落であり、栗林・牛出古窯・牛出・がまん淵はそれとの関係で成立した集落であろう。同様に南西部では、他の遺跡は明らかでないが、間山を中核とするのではなかろうか。ほかの遺跡と比べて、七瀬と安源寺は立地がやや異なり、前者は扇端部と丘陵の間の狭長な湿地帯に面する比高数メートルの崖錐面にあるのに対し、後者は広大な低湿地に面する比高40ｍの丘陵上にあって、環濠が存在する可能性も指摘されている。

１段階直前にがまん淵が形成され２段階に廃絶するが、七瀬はそれ以前から継続し４段階までに廃絶する。安源寺の上限下限は明確でない部分があるが、１段階以前から５段階以降まで、栗林は１～５ないし６段階、牛出古窯は４～６段階、牛出は４ないし５段階に存続している。３段階の七瀬では東海系土器の波及の影響が大きい。牛出・牛出古窯の前半期の外来的要素も、東海に求めてよいだろう。一方、七瀬での北陸系土器は１段階から一定程度の比率で継続的に見られるが、３段階以降は減少傾向にある。栗林では、１段階で北陸系土器が見られる。七瀬のような継続的集落では外来系土器が一定量存在しても、在来系土器の基本的組成に大きな変化がないのに対し、小集落では特にその初期において在来系土器の影が薄い。

これらの遺跡の位置的・時間的関係をまとめれば、次のようになろう。

①　１段階あるいはその直前に南方を意識した位置に、がまん淵の防御的集落、西・北方を意識した位置に栗林の集落が形成される。

②　２段階にがまん淵の集落が放棄される。

③　３段階に東海系土器が波及して土器様相が大きく変容するが、集落に変化は見られない。

④　４段階に栗林より千曲川上流部に牛出・牛出古窯の集落が形成され、それと前後して七瀬集落が放棄される。

⑤　５～６段階に栗林・牛出・牛出古窯の集落が放棄される。安源寺も同様であった可能性がある。

⑥　６段階にも間山の集落は継続するようであるが、７段階以降は集落立地が変化するようである。

土器様相からは、北陸・東海地域との交流がこの地域の社会の動向に大きな影響を及ぼしていることがうかがえる。そして、土器の様相変化には箱清水様式の継続・変容過程という一面がある。集落遺跡の動向にも、外部との関係に規定された在地集団の動向を見てよいだろうか。

がまん淵集落の立地や環濠などに社会的緊張を見るとすれば、１段階の北陸系土器は、社会的緊張状態の中でもたらされた可能性があり、その原因が善光寺平南部との関係にあったことを、がまん淵の位置は示しているのかもしれない。また、がまん淵が放棄された直後に形成された栗林の小集落は、その北陸系土器の強い影響からも、移住を含めて一層の関係の緊密化を示している。しかし、その母村ともいえる関係を想定し得る七瀬遺跡では前段階からの漸進的な変化が続いている。そして、環濠集落が放棄されて間もなく、東海系土器が波及する。

集落の様相においては、以上のように２・４・６段階に画期ともいえる変化を認めることができる。ところで、ここで用いる段階の設定においては１とそれ以前、２と３の間、４と５の間、６と７の間の変化が大きいのではないかと予測した。ただ、その内容については検討していないので、それが様式的画期であるかどうかは課題である。いずれにしても、土器様相に大きな変化が起こる直前に、集落動向に変化が認められるということになろうか。土器の様相変化は外来系土器の波及と密接にかかわっている。土器と集落動向の変化が一致しないことから、土器に見られる他地域との交流の緊密化は、対外的交流機能の転換点において、この地域の置かれた歴史的・地理的位置に規定された選択の結果と考えたい。ただ、土器様相に見られる東海あるいは畿内および北陸との交流には質の違いがうかがえる。

善光寺平南部の篠ノ井遺跡群の環濠もがまん淵遺跡と同時期に埋没したと考えられ、1段階から2段階における対外関係の変化は、善光寺平一円に共通する要因があったのかもしれない。3段階における東海系土器の直接的波及は極めて限られた範囲と考えられるが、以後その系譜を引くと思われる土器は、在地的変容を遂げながらかなり広範に分布するようになる。飯山市域では北陸系を主体としながらも、東海に系譜をたどり得る在地化したものが見られる。

3　外来系土器と墳墓

この地域の前方後方墳は、中野市蟹沢古墳・飯山市勘介山古墳・法伝寺2号墳などが知られ、松本市弘法山古墳の例から、その年代を本稿の5段階あたりに考える向きが多いが、今のところ、明確な根拠はない。山頂あるいは丘陵頂部に立地するこれらの古墳に対して、長野市篠ノ井遺跡群等の前方後方形周溝墓は全長15～20m程度で自然堤防上など平地に立地している。この周溝墓と比較すると、安源寺遺跡の前方後方形周溝墓は立地・規模が、長野市北平1号墳は低い墳丘と前方部の不明瞭さが、類似する。後者は、山頂に立地する墳丘墓としては初源であろう。

弘法山古墳出土土器は東海系を主体としている。それに先立つ北平1号墳の土器は、同じく東海系土器といっても、弘法山古墳と比べれば在地化しており、在来系土器も多い。篠ノ井遺跡群では、ここでいう第2段階から第6段階までの前方後方形周溝墓の展開が明らかにされているが、出土土器の様相には東海系の要素はうすい。6段階のＳＤＺ３には底部穿孔の二重口縁壺が見られる。安源寺遺跡の前方後方形周溝墓も6段階であろうが、その土器様相は畿内系と見られる。

松本市上木戸遺跡に認められる東海系土器の第1次拡散が、4段階と見られる弘法山古墳の築造とかかわるものとし、七瀬遺跡の3段階について同様な類推が可能であれば、中野市域に弘法山古墳同様の墳墓が所在する可能性は大きい。蟹沢古墳はその候補となろう。これに対して、善光寺平南部の状況は第1次拡散の直接的影響はいまだ明瞭ではない。3段階の東海系土器の第1次拡散が七瀬遺跡などに直接及んでいる事実と、その直後から量的多寡はあるとしても、善光寺平一円の墳丘墓や一部の集落で在地化した東海系土器が見られることから、その間接的影響は広範なものであったと考えられる。これは、交流のルートとその到達点、到達点とその周辺地域の東海地域との関係の差異、それが地域社会に及ぼした影響の質的差を示しているのではなかろうか。例えば、外来系集団の定着地では、その集団が造墓活動に直接的に参画する可能性はよりつよい。

弘法山古墳と善光寺平の前方後方形周溝墓を比べた場合、後者の出土土器の様相や立地からは、前方後方形という形態上のイメージの在地での展開を見ることはできても、その出現や展開を新たな墓制への画期として評価することはむずかしい。山頂に立地する北平1号墳の東海系土器の間接的流入とも言える様相は、周溝墓の在地での自立的展開の中で、山頂というイメージのみがもたらされたことを示すものではなかろうか。北平1号墳が弘法山古墳より時期的にさかのぼるであろうことは、第1次拡散の影響を間接的にしか受けなかったが故に、イデオロギーの根本的変革に要する準備期間を必要としなかったためとも考えられよう。これは、北平1号墳を弥生墳丘墓の在地的展開の中で評価するということである。

篠ノ井遺跡群の周溝墓は同時期に地域首長墓としての前方後円墳等が周辺に存在する可能性がつよい。弘法山古墳や森将軍塚古墳は共同体外部との関係を契機として出現したものである。これらの周溝墓は、地域首長権のもとにあってそれより1・2段階下位の小集団の造営になるものであり、古墳出現前から共同体内部において意義付けられてきた墓制を古墳出現以後も受け継ぐことにより、共同体の社会構造やイデオロギーの変化しなかった部分を表現している。同時に、その首長権の成立基盤の基礎的単位を体現するものであって、前方後円墳出現後は、それを頂点とする階層制に組み込まれたことを示しているものと

考えられる。

外来系土器の流入様相の差、在地における前方後方形周溝墓の展開からすれば、善光寺平南部地域では、墳墓のイデオロギー的変革を示すものとしての弘法山古墳に類するような前方後方墳が、5段階以前に存在する可能性はうすいことになろう。もしそうであれば、南部地域の姫塚古墳などの前方後方墳は、この地域において6段階に出現したと考えられる畿内的前方後円墳以前の墓制というより、その階層制にすでに組み込まれたものとして築造された可能性があろう。姫塚古墳は川柳将軍塚古墳に近接し、それとの首長系譜が予想できる。前後いずれとしても、川柳将軍塚との年代差は、ここでいう数段階以上ではないと考える。

安源寺遺跡の前方後方形周溝墓と法伝寺2号墳は墳丘形態が良く似ており、規模も共に23m程が想定されている。立地もさほど違いはなく、山頂立地というより、集落周辺の立地といえそうである。法伝寺2号墳の年代的な根拠はほとんどないが、出土土器には4段階以前に見られるものにちかい高坏脚部が見られる。これらが在地での展開がたどれる篠ノ井遺跡群の前方後方形周溝墓に類するものと考えられるならば、その墓制の意義は同様であった可能性もある。ただ、飯山市域においては北陸系土器の様相が異なり、その後の展開も中野市域とは異なる可能性が大きい。少なくとも後者では、これらと同時期に、その上位に位置付けられる地域首長墓としての前方後円墳の存在も考えられることになろう。内容が明らかでなかった高遠山古墳の近年の調査成果は、5・6段階の前方後円墳としての可能性をつよめている。

弘法山古墳周辺において、以後の首長系譜が不明確な理由は、その地域首長権存立の対外的必然性が消滅した時、なお内部的変革が達成されていなかったが故であろう。このような共同体内外の政治的条件の不一致は、善光寺平南部では森将軍塚の築造される時期に解消され、この段階をもって前代以来の社会構造・イデオロギーが変革されたものと思われる。

以上、古墳出現期の中野地域を弘法山古墳周辺や善光寺平南部地域と比較してきた。この地域に限らず、それらにおける土器・墳墓等の様相の違いは、先述したような、東海・畿内さらに北陸地域から見て、それぞれの時点で、いずれが地域交流のフロンティアであったかによって、導かれたものではないか。例えばこの地域では、1段階における北陸、3段階における東海、5段階における畿内との関係である。その交流のルートに沿う他の地域は、フロンティアの時期的展開と、そこにおいて地域毎に求められた役割の違い、それに対する主体的選択の結果が、異なっていたはずである。すでに指摘されている、この地域における外来系土器・集落の動向と前方後方形墳墓、さらに前方後円墳とのかかわりを考えるにあたってのひとつの視点であろう。

参考文献（本項のすべてにわたって下記文献からご教示を得ているため、記述項目に則して掲げるべきところ、一括して掲げさせていただく。これ以外にも参考にさせていただいたものは多い。深謝。）

青木和明・寺島孝典　1992『篠ノ井遺跡群（4）』　長野市教育委員会

青木一男・他　1996『大星山古墳群・北平1号墳』　長野県埋蔵文化財センター

赤塩　仁・中島庄一・他　1994『栗林遺跡・七瀬遺跡』　長野県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1990　『廻間遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎・他　1997『西上免遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1995『前方後方墳から見た初期古墳時代』『前方後方墳を考える』
第3回東海考古学フォーラム資料

宇賀神誠司・他　1988『上木戸遺跡・他』　長野県埋蔵文化財センター

臼居直之・市川隆之・他　1998『石川条里遺跡第2分冊』　長野県埋蔵文化財センター

金井汲次・櫨原長則・他　1987『安源寺III』　中野市教育委員会

川村浩司　1996「越と古代の北陸」『古代王権と交流3』名著出版

川村浩司　1996「弥生後期における北信濃と北陸」『考古学と遺跡の保護―甘粕健先生退官記念論集』同刊行会

田嶋明人　1986『諏町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人　1995「土器と「古墳時代」」『北陸古代土器研究　第5号』

櫨原長則　1993『間山III』　中野市教育委員会

鶴田典昭・他　1997『牛出古墳遺跡・他』　長野県埋蔵文化財センター

並井雅尚　1993『弘法山古墳出土遺物の再整理』　松本市教育委員会

中島庄一・櫛竹雅之・関武　1995『安源寺遺跡』　中野市教育委員会

西山克己・青木一男・他　1997『篠ノ井遺跡群』　長野県埋蔵文化財センター

望月静雄　1997『法伝寺2号古墳』　飯山市教育委員会

望月静雄・常磐井智行・他　1990『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告II』　飯山市教育委員会

望月静雄・常磐井智行・他　1996『上野畑・柳町遺跡』　飯山市教育委員会

望月静雄・桃井伊都子・他　1995『須多ケ峯遺跡』　飯山市教育委員会

望月静雄・桃井伊都子・他　1995『柳町遺跡』　飯山市教育委員会

牛出遺跡遺物観察表

遺物観察表凡例

1．弥生時代後期・古墳時代前期遺物観察表の胎土欄の記号は以下の通りである。

胎土　1：石英・長石など直径1㎜以上の大粒の鉱物を多量に含み、鉄分が磁鉄の褐色の粒が見られる。

2：石英・長石など直径1㎜以下の小粒の鉱物を多量に含み、鉄分が磁鉄の褐色粒が見られる。特に雲母が多く見られるものを②とした。

3：石英・長石など鉱物粒の他に、鉄分が磁鉄の褐色の粒子が多量に含まれるもの。

4：石英・長石など直径1㎜以下の小粒の鉱物を多量に含み、褐色の粒子は見られない。特に雲母が多く見られるものを④とした。

5：石英・長石など直径1㎜以上の大粒の鉱物を多量に含み、褐色の粒子は見られない。

6：鉱物粒があまり含まれず、洗練された胎土。

7：鉱物粒があまり含まれず、鉄分が磁鉄した褐色の粘がみられる。

調整　ナデA：指などで撫でるもので、器面が綺麗に仕上げられるもの。(ナデと表記)

ナデB：撫でた部分が窪み、ナデの単位が明瞭に見られ、その単位内には繊維束をひいたような条線が認められるもの。

ナデC：指で撫でた凹凸が明瞭に見られるもの。粘土を掻き取ったように見えるものもある。

ナデD：工具を用いて撫でたと思われ、浅い条線が認められる。条線はハケBのように明瞭には認められない。

2．平安時代の須恵器・土師器観察表では、残存率の数字は32分の1の倍数を示し、2は2／32を示す。また、焼きひずみが激しいものは、できるだけ焼きひずみを修正し本来の形状を想定し測定した。なお、杯B・壺の器高A・Bは以下のように測定し、他の器種はいずれかの欄に器高の数値を記載した。

杯B：器高Aは高台を除いた杯部のみの数値。器高Bは高台を含めた数値。

壺　：器高Aはつまみ部を除いた数値。器高Bはつまみ部を含めた数値。

3．整理Noは遺物に黄色で記注しており、実測図番号と一致する。

古墳時代遺物観察表

図版番号	遺構名	器種分類	外面調整	内面調整	色調	胎土	整理番号	備考
第13図1	SB03	小型土器	ハケメ	ナデ			1005	完形
第13図2	SB03	小型土器	不明	不明			1009	
第13図3	SB03	高杯	ナデ	ナデ			1104	
第13図4	SB03	壺形土器	口縁ナデ、胴部ハケメ	口縁ハケとナデ、胴部ナデ			1004	
第13図5	SB03	甕形土器	ハケとケズリ？	ケズリ			1002	
第13図6	SB03	壺形土器	赤彩・ミガキ	ナデ、胴下部ハケ			1083	
第14図1	SB10	高杯	ケズリ	ナデ又はミガキ			1105	
第14図2	SB10	壺形土器	ハケメ	ハケメ			1090	
第14図3	SB10	壺形土器	T字文、鋸状文、ボタン状貼付け、赤彩	ナデ			1085	
第14図4	SB10	壺形土器	ミガキ・赤彩	ナデ			1087	
第15図1	SB11	壺形土器	ハケ・ナデ	ナデD			1088	
第16図1	SB15	甕形土器	櫛描直線文・波状文、頸部ミガキ又はナデ	不明	橙色	4	1068	
第16図2	SB15	甕形土器	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色	4	1033	
第16図3	SB15	甕形土器	上半ハケ、下半ケズリ	ナデD	橙色、黒斑	④	1022	
第16図4	SB15	内湾口縁鉢	ナデ	ナデ	橙色	2	1025	2孔
第16図5	SB15		ナデ	ナデ	橙色、黒褐色	4	1028	
第16図6	SB15	小型土器C	ミガキ	口縁ミガキ、胴部ナデ	橙色	4	1035	
第16図7	SB15	壺形土器E	赤彩・ミガキ	口頸部赤彩、胴部ナデ	橙色	4	1036	
第16図8	SB15	壺形土器E	ミガキ	ミガキ	橙色、明赤褐色	6	1092	
第16図9	SB15	小型土器C	ナデ又はミガキ	ナデ	橙色		1034	
第16図10	SB15	小型土器C	ミガキ	ミガキ	橙色	④	1062	
第16図11	SB15	小型土器C	ミガキ、ナデ	ナデ	橙色	4	1037	
第17図1	SB14	壺形土器A2	ハケ、ミガキ・赤彩、口唇部波状文	ハケ、ミガキ・赤彩	橙色	4	1084	
第17図2	SB17	壺形土器	ナデ	ナデ	浅黄橙色	4	1086	
第17図3	SB07	壺形土器	ミガキ	ナデ（黒色）	赤褐色	7	1013	内湾の口縁と思われる
第17図4	SB18？	壺形土器	赤彩	赤彩		4	1059	古墳中期
第17図5	SB07		ナデB	ナデ	黒～にぶい橙色	7	1074	古墳中期

古墳時代遺物観察表

図版番号	遺構名	器種分類	外面調整	内面調整	色調	胎土	整理番号	備考
第17図6	SB07		ナデ	ミガキ、黒色	にぶい橙色	7	1016	古墳中期
第17図7	SB17	高杯	赤彩	赤彩		4	1093	
第17図8	SB18	壺形土器	不明	不明	黄橙色	4	1067	
第17図9	SB14	甕形土器	ナデ	ナデ?	黒色	4	1102	
第17図10	SB07	壺形土器?	ナデD	ナデD	にぶい褐色~褐色	2	1063	
第17図11	SB18	甕形土器	頸部ハケ、胴部ナデorナデD	口縁~頸部ハケ、胴部中ナデ	にぶい褐色	4	1069	
第17図12	SB07	甕形土器	ハケ、ミガキ?	口縁ハケ、胴部ハケ→ナデ	橙~にぶい褐色	4	1011	
第17図13	SB07	壺形土器?	ナデ	ナデ	橙色	4	1012	
第17図14	SB18	甕形土器	ナデ、胴下部ケズリ	ナデ、ナデD	にぶい褐色~黒	4	1065	
第17図15	SB07	甕形土器	ハケ	ナデ	橙~にぶい褐色	4	1072	
第17図16	SB17	甕形土器?	ナデorミガキ	不明	外は黒、内は橙~黒色	5	1091	
第17図17	SB18	高杯	ハケ→ナデ	ミガキ	橙色	4	1057	
第17図18	SB18	高杯	ミガキ	ミガキ	橙色	2	1070	
第17図19	SB07	器台	不明	ナデ	橙色	4	1066	
第17図20	SB14	器台	不明	不明	橙色~黒	4	1103	特に混和材が多い
第18図1	SK02	甕形土器	タタキ	ナデ	にぶい褐色	5	1078	底部木葉痕
第19図1	IIIR9	壺形土器	ハケ、口縁上部横ナデ	ハケ、口縁上部横ナデ	橙色、黒斑	4	1051	
第19図2	IIIR8	甕形土器	ハケ、口縁上部横ナデ	不明	橙色	4	1077	
第19図3	IIIR13	壺形土器C	口縁上部ナデ・下部ハケ	口縁上部ナデ・下部ハケ	暗褐色~灰黄褐色	4	1054	口唇部刻み
第19図4	IIIR9	壺形土器B	ナデ	ナデ・ハケ	橙色	4	1099	
第19図5	IIIR8	壺形土器B	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	4	1046	
第19図6	IIIR8	鉢形土器	ナデ	ナデ	橙色	2	1048	
第19図7	IIIR3	不明	ナデ	ナデ	橙色	4	1045	
第19図8	IIIR8	鉢形土器	ナデ	ナデ	橙色	4	1047	
第19図9	IIIR9	器台?	ミガキ	ミガキorナデ	橙色	④	1049	
第19図10	IIIR3	高杯	ケズリ・ナデ	ナデorミガキ	にぶい黄橙色	4	1096	口唇内削ぎ
第19図11	IIIR8	高杯	赤彩・ミガキ	赤彩・ミガキ		4	1095	口唇内削ぎ
第19図12	IIIR8	高杯	ミガキ	ケズリ?	橙色	2	1075	6孔
第19図13	IIIL19	高杯	ミガキ	不明	橙色	4	1076	3孔

平安時代遺物観察表

図版番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	器高C(cm)	調整	胎土	色調(外)	色調(内)	口縁部残存率/32	底部残存率/32	整理番号	備考
第20図01	SB01	土師器	椀	8.0	3.4		2.8		底面転糸切りを欠損、内面より墨跡を確認している。	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	にぶい橙色		3	32	4	
第20図02	SB01	土師器	杯		5.8				ロクロナデ、底面転糸切り	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む、金雲母多含む	橙色	橙色		32	3	
第20図03	SB01	土師器	杯		5.8				ロクロナデ、底面転糸切り(粗い)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙			16	7	
第20図04	SB01	土師器	椀	13.4	6.0	3.6	4.5		ロクロナデ、内面ロクロナデで、丁寧にナデられている。	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、小石も含む	橙赤褐色	にぶい黄色	9	32	2	
第20図05	SB01	土師器	甕類	15.1	6.1	4.9	6.0		ロクロナデ、内面、ミガキ不明、器壁薄い、灰釉、漬し塗り	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		9	16	8	
第20図06	SB01	灰釉	段皿	14.4						赤茶に鏡赤い粒子	灰白	灰オリーブ	3		312	
第20図07	SB01	白磁	皿		6.5				白磁	非常に細かい粒子	白色			32	356	
第23図01	SB02	土師器	杯	9.0	4.0		2.8		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		7	10	17	
第23図02	SB02	土師器	杯	10.0	4.7		3.0		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。金雲母含む	橙		9	15	18	
第23図03	SB02	土師器	杯	10.6	4.5		2.4		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		30	32	11	
第23図04	SB02	土師器	杯	10.0	4.4		2.6		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		32	32	12	
第23図05	SB02	土師器	杯	10.6	5.1		5.1		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	浅黄橙色		29	32	23	
第23図06	SB02	土師器	杯	11.4	4.8		3.1		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	茶色粒・黄石・赤褐粒多く含有、かなり細かい粒子。	橙		32	32	13	
第23図07	SB02	土師器	杯	12.0	4.5		3.5		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、粒子が粗い。	橙	黒色	22	32	10	
第23図08	SB02	土師器	杯	12.0	5.0		3.2		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)、口唇部肩取り	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	にぶい黄橙色		12	32	20	
第23図09	SB02	土師器	杯	10.1	5.0		3.2		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		8	32	31	
第23図10	SB02	土師器	杯	12.8	4.8		3.0		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		15	32	26	
第23図11	SB02	土師器	杯	14.0	5.5		4.4		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		8	32	25	
第23図12	SB02	土師器	杯	13.0	6.0		4.1		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		7	16	29	
第23図13	SB02	土師器	杯	13.2	5.5		4.1		ロクロナデ、底面転糸切り(細かい)	1~2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	にぶい橙色		3	32	22	
第23図14	SB02	土師器	椀	14.0					ロクロナデ、底部欠損、口縁外反	1~3mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、粒子が粗い、金雲母含む	橙		6		33	

平安時代遺物観察表

図版番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	器高C(cm)	調整	胎土	色調(外)	色調(内)	口縁部残存率/32	底部残存率/32	整理番号	備考
第23図15	SB02	土師器	椀	14.5	6.4	5.0	6.0		ロクロナデ、底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい黄橙色	浅黄橙色	6	32	24	
第23図16	SB02	土師器	椀	14.5	7.0		6.7		ロクロナデ、内黒ミガキ、内面口縁部端部晩色	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい褐色	黒色	4	30	27	
第23図17	SB02	土師器	鉢/鍋	12.2	5.8	4.2	5.1		ロクロナデ、内黒放射状ミガキ。	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	浅黄橙色	黒色	13	32	14	
第23図18	SB02	土師器	鉢/鍋	14.4	8.0	5.0	6.0		ロクロナデ、内黒ミガキ、内面黒色部上半無ミガキ。	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい褐色	黒色	14	32	21	
第23図19	SB02	土師器	鉢/鍋						ロクロナデ、内面十字ミガキ、高台欠損	非常に緻密	にぶい黄橙色	黒色		13	15	
第23図20	M-17	土師器	鉢/鍋	12.7	6.3	4.2	5.3		ロクロナデ	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙	黒色	23	32	1	
第23図21	SB02	土師器	小型	12.4					ロクロナデ	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙			5	41	
第23図22	SB02	土師器	小型		5.8				ロクロナデ、底回転糸切り、口縁欠し。	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙赤褐色			16	39	
第23図23	SB02	土師器	小型	18.0					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙赤褐色		13		37	
第23図24	SB02	土師器	鉢	21.7					ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	赤褐色	明赤褐色	13		44	
第23図25	SB02	土師器	甕	23.0					ロクロナデ、口縁玉縁	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		5		45	
第23図26	SB02	土師器	甕	23.6					ロクロナデ、内ミガキ(微位)	茶色粒・長石・石英粒多く含有,かなり細かい粒子。	橙		2		40	
第23図27	SB02	土師器	甕	23.2					ロクロナデ→胴下半平行タタキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	8		36	
第23図28	SB02	土師器	甕	22.5					ロクロナデ	白英粒を多く含み,大小の砂粒少量に含む。	にぶい橙色		6		35	
第23図29	SB02	土師器	甕	24.0					ロクロナデ,胴下半部ナデ,口縁部端部ヨコナデ,口縁部端部晩色	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	にぶい橙色	にぶい橙色	4		34	
第24図30	SB02	土師器	甕	20.3					ロクロナデ→胴下半格子目タタキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		4		38	
第24図31	M-17	土師器	羽釜						ロクロナデ	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有。	橙				6	
第24図32	SB02	土師器	羽釜						ロクロナデ、体部下半平行タタキ	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有。	橙				48	
第24図33	M-17	土師器	羽釜	21.0					ロクロナデ	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有,内面スベやか	橙		4		5	
第24図34	SB02	土師器	鉢	23.0					ロクロナデ→内ヘラ調整,外タタキ→端部口縁ヨコナデ	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有。	橙		2		43	
第24図35	SB02	須恵器	甕						ロクロナデ,櫛描波状文と沈線、横化エン城成	非常に微細な砂粒含有。	赤褐色				9	
第24図36	SB02	土師器	土鍋						穿孔あり	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含む。	浅黄橙色				353	
第26図01	SBO4	土師器	杯	10.5	4.0		3.0		ロクロナデ,底回転糸切り	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ,粒子細い。	橙		15	32	262	
第26図02	SBO4	土師器	杯	10.5	4.5		2.8		ロクロナデ→底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		32	32	231	
第26図03	SBO4	土師器	杯	11.0	5.3		2.8		ロクロナデ→底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ,金雲母含む	橙		32	32	232	
第26図04	SBO4	土師器	杯	11.0	5.4		2.8		ロクロナデ→底回転糸切り(細かい)	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		32	32	233	
第26図05	SB14	土師器	杯	11.4	5.5		2.6		ロクロナデ,底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		13	14	269	
第26図06	SBO4	土師器	杯	11.0	4.8		3.0		ロクロナデ→底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		26	32	234	
第26図07	SBO4	土師器	杯	12.0	5.4		3.1		ロクロナデ→底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		31	32	230	
第26図08	SBO4	土師器	杯						ロクロナデ,底回転糸切り(細かい),口縁部内外赤彩,口縁部スス付着	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい橙色		8	32	265	
第26図09	SBO4	土師器	杯	13.0	5.0		4.0		ロクロナデ→底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		31	32	256	
第26図10	SBO4	土師器	杯	13.0	5.5		3.9		ロクロナデ→底回転糸切り(細かい)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		26	32	235	
第26図11	SBO4	土師器	椀		7.8			1.5	ロクロナデ、高台付	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ,内面ザラザラ,内面黒いが赤・茶色粒を多く含む。	橙			7	261	
第26図12	SBO4	土師器	鉢?	21.4					ロクロナデ	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		6		241	
第26図13	SBO4	土師器	鉢/鍋	12.8	8.0	8.0	4.5		内黒ミガキ,底回転糸切り痕	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙	黒色	32	26	227	
第26図14	SBO4	土師器	鉢/鍋	12.0	6.2	3.9	4.8		内黒ミガキ不明瞭,口縁端部に炭化物付着	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙	黒色	29	32	259	
第26図15	SBO4	土師器	鉢/鍋	12.0	6.2	4.3	5.5		内黒ミガキ,外口縁部ミガキ(横位)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		10	32	226	
第26図16	SBO4	土師器	鉢/鍋	11.5	5.6	4.0	5.2		内黒ミガキ,外口縁ミガキ	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	浅黄橙色	黒色	32	31	228	
第26図17	SBO4	土師器	鉢/鍋	13.8	7.2	4.0	5.5		ロクロナデ内黒ミガキ不明瞭	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい橙色	黒色	21	32	258	
第26図18	SBO4	土師器	鉢/鍋	13.5	5.5	4.0	5.3		内黒ミガキ,外口縁部ミガキ(横位)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙	黒色	19	21	225	
第26図19	SBO4	土師器	鉢/鍋	14.2	7.6	5.6	6.6		ロクロナデ内黒ミガキ不明瞭	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい橙色	黒色	9	32	257	
第26図20	SBO4	土師器	鉢/鍋	11.0	5.2	4.4	5.0		両黒内外ミガキ(口縁端位,放射状)	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	黒色	黒色	17	32	229	
第26図21	SBO4	土師器	甕	12.8					ロクロナデ	非常に微細な砂粒含有。	橙		2		248	
第26図22	R-03	土師器	甕	18.0					ロクロナデ	非常に微細な砂粒含有。	明赤褐色		3		301	
第26図23	SBO4	土師器	甕	16.0					ロクロナデ→胴下半格子目タタキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		8		244	
第26図24	SBO4	土師器	鉢/鍋	14.0					ロクロナデ→両黒ミガキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	黒色	黒色	4		255	
第26図25	SKO9	土師器	杯	11.0	4.5		3.1		ロクロナデ→底回転糸切り,器壁薄手	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		11	13	218	
第26図26	SKO9	土師器	杯	11.0	4.6		3.4		ロクロナデ→底回転糸切り,器壁薄手	1～2 mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい橙色		22	32	221	

平安時代遺物観察表

図版番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	部高B(cm)	総高C(cm)	調整	胎土	色調(外)	色調(内)	口縁残存率/32	底部残存率/32	整理番号	備考
第26図27	SKO9	土師器	杯	12.0	5.0		4.5		ロクロナデ、底糸切り、器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、金雲母含む	橙		4	8	220	
第28図01	SB05	土師器	杯	9.6	4.0		2.5		ロクロナデ、底糸切り、器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、白雲母等多	橙		14	17	60	
第28図02	SB05	土師器	杯	10.0	4.4		2.6		ロクロナデ、底糸切り、器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ	暗赤褐色		32	32	58	
第28図03	SB05	土師器	杯	11.0	5.5		3.0		ロクロナデ、底糸切り、器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、金雲母含む	橙		13	32	57	
第28図04	SB05	土師器	杯	11.2	5.0		3.1		ロクロナデ、底糸切り、器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、金雲母含む	橙		7	27	56	
第28図05	SB05	土師器	杯	14.0	5.7		3.8		ロクロナデ、底糸切り、器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ、金雲母含む	橙		9	32	55	
第28図06	SB05	土師器	私用品		5.4				ロクロナデ、内ミガキ、口縁欠損、底部転糸切り(縁かい)	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ	橙				25	49
第28図07	SB05	土師器	杯						ロクロナデ、底糸切り、高台	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ	橙	橙色			59	
第28図08	SB05	土師器	転用品	12.2	5.4	3.7	4.3		ロクロナデ、内ミガキ、両面	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ	黒色	黒色	1	11	53	
第28図09	SB05	土師器	甕						ロクロナデ、胴下半部ケズリ(後位)	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有	暗赤褐色	にぶい黒色			347	
第28図10	SB05	土師器	甕	22.4					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		9		62	
第28図11	SB05	土師器	羽釜	17.0					タタキ→ナデ、胴部ケズリ(後位)	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有	暗赤褐色	黒色	10		61	
第28図12	SK04	土師器	転用品	15.0	7.0		4.3		ロクロナデ、内ミガキ、底ヘラケズリ、穴埋	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ	橙	黒色	14	19	50	
第28図13	SK04	土師器	竹百鳥用品	24.4					ロクロナデ、片口、内面ミガキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。黒い粒子	橙	黒色	8		64	
第28図14	SKO4	土師器	甕	14.5					ロクロナデ、胴下半ケズリ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		8		212	
第28図15	SK04	土師器	甕	22.6					ロクロナデ、口縁端部面取り	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		7		63	
第28図17	SKO5	土師器	甕	13.0					ロクロナデ	非常に微細な砂粒含有、金雲母含む	暗赤褐色		2		216	
第28図18	SKO7	土師器	杯	13.0					ロクロナデ一内面ミガキ	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ	橙		7		214	
第28図19	SKO7	土師器	杯		6.0				ロクロナデ	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ	にぶい橙色			24	217	
第31図01	SB06	土師器	鉢(須)	7.5	3.8		1.8		ロクロナデ、底糸切り(不明瞭)	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	にぶい黄橙色	浅黄橙色	8	30	325	
第31図02	SB06	土師器	鉢(須)	8.4	4.0		1.9		ロクロナデ一底面糸切り、焼誠なつくり	1-1mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。細かい砂粒多く含む。	橙		17	26	209	
第31図03	SB06	土師器	鉢(須)	9.0	4.2		2.5		ロクロナデ、底面糸切り、器壁厚手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		9	16	323	
第31図04	SB06	土師器	鉢(須)	9.2	4.0		2.4		ロクロナデ、底面糸切り、器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		32	32	316	
第31図05	SB06	土師器	鉢(須)	9.1	4.4		2.1		ロクロナデ、底面糸切り	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		20	14	317	
第31図06	SB06	土師器	鉢(須)	9.1	3.8		2.7		底面転糸切り	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。黒色粒子入	橙		19	32	67	
第31図07	SB06	土師器	鉢(須)	9.4	4.2		2.2		ロクロナデ一底面転糸切り、焼誠なつくり転糸切り、器壁厚手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		25	32	206	
第31図08	SB06	土師器	鉢(須)	10.2	4.6		2.5		ロクロナデ、底面転糸切り、器壁厚手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		6	12	324	
第31図09	SB06	土師器	杯	8.0	4.0		2.4		ロクロナデ、底面転糸切り	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	明赤褐色		3	8	321	
第31図10	SB06	土師器	杯	10.2	4.0		3.1		ロクロナデ、底面転糸切り、内面黒色微付着	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	にぶい橙色		32	32	315	
第31図11	SB06	土師器	坏	14.0					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	明赤褐色		10		152	
第31図12	SB06	土師器	杯	15.0					ロクロナデ、底欠損、器壁厚手	茶色粒・長石・石英粒多く含有し、赤色mm多く混入、かなり細かい粒子	にぶい橙色	暗赤褐色	9		326	
第31図13	SB06	土師器	杯	14.0	6.4		4.0		底面転糸切り	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		14	32	66	
第31図14	SB06	土師器	私用品	14.0	6.4		3.4		ロクロナデ、内面、内面ミガキ	非常に微細な砂粒含有。	にぶい黄橙色	黒色	2	9	328	
第31図15	SB06	土師器	転用?	20.0					ロクロナデ、口縁外反、器壁厚手	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙	暗赤褐色	5		148	
第31図16	SB06	土師器	甕	18.2					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	暗褐色		5		336	
第31図16	SKO4	土師器	甕	22.6					ロクロナデ、口縁端部面取り SB05-631は一個体	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。					215	
第31図17	SB06	土師器	杯	12.2	5.0		3.0		ロクロナデ一底面転糸切り(縁かい)	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		16	32	204	
第31図18	SB06	土師器	杯	12.8	6.0		3.5		ロクロナデ一底面転糸切り(縁かい)	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		25	32	207	
第31図19	SB06	土師器	杯	13.2	5.0		3.6		ロクロナデ、底面転糸切り	茶色粒・長石・石英粒多く含有、かなり細かい粒子。	にぶい橙色	にぶい橙色	22	32	314	
第31図20	SB06	土師器	杯	13.0	5.8		3.8		ロクロナデ一底面転糸切り	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		32	32	203	
第31図21	SB06	土師器	杯	14.4	6.0		4.1		ロクロナデ、底面転糸切り	非常に微細な砂粒含有。	橙		19	32	313	
第31図22	SB06	土師器	杯	14.6	6.0		4.1		ロクロナデ一底面転糸切り(縁かい)	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	橙		30	32	210	
第31図23	SB06	土師器	杯	14.0					ロクロナデ、底欠損、器壁厚手	非常に微細な砂粒含有。	暗褐色	暗赤褐色	7		327	
第31図24	SB14	土師器	私用品	15.2					ロクロナデ、内面、内面ミガキ不明瞭、外面未整	非常に微細な砂粒含有。	にぶい黄橙色	黒色	4		329	
第31図25	SB06	土師器	私用品	16.0					ロクロナデ、内面(薄手)	非常に微細な砂粒含有。	浅黄橙色	黒色	7		330	
第31図26	SB06	土師器	私用品	15.0					ロクロナデ、内面	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	にぶい黄橙色	黒色	4		331	
第31図27	SB06	土師器	鉢(内黒)	·					ロクロナデ、内面ミガキ	1～2mm砂粒多量に含有、外面ザラザラ。	にぶい黄橙色	黒色			202	
第31図28	SB06	土師器	椀		6.2			1.7	ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	明黄色			1	349	

平安時代遺物観察表

図版番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	器高C(cm)	調整	胎土	色調(外)	色調(内)	口縁部残存率 分子/32	口縁部残存率 分母/32	整理番号	備考
第31図29	SB06	灰釉	皿		8.3			1.0	高台貼取り、輪積し接ぎ、内底丸撫き高台痕残	非常に緻密	にぶい黄橙色	黄オリーブ色		32	211	
第31図30	(SB06)	緑釉	椀蓋	12.0					緑釉	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。非常に微細な砂粒含有。	にぶい黄橙色	橙	4	357		
第31図31	SB06	土師器	小壺	14.0					ロクロナデ	非常に微細な砂粒含有。	赤褐色	明赤褐色	3	340		
第31図32	SB06	土師器	小壺	17.0					ロクロナデ	非常に微細な砂粒含有。	にぶい黄橙色		7	339		
第31図33	SB06	土師器	小壺	18.0					ロクロナデ、内面ユキメ、底部外周ケズリ(横位)	非常に微細な砂粒含有。	橙		7	335		
第31図34	SB06	土師器	鍋	8.0					内外ナデ	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有。	明褐色		6	355		
第31図35	SB06	土師器	鍋		6.6				内外ナデ	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有。	明褐色		11	354		
第31図36	SB06	土師器	羽釜						ナデ	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有。	明褐色		2	295		
第31図37	SB06	土師器	羽釜	28.2					ロクロナデ、口縁内面	非常に微細な砂粒含有。	黒褐色		2	71		
第32図38	SB06	土師器	甕	22.5					ロクロナデ、口巻部面取り(平)口縁内側	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	1	にぶい橙色		337		
第32図39	SB06	土師器	甕	25.6			28.4		ロクロナデ、胴下半平行ケヅキ、内面同心円状ケヅキ凸痕	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	黒褐色		5	32	332	
第32図40	SB06	土師器	甑	24.0	21.2				ロクロナデ、胴部筒手目ケヅキ、口縁部有段、穿孔2つ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	明赤褐色		12	30	343	
第32図41	SB06 (SB15外)	土師器	甕	20.7					ロクロナデ、胴下半平行ケヅキ(細かい)	非常に微細な砂粒含有。	橙	橙色	10		309	
第32図42	SB06 (SB15外)	土師器	甕	24.6			28.6		ロクロナデ、胴下半平行ケヅキ、線状痕	非常に微細な砂粒含有。	橙	橙色	20	32	310	
第32図43	SB06 (SB15外)	土師器	甕	19.8					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		4	334		
第32図44	SB06 (SB15外)	土師器	甕	19.5					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		5	338		
第32図45	SB06 (SB15外)	土師器	甕	17.8					ロクロナデ、外面スス付着	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	赤褐色			333		
第32図46	SB06 (SB15外)	土師器	鍋	16.0	8.2	4.0	5.2		内外口縁赤彩、内ミガキ不明瞭	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	明赤褐色	明赤褐色	19	8	208	
第34図01	SB07	土師器	杯	9.8	4.2	2.9							7	32	272	
第34図02	SB07	土師器	杯	9.4	4.3	2.7			ロクロナデ、底部回転糸切り	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	黒色	黒色	8	32	273	二次焼きあり 土師器
第34図03	SB07	土師器	杯	11.0	5.2	3.2			ロクロナデ、底部回転糸切り(投入)。	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	赤褐色		9	16	158	
第34図04	SB07	土師器	杯	12.0					平行ケヅキ、胴下半部破片	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		8		172	
第34図05	SB07	土師器	椀		6.8			0.8	ロクロナデ、高台部分	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	赤褐色		24	165		
第34図06	SB07	土師器	椀 (内面黒)		5.2			0.8	ロクロナデ、ミガキ不明瞭	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	黒色	黒色		32	200	
第34図07	SB07	土師器	羽釜	16.2					ロクロナデ、胴下半部スス付着	石英粒を多く含み、大小の砂粒多量に含有。	明赤褐色		6		70	
第34図08	SB07	土師器	小型甕	9.3		10.2			非ロクロ、ミガキ風の粗いナデ、丸底。	きめが細かいが、小石や粗い砂粒が混入。	にぶい黄色	橙色	23		292	
第34図09	SB07	須恵器	凸型硯						板状平行ケヅキ、内面ハケメ、円形部欠損	茶色粒・長石・石英粒多く含有。かなり細かい粒子。	灰白				275	
第34図10	SB07	十師器	土師	3.9	1.4				手ずくね						361	
第34図11	SB07	十師器	土師	2.9	1.4				手ずくね						362	
第34図12	SB07	十師器	土師	3.1	1.6				手ずくね						363	
第34図13	SB07	十師器	土師	3.7	1.3				手ずくね						364	
第34図14	SB07	土師器	土師	3.4	1.2				手ずくね						365	
第34図15	SB07	土師器	土師	2.8	1.5				手ずくね						367	
第34図16	SB07	十師器	土師	3.8	1.4				手ずくね						366	
第34図17	SB07	土師器	土師	3.1	1.4				手ずくね						368	
第34図18	SB07	土師器	土師	3.1	1.5				手ずくね						369	
第34図19	SB07	土師器	土師	3.2	1.6				手ずくね						370	
第34図20	SB07	土師器	土師	3.0	1.4				手ずくね						371	
第34図21	SB07	土師器	土師	2.9	1.4				手ずくね						372	
第34図22	SB07	土師器	土師	2.9	1.3				手ずくね						373	
第34図23	SB07	土師器	土師	3.5	1.5				手ずくね						374	
第34図24	SB07	土師器	土師	3.6	1.4				手ずくね						375	
第34図25	SB07	土師器	土師	3.1	1.5				手ずくね						376	
第34図26	R18	土師器	土師	5.2	1.7				手ずくね						377	
第35図01	SB08	土師器	杯(皿)	8.8	4.0		2.0		ロクロナデ一底回転糸切り(細かい)、粘土埋手	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	橙		18	32	153	
第35図02	SB08	土師器	杯	17.5	7.4		3.9		ロクロナデ一底回転糸切り(粗い、底部大きい、底部に輪状痕跡残存	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	橙		7	32	154	
第35図03	SB08	土師器	杯 (内面黒)	16.0	4.9		3.8		ロクロナデ一底回転糸切り(細かい)一ミガキ不明瞭	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	黒色	赤茶	15	19	155	
第35図04	SB09	土師器	杯	12.5	12.5		3.8		ロクロナデ、底回転糸切り、	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	橙		32	32	274	
第35図05	SBO9	土師器	杯/椀	13.2	5.2		3.3		ロクロナデ一底回転糸切り、静雲博手、線書文字あり、内黒	茶色粒・長石・石英粒多く含有。かなり細かい粒子。	橙	黒色	3	32	222	
第35図06	SB09 (SB6)	土師器	椀/杯	13.2	5.4		4.3		ロクロナデ、内ミガキ、風回転糸切り	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	橙	黒色	9	32	51	5図04と接合
第37図01	SB14	土師器	杯	11.8	4.4		3.1		ロクロナデ一底回転糸切り	1～2 mm砂粒多量に含有。外面ザラザラ。	橙		13	32	119	
第37図02	SB14	土師器	杯	12.4	5.2		3.2		ロクロナデ、底回転糸切り(細かい)	茶色粒・長石・石英粒多く含有。かなり細かい粒子。	にぶい黄色		10	32	72	
第37図03	SB14	土師器	杯	12.0	4.8		3.8		ロクロナデ、底回転糸切り	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	にぶい黄色		16	32	73	
第37図04	SB14	土師器	杯	12.0	4.5		3.8		ロクロナデ一底回転糸切り、口縁端部歪取り	茶色粒・長石・石英粒多く含有。かなり細かい粒子。	橙		3	8	118	

平安時代遺物観察表

図版番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高A(cm)	器高B(cm)	器高C(cm)	調整	胎土	色調(外)	色調(内)	口縁部或若横存率/32	整理番号	備考
第37図05	SB14	土師器	甕類	15.0	5.8		5.6		ロクロナデ-底回転糸切り,内黒ミガキ不明瞭	茶色粒・長石・石英粒多く含有,かなり細かい粒子。	橙	黒色	3	23	145
第37図06	SB14	土師器	甕類	16.2			5.9		内黒ミガキ,高台欠損	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ	にぶい黄橙色	黒色	13		104
第37図07	SB14	土師器	甕類	14.5					内黒ミガキ	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ	黒色	黒色	6		113
第37図08	SB14	土師器	甕類	12.0					ロクロナデ,内黒ミガキ	茶色粒・長石・石英粒多く含有,かなり細かい粒子。	浅黄橙色	黒色	7		109
第37図09	SB14	土師器	甕類	15.0	7.7		6.2		ロクロナデ,内黒ミガキ,底回転糸切り痕	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ	にぶい黄橙色	黒色	19	32	103
第37図10	SB14	土師器	甕類	16.0					内黒ミガキ,口縁丸潰	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ	にぶい黄橙色	黒色	3		114
第37図11	SB14	土師器	甕類		5.6			1.0	ロクロナデ,内黒ミガキ,暗文線状	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい黄橙色	黒色		16	107
第37図12	SB14	土師器	甕類		10.2			1.1	内黒ミガキ,不明瞭	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい黄橙色	黒色		32	105
第37図13	SB14	土師器	甕類		7.0			1.1	ロクロナデ,内黒ミガキ	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	にぶい黄橙色	黒色		20	106
第37図14	SB14	土師器	坏	17.0					ロクロナデ,強くロ縁外反,底部欠損,器壁やや薄手	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ。	橙		7		149
第37図15	SB14	土師器	椀		7.0				ロクロナデ	茶色粒・長石・石英粒多く含有,かなり細かい粒子。	にぶい黄色			22	78
第37図16	SB14	土師器	杯(黒色)		6.0				ロクロナデ,底回転糸切り,黒黒,内ミガキ	非常に微細な砂粒含有。	黒色	黒色		16	288
第37図17	SB14	土師器	甕類	12.2					赤岩,ロクロナデ,底部欠損,器壁薄手	茶色粒・長石・石英粒多く含有,かなり細かい粒子。	にぶい黄色		4		140
第37図18	SB14	須恵器	杯B		9.7				底部回転糸切り,高台付き	粒子が細かい	灰色			12	358
第37図19	SB14	灰釉	皿	14.0	7.0	2.5	2.9		灰釉淡し,掻け	非常に緻密	11.釉		8	11	157
第37図20	SB14	灰釉	皿		7.0			0.9	ロクロナデ-底回転糸切り(細かい)-静壁薄手,鍵あり	非常に緻密	12.釉			32	156
第37図21	SBO6	土師器	鉢	18.0	9.2		10.1		ロクロナデ-底回転糸切り(粗い)-内ミガキ(横位)	茶色粒・長石・石英粒多く含有,かなり細かい粒子。	明赤褐色		5	22	115
第37図22	SB14	灰釉	短頸壺	11.5					灰釉,ハケ塗り	非常に緻密	釉オリーブ	灰白色	2		311
第37図23	SB14	土師器	鉢(内黒)	32.0					ロクロナデ,口部回転ヘラケズリ,内黒	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む,金雲母	明赤褐色	黒色	10		102
第37図24	SB14	土師器	小甕	11.8					ロクロナデ	非常に微細な砂粒含有。	にぶい黄色	にぶい黄橙色	6		91
第37図25	SB14	土師器	甕	18.0					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		5		86
第37図26	SB14	土師器	甕	19.2					ロクロナデ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	明赤褐色	橙色	4		93
第37図27	SB14	土師器	甕	20.8					ロクロナデ,胴下半平行タタキ,実NO8同一個体	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		9		87
第37図28	SB14	土師器	甕	24.8					ロクロナデ,口縁端部面取り,器壁厚手	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		3		276
第37図29	SB14	土師器	羽釜	23.0					ロクロナデ	石英粒を多く含み,大小の砂粒多量に含む。	にぶい黄色		4		128
第37図30	SB14	土師器	甑		16.7				ロクロナデ-胴下半平行タタキ	心英粒を多く含み,大小の砂粒多量に含む。	明赤褐色	にぶい黄色		8	101
第37図31	SB14	土師器	甑	17.0					ロクロナデ	茶色粒・長石・石英粒多く含有し,茶色1mm多く混入,かなり細かい粒子。	橙		4		267
第38図32	SB14	土師器	甕	20.2					ロクロナデ-胴下半粗い平行タタキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙		4		132
第38図33	SB14	土師器	甕	25.2					ロクロナデ-胴下半粗い平行タタキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	1.7.		7		125
第38図34	SB14	土師器	甕						ロクロナデ-胴下半縦位ケズリ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	明赤褐色				88
第38図35	SB14	土師器	甕		10.0				内面ハケ,外面外周ヘラケズリ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	橙			4	99
第38図36	SB14	土師器	甕		9.5				底と底外周ヘラケズリ	非常に微細な砂粒含有。	赤褐色			8	95
第38図37	SB14	土師器	甕	21.6					ロクロナデ-胴下半タタキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	明赤褐色		2		123
第38図38	SB14	土師器	甕						ロクロナデ-胴下半平行タタキ	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	赤褐色	にぶい橙色			100
第38図39	SB14	土師器	甕						胴下半縦形格子目タタキ,内あて具痕	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	にぶい黄橙色				83
第38図40	SB14	土師器	甕								灰色				100
第38図41	SB14	土師器	甕						平行タタキ,底破片,内あて具痕,整理NO8同個体	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。	にぶい橙色				82
第38図42	SB14	土師器	甕						ロクロナデ-胴下半格子目タタキ(粗い目)	細かい長石・石英・茶色粒を多く含む。					130
第38図43	SB14	土師器	甕						ロクロナデ	石英粒を多く含み,大小の砂粒多量に含有,底格目	明褐色				131
第39図20	SKO6	土師器	杯	10.0	3.8		3.0		ロクロナデ-底回転糸切り,器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ,白色粒子多	橙		32	32	223
第39図21	SKO6	土師器	杯	10.0	3.5		3.0		ロクロナデ-底回転糸切り,器壁薄手	1～2mm砂粒多量に含有,外面ザラザラ,白色粒子多	橙		32	32	224

第４章　韮山遺跡

第１節　遺跡と調査の概要

１　遺跡の概要

韮山遺跡は下水内郡豊田村大字上今井字韮山237他に所在する。千曲川左岸の米山山塊から続く丘陵の東端に立地し、千曲川との距離は約250ｍ、比高差は約40ｍである。遺跡の一部は河岸段丘から続く平坦面にも広がる。標高は360ｍ～371ｍである。

調査地は、東端が国道117号線に隣接する平坦部と、東へ舌状に張り出した台地状の地形とからなる。平坦部はリンゴ畑になっているが、以前は丘陵から段々とつづく水田であった（下段畑地）。丘陵部の水田化は中腹を横走する用水が整備された後である。水田からリンゴ畑への転作はおよそ20年前のことである。この際、階段状の水田を削平したため、西側の水田との段差は約２ｍとなっている。なお、東に張り出した舌状の台地は水田となっている（上段田地）。また、国道東側に見られる谷の先端が、下段畑地であり、国道建設さらに水田改善はより深い谷であったものが、埋立てや崩落により現状の平坦地を形成したものと考えられる。

上信越自動車道建設に伴う長野県教育委員会の事前踏査により、中世蔵骨器が出土したということから遺跡とされていた。遺跡に隣接する国道117号線の南東部には経塚の小字名も残っている。

２　調査の概要

(1)　調査範囲と調査方法

下段畑地を１区、上段田地を２区とする。１区では重機によるトレンチ調査を行った。東西方向に３本のトレンチを掘ったが、地表下20cmで礫層となり、遺構・遺物は確認されなかった。２区は重機による表土剝ぎを行い面的調査を実施した。また、斜面部での窯跡や中世墓地などの存在が予想されたため、１区を取り囲む斜面に重機によるトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

なお、１区上部の尾根が蔵骨器の出土地点と思われるが、用水路より上部は用地内外とも調査以前に削り取られ、尾根そのものが失われていたため調査対象としなかった。

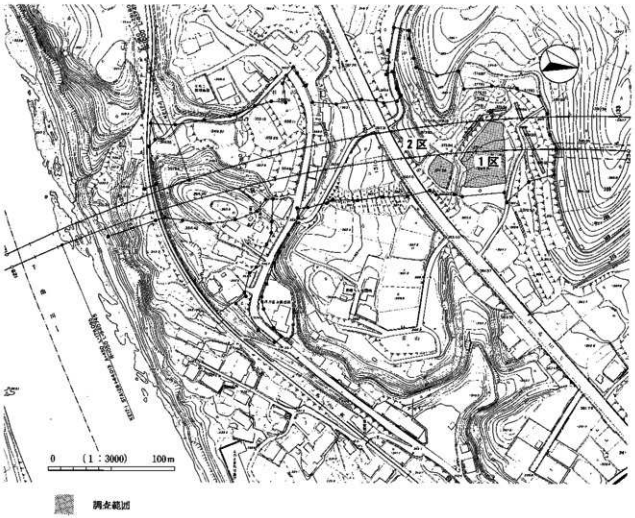
(2)　調査経過（調査日誌抄）

調査期間：平成６年４月７日～４月１８日

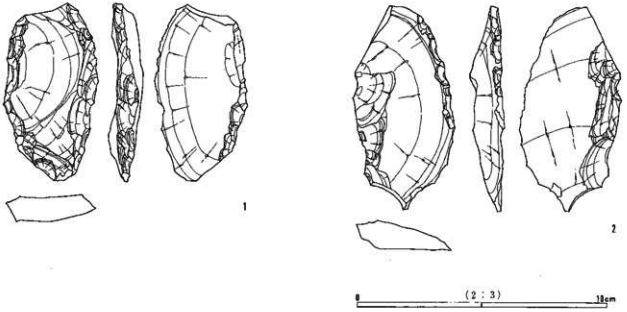
４月７日　１区トレンチ調査開始。
４月11日　発掘調査開始式。豊田村ケーブルテレビの取材。
４月12日　２区表土剝ぎ。
４月13日　２区で旧水田の畦を検出、土師器・陶磁器片出土。
４月14日　水田部調査。
４月15日　水田面検出、写真撮影。
４月18日　遺物取り上げ。大谷地遺跡へ機材搬出。

(3)　調査結果の概要

１区では遺構・遺物は確認されなかった。２区では等高線に沿って弧状の畦が２本確認され、陶磁器片・土器片が少数出土した。畦は近年の造成以前の水田のものと思われる。調査地の斜面上方は造成前の様子をとどめる休耕田があり、その区画と方位・間隔等が一致する。出土遺物はスクレイパー、内耳鍋、近



第48図　韮山遺跡　調査範囲



第49図　韮山遺跡　出土遺物

世陶磁器などで、畦以外の遺構は認められず、伝承にあった蔵骨器と関わる中世墓地の遺構も検出されなかった。

第２節　出土遺物

スクレイパー２点、剥片11点、奈良・平安時代の須恵器・土師器３点、内耳鍋１点、擂り鉢など近世陶磁器16点が出土した。第49図１・２は安山岩のスクレイパーで、１は自然面を打面とした横長の剥片を素材とし、二側縁に調整加工が見られ、調整加工が及ばず素材剥片の鋭利な縁辺を残す部分もある。調整加工は主に背面に施されており、主剥離面には数回の剥離が認められるのみである。一部欠損している。２は横長の剥片を素材とし、主剥離面の二側縁に調整加工が見られる。打面は調整加工により失われている。これら２点の石器は素材剥片の形状と大きさ、調整加工が類似しており同一時期のものと思われる。また、縄文時代の土器が出土していないことから、旧石器時代の石器である可能性がある。また、剥片は黒曜石２点・チャート７点・玉髄１点・安山岩１点で、これらも旧石器時代の遺物である可能性がある。

第３節　まとめ

調査当初想定した中世墓地にかかわる遺構・遺物は発見されず、蔵骨器出土地点と思われる場所は既に削平されており、中世墓地に関する資料は得ることができなかった。また、わずかな遺物が採集されたのみであったが、旧石器時代と奈良・平安時代と思われる遺物が出土しており、調査地の周辺にこれらの時期の遺構が存在する可能性も考慮しておきたい。

第5章　風呂屋遺跡

第1節　遺跡と調査の概要

1　遺跡の概要

風呂屋遺跡は、下水内郡豊田村大字上今井字風呂屋3012－1ほかに所在する。千曲川は、これよりやや上流部より長野盆地と飯山・木島平間の峡谷状の地形に入り、川幅を狭めながら蛇行している。風呂屋遺跡は、この千曲川を見下ろす、左岸の段丘上、南北約350m、東西約150mに広がっている。これまでに縄文時代中期後期の土器や石器、弥生時代の太形蛤刃石斧、平安時代の灰釉陶器などが採集され中世の空堀、土塁も知られていた。

遺跡の周辺には、上今井、替佐などの集落の発達をみるが、本調査区は上今井の北、中世の遺構などが知られる段丘面よりさらに一段高いテラス状の緩斜面上にある。この地形は、調査区西側に迫る米山山塊の急峻な斜面の「地滑り」による堆積物によって形成されたものと考えられるが、調査区は上今井城址北側の小さな谷の谷口に位置するため、東南に緩やかに下る浅いすり鉢状のくぼ地を形成している。標高は、390mから380mを測り、千曲川までの直線距離は約500m、比高差は約60mある。

調査の前までリンゴ畑として利用されており、その耕作者は、畑地にするために明治以降に削平され、また飯山線建設に際しては、大きな石が運び出されたという。

「風呂屋」と言う地名については、豊田村誌に『上今井には城山と南城と言つている城山…とふろやしき（古屋敷の訛か）と称する館趾と内堀の二つの館趾がある。』（264P）との記述があり、中世の館跡に結びつけた伝承が見られる。

2　調査の概要

(1)　調査範囲と調査方法（第50図）

本遺跡においては、4000m²の発掘調査を実施した。本調査に先立って用地内を試掘調査した結果、土師器片、縄文土器片及び黒色土の落ち込み数カ所を確認した。そこで調査区を設定し、重機による表土剝ぎの後に、面的な掘り下げによる調査を実施した。

基準点（A－1グリッドの交点）を、国家座標（第Ⅷ系）X＝－16.320、Y＝84.200に設定し、長野県埋蔵文化財センターの仕様に従い、調査区内に方位に合わせた8mグリッドを設定し遺物の取り上げ、実測を行った。

(2)　調査経過（調査日誌抄）

調査期間　平成6年6月22日～同年9月30日

6月22日　発掘調査開始。土師器、縄文土器片の散発的出土。

6月23日　J－2・3で石列を確認。石棺墓、石室、井戸などの可能性を想定。

6月29日　D－23・24掘り下げ。縄文土器片出土。J－2・3の石列掘り下げと写真撮影。

6月30日　D－23・24・25検出。縄文土器多数出土。J－2・3の石列掘り下げ、南側に更に小礫群を検出。

7月7日　D－23・24・25掘り下げ。D25より土偶検出。J－2・3の石列を横穴式石室と確認。

7月8日　D－23・24、I－2・3掘り下げ。縄文土器多数出土、住居跡確認できず。調査区南側のI－17・18・19トレンチ調査。包含層なし。
7月13日　I－3グリッドより磨製石斧、打製石斧4点相次いで検出。古墳の石室積り下げ。
7月14日　D－23・24・25、I－2・3掘り下げを継続したが、遺構確認できず。古墳石室周辺の調査を開始。
7月18日　豊田村ケーブルテレビ取材あり。
7月21日　I－4から土師器甕を検出。石室周辺にトレンチを入れたところ、外側から新たに石列を検出した。二重の配石となっている可能性がある。
7月22日　豊田村教育委員会視察。　I－4から土師器が集中して出土した。
7月28日　I－4の土師器集中部分において住居跡を検出。石室周辺の配石を検出。
8月3日　住居跡（SB01）かまど、遺物などを検出。古墳石室内で須恵器出土。
8月4日　古墳石室内より小型壺出土。
8月9日　神村理事、穂口参事来訪。
8月10日　古墳南側J－6・7検出。縄文土器多数検出。
8月12日　古墳裏道部掘り下げ。
8月18日　石室実測図作成。
8月27日　現地説明会実施。見学者約130名。豊田村ケーブルテレビ取材。
8月30日　古墳全面清掃。側面図作成。SB01掘り下げ、土師器坏出土、写真撮影取り上げ。
8月31日　古墳石室空撮。
9月1日　豊田村村長、教育委員会来訪。古墳移転の打ち合わせ協議。SB01かまど掘り下げ、断面図作成。古墳、裏ごめ石をはずす。
9月5日　SB01完掘。
9月6日　古墳、石室周辺の面的掘り下げ。SB01床下の面的掘り下げ。とりに縄文土器片多数出土。
9月12日　古墳、裏ごめ石撤去、側壁を残し面的な掘り下げを進める。
9月13日　古墳裏ごめ石、配石取り外し。J－1・2・3・6・7縄文遺物包含層の掘り下げ。
9月14日　古墳石室平面図作成。J－1・2・3・6・7縄文遺物包含層の掘り下げ、縄文土器多数出土。
9月21日　古墳石室全景撮影。古墳石室周辺の掘り下げ、縄文土器片と石器出土。
9月22日　古墳石室写真撮影。石室解体。石室下の黒色土を掘り下げる。縄文土器、石器多数出土。
9月26日　古墳下の黒色土の掘り下げ。縄文土器、石器多数出土
9月29日　古墳下の黒色土の掘り下げ完了。
9月30日　全面清掃し空撮空測準備。
10月5日　空撮空測を実施。調査終了。

(3) 調査結果の概要（第51図）

今調査によって遺構としては、豊田村初の古墳（風呂屋古墳と命名）1基、平安時代の竪穴住居跡1棟を検出した。また縄文時代中期の土器石器を多く検出することができた。

古墳は、後の畑地の造成などによって、上部を既に失い全容を知ることはできなかったが、横穴式石室を有する古墳時代後期の円墳である。石室及び周辺から古墳時代後期の土器及び金属器数点と平安時代の土器数点を検出した。縄文時代の遺構は地滑りなどによって失われたものと思われるが、遺物は多かった。縄文土器及び石器は、中期前葉から中葉に位置付けられよう。同時期と思われる土偶も30点ほど出土した。縄文土器はそのほとんどが破片資料であり全形をうかがえるものは少ないが、北信地方ではこの時期の資料は比較的少なく、重要な資料となろう。

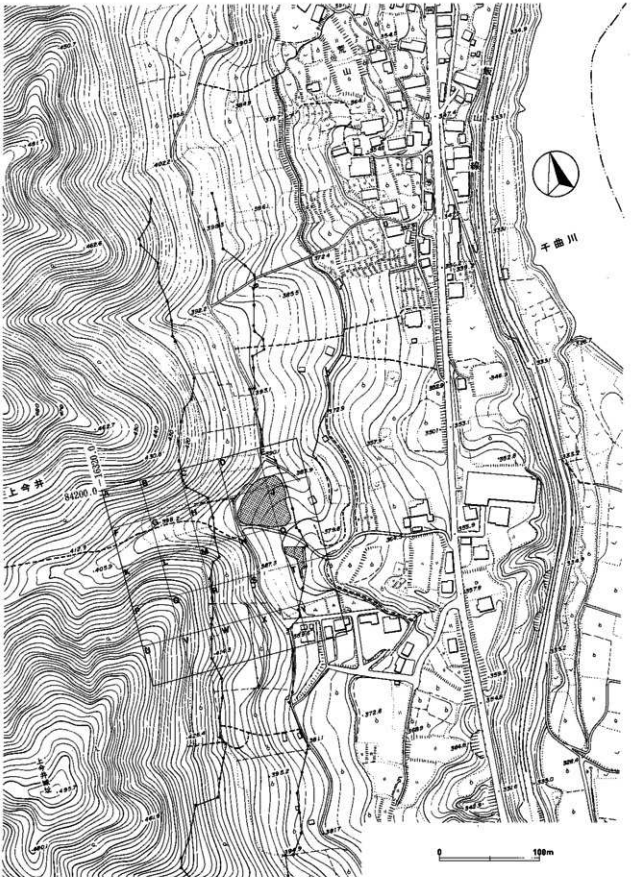
(4) 土層の状況と基本土層（第52図）

調査区は、地滑りの多い地域に属し、また小さな谷の出口に当たる。そのため谷上流部からの崩落によると思われる土砂の堆積と浸食の痕跡を複雑に残している。そこに北及び西側斜面から土砂が崩落し、狭い範囲であっても土層は複雑に変化する。特に、遺物包含層が存在した調査区北半分と、それのない南半分の地域とでは、大きな相違が見られた。

II層は縄文時代から平安時代の遺物の包含層である。古墳は、II層中から石室の石積みが始まり、平安時代の住居跡は、II層を掘り込んで作られていた。

次に、複雑な本調査区内の土層形成については、以下の様に考えられる。

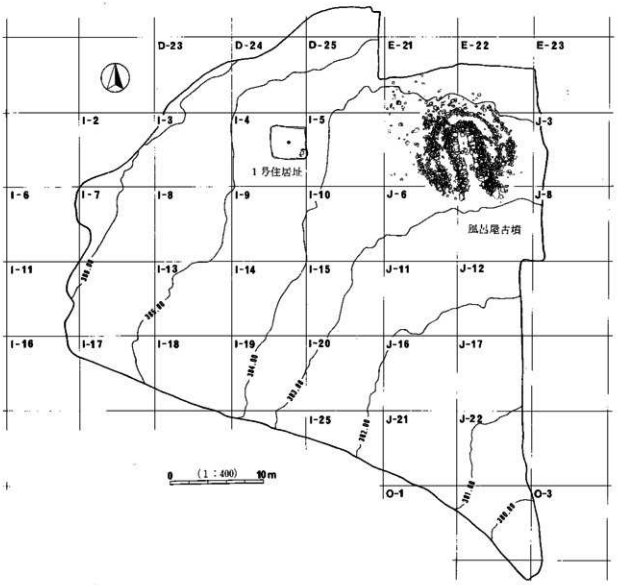
地形的には、比較的傾斜の急な斜面の途中に、テラス状の平坦な地形が形成され、調査区東側は斜面下部にも関わらず、やや盛り上がった丘状の地形が見られるという特徴がある。また調査区内には、地表からかなり深い部分にも、細かく均質な砂層が、厚みと広がりを持って堆積している。以上の点から、このテラス状の平坦な地形は、調査区南端を流れる小さな谷川による浸食堆積の結果とは思われにくい。むし



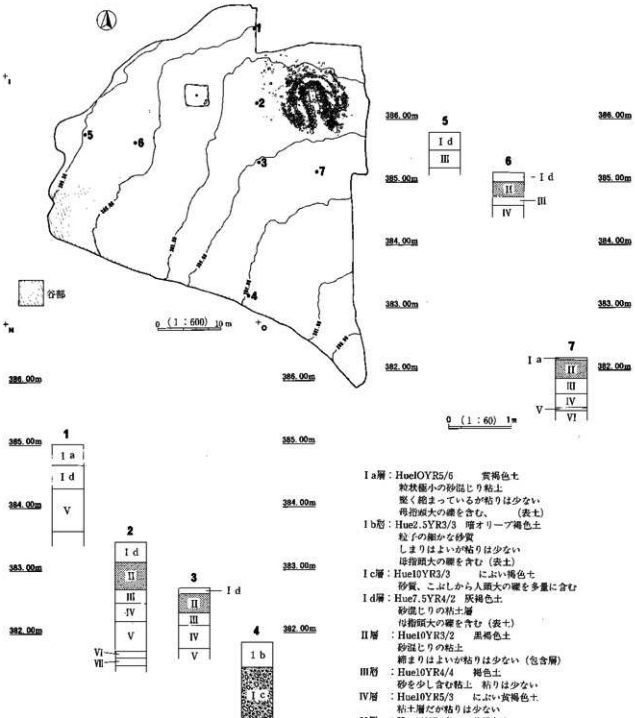
第50図　風呂屋遺跡　調査区とグリッド配置図

ろ、北と西から迫る米山山塊の地滑りとそこから供給された土砂の堆積によって、形成されたものと考える方がよい。砂層は、米山山塊を形成する、第三紀層のものである。調査区南端を流れる谷川は、大雨などの際、上流部から礫なども押し流して、急激な堆積をもたらしたのではなかろうか。また、畑地やリンゴ畑として利用されたことによって削平された部分もかなり多いと考えられる。

以上の要素から調査区は大きく二つの地区に分けて考えることができる。すなわち地滑りなどによって遺物を含む堆積物が供給された地区と、その供給がなかったか浸食などによってそれらが失われ堆積物によって埋められた地区である。これを簡単に図示すると第52図のようになる。遺物包含層は、地滑りなどによって供給された堆積層の一部と考えられ、縄文時代中期以降、古墳築造までの間にそれ以前の生活面や地形が失われたのではないかと思われる。また、遺物は本来の位置から大きく移動しておらず、この周囲が集落域であったことを示すものと思われる。そして、古墳と平安時代住居の存在からも、7世紀以降は地形的に安定していたことがうかがえる。



第51図　風呂屋遺跡　遺構配置図



Ⅰa層：Hue10YR5/6　黄褐色土
粒径極小の砂混じり粘土
堅く絡まっているが粘りは少ない
母指頭大の礫を含む、（表土）

Ⅰb層：Hue2.5YR3/3　暗オリーブ褐色土
粒子の細かな砂質
しまりはよいが粘りは少ない
母指頭大の礫を含む（表土）

Ⅰc層：Hue10YR3/3　によい褐色土
砂質、こぶしから人頭大の礫を多量に含む

Ⅰd層：Hue7.5YR4/2　灰褐色土
砂混じりの粘土層
母指頭大の礫を含む（表土）

Ⅱ層　：Hue10YR3/2　黒褐色土
砂混じりの粘土
締まりはよいが粘りは少ない（包含層）

Ⅲ層　：Hue10YR4/4　褐色土
砂を少し含む粘土　粘りは少ない

Ⅳ層　：Hue10YR5/3　によい黄褐色土
粘土層だが粘りは少ない

Ⅴ層　：Hue10YR5/8　黄褐色土
細粒砂、母指頭大の小礫をまれに含む

Ⅵ層　：Hue10YR3/2　黒褐色土
細粒砂　締まりは良好だが粘性はない

Ⅶ層　：Hue10YR3/4　暗褐色土
細粒砂　締まりは良好だが粘性はない

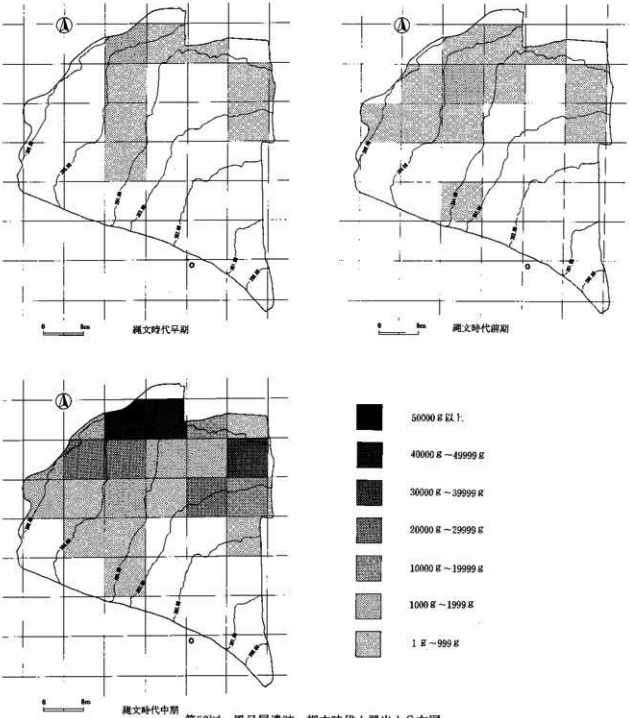
第52図　風呂屋遺跡　基本土層

第２節　縄文時代の遺物

１　土器

(1)　土器の出土量とその分布

「地滑り」または「土砂崩落」と考えられる堆積層から出土したため、各時期の遺物が混在し、時期による分層はできず、遺構も検出されなかった。そこで調査区全体として計量した。その分布については、中地区（８ｍグリッド）を単位として、出土量を第53図で示す。



第53図　風呂屋遺跡　縄文時代土器出土分布図

①調査区全体の土器の出土量

時　　期	破片数	破片数の比率	重量（g）	重量による比率
縄文時代早期	220	0.8%	5,085	1.8%
縄文時代前期	139	0.5%	3,160	1.1%
縄文時代中期	26,385	99.7%	275,959	97.1%
合　　計	26,744		284,204	

≪後期の土器は極端に少ないので省略する。≫

以上の様に破片数でも重量においても出土した土器は、縄文時代中期に位置付けられるものがほとんどである。数値上早期が前期を上回っているが、これは早期の1個体が多数の破片に割れて出土し、また厚く重量があるためである。破片から見た場合早期より前期の方が個体数は多い。縄文時代中期の土器は、出土遺物の主体をなし分布や出土状況から見て比較的短期間に残された土器群と思われる。

②出土分布（第53図）

早期・前期・中期の土器ともに、調査区の北半分に偏る。時期別に見ると早期の土器が狭い範囲に重点的に出土したかに見えるが、これは1個体の約半分がまとまって出土したためである。これをのぞくと早期、前期、中期ともに調査区の北部、緩斜面と急斜面との境目を中心にした範囲に出土している。

(2)　土器の記述方法

同一の包含層から各時期の土器が出土した。しかも出土土器のほとんどは破片資料であり、全体の器形をうかがえるものは極めて少ない。

出土量の大半を占める縄文時代中期の土器は、各部分の破片資料を参考に以下のような器形が推定される。

a）上部に向かってやや開く円筒形の胴部の上に、外傾した口辺に直立した口縁がつくもの。その中にはキャリパー形の口縁を持つものもある。

b）円筒状で底部より外反するもの。

c）やや胴部がふくらむ器形で口縁部がほぼ直立またはやや外反するもの。

d）胴部上部がふくらみを持ちキャリパー形の口縁を持つもの。

e）波状口縁を持つもの。

復元できる個体が少ないためこれらの器形を分類の基準にはできないが、破片資料が主体のため本稿では以下のように、まず早期、前期、中期、後期に大別し、施文方法および文様要素によってそれらを細別して記述する。

第Ⅰ群　早期　絡条体圧痕文が施されるもの

第Ⅱ群　前期

　第1類　沈線による波状文を持つもの

　第2類　竹管文を持つもの

　第3類　縄文施文のもの

　第4類　無文のもの

　第5類　細い粘土紐を張り付けた施文を持つもの

第Ⅲ群　中期

　第1類　単沈線を中心に施文したもの

　第2類　半截竹管による施文を持つもの

A種　浅い平行沈線で施文したもの
B種　半截竹管の半隆起線による施文をしたもの
a　口縁部付近
1　半隆起線を縦位に密に引き並べたもの
2　半隆起線による「U」字状文または逆「U」字状文を施文したもの
3　連華状文を施文したもの
4　横走する半隆起線を持つもの
5　横位無文帯
b　下降する隆帯の上部につく装飾突起
c　胴部
1　地文が無文又は縄文施文されるもの
(1)下降する隆帯又は半隆起線による縦区画を持つもの
直線的半隆起線のモチーフによるもの
曲線的な半隆起線のモチーフを持つもの
(2)継手文（連結部）のモチーフを持つもの
(3)B字状文のモチーフを持つもの
(4)区画の周辺に刺突文を持つもの
2　縄文以外の施文の胴部（沈線による綾杉、斜格子など）
3　半隆起線による細かな区画が施される胴部
第3類　縄文のみを施文のもの
第4類　指頭圧痕を施文したもの
第5類　その他
A種　地文を持たず隆帯のみで施文されたもの
B種　粘土紐の貼り付けなどによる立体的な文様を持つもの
C種　内面に施文されたもの
D種　底部に圧痕を持つもの
第Ⅳ群　後期

(3) 土器の概要

今回の調査では、早期の絡条体圧痕文土器、前期、中期、後期の縄文土器が出土したが、主体は中期前葉と中葉である。

第1群　早期絡条体圧痕文が施されるもの（第54図1～4）

以下は縄文時代早期末に位置付くものと思われる。

1は口縁部から底部までの破片で、つぶれたような状態でまとまって出土した。口縁部から胴部下半までの接合が可能であったが、尖底部との接点は明確に出来なかった。器形は、口縁部がやや外反した砲弾型で、口縁から3cmほど下がったところに、隆帯を1条巡らしている。胎土は褐色を呈し底部付近では褐色から赤褐色、口縁部付近では黒みがかった茶褐色に変化している。また、白色の微細な粒子の混入を認め、繊維の混入も多い。文様は、口縁部直下に4条の芋虫状の絡条体圧痕を、主に横位に施している。その下の隆帯上を横方向の矢羽状の絡条体圧痕で埋めている。さらにその直下に、3条の絡条体圧痕を横位に施文している。しかし、部分的ではあるが、口縁部から隆帯上にかけて縦位の絡条体圧痕が見られる。

胴部は斜め方向の条痕によって埋め尽くされている。内面全体も同様である。口唇部には条痕や圧痕は認められない。外面の条痕は、沈線が10数本平行して引かれている。内面は、外面に比して沈線の幅が広く絡条体条痕文と思われる。

２は尖底部破片である。胎土は外側が褐色を呈し、内部が赤褐色に近い。繊維を含み、白色の微細な粒子の混入が見られる。外面に縄文を、内面には条痕文を持つ。

３は条痕文の施された胴部破片。褐色で繊維を含む胎土である。器面には横または斜め方向の、内面には縦と斜め方向の条痕文が見られる。

４は口縁部で、緩やかな波状を呈する器形である。補修孔と見られる円孔を持つ。胎土は白みがかった褐色で、繊維とやや大きめの砂粒を含む。文様は、口縁部に５段から７段の横位多段構成の絡条体圧痕文を持つ。口唇部にも絡条体の圧痕が認められる。胴部には斜めまたは横向きの条痕文が、内面にも縦方向の条痕文が見られる。

この一群の土器の編年的位置については、施文の状態などから以下のように考える。石山式～天神山式の時期になると撚糸文を地文とする絡条体圧痕文が卓越してくるが、これらの土器の中に撚糸文を持つ土器は認められない。そこでこれらは、茅山上層式から入海式の時期に収まるものと考えられる。ただし、東海系の土器の伴出が認められないため、詳細な時期は限定はしがたい。(注11)

第Ⅱ群　前期

第１類　沈線による波状文を持つもの（前期前半　黒浜式併行）（第55図５・６）

５はやや内湾する平口縁で、上半部にやや幅広の浅い沈線で波状文を横位に数条巡らし、端部に瘤状の小突起がつく。胎土は褐色で、白色の微粒子の混入が見られる。６はやや外反する口縁かと思われる。５と同じく浅い沈線で波状文を横位に巡らし、その下には縄文が施文される。胎土は褐色でやや赤みがかっている。信濃町日向林Ｂ遺跡(注12)に類例の出土を見る。

第２類　竹管文による施文をしたもの（第55図７～12・25）

７は口縁部破片で10と同一個体。半截竹管による押し引きの爪形文が横位に３条施文されている。その下に半截竹管による波状の平行沈線が横位に施文される。黒浜式期の後半に位置付くものと思われる。８は、爪形文（Ｃ字）で曲線文様を構成している。茶褐色の破片で、黒色の砂の混入が多い。諸磯ａ式土器併行と思われる。９は半截竹管の平行沈線を引き、その中を爪形文で充塡している。胎土は黒褐色で砂の混入がかなり見られる。諸磯ａ式またはｂ式併行と思われる。11は口縁部破片で、半截竹管による平行沈線を横位に密に施文する。鋭い刺突の穴を持つボタン状貼付が２個つく。胎土は、白みがかった褐色で白い微細な粒子が混入する。12は口縁破片である。半截竹管による押し引きの爪形文が施文される。白っぽい胎土で砂の混入が見られるが、器面はなめらかで緻密な印象を受ける。諸磯ｃ式併行と思われる。

25は波状口縁の土器である。半截竹管を２本１組にして引いた平行沈線を横位に密に施文し、縦位に４本１単位の結節浮線文を施文している。また口唇部には刻み目文が見られるがこれは半截竹管によるものではない。口縁部と胴部との境目には、大きめの爪形文が横位に施文されて区画をなしている。おそらく右手の爪の押し引きによって施文したものと思われる。胴部は横位の羽状縄文が施文されている。胎土は白みがかった褐色で、白微細な粒子が混入する。この土器の口縁部は、諸磯Ｃ式土器の影響を見ることができる。しかし、胴部の羽状縄文と口縁部の結節浮線文との組み合わせ、大きめの爪形文などは、真脇遺跡報告書の第３群土器（福浦下層式期）の２類土器や第４群土器（蜆ケ森式期）の８類（蜆ケ森Ⅱ式土器）との類似性が強い。

第３類　縄文施文のもの（第55図13～16）

13はほぼ直立する平口縁の土器で、施文は単節のＬＲとＲＬの原体を交互に回転した羽状縄文である。褐色で多くの砂を含む胎土である。14は平口縁の深鉢の直立する口縁部分の破片。口唇部はＲＬの原体を５㎜程度の間隔で器壁に直交する方向で押圧施文している。黒褐色で３～４㎜の赤色チャートの小礫などを含む砂が混じる胎土である。前期前半に位置付くものと思われる。15・16は深鉢の胴部で単節のＬＲとＲＬの原体を交互に回転した羽状縄文が見られる。褐色の胎土に少量繊維が混入する。

第４類　無文のもの（第55図19～24）

19は「く」の字形に屈曲する浅鉢の胴部。器面をなでてなめらかな表面に仕上げ、屈曲部直下に沈線を１本巡らしている。褐色で砂と雲母の混入の多いざらざらした胎土である。20は無文の口縁部である。胎土などほとんど19と同じものである。21は屈曲部の上部３㎝ほどで口縁部に至るが口縁部周辺には直径７㎜ほどの円孔が見られ口縁の周りを巡っているものと思われる。口縁部は立ち上がるものと予想されるが端部の破片はない。胎土は黄褐色で砂の混入は少ない。

24は同形態の浅鉢の底部から胴部にかけての部分であると思われる。21に比較して器壁が厚い。これらの土器は諸磯ｃ式期に位置付くものと思われる。

第５類　細い粘土紐を張り付けて施文したもの（第55図17・18）

17・18は屈曲する口縁部の破片で、太さ２㎜ほどの細い粘土紐を張り付けて斜格子状の模様を施文している。屈曲部の下には２条の平行沈線が巡る。在地系の前期土器ではないかと思われる。

第Ⅲ群　中期

第１類　単沈線による施文を中心とするもの（第56・57図26～45）

中期初頭に位置付けられると思われる一群であり、主に単沈線による施文を中心にしたものである。

26は地文は斜沈線を用い波頂部の文様や胴部の区画には隆帯を用いているが、大半の文様を沈線により施文しており、竹管文を多用する大半の土器とはやや系列を異にすると思われる。胴部に交互刺突文も観察できるが、波頂部の曲線を主体にした文様は他の土器には見られない。また、胴部の区画内の曲線文様も独特のものである。地文は飯山市深沢遺跡出土土器の１類（西沢隆治1988）に類似するのではないかと思われる。胎土は赤褐色で砂と雲母の混入が見られる。

27は波状口縁を持つ深鉢で全体をＲＬの縄文を転がし、太めの単沈線と隆帯によって施文している。波頂部は沈線の施文具と同じ工具を押し当てて三つの突起状に成形している。胎土は赤褐色でやや粒の大きい砂を含むが緻密である。

28は小波状の突起を持った口縁部。棒状の工具によって引かれた横方向の波状沈線と平行沈線による施文が見られる。濃い茶褐色の砂の少ない胎土である。

30・31は胴部破片でともに沈線による曲線文様が見られ、地文の縄文の施文方法が類似する。胎土は褐色で緻密である。

32・33・34はともに押し引き文が見られるものである。32・33は波状口縁を持ち32は波頂部の渦巻き文の下に押し引き文を縦に施文し、口唇部を細い沈線で細かく刻んでいる。また32・33はともに胎土に白色の粒子を多く含みざらざらとした器面である。

36は口縁部に特徴的な突起を持ち、突起の裏面にも三角形の陰刻を施文している。口縁直下に横長楕円形の区画文を持ち区画内の沈線の下半を刺突している。その下の２本の沈線を上下から交互に刺突して施文し37との類似を見る。

38はキャリパー形で平口縁の土器である。縄文は見られず棒状の工具で引かれた単沈線による施文がなされている。口縁部から単沈線によって縦方向に区画した無文の区画と、刺突文で充塡した区画とが見ら

れる。また曲線の区画があるが全体像は把握できない。褐色で砂と雲母の混入が多くざらざらして崩れやすい胎土である。

39の口縁部はやや外反する。口縁部に横長楕円の区画文を持ち、区画内に刺突文を持つ部分と波状沈線を持つ部分がある。胴部には隆帯が1本下降し、粗い格子状の区画を単沈線で施文し、その区画内を同じく粗い刺突文で充填している。胎土は赤褐色で雲母の混入が見られるが、器面のざらつきは少ない。38・39に見られる粗い刺突文は付近の同時期の遺跡に見られない。類例は新潟県中郷村南田遺跡の中期末の土器や新潟県南魚沼郡塩沢町五丁歩遺跡の中期土器に見られるが詳細については十分な情報を集められない。

40はやや外反する胴部の破片と思われるが、全体像はつかめない。施文方法も独特のものが見られ、貼り付けられた隆帯は中空で大きく器面から張り出す構造を持つ。隆帯の下部の円文も後から貼り付けられたものである。隆帯上には左右に円文が付けられ、沈線と隆帯によって施文される。中央の沈線は2本とも沈線内に刺突がなされ、右側面は刺突文によって充填されている。左側面は胴部からつながる曲線模様が見られる。胴部には沈線によって同心円文、渦巻き文、斜め施文の変形した楕円区画文モチーフなどが見られる。同心円文の境目には三角形の陰刻が見られ、楕円状の区画文の曲線部は貼付文が見られる。胎土は、白みがかった褐色で白色の粒子を多く含む大変に密度が低い（軽い）胎土で特徴的である。この土器に類似したものは他にほとんど確認できず周辺遺跡でも類似のものはない。

42は口縁部の一部に隆帯で波状の文様を施文している。隆帯より下はやや太い棒状の工具による沈線を縦位に引き並べ、その直上部を刺突している部分と、半隆起線による曲線が施文された部分とがある。

43・44は小破片であるが、棒状の工具による押し引きが見られる。

45は横方向に3列の角押し文を施文している。

第2類　半截竹管による施文を持つもの（第57～67図46～235）

A種　半截竹管による浅い平行沈線で施文したもの（第57図46～53）

46・47・48・49・50は平行沈線により斜格子目文を施文する。51は突起部分と思われるが円孔が貫通している。黒褐色または褐色の胎土で多量の砂を含み器面は荒い。49は雲母を含みほかと異なる。これらは、上水内郡小川村筏遺跡第4類Bの「半截竹管による平行沈線を多用する土器」（寺内隆夫1991）や、上水内郡三水村上赤塩遺跡のⅠ群3類「貫通する円孔と格子目文を持つ土器」（寺内隆夫1991）などと共通する文様構成要素を持っている。また飯山市須田ヶ峰遺跡にも類似したものが見られる（飯山市史1993）。以上の類例より考えてこれらは、中期前葉五領ヶ台式に併行する時期のものと思われる。52・53は口縁部で平行沈線を斜めに密に施文している。黒褐色または褐色の胎土で多量の砂を含み器面は荒く、52は雲母を含む胎土である。

B種　半截竹管による半隆起線で施文をしたもの（第57～67図54～235）

a　口縁部付近

a1　半隆起線を縦位に密に引き並べた土器（第57・58・59図54～80）

平行沈線と同じ半截竹管を用いながら、蒲鉾の背の部分のように丸みを持った半隆起線を引く。口縁部直下に施文されるものが多いが、更に横走する半隆起線を3本ほど挟んでもう一段施文されるものも58・61などに観察される。また54も口縁部と言うよりは頸部に近い部分への施文である。器形は破片資料のために全体像を十分につかみ得ないが、深沢遺跡出土土器の器形との類似点より考え、底部から頸部にかけてやや広がる筒状の胴部を持ち、頸部で角度を変えて外反し口縁部にかけて「く」の字形に立ち上がる平口縁のものが多いと思われる。また、外反の角度の小さいものは胴部にやや膨らみを持つ器形かと想像さ

れる。口縁部に突起を持つものが見られ、60・61・62・64など山形の突起を持つもの、65の渦巻き状の突起、65－B・65－Cの山形と渦巻きのモチーフをつなげたものなどの他に、55・58・59に見られる非対称の突起もある。まとロ縁部に縄文を施文するものとしないものが見られる。この文様帯の下の頸部にかけて、横位無文帯（54・58・59）または横位縄文帯（55・56・62・69）が見られるものが多い。57は小型の土器でほぼ全体をうかがうことが可能である。横位縄文帯に相当する部分に２本の半隆起線で三角形に区画をしており、他の土器には見られない文様構成を持つ。また胴部にも下降する半隆起線の間にU字状の区画が見られる。胎土は大別して２種類に分けられ、赤褐色または黒褐色を呈するものが56・57・60・67・72・74・76、白みがかった褐色を呈するものが59・61・62・64・66・70・71・77・78などで、いずれも砂の混入が多く雲母が混じる。62は65－A・B・Cなどと同一個体であるが、縦位の半隆起線がやや斜めに引かれる部分もあることを示している。78はロ縁部が内湾する器形で、半隆起線の引き出し部分に半截竹管を押し当てて半円形としており、刻印蓮華文の施文方法（南久和1976）に通ずる特徴を持つ。79は半隆起線による施文ではないが施文方法は78に類似するものである、ただし蓮華状の花弁の先端に棒状工具による刺突文が見られる事と平行沈線に近い点で力強さにかける。80も半隆起線の上端部に棒状工具による刺突文が施文されており79との類似性が認められる。

ａ２　半隆起線による「U」字状または逆「U」字状の区画を持つもの（第59・60図81～96）

厳密な意味での「U」字状文または逆「U」字状文とは、「U」字状に区画した中に半隆起線を１～５本程度引き並べたものと思われるが、更に横広の「U」字状区画を持つものがあり幅の狭いものからかなりの幅を持つものまでの変化があるが、この分類とした。

81から86は逆「U」字状で、87から96は「U」字状に区画されたものである。この文様も第４類ａと同様にロ縁部付近に施文されたものが多い。しかし、82のように頸部と思われる部分への施文も見られる。全てが縦位に半隆起線のを密に施文した後に、区画をしている。やはり復元できるものが少なく、全体像を知ることは出来ないが、第４類ａと同様の傾向を持つものと推察され文様の構成要素も共通するものが多い。ただし78のような、縦走する半隆起線の上部へ半截竹管を押しつけ半円形に成形したものは見られず、半隆起線の上端の形状へのこだわりよりは、集合する半隆起線の構成に施文の力点が置かれている印象を受ける。96は頸部に横位無文帯を持つ土器と思われるが、U字状文直下の横走する半隆起線の中に隆帯で継手文（姥ヶ沢）を伴いながら弧状の曲線をモチーフにして区画し、隆帯の間を無文とする。縦横方向に沿った施文方法を遵守する傾向が顕著なこの土器群の中にあって曲線を用い、水平垂直方向の施文でない文様を持つ点は特徴的で新崎式の変遷を参考にした場合新しい要素と考えられる。91はロ縁部の文様帯に円形の突起を持つもので姥ヶ沢遺跡出土土器に類例を見ることが出来る。81・85はやや白みがかった褐色の胎土で、砂と雲母の混入が観察される。それ以外の土器は赤褐色の胎土でやはり砂と雲母の混入が観察される。

ａ３　蓮華状文を施文したもの（第60図97～104）

97は口縁部がゆるく外反し、胴部は少し膨らむ筒型を呈する。口縁部から横位無文帯に至るまでの間に、横走する半隆起線を間に挟みながら蓮華状文が二段施文される。蓮華状文は、花弁の上部を半截竹管を押し当てて半円状に形作り、印刻蓮華文の手法を取る。更にその下に平行沈線を縦に引き並べる。横位無文帯及び胴部を縦に区画する無文帯の周辺部に刻み目文を持つ。胴部には正格子目文を地文として持つ。その中を半隆起線によって縦に区画し、曲線の半隆起線によって更に区画を施す。その半隆起線と半隆起線とが接する間隙の狭い部分は、間を削り取る。器形と文様の構成要素を見る場合、多くの点で北陸地方の新崎式土器様式との共通点を見いだしうる土器である。しかし、文様の構成上、北陸地域では、横位無文帯より上に二段も蓮華状文を巡らせるような施文は見られない（神保孝造氏の御教示）。また胎土

も赤褐色で砂と雲母を含み、北陸の土器とは異なり本調査区出土土器に共通するものである。これらの点から、新崎式土器様式の影響をかなり強く受けた地元の土器と考える。横位無文帯より上部に蓮華状文を二段に施文した土器は、望月町後沖遺跡に見られる。(「後沖遺跡」福島邦男　第19号住居出土土器 1983) また胴部の半隆起線で施文されたB字状文が一方が直線、もう一方が曲線（B字状）をなすものが一般的であるのに対して、この土器は両側に曲線部を有する点で、在地化の傾向が読みとれると金子拓男氏の御教示も得た。

98は、器形は97と同様に新崎式土器に類似したものである。しかし、新崎式土器には見られない要素もある。まず、胎土は97と同じ赤褐色で砂と雲母を多く含む。文様構成要素では、口縁部に小波状の突起が連続して付けられることが大きな特徴といえる。また蓮華状文を口縁直下に持つが、その下に横走する半隆起線6本を挟んで蓮華状文に類似する文様帯を持つ。これは花弁の中程の沈線が全て斜沈線によって施文される独特のものである。横位無文帯の存在を確認できないが、縦の無文帯と思われる部分が隆帯右側に予想される。胴部は地文に縄文を施文し、半隆起線によって主に曲線によって区画される。区画の構成要素は97に類似性を持つが沈線際部分を削らず地文が全て残るところは在地的な特徴と思われる。

99は口縁部に半隆起線を5本横走させそのうちの2本は爪形文が施文されている。その下に半隆起線を縦位に密に施文し、その2本ないし3本を単位に上部を弧状に削り取り花弁上部の丸みを作り出している。さらに3本の半隆起線を挟んで、細い半截竹管による平行沈線を縦位に施文し、5ないし6本の沈線を単位にやはり上部を花弁の上部のように削り取っている。この削り方は三角形に半隆起線の上部を掻きこむように削る方法ではなく、弧状に沈線を引いて周りを削って花弁の形を作り出している。白みがかった褐色で砂と雲母の混入が多い胎土である。器形は口縁部がキャリパー形の新崎式土器に類似するものと思われる。

101・102・103・104は同一個体と思われる。口唇部直下に半截竹管を押し当て半円形に蓮華の花弁上部の丸みを作り出し、印刻蓮華文の施文方法と共通する。花弁の下端部分には長めの刻み目文のみが印され、中間部分に平行沈線を雑に引き並べ崩れた蓮華状文を構成している。胴部との境目には3本の半隆起線を横走させ胴部は無文で沈線際に刻み目文を印す。文様に崩れた要素が見られ「充墳文」(南久和1976) 的な要素を思わせるものである。

a 4　横走する半隆起線を持つもの（第60～63図105～146）

口縁部付近に横位に半隆起線を施文する。半截竹管で施文する方法は共通するが、縦位の半隆起線による施文がなされない。口縁付近から推察される器形は、口縁部がほぼ直立するバケツ形に近いものと、口縁部で外反して開くものとが多いと思われる。それらは、口縁突起を持つものは少ないのではないかと思われる。一方多くの波状口縁土器などが含まれる。

文様構成要素としては横走する半隆起線を中心に、半隆起線のみで施文するもの、沈線際に刺突するもの、交互刺突文を持つもの、爪形文を持つもの、継手文を持つものなどが見られる。箆状工具による交互刺突と沈線際の刻み目文が組になった文様は、深沢遺跡出土土器の2類・3類にも見られるものであり107・114に施文された交互刺突文とは工具も施文意図も異なるように思われる。

106・115・116は継手文を、口縁突起または口縁部直下の文様帯に持つ。いずれも沈線際の刻み目文と共伴しており、105・106・108に施文された文様要素と共通する。106の継手文は施文方向が斜め方向へと変化をしており96との共通要素を見ることができる。また111は赤褐色で砂の多い胎土のために器面が荒く細部が見にくいが、沈線際を刻み目状に刺突する半隆起線と刺突のない半隆起線が交互に横走している。117・119は半隆起線上に爪形文が施文されたものである。いずれもやや黄色味がかった褐色の胎土で他の土器が赤褐色を呈しているのに対して相違が見られる。

124は口縁部で外反するバケツ形の土器で胎土は赤褐色で砂と雲母を含む。口縁部には小波状の突起がつき口唇部には爪形文が施文され、頸部に爪形文を施文された半隆起線が横位無文帯を挟んで２条巡る。横位無文帯と思われる部分は二条巡る。上部に一部、縄文で施文された箇所が見られる。胴部は下降する半隆起線によって大きく４単位に区分（区画）される。その中を更に平行沈線によって細かく縦区画する。その区画も直線的な区画部分と上部に曲線を用いている部分が見られ特徴的である。小さな区画内は、綾杉状の平行沈線によって充填される。しかし、一部の区画はＢ字状文によって充填される。頸部の横位無文帯に張り付けられた突起は、縄の結び目を模したようなモチーフである。胴部施文の文様が綾杉文であり、深沢遺跡出土土器の１類に類似性をもつ土器とも思われたが、器形・文様構成要素など相違点が多い。またＢ字状文、爪形文、横位無文帯など北陸地方の文様要素が目立つ点、縦横の文様構成の中に曲線の区画部分が混じり新しい要素が見られる点も、深沢遺跡出土土器の１類には共通しない要素と思われる。

125も色調は黒褐色を呈し砂を多く含む胎土である。波状口縁を持ち口縁部には半隆起線を横走させている。胴部には、継手文やＢ字状文を持ち、交互刺突文と沈線際の刻み目文を持つ。また頸部に横位無文帯を持ち他の器形の土器との共通要素が多い。

128－Ａ・Ｂの波頂部には沈線際に篦状工具による鋭い刻目文を持つ。また133も沈線際から隆帯上にかけて同じ様な方法での刻目文が施文されている。一方130・132には沈線際の刺突が見られるが、これらの使用された工具は、半截竹管と思われる。126の刺突に用いられた工具はやや丸みを帯びたもので、篦状工具によって隆帯上を刺突する点で他の個体とは違った施文を施している。

135は口縁部の表と裏と波頂部の継手文を２本一組の隆帯で施文している。

137－Ａ・Ｂは同一個体と思われる。波状口縁を持ち、口縁部に半截竹管による半隆起線６本横走させる。その２本の沈線沿いに半截竹管の背の部分を交互に押し当てて、交互刺突文を連続的に施文している。また波頂部に隆帯による渦巻き文が見られる。特徴的な文様構成要素を持つ個体であるが、赤褐色で雲母を含む胎土でほかの土器と共通する。139は交互刺突が連続して施文されている点で137－Ａ・Ｂに類似性を感じる破片である。

140も口縁部に半隆起線で隅丸の長方形の区画文を施文し、半隆起線に沿って半截竹管で間隔の広い刺突文が見られる。142は口唇部に棒状の工具を押しつけて小さな山形文を連続して作り、その山の部分に半截竹管によって深い刺突をしている。施文工具施文方法とも他の土器と共通するがその構成方法は特異である。143と144は胎土、施文方法ともに類似性も極めて高く同一個体と思われる。赤褐色の胎土で砂と雲母の混入が見られる。半円形に近い区画文を持ち、その周りの隆帯上に楔形の刻み目文を施文し区画内の施文は彫りが深く立体的で新しい要素を多く備えているものと思われる。145は褐色で砂と雲母の混入が見られる土器である。頸部で外反し外に開く口縁を持ち、ほぼ筒状の胴部を持つものと思われる。口縁部に楕円区画文を持ち、内部を２重半隆起線によってさらに楕円を描き中央部に半截竹管による刺突文を横位に並べている。胴部にも地文として縄文を持ち縦位の半隆起線を引き下ろしている。

146はやや白みを帯びた褐色で砂を含むがざらつきは少ない。頸部で外反し外に開く口縁を持ち、ほぼ筒状の胴部を持つものと思われる。地文にＲＬの縄文が施文されており、横位の半隆起線が口縁部に１条、頸部に３条が施文される。その半隆起線の下部に半截竹管によって間隔の広い刺突文が施文される。一部に非対称の三角形の突起が付く。刺突文の施文方法で140・141・145などとの類似が見られる。

ａ５　横位無文帯を構成するもの（第57～59図・61～63図54～56・58・75・123・129・147・148）

口縁部の文様は基本的に「横方向」に構成されたものであるが、胴部は基本的に「縦方向」の区画によって文様帯が分けられている。その口縁部と胴部との境目に、「横位無文帯」を持つものが多く見られる。

口縁部の分類の中にも横位無文帯が見られる土器片が多く、56・55などは、横位無文帯の部分に縄文が施文され横位縄文帯ともいえる。これらの部分には文様帯最上部の沈線際に半截竹管と思われる工具によって、連続的に刺突がなされているものが多い。また、59・75などは無文帯に縄文施文がなされないが同じ様な刺突を見る。一方、54・58は横位無文帯に刺突はない。また更に123は刺突のある横位無文帯を持つがその中に段差を持っている。これは58が縦に密に並べた半隆起線を口縁部から二段目の文様帯の中程まで施文して横位の半隆起線を引かずに、段差を持って横位無文帯につなげているのに類似性を持っている。この段差による施文の切り替えは深沢遺跡出土土器の2類にも見られる特徴である。

無文帯の周囲の刺突には、上下に刺突文を持つ148や波状口縁部につながる横位無文帯の上部に刺突したものなども見られる。また横位無文帯直下の施文方法は大きく二つの分類が可能で、147のように数条の半隆起線を施文するもの、129に代表されるもののように胴部の縄文との境目に半截竹管で連続して刺突文を施文するものがある。

b　下降する隆帯上部につく装飾部（第57・63図55・56・149～151・154～158）

胴部は縦に分割された文様帯で、その縦区画に半隆起線や隆帯が使用される。その下降する半隆起線や隆帯の最上部に、突起が見られるものがある。突起は横位無文帯内又は直下に付けられたり地文上に直接貼付される。149・150・151・155はY字状のモチーフのバリエーションと思われるものである。また152・153は瘤状の突起が見られる。156・157は深沢遺跡出土土器3類に見られる下降する2本の平行隆帯の最上部につく突起との類似性が見られる。また154・158は継手文が見られ55・56などとともにこの時期に縦区画の半隆起線や隆帯に付随する主要なモチーフとして使用されることが多かったのではないかと思われる。

c　胴部

c1　地文が無文又は縄文施文されるもの（第63～66図161～219）

(1)　下降する隆帯又は半隆起線による縦区画を持つもの

一本の隆帯が半隆起線などを伴わずに下降する161、二本隆帯が下降する257が見られる（但し、257の上部に横走する隆帯が見られるため竹管文と共伴するかは明確ではない）。また半隆起線によって縦に区画をしたと思われるものに163・164・167などがある。なかでも167は縦の半隆起線に沿って丸い刺突文が並び特徴的である。そして隆帯と半隆起線が組になって縦区画をするものはかなり多く、160・165・168のように隆帯に沿って半隆起線を引くものもあるが、半隆起線が区画を作るものの方が一般的である。それは169から174のように直線的半隆起のモチーフによるもの、181から183のように曲線部を持つ半隆起線のモチーフによるものとがある。

175は比較的小さな土器の胴部である。全体に摩耗が激しく地文などは確認できない。文様は半隆起線を五本組み合わせた縦の直線による区画と思われる部分と四重の半隆起線による楕円が見られる。楕円には交互刺突文と沈線際の刺突が見られ刺突は丸い。胴部に楕円を持つものはこの土器のみではないかと思われる。185は黒褐色の砂と雲母の混入の多い荒い器面を持つ土器である。地文には縦に条の残る縄文を施文し、縦方向に大きな波状沈線を平行沈線で2本組にして施文している。施文の方法は他の土器との共通性が高いが、文様要素はやや異なる。胴部の文様は中野市姥ヶ沢遺跡（壇原長則1983）において「鎖状」または「鎖文」として分類されたものに類似する。

(2)　継手文（連結部）のモチーフを持つもの（第65図186～191）

継手文（連結部）のモチーフを隆帯または半隆起線によって施文し、区画内を更に区画または装飾するものを分類した。184は胴部の装飾が少ないもので、貼り付けられた隆帯によってモチーフが施文されている。186は平行沈線に近い半隆起線のみで施文され装飾的要素も少ないが、188から191は隆帯で継手文

を施文し半隆起線で周囲を装飾するもの、B字状文に近い装飾部分を持つもの（188・191）が見られる。また189は平行する二本の隆帯に挟して施文されている。

(3)　B字状文を伴うモチーフによる（第65・66図194～201）

194から198は「B」字のモチーフの施文が、半隆起線の間を充填する様にはなされず北陸地方の土器の文様とは異なる在地性の強いものと思われる。一方200・201は半隆起線による区画の中を充填する文様構成要素としての性格が強い施文であり、「B」の曲線部分が縦走する半隆起線に接している点が北陸地方と共通であると考える。また200の持つ「B」字状文もこれに近い施文方法と思われる。202は底部から胴部にかけての破片であるが、底部が張り出し胴部から頸部にかけてやや外反しながら立ち上がる特異な器形を持っているものと思われる。文様構成要素としては、「B」字状文、継手文、周囲に楔形刻み目文を持つ縦位の無文帯などが見られる。中でも継手文を持つ下降する２本一組の隆帯は、垂直方向には下がらず斜めに下がり、縦位の無文帯はそれにつれて斜め方向に施文されている。新崎式土器の新しい時期のものとの類似性が強いと思われる。

(4)　区画の周辺に刺突文を持つもの（第66図202～209）

203や183は胴上部の沈線際に連続する刺突文を横方向に施文したものが見られるが、これはこの調査区出土土器の中では一般的に見受けられる。また178・181はこの刺突文が半隆起線に沿って（沈線際に）縦方向に施文されているもので、あまり多くは見られない。204は縦横の半隆起線に沿って（沈線際に）刺突文が見られるものである。このような刺突文は205から208・214のように半裁竹管の断面を押しつけて爪形（C字状）に施文したもの、209から213・215から219のように楔形刻目文を印すものまでが見られる。207・208は沈線上を半裁竹管で刺突しているが、これも同様の考え方による施文の一つの形と考えたい。

半裁竹管を180°ずつ回転させながら施文したコンパス文が183・199に見られこの時期の施文に利用されている様子がうかがわれる。179・180などは、コンパス文が垂下しており半隆起線による縦区画や結節縄文を縦に施文するのと同じ効果を持つものと思われた。177と182は渦巻き状の文様が見られるもので、176は隆帯の曲線構成による文様であるが同じく縦位の区画を構成するものと思われる。

ｃ２　縄文以外の施文の胴部（沈線による綾杉、斜格子など）（第66・67図220～234）

ここに分類した胴部の文様は、量的に多くない。220・221は半隆起線の区画内の地文として正格子目文を持つもので、褐色で混入する砂は少なく、雲母の混入が見られない胎土である。222は同じく地文に斜め格子目文を持つ土器で半隆起線の施文が立体的でくっきりとした施文方法が他の土器と違った印象を与える。胎土は砂の混入が少ない。224も施文が立体的である。地文として半隆起線による斜沈線を持つ。胎土は砂の混入が少ない。

227は地文部分に綾杉楔形刻目文（真脇遺跡1986）に類似した文様が見られる。横方向のものと縦方向のものとが見られるが縦方向のものが綾杉楔形刻み目文により近いと思われる。施文方法は丁寧で横方向に何段も重ねる部分でも大きな乱れが見られない。また区画の中に正格子目文が施文された部分も見られ221などと大きな時期差を持たないものと思われる。区画の半隆起線の間を削り取り半隆起線による施文を際だたせている点、また縦位の無文帯は周囲に楔形刻み目文を持ち、隆帯が斜めに下がる部分も見られ新崎式土器の最も新しい時期の文様要素に類似するものが多い。胎土への砂の混入は多い方であり、雲母の混入も多い点では在地の土器に近い特色を持っている。225は地文に刺突文を持つ土器で、胎土は白みがかった褐色で、砂と雲母ともに混入が目立つ。施文は半隆起線による区画がなされ、モチーフは「B」字状文を模倣したものと思われる。施文は雑であるが、半隆起線の間を削り取るなどの特徴を持っている。226は縦位の平行沈線を密に施文して地文としている。半隆起線は施文が浅く左下の曲線部は平行沈

線に近いが、それによって囲まれた部分の内側を削り取る施文方法が採られている。223は平行沈線による格子目文と横方向の平行沈線を地文としているが、短い平行沈線を角度も決めずに手早く引いたようで雑な印象が強い。また縦横に施文された区画の平行沈線も浅く雑に施文されている。大きい交互刺突文と沈線際の刻み目文が見られる所から、第Ⅲ群第3類と同時期とは思わない要素が多い。228から234には、綾杉文を施文したものである。228は半隆起線と大きな交互刺突文と共伴しているもので、単沈線による綾杉文が施文されている。229も228に類似した横方向の綾杉文を持つが2段以上の施文がなされていたようで、この破片には浅い沈線が2本伴っている。230は繊細な沈線によって施文された綾杉文を持ち半隆起線の文様と共伴する。233は平行沈線に近い半隆起線と交互刺突、沈線際刺突と共伴しており、単沈線による綾杉文を持つ。234は平行沈線によって施文された綾杉文を持つもので124の施文方法に近い。

ｃ３　細かな区画が施される胴部（第67図235）

235は縄文を地文とした胴部に半截竹管による半隆起線によって隅丸方形の区画を施文している。区画中央に2本の半隆起線を縦に施文しているものが多いが、一破片のみ渦巻きが施文されているものがある。また区画の間に縦位に半隆起線を三本引き中央のものに交互刺突文を施文している。胴部の縦区画の中を更に細かくパネル状の方形に区画をしている例はこの一点のみである。

第3類　縄文を施文したもの（第67・68図236～262）

237・244・249も折り返しの口縁を持つ縄文が施された土器であるが、器形は248とは異なるものと思われる。238・240・243は付加縄文（縄巻縄文）で施文されたもの、236は口縁部まで縦位の結節縄文が施文されている。236・239・245は口縁部の折り返しを持たず、口唇部を平らに成形している。246は口縁部で外反し丸みを帯びた突起がつく、241・242も突起部分で、242には隆帯の貼り付けが見られるが、胎土や形状、縄文施文の状況より考えて同一個体と思われる。縄文のみで施文された土器の場合、平口縁のものが一般的で口縁部に突起を持つものや、波状口縁を持つものはこの2個体のみであった。

248は底部から口縁部にかけてゆるく外反しながら開く平口縁を持つ土器である。胎土は黄褐色から赤褐色に近く、白色の粒子、砂、雲母の混入が見られる。口縁部は外に折り返してやや肥厚させる以外には特に装飾を施さない。胴部はＲＬの縄文を全面に施文するが縄文原体を転がす方向は一定してはいない。その上に2本を一組にした結節縄文が全周で6組垂下している。

250はやや丸みを帯びた胴部で頸部を絞りやや内湾する口縁部を持つ。胎土には砂と雲母の混入が見られるが器面のあれは少ない。全面がＬＲの縄文によって施文されているが、荒く施文され条の方向は一定ではない。特に胴部においては、縦方向に条が見られており、北陸地方の中期の縄文施文土器に類似性を持っているように思われる。

252・255・258から262は縄文が施文された胴部で口縁部の施文がわからないもので一括してこの部分に分類したが、結節縄文が下降している共通点を持つ。253・254・255・257・258は隆帯が下降して胴部を縦に区画しているものであるが、上部の施文の方法が明確に観察できないためここに分類をした。

第4類　指頭圧痕文を施文したもの（第69・70図263～286）

竹管文を持つ土器と大きく文様構成要素の異なる土器である。口縁部から胴上半部にかけて横長楕円の区画文が見られるものが多く、胴部には指頭圧痕文が見られる。阿玉台式土器の在地化したものと捉えられてきた土器であるが、多くの点で斜行沈線文式土器（後沖式土器）（寺内隆夫1996）の影響の強い土器と思われる一群である。

263は楕円区画文を持つ土器で、この調査区出土土器で最大の土器である。口縁部には動物（かえる）

と思われる、具象性の高い突起が付き、大きな円文状の渦巻き文と組み合わされている。口縁部から胴部中程までは、横長の楕円区画文が積み重ねられるように施文されている。口縁部の区画内には斜沈線で充塡されたもの、波沈線を引き周辺に刻み目文を施文したもの、縦沈線を施したものが見られる。これらの横長の楕円区画文の間に、円文を貼付する。胴部の楕円区画文には波沈線が施文されている。さらに胴部には地文に指頭圧痕文が施文されていることが観察できる。この土器は口縁部から胴部にかけて隆帯によって、横長の楕円区画文を積み重ねる様に施文し、無文帯を持たない点も特色といえる。この土器は褐色の砂を多く含んだ胎土でざらざらした器面を持つが、大きな土器の割に器壁は薄い。また、雲母の混入は見られない。264は底部から緩く外反しながら立ち上がり、口縁部が内側に折り返された特徴的な形態を持つと思われる。口縁部上段に沈線と波状沈線を横に施文し、その下に楕円区画文を持つ。楕円区画内は周囲に沈線が、中央に波状沈線が施文され上段の施文とほぼ同じ施文がなされる。渦巻き状の突起が付き、それを起点に、胴部にアルファベットの「R」字状の懸垂文が施文される。渦巻き状の別の突起（264－B）がついていたものと思われる。胴部は指頭圧痕文が施文される。胎土は赤褐色に近く砂の混入は見られるが雲母は混入しない。また266は264の突起部分に類似したものと思われる。268・277も楕円区画文内を斜沈線で充塡してるものであるが、277は半截竹管で平行沈線を引き並べている点が、竹管文を持つ土器に共通する要素である。この２点については雲母の混入が見られる。また271－A・271－B・273・272は胴部に施文された隆帯の文様であるが、楕円区画文の部分ではないかと思われる。274・275・276は口縁部まで指頭圧痕文が施文される。278は胴部破片と思われるが半截竹管の半隆起線が施文され277同様竹管文を持つ土器との中間形態を示すと思われる。279・280は隆帯上に圧痕文を施したものである。

285は口縁部に楕円区画文を巡らし、区画内を押し引きによる斜行沈線で充塡し斜行沈線文土器の範疇からは逸脱する要素を持つ。胴部には指頭圧痕文が施文される。胎土は赤褐色で緻密な器面を持つが雲母の混入は多い。

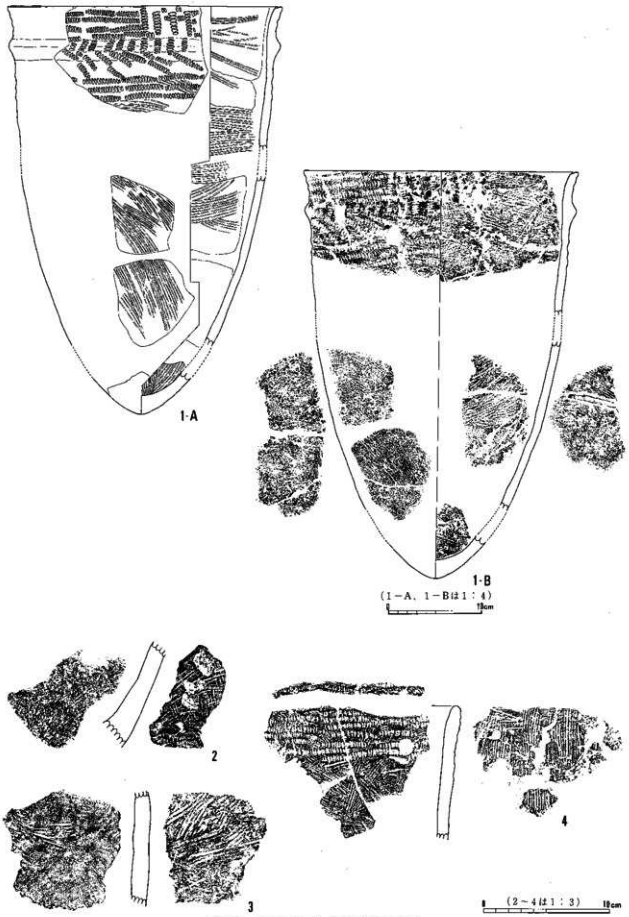
第５類　その他

Ａ種　地文を持たず隆帯のみで施文されたもの（第70図287）

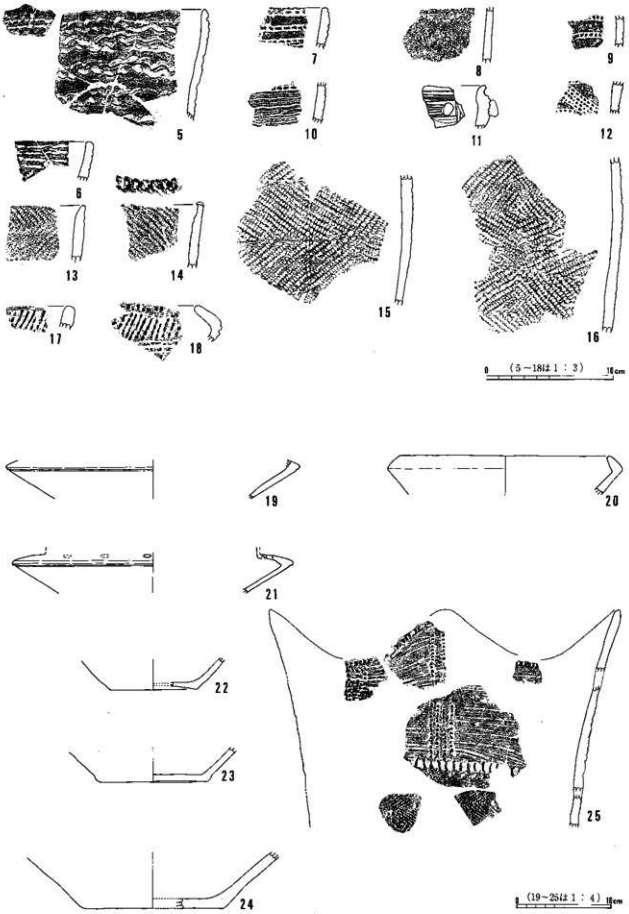
287は有孔鍔付土器である。砂と雲母の混入が見られるが、他の土器とは異なって緻密でなめらかな器面を持っており焼成の状態も良い。内面には丁寧な磨きの跡が認められるが、表面も内面に劣らず丁寧な調整が見られる。口縁から3.5cm下に並ぶ穴は、内面に下がりながら穿孔されている。胴部には大きな隆帯によって立体的な曲線が描かれている。多くの点で他の土器と異なる。

Ｂ種　粘土紐の貼り付けなどによる立体的な文様（第71・72図288～321）

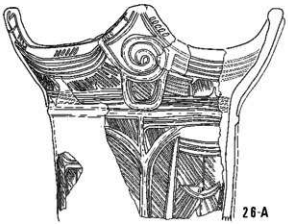
口縁部または口縁部付近に付けられていたと思われる突起である。山形文、渦巻き文、継手文を立体化した様なモチーフのものは、飯山市深沢遺跡や中野市銚ヶ沢遺跡出土土器に類似性が極めて高いものが多い。特に300は深沢遺跡２類（長野県史12番）が持つ突起に類似性が極めて高いものである。296・297などは新崎式土器に類似したもので298・299はそれに近似するものである。301・308・309などは曲線の隆帯を用いた複雑な構成を見せており、この時期のものとしては新しい要素ではないかと思われる。314・315は左巻きの釣り針状のモチーフを横位置に付けたもので、楕円区画文に付く貼付文との共通性を思わせる。306は胎土が黄色みを帯びた褐色であり砂や雲母の混入が多く、平らな器面に隆帯を張り付けている点など指頭圧痕を持つ土器に類似している。313は小さな楕円区画文を持つ区画内を平行沈線で充塡するとともに沈線際に刻み目文を持っているものである。318は中期中葉に中部高地に見られるモチーフに大変類似している。

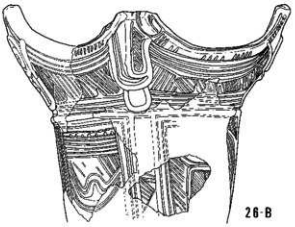


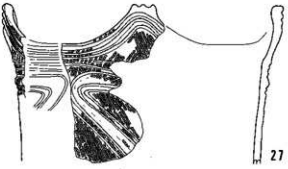
第54図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(1)



第55図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(2)

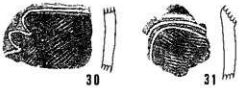


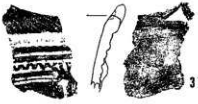




(26－A、26－B、27は1：4)

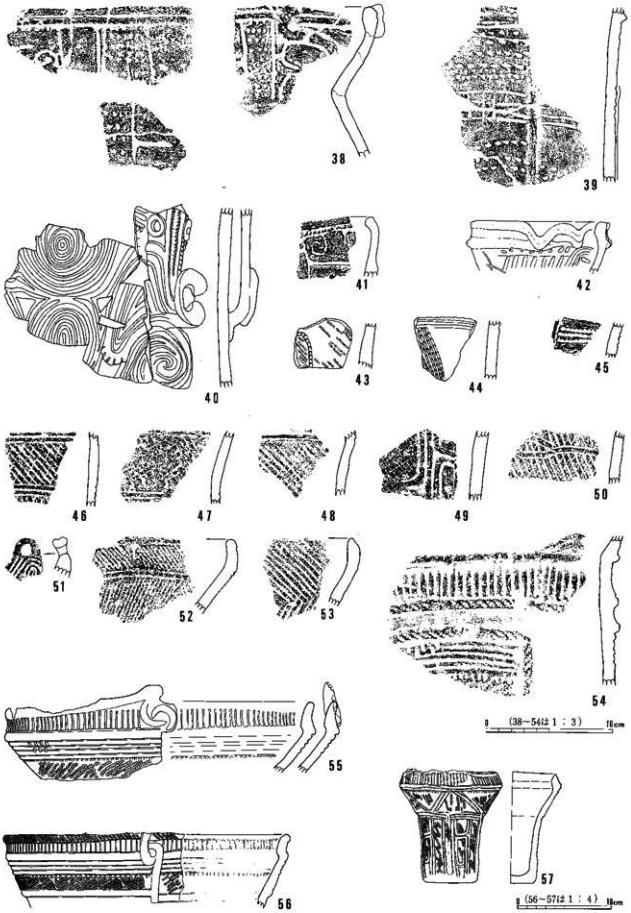
0　10cm



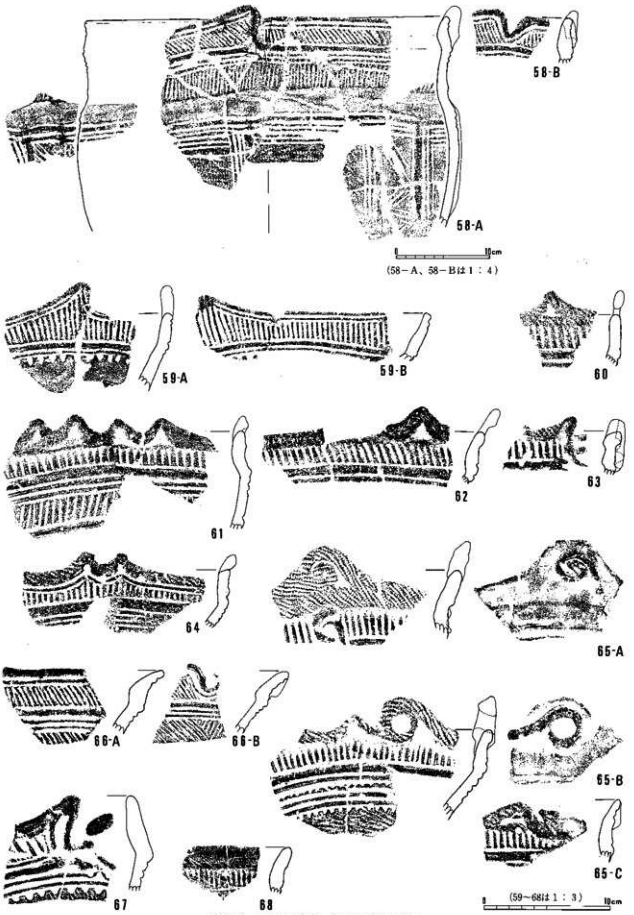


0　(28～37は1：3)　10cm

第56図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(3)

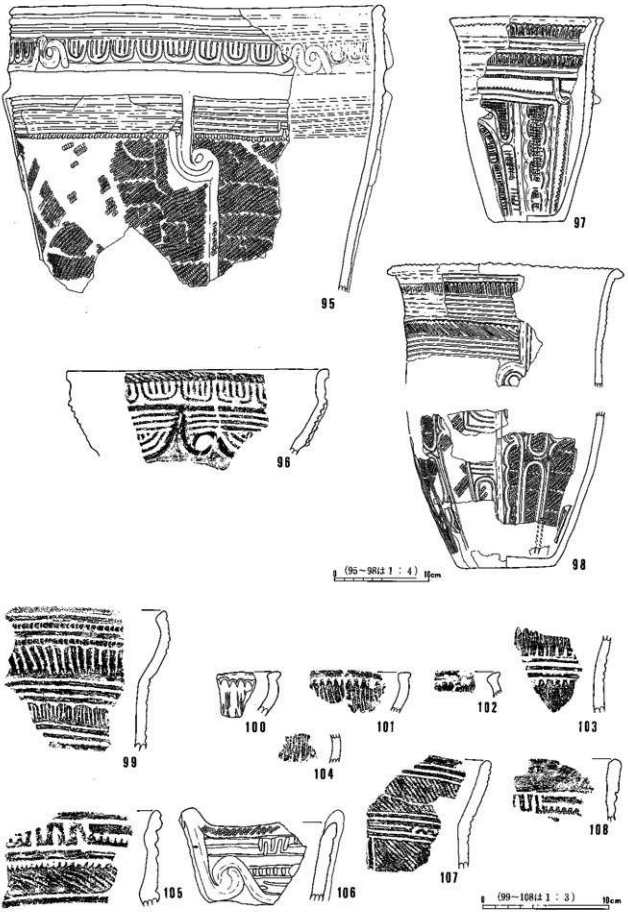


第57図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(4)

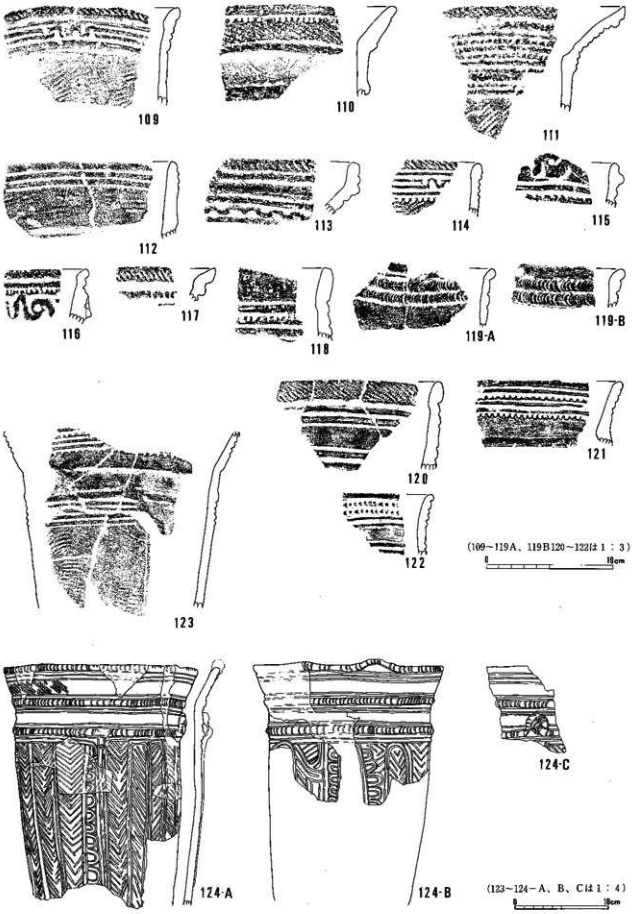


第58図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(5)

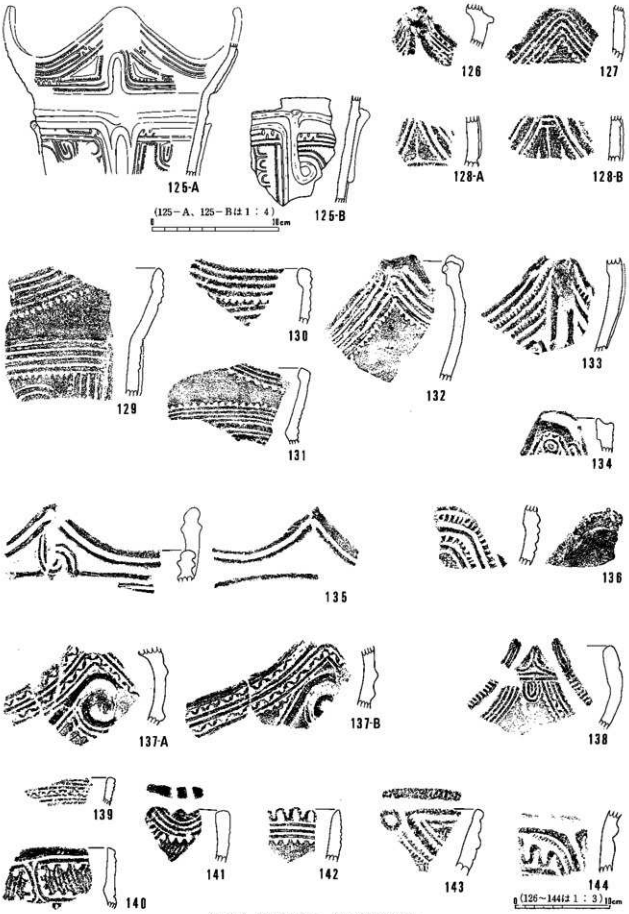
第59図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(6)



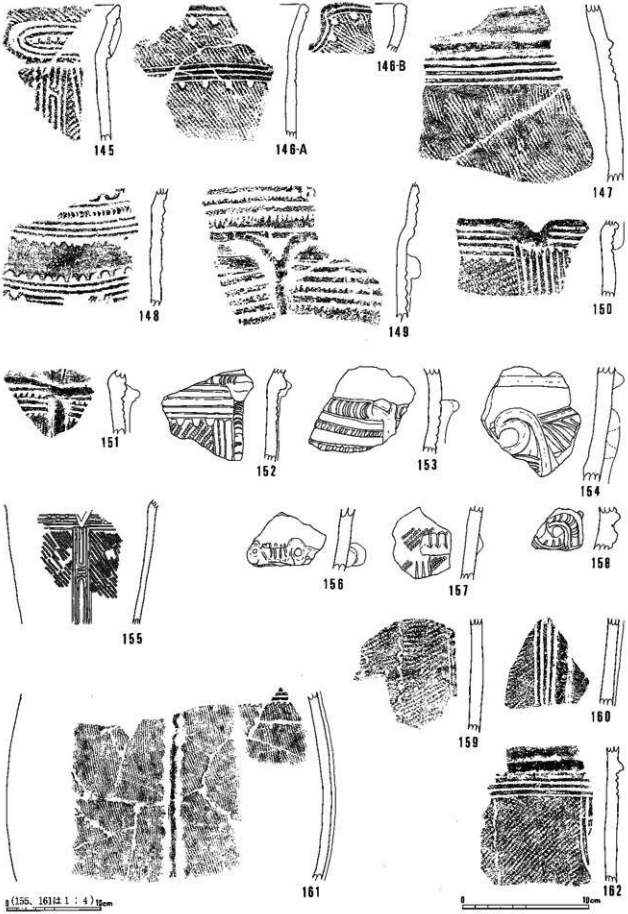
第60図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(7)



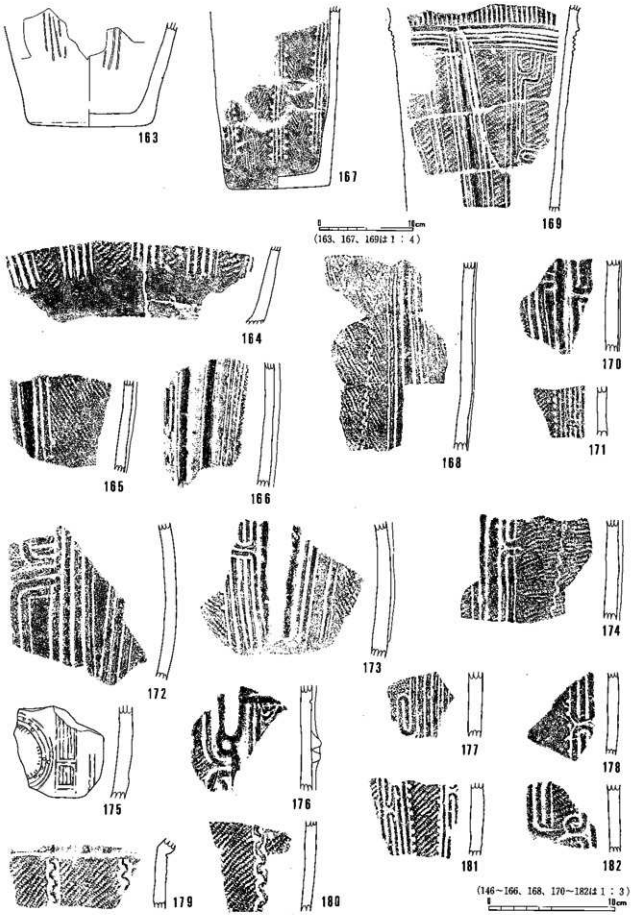
第61図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(8)



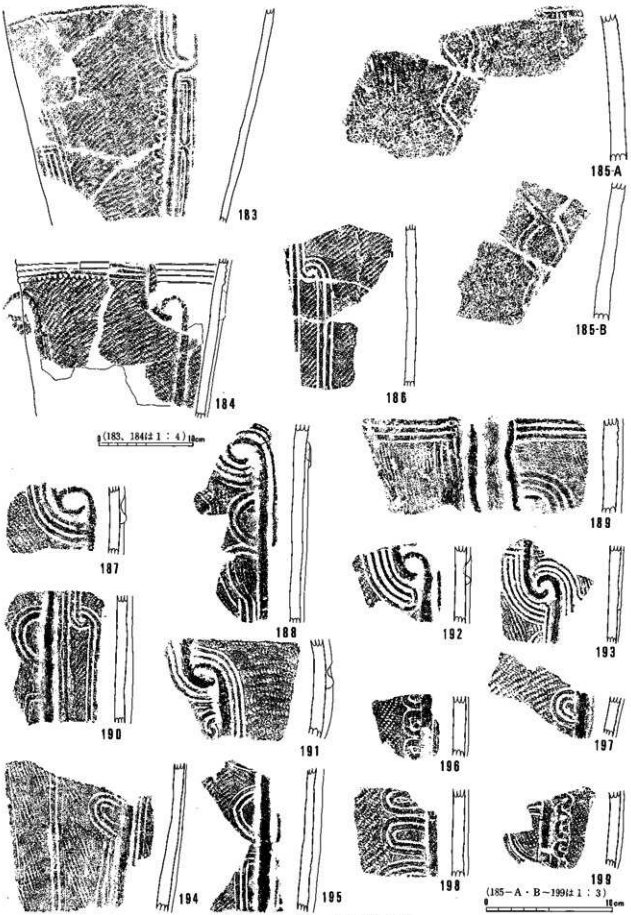
第62図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(9)



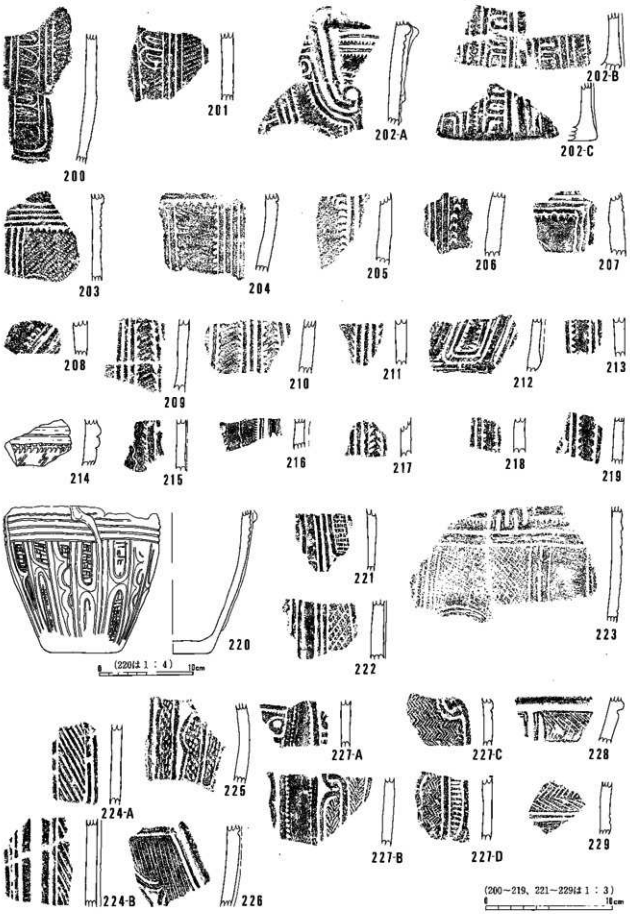
第63図　風呂屋遺跡　縄文時代:I:器(10)



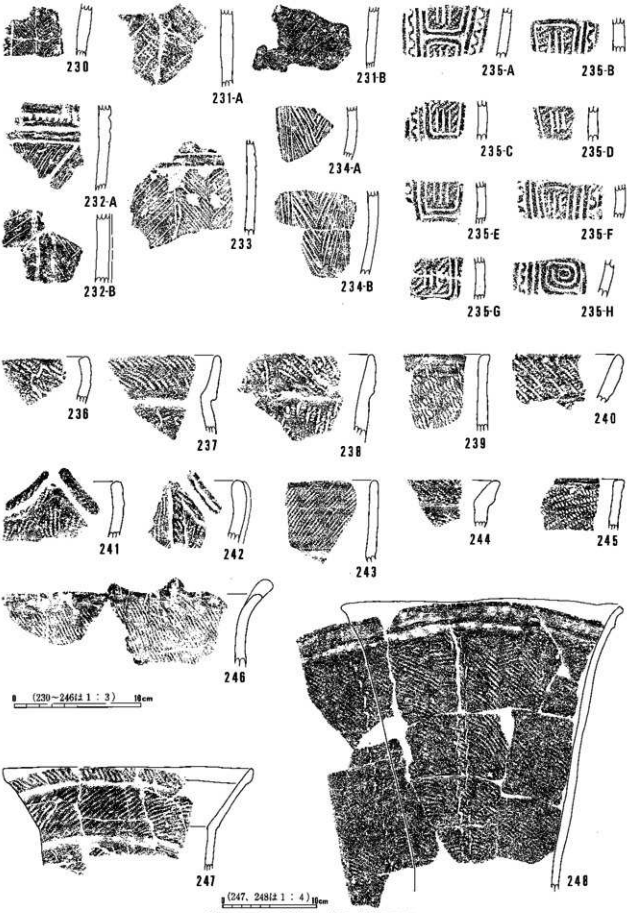
第64図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(1)



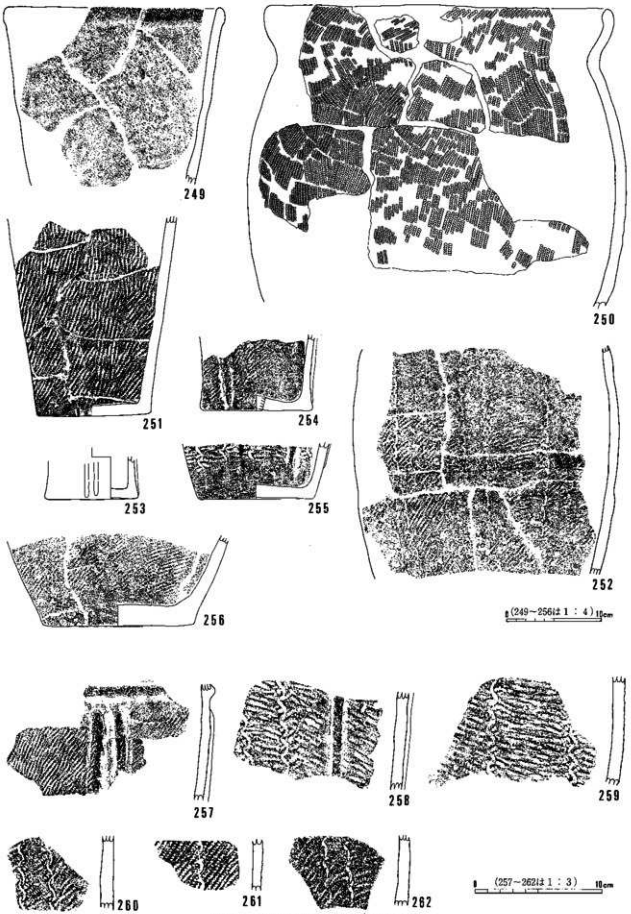
第65図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(2)



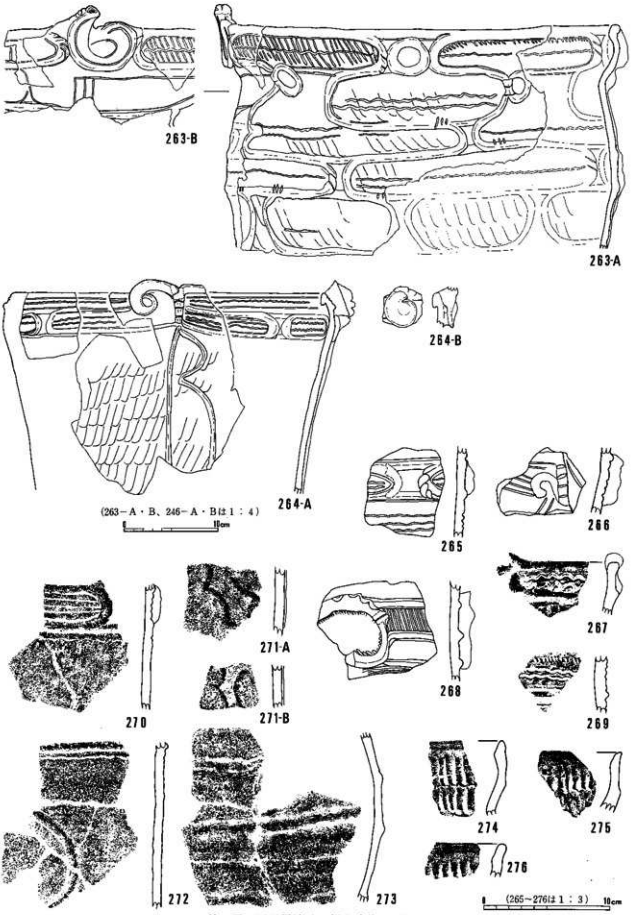
第66図　風呂屋遺跡　縄文時代土器03



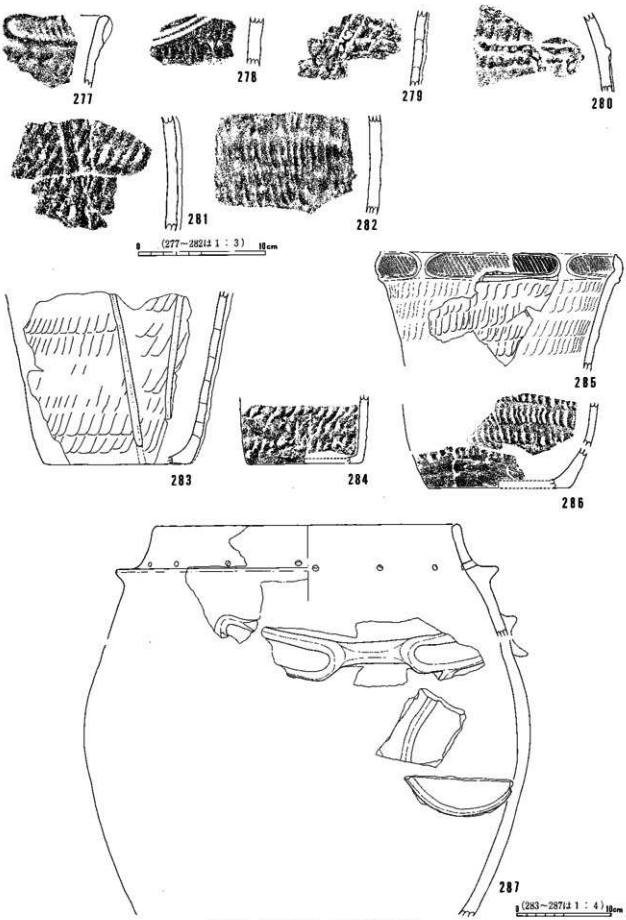
第67図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(4)



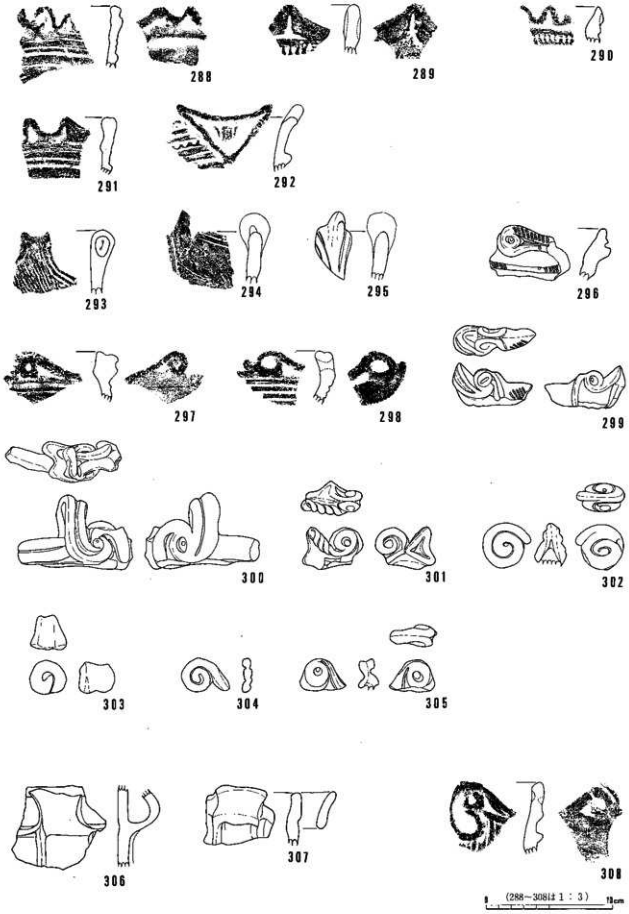
第68図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(15)



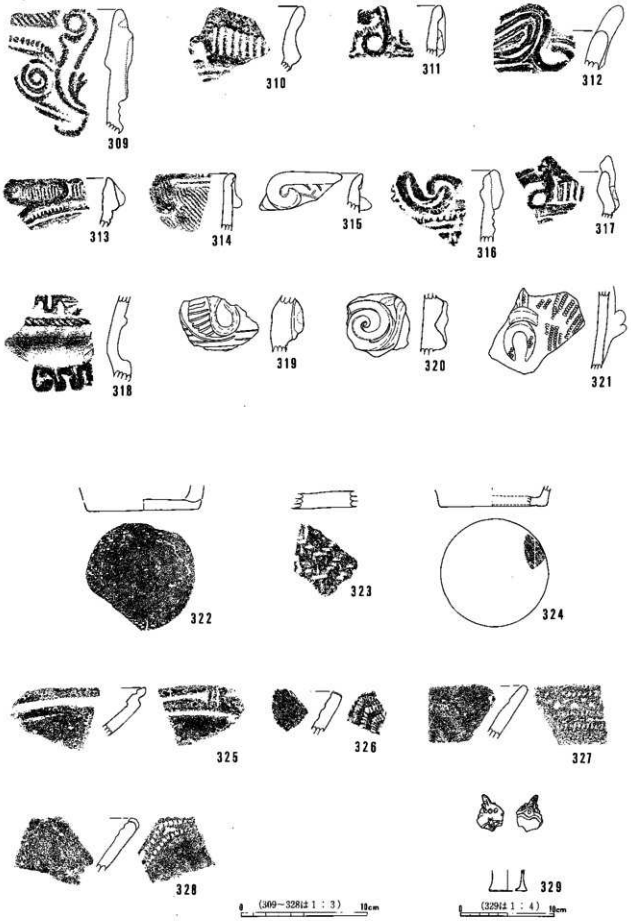
第69図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(4)



第70図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(7)



第71図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(8)



第72図　風呂屋遺跡　縄文時代土器(3)

Ｃ種　底部に圧痕を持つもの（第72図322～324）

322・323は底部に「あじろ」痕が観察できるものである。また324は木葉痕が観察できるものである。

Ｄ種　内面に施文されたもの（第72図325～328）

内面に施文された浅鉢の口縁部の破片である。326は押し引き文の間に三角形の陰刻文が、327は押し引き文の下に交互刺突文が施文されているものである。328は波状口縁を持つ浅鉢の波頂部の一部と思われるが、半截竹管の背側による押し引き文が横走している。胎土は赤褐色であるが328は砂の混入は見られるが緻密な器面を持っている。それ以外の破片は砂と雲母の混入が見られ、器面はざらざらして荒いもので他の土器の胎土に近い。これら浅鉢の施文方法又は文様は、小川村筏遺跡出土の浅鉢、望月町上吹上遺跡出土の浅鉢（第61図14～23）、和田村細尾中道遺跡ＳＢ０１・０２出土の浅鉢など本遺跡出土土器との関連性が高い遺跡出土の浅鉢の施文方法に類似する。また大石遺跡など中信の遺跡出土の浅鉢などにも類似性が高いと思われる。これらの浅鉢は九兵衛尾根Ⅰ式からⅡ式の時期にかけてのもの或いは縄文時代中期初頭のものとされる場合が多い。

第Ⅳ類　後期（第72図329）

329は口縁部と底部の破片であるが、同一の個体と思われる。黒褐色の小さな土器であるが器壁は薄く焼成の状態も良い。また砂の混入が見られるが器面はなめらかである。口縁部には円文を持つ突起が付きその下に貫通する円孔が見られる。また突起の下には上下につながる二つの円文を持つ隆帯が横に巡っている。底部はやや張り出している。文様より考えて堀之内式土器様式併行の時期に位置付くと思われる。

2　土製品

(1)土偶（第74・75・76図１～38）

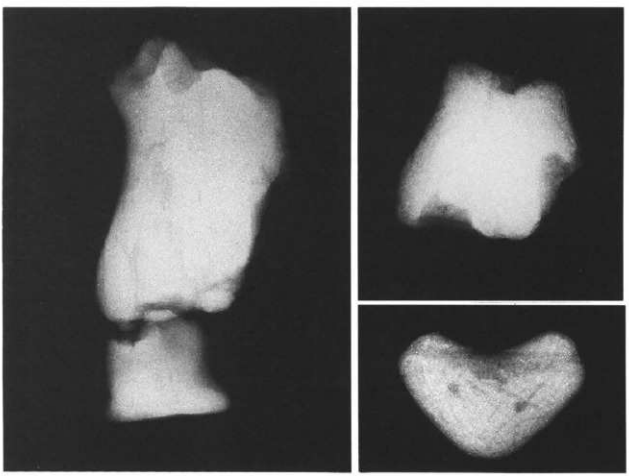
総数では30点出土し、接合したものが２点ある。出土した地域は土器が大量に出土したグリッドに重複している。接合関係は、１がＳＢ０１（Ｉ－４グリッド）出土の頭部と隣接のＤ－24グリッド出土の胴部と３がＤ－25出土の胴部と出土位置不明の足（脚）と接合している。土偶の胎土は少数の例外をのぞいて、出土土器同様の雲母と砂の混入が見られるものである。以下、頭部・腕部・胴部・脚部の各部位に応じて記述する。

頭部（胴部を含む）：３点ある。１は頭部と胴部が接合したもので、河童形の頭部を持ち後頭部がやや張り出す。頭頂部は平坦で貫通孔が３つある。顔面は平坦でハート形の輪郭を持ち、眉は隆帯で、目と口は刺突によって表現される。頸部は長く伸びやかなフォルムを持つ。左胸と上肢は板状で頸部につながる半截竹管の平行沈線とそれに沿っての刺突文が見られる。背面にも同様の施文が見られ、脇の下及び乳房下にも沈線が施文されている。４は河童形の頭部で後頭部がやや張り出し、頭頂部は平坦で貫通孔が３つある。眉は隆帯で表現され、眉の上に沈線が見られる。目と口は刺突によって表現されている。５も河童形の頭部で頭頂部に結髪表現と思われる環状の隆帯があるが貫通孔はない。顔の表現は他のものと同じである。

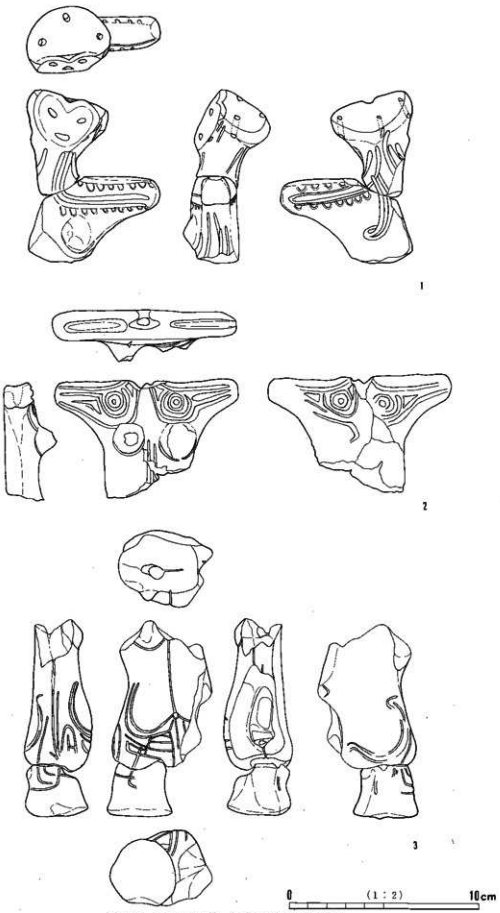
腕部（胴部を含む）：２は胸部と上肢である。首の付け根にはＶ字状の穴が穿たれソケット状に加工された首が接合されていたものと推察される。板状で表表の肩から腕にかけて沈線による同心円文様と沈線と三角印刻文の組み合わせによる文様が見られる。更に腕の上部に太い沈線が引かれている。乳房は粘土を貼り付けており左が剥落している。胴には正中線と思われる平行沈線がある。破損が見られるが、腹部にかけては丸みが見られ単純な板状の形態とは異なる。14は左胸と左上肢で、板状に近い形態を持つ。小型ながら沈線の文様が複雑に描かれる。背中に渦巻き文様を持つ。胸から腕の沈線は半截竹管によると思

われる平行沈線である。体側部に丸みが見られやや立体的な印象を受ける。13も胸と上肢で、板状に近い形態を持つ。小型でやや平面的である。沈線が正中線と腕に見られる。８は左乳房と上肢である。左乳房と腕がちょうど組になって破損した例で、製作の最初の段階からこの状態で作られたものと思われる。７は腕の先端と思われる。裏も表も半截竹管による平行沈線で施文される。６は右腕でやや上に反る傾向を見せる形状。無文で断面径はほぼ四角。

胴部：３は胴部と脚部が接合したものである。胴部は丸みを帯び立体的で写実的である。臀部の張り出しは見られない。文様は、腹部に正中線と半円形が、臀部にはハート形が沈線で施文される。胴下半部は複雑な構成の沈線が施文される。脚部の施文も沈線文である。脚部の接合はソケット状の差し込みで、腹部から胸部下半にかけての空洞に差し込まれる。また胴部上半にもやや右によって穴が見られ首を受ける穴なのかとも思われる。Ｘ線写真（第73図）でその様子が確認できる。脚部はほぼ円柱状で、中心部が突出しソケット構造を見せている。19は右腹部と下肢である。ひざを曲げてしゃがんだ状態を表現している。腹部が大きく膨らんでおり、臀部が張り出し立体的写実的な形態を持つ。出産（座産）に似た姿勢と思われる。18は右胴部の縦破片で平板な形態を持つものと思われる。胸より下には沈線模様が見られ、黒色で緻密な胎土は他の個体との相違点である。17は右胴部の縦破片である。かなり丸みを帯びた胴部で表現は写実性が高い。肩（肩胛骨付近）に１本の沈線が見られる。15は右腰部である。丸みを帯びた立体的形態を持ち臀部はやや張り出し写実的に造形してある。大腿部には沈線文の痕跡がある。16は腹部で形態は板状に近い。足はソケット状の接合をしたようで脚部の入る穴は、おそらく、指先で指の腹を内側に向

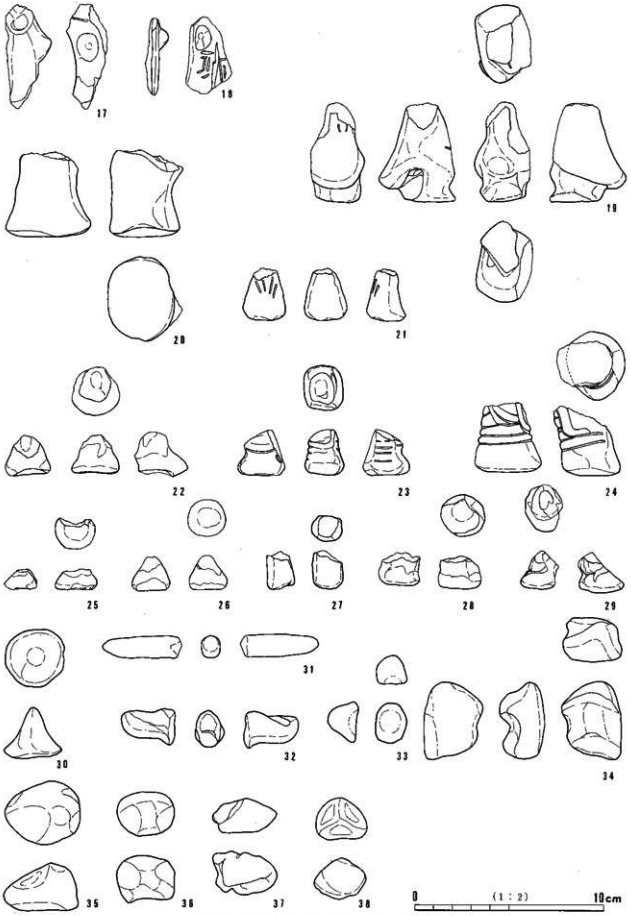


①土偶３Ｘ線写真（１：１）　②土偶11Ｘ線写真（１：１）
③土製品39Ｘ線写真（１：１）
第73図　風呂屋遺跡　土偶、土製品Ｘ線写真



第74図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(1)

第75図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(2)

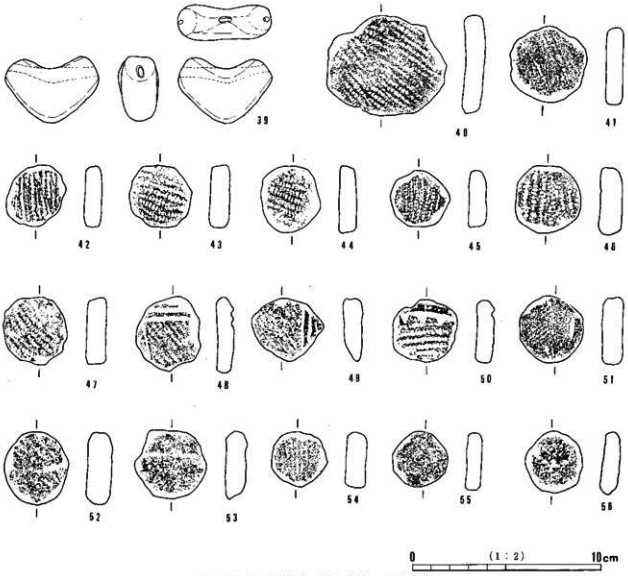


第76図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(3)

けてあけたようで、爪の跡が残っている。腹の隆起は低く部分的。胎土は18に類似している。10は胴部左半分の破片である。ソケット状の脚部を受ける穴が見られる。丸みを帯びた胴部で腹部がかなりせり出す。正中線と腹部に沈線文様。体側部にも沈線文が見られる。12は胴部破片。正中線と腹部に沈線文様。体側部にも沈線文が見られる。9は胴部の破片である。ソケット状の脚部を受ける穴が見られる。丸みを帯びた胴部で腹部がかなりせり出す。また胴部上半にもやや左によって穴が見られ首を受ける穴なのかとも思われる。正中線と腹部に左右対称の半円状の沈線文様。体側部にも沈線文が見られる。11は胴部破片。ソケット状の脚部を受ける穴が見られる。X線写真（第73図）でその様子が確認できる。正中線と腹部に左右対称の半円状の沈線文様が施文される。

脚部：23はソケット状の脚で中心部にソケットの芯が観察できる。側面に半截竹管による横走りの平行沈線文が施文される。24は左脚と思われる。円柱状で半截竹管による平行沈線文様がある。20は右脚で円柱状。無文。21は右脚、やや円錐状で後ろ側に4本の沈線が縦走する。29・28・22・25・26はソケット状の脚で中心部にソケットの芯が見える。28・25・26はやや白みを帯びた褐色の胎土で雲母・砂などの混入は少なく緻密で堅い焼成である。27は右脚でやや角張る形態を持つ。無文で、胎土は18に類似。

その他土偶の部分と思われるもの：30は脚部と思われた。ソケット状に作られた足の芯とも思われる



第77図　風呂屋遺跡　縄文時代の土製品(4)

が、全面が赤く酸化され土偶の一部として焼成されたとは言えない。しかし、焼成中に離脱した可能性もある。33は乳房と思われた。裏側は、凹みが見られる。胴体の部分に後から付けた物が剥離したと考えられるが、裏面も焼成時に酸化されており、完成後の剥離とは言い難い。34は部位不明の粘土塊であるがポーズ土偶の臀部のようにも見え、明確な形態は把握できなかった。31は棒状のもので腕かとも思われたが、やや細長く隆帯の一部とも思われる。37・35・36・38の粘土塊はやはり土偶の一部と思われるが、明確な形態を把握できなかった。

(2)土製円盤（第77図40～56）

17個を検出した。40のみがほかの土製円盤の2倍近い大きさであったが、他のものは、ほぼ同じ様な大きさで、規格性に近いものを感じる。特別に成形され焼成されたものではなく、土器片の縁辺を研磨して作られたものと思われる。詳細は第3表の一覧表に示す。

(3)その他の土製品（第77図39）

39はハート形に近い形状を持つ。上部に3個の穴があき左右両端部の穴はほぼ直線上に貫通している。中央部の穴はその貫通孔に上部からつながっている。糸又は紐を通して垂飾として用いられたのではないかと推察される。X線写真（第73図）でその様子が確認できる。

第3表　風呂屋遺跡　土製円盤一覧表

図版番号	出土地区	重量(g)	最大径(cm)	厚さ(cm)	備考
第77図－40	J－2	40.07	6.30	1.00	全周稿打による成形
〃　41	D－25	17.04	4.00	0.90	全周の4分の3程度に研磨痕。縄文。
〃　42	D－24	10.55	3.20	0.90	全周稿打による成形だけで、研磨痕はほとんど残さない。縄文。
〃　43	J－7	13.99	3.30	1.05	全周の4分の3程度に研磨痕。縄文。
〃　44	D－24	13.01	3.50	0.95	全周の4分の1程度に研磨痕。縄文。
〃　45	E－21	8.87	3.15	0.90	全周の4分の1程度に研磨痕。縄文。
〃　46	I－3	19.18	3.50	1.15	全周研磨痕あり。縄文。
〃　47	J－1	16.12	3.55	1.00	全周の2分の1程度に研磨痕。縄文。
〃　48	D－24	13.82	3.90	0.90	全周の4分の1程度に研磨痕。縄文と2本の半載竹管による半隆起線。
〃　49	I－3	11.83	3.85	0.90	全周稿打による成形だけで、研磨痕はほとんど残さない。縄文と2本の半隆起線。
〃　50	J－2	11.53	3.35	0.90	全周稿打による成形だけで、研磨痕はほとんど残さない。縄文と半隆起線。
〃　51	J－7	15.93	3.50	1.10	全周の4分の3程度に研磨痕は。縄文。
〃　52	D－24	20.51	3.90	1.30	全周研磨痕あり。縄文。
〃　53	J－2	15.29	3.90	1.10	全周稿打による成形だけで、研磨痕はほとんど残さない。縄文。
〃　54	J－7	13.21	3.00	1.05	全周研磨痕あり。縄文。
〃　55	J－1	9.24	3.00	0.80	全周研磨痕あり。縄文。やや角張って見える。
〃　56	D	8.62	3.30	0.95	全周稿打による成形だけで、研磨痕はほとんど残さない。縄文。

3　石器

本遺跡出土の土器の大多数は中期前葉から中葉に属する。出土した石器の大半も同時期のものと考えられる。しかしながら本遺跡では早期、前期、後期の土器もわずかながら出土しており、中期前葉以外の石器も含まれている。

(1)石鏃（第78図1～25）

29点出土。無茎石鏃28点、有茎1点で無茎のもののみ図示した。2・17は周辺加工のみで素材剥片の剥離面を大きく残しており、完成品(注3)とは考え難い。19は調整加工の過程で頭部が大きく剥離した未製品と思われる。形が整っており完成品と思われるもののうち、完形品は1・6・8・11・16であり、他は頭部又は脚部を欠損している。個別の欠損状況の詳細は遺物観察表を参照して頂きたい。安山岩4点（1・8・17・24）、頁岩1点（21）、硅質頁岩1点（22）、チャート3点（23・25）、黒曜石20点と黒曜石の割合が高い。

(2)石匙（第78図26～30）

5点出土。26は刃部端部を欠損、29はつまみ部を欠損している。26・28・29は安山岩、27は硅質頁岩、30は黒曜石である。30はつまみ部の調整加工が未発達で素材剥片の形状をそのまま残しており、周辺地域では早期後半から前期前半にみられる形体的特徴を有している。26～29は前期有尾式以降中期中葉まで多くみられる形態的特徴を示す。

(3)尖頭器（第79図31）

1点出土。素材剥片は横長で、周辺加工により打点は失われている。安山岩製。

(4)石錐（第79図32）

2点出土。黒曜石のもと安山岩のものがある。32は錐部端部は欠損し、錐部に磨耗痕は認められない。一面に平坦な自然面を残し、黒曜石製である。

(5)L字形石器（PL24）

1点出土。両面加工によりL字形に加工した石器である。短辺の端部が欠損している。黒曜石製。

(6)楔形石器

2点出土。全て黒曜石製である。

(7)スクレイパー（第79・82図33～37・74～82）

チャート・黒曜石など小型の剥片石器と同じ石材で小形から中形のものをa類（33・34・36）、安山岩・頁岩など打製石斧と同じ石材で中形から大形のものをb類（35・37・74～82）とした。b類は所謂横刃型石器と分類されるものを含む。a類は4点、b類は20点出土した。

(8)打製石斧（第80～82図42～73）

131点出土。大半が所謂短冊形・撥形の円刃（a1類）であるが、撥形で直刃の直刃斧に類似した石斧（a2類）が6点（50・70）、基部の幅に比べ刃部の極端に広い形態の石斧（b類）が3点出土した（60）。小形のものから大形のものまで見られ、完形品を計測すると長さ7.0cm～13.2cm、幅3.6cm～5.2cmである。完形品は27点、刃部を欠損したもの38点、基部を欠損したもの48点、刃部と基部を欠損したもの14点、その他4点で、完形率は約20%である。また、完形品と基部欠損の75点中の50点に磨耗痕が観察された。頁岩68点、安山岩63点である。なお、石材は肉眼観察によるが、表面は風化しており石材鑑定が困難なものが多く、誤認しているものも多いであろう。頁岩、安山岩の峻別は困難であるが、いずれも新鮮な割れ面は黒色を呈する石材である。また、節理面を残すものが多く見られる。原石は角礫状のものと、川原石などの円礫を母岩としたものが確認される。

⑼磨製石斧（第83・84図83～99）

17点出土した。95は輝緑岩製の太型蛤刃石斧で弥生時代の石器と推定される。他は縄文時代の石斧と考えられ、土器の出土量から多くは中期前葉に属するものとおもわれる。90・93・96が安山岩製、96は石材不明、他は全て蛇紋岩である。縄文時代の磨製石斧では蛇紋岩13点、安山岩３点、その他１点であり、蛇紋岩の占める割合が高い。また、小形の83を除いて全て定角式磨製石斧である。完形品は３点（89・96・98）で他は全て欠損しており、縄文時代の石斧16点中11点が基部を残して刃部を欠損している。また、欠損部に敲打によるツブレが認められるものが５点あり（88・90・92・94・99）、石斧本来の用途とは別の用途に転用されたものであろう。完形品が少なく客観的な根拠に乏しく感覚的ではあるが、出土した縄文時代の石斧は大きく３つのサイズに分けることができる。すなわち小形のもの（83・84）、中形のもの（85～94・96）、大形のもの（97～99）に分類される。さらに、中形・大形のものは基部端部に平坦面を作り出している。この特徴は善光寺平の縄文時代前期以前には見られず、中期以降の磨製石斧の特徴と考えられる。

⑽礫器（第84・85図100～113）

板状の角礫を素材とし表裏両面からの調整加工により刃部を作出したものをａ類（113）、長径５．６cm～９．１cmの断面Ｄ字状の平坦面がある楕円礫を素材とし片面から剥片剥離が施されているものをｂ類（100～112）とした。

ａ類は頁岩製のものが１点出土した。

ｂ類は安山岩27点、砂岩２点、石英１点、チャート１点の合計31点が出土した。27点のうち16点が欠損品である。ｂ類の調整加工の位置は個体により様々で、調整加工により作出された刃部の状態も鋭利なものとつぶれているものとがある。また、縁辺部への敲打により生じた小さい剥離痕が認められ、調整加工との区別が困難なものがある。

⑾磨石・凹石・敲石（第85・86図114～126）

磨石・凹石・敲石はそれぞれ河原石を用いた石器で、相互に重複する要素（機能面）を有するためにそれぞれの器種を明確に区別することは困難である。本報告では各器種を以下のように定義し、機能面の位置・状態により細分する。

凹石：敲打による凹部を有する石器（第86図117・121・122）。凹部のみのもの（120）をａ類、凹部と正面の滑らかな磨り面を持つもの（121）をｂ類、凹部と側面のざらざらした磨り面を持つもの（117）をｃ類）とした。なお、凹部と正面と側面の磨り面を持つものはｃ類とする。ａ類が20点、ｂ類が６点、ｃ類が７点出土し、石材は安山岩30点、砂岩１点、花崗岩１点である。

磨石：対象物との摩擦により磨耗した面（磨り面）を有するもので、凹部を有するものを除いた石器。表裏面（正面）に磨り面があるもの（ａ類）と、側縁又は稜部に磨り面があるもの（ｂ類）に分類される。ａ類は滑らかな磨り面のものが多く、ｂ類は特殊磨石などに見られるようにざらざらした磨り面である。正面及び側面の両方に磨り面があるものはｂ類とした。さらに機能面の状態・石器の形状により細分した。

ａ１類：磨り面のみのもの（第86図120）。４点出土。

ａ２類：磨り面と敲打痕があるもの（第86図123）。２点出土。

ａ３類：磨り面が不明瞭であり、形状から磨石と判断したもの。28点出土。

ｂ１類：断面三角形の稜部に機能面があるもの（第85図114～116）。磨り面のみのものと、敲打痕を有するものとがある。特殊磨石とされるものである。４点出土。

ｂ２類：断面楕円形の対峙する二側縁に機能面があるもの（第86図118・119）。磨り面のみのものと、長

軸端部に敲打痕を有するものとがある。11点出土。

石材は安山岩43点、花崗岩3点、閃緑岩1点、砂岩1点である。a3類は自然礫を誤認しているものもあると考えられることを付け加えておきたい。

敲石：敲打による平坦面（敲打痕）のみを有するもの。平面形が円形または楕円形のもの（a類）と、長さ10cm以下の棒状のもの（b類）と、長径10～15cmの長楕円形のもの（c類）がある。さらに、a類は断面が円形又は楕円形のもの（a1類）と、偏平な楕円形で板状ののもの（a2類）に区分される。a類が4点、b類が8点、c類が6点出土した。安山岩15点、花崗岩1点、砂岩1点、頁岩1点である。

⑿石皿（第87図127～136）

中央部が窪むもの（a類：127～133）、平坦な板状のもの（b類：134～136）とがある。a類には裏面に敲打による凹痕を有するものがある。a類が8点、b類が4点出土しており、いずれも欠損している。全て安山岩である。

⒀石錘

偏平な楕円礫に敲打によるわずかなえぐりが対峙するものが1点出土した。縄文時代の礫石錘は剥片剥離によりえぐりを作るものであり、本品は縄文時代の石錘とは趣をことにしており、石錘と断定する根拠に乏しい。

⒁磨耗痕のある剥片

安山岩の剥片の中に磨耗痕が認められるものがある。2点確認されたのみである。

⒂石核・原石（第79図38～41）

黒曜石の原石が4点出土した（39～41）。39は35g、40は21g、41は29g、図示しなかったものが18gである。

石核は黒曜石4点、チャート2点、硅質頁岩1点（38）の7点が出土した。黒曜石の石核には両極打法による剥片剥離も見られる。

⒃剥片

総点数794点の剥片が出土した。黒曜石344点、安山岩・頁岩など打製石斧・スクレイパーb類（横刃型石器）に用いられる石材357点、チャート12点、石英6点、硅質頁岩5点、玉髄3点、その他石材不明77点である。

上記の他に打製石斧の使用時の欠損破片又は製作時の欠損破片が51点出土した。この中には磨耗痕があるものが12点あり、刃部再生時の剥片も含まれている。打製石斧の全体量と剥片・欠損破片の点数を比較すると、遺跡内で打製石斧の製作の全工程を行っていたとは考えがたく、使用時の欠損破片を除く剥片・欠損破片は、最終的な調整加工もしくは刃部再生を集落内で行った結果生じたものと思われる。

註

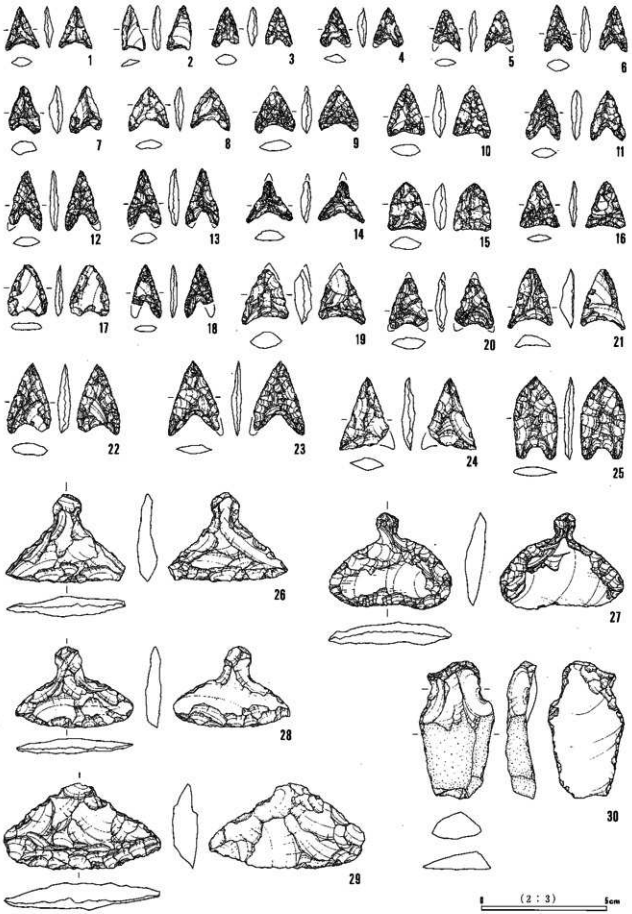
1　贄田　明氏（長野県埋蔵文化財センター）の御教示による

2　貫ノ木遺跡・日向林B遺跡発掘調査報告書―図28・36・39・41

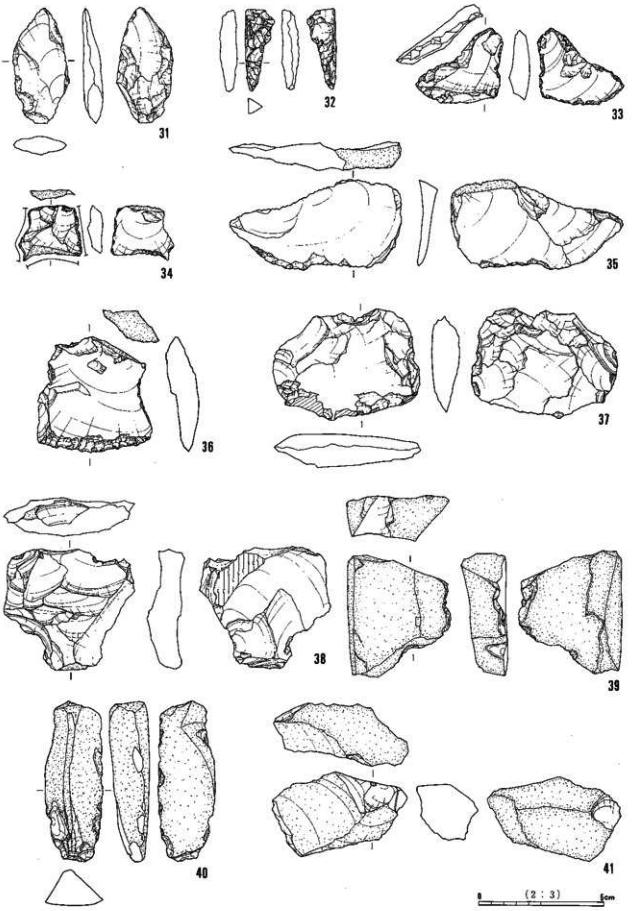
3　完成品とは製作者が完成したと認識した段階の道具を示す概念とし、それに対し製作途上品、失敗作品は未成品とした。なお、完形品とは欠けていない状態のものを示し、欠損品の反対語として用いている。

参考・引用文献

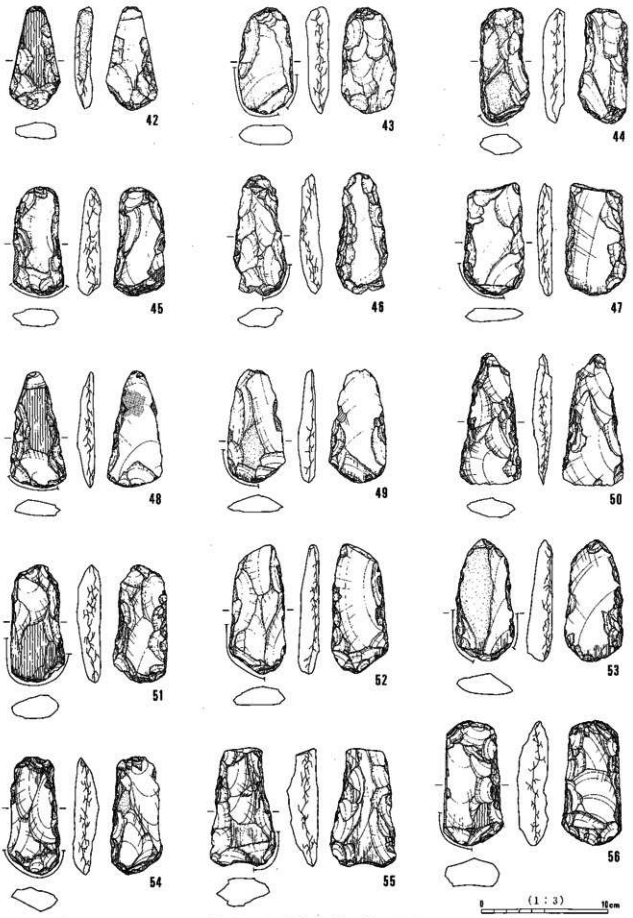
第5節末尾に掲載



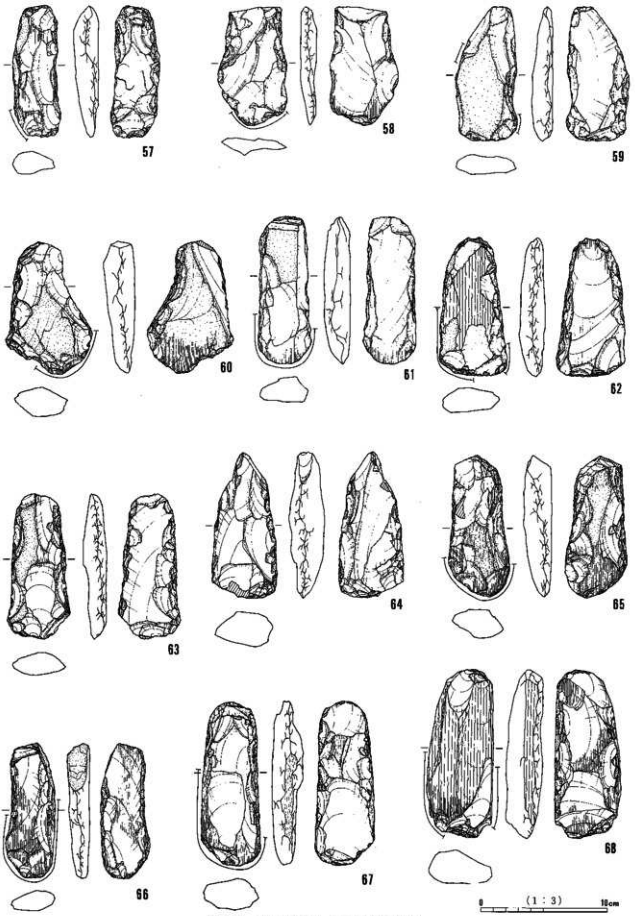
第78図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(1)



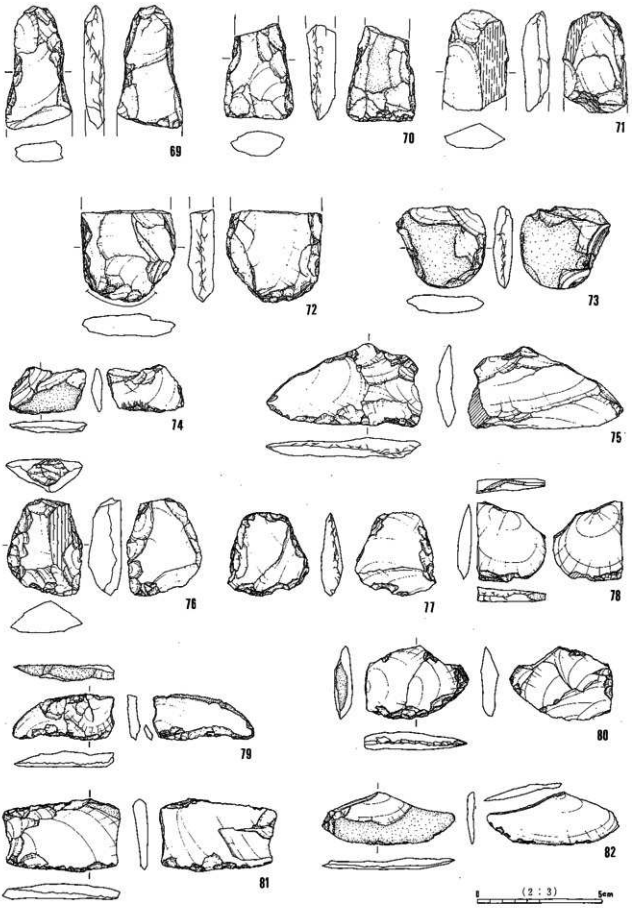
第79図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(2)



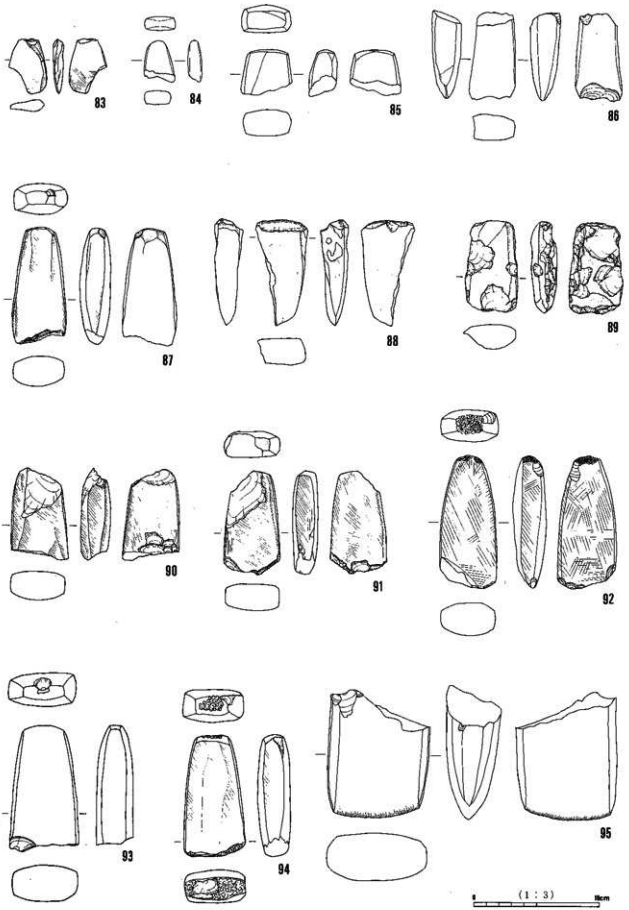
第80図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(3)



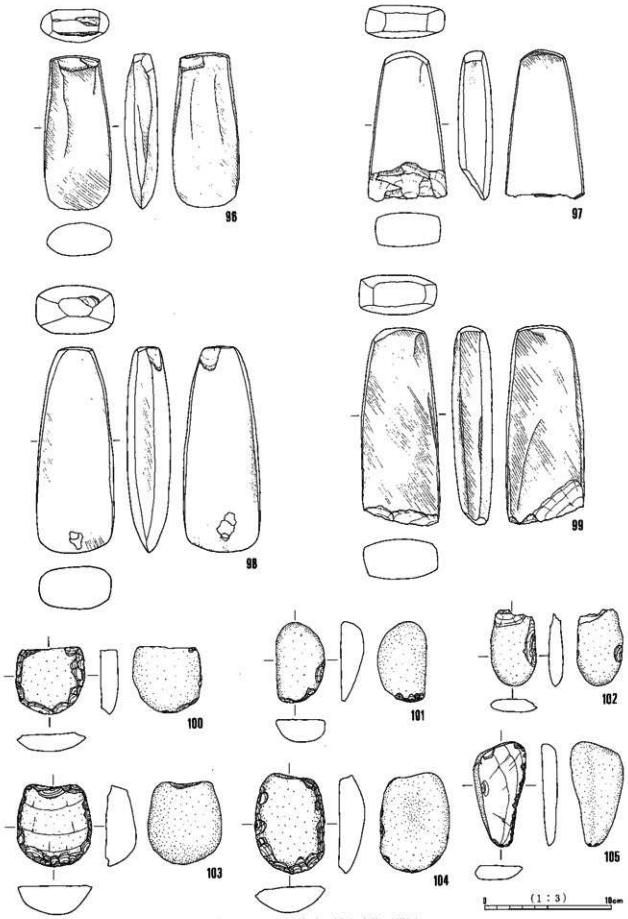
第81図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(4)



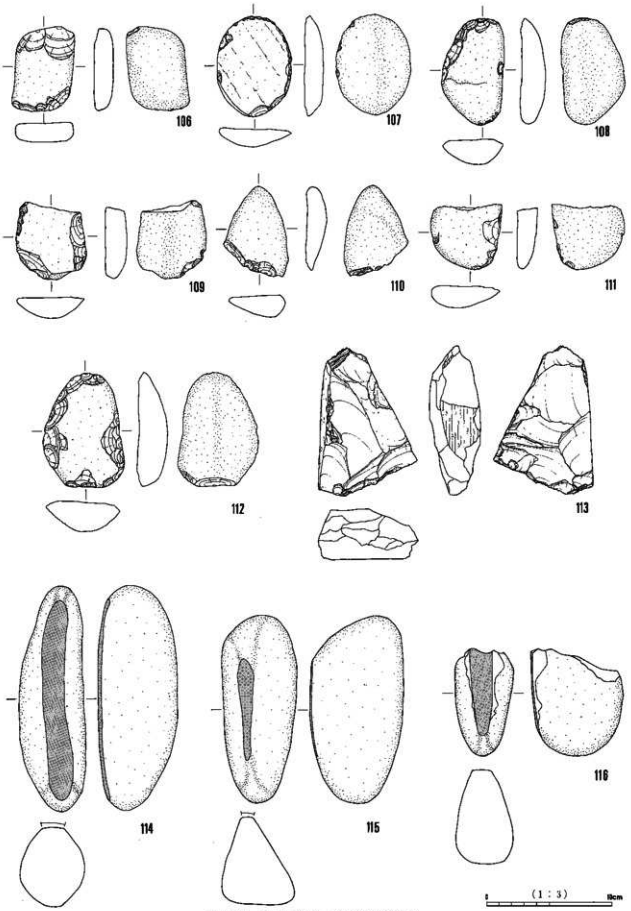
第82図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(5)



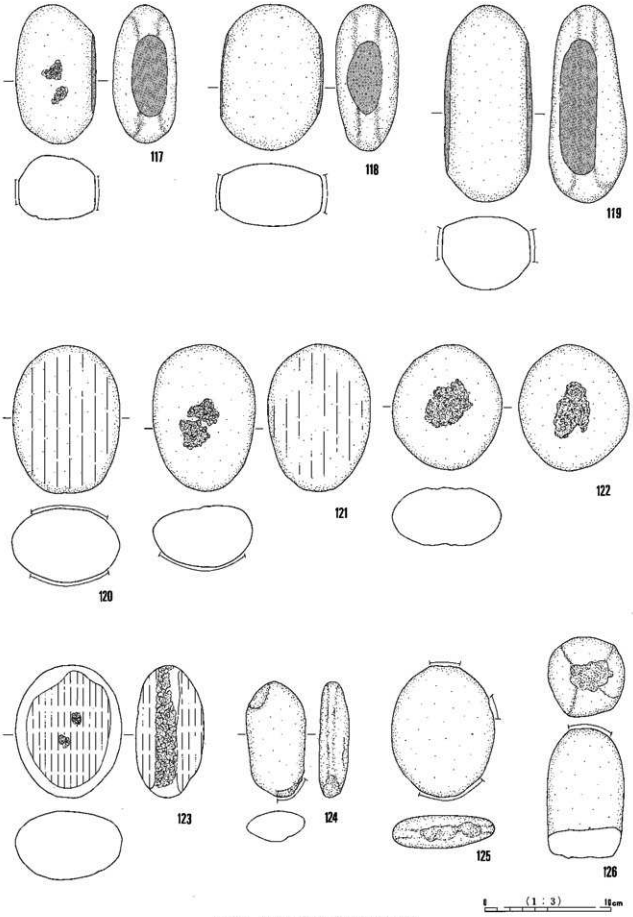
第83図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(6)



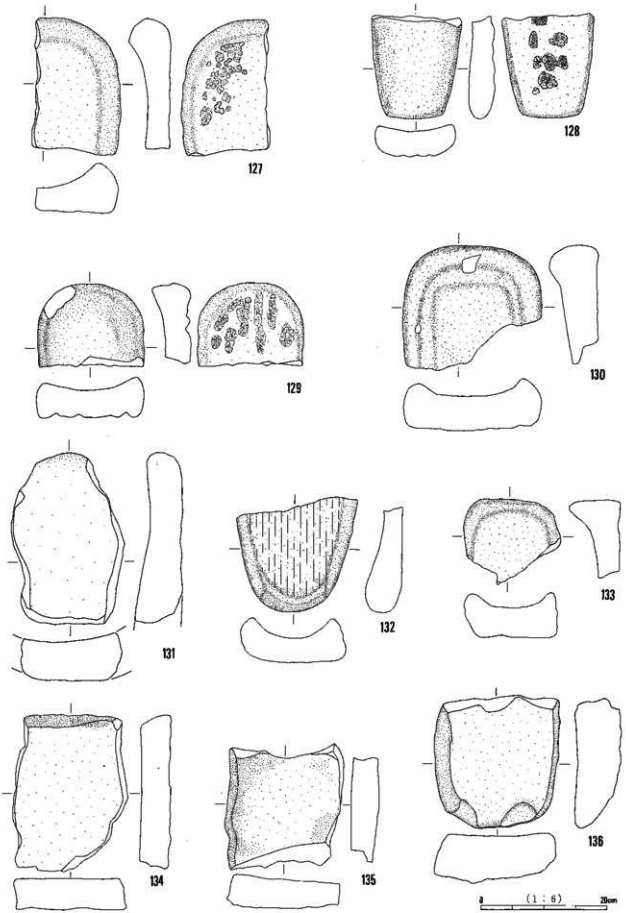
第84図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(7)



第85図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(8)



第86図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(9)



第87図　風呂屋遺跡　縄文時代石器(1)

第3節　古墳時代の遺構と遺物（風呂屋古墳）

1　立地と調査経過

調査当初の現地表面ではマウンドは確認されず、古墳の存在は知られていなかった。表土直下から人頭大の礫が検出され、掘り下げたところ横穴式石室であることが確認された。新発見の古墳であり、風呂屋古墳と命名した。墳丘は大規模な削平を受けており旧状をとどめず、リンゴ畑となっていた。畑の所有者の話では「石が多かったので、かなりの石を取り除いた」とのことであった。

古墳は南向きの緩斜面に立地し、斜面下方に開口する。東側は尾根が張り出しており、東への視界は遮られている。開口部のある南側は上今井の集落の先に千曲川を望むことができる。標高383.2m～384.5mである。

風呂屋古墳から北東約200mの調査区外に、人頭大の礫が散乱する所を確認したが、古墳の積み石であるか否かは確認できなかった。当該期の古墳は群在することが多いことから、風呂屋古墳の周辺に数基の古墳が分布する可能性は高い。

なお、当古墳は村民から移転保存を要望する気運が高まり、調査終了後に豊田村教育委員会により、替佐城跡公園の一角に移転・復元され一般に公開されている。

2　墳丘と主体部の構造

(1)　墳丘の構造（第88・89図）

墳丘は、畑の耕作などにより上部が失われており、残存高約1.4mで、地表下に埋没していた。墳形は円墳で、石室主軸方向に推定11.5m、直交方向で10.5mを測る。北側の裾石が検出されず、開口部の端も明確につかむことはできないことから、石室主軸方向の墳長は確定できない。墳丘の封土と埋没土の識別が困難で、石を残して掘り下げた結果、石室の外側を裾石及び内回りの石列が二重に巡っていることが確認された。また、表土を取り去った面で拳大の礫が主体部の南側に分布していた。第88図は石の検出状況（石室内の石は一部取りあげている）、第89図は石室内に崩れ落ちたと思われる石と、前庭部に詰められた石と、開口部付近の小さな石をを取り除いた状況である。

裾石は根石のみで、等高線に並行する東西方向の断面では、石室の床面とほぼ同レベルにある。西側と東側では裾石が明確に確認できるが、北側では途切れる。北側の周辺に散在する大きな石が裾石の崩落したものであろうか。本来は石室主軸方向にわずかに長い楕円形であったと推定される。なお、北西側は近年の潅漑施設のパイプの埋設時に破壊されている。

内回りの石列は、東側の石列が石室まで続いており、石室主軸方向に長い楕円形を呈する。長軸約8.3m、短軸約7.5mの円形に巡っており、数段の石積みが確認される所と根石のみが残されている部分とがある。根石は大きいもので50cm前後で、その上に人頭大の礫が積まれる。内回りの石列の根石は裾石よりも30cm前後高い位置に並べられている。

二重の石列の内側に横穴式石室が築かれている。石室の裏込めは大小の礫を積み上げており、広い所で幅80cmである。

(2)　主体部の構造（第90図）

主体部は玄室と羨道からなる片袖型横穴式石室である。石室の上部はすでに石が抜き取られており、側壁の上部の構造は不明である。玄室は長さ2.65m、最大幅1.20mで、最も残りの良い東側側壁で残存高

0.8mである。玄室の東側側壁では三段の石積みが見られるが、西側側壁では一段又は二段の石積みが残されているのみである。奥壁は側壁に比べ小形の石を積み重ねている。

西側側壁の袖石が石室内に傾いているため第90図では大きく張出しているように見えるが、床面での張出し部は約20cmである。羨道の側壁は玄室に比べ厚い大きな石を用いており、また、縦積する部分があり、玄室では二段もしくは三段の高さを一つの石で満たしている。特に東側側壁では玄室と羨道の積みかたの差が明瞭である。また、羨道の開口部側では側壁が崩れた様子が見られ、羨道と前庭部の境界が明瞭に捉えることはできない。玄室と羨道の間に長さ1.2m、幅0.6m、厚さ約30cm（推定）の石が検出された（第88図）。当初、天井石又は側壁が崩落したものと考えたが、羨道部西壁が石室内に傾いており、羨道と玄室の境の側壁が崩れて抜け落ちた様子で基底の石が明確に確認できないことから、この石が袖石である可能性がある。すなわち、石室西壁には幅約30cm高さ1.2mの袖石が石室内に転んだと考えられるが確証はない。また、羨道部には閉塞と考えられる人頭大の石積みが見られ、閉塞部から開口部にかけては石室や裾石に比べ小形の石が充填されていた（第88図）。なお、石室内部には大小の石が落ち込んでいたが、第88図はこれらの礫の多くを取り去った状況を示した。

床は、敷石や版築などはみられず、明確に床を捉えることはできなかった。石室内埋土と地山黒色土は区別できず、側壁基底部付近より下位では下層に含まれる縄文土器などを出土した。鉄鏃などの出土遺物の最下底面を床と推定した。

4　出土遺物

(1)　遺物出土状況（第89図）

玄室より鉄鏃、底部にヘラ描記号がある須恵器杯B、小形の短頸壺が出土した。鉄鏃はほとんどが欠損状態で出土しており、鏃身部が4点あることから、最低4個体はあったこととなる。これらの遺物は玄室の南側にまとまって見られるが、これらの遺物が原位置であると断定はできない。

墳丘部及びその周辺からは須恵器杯・高台付き杯・杯蓋・短頸壺・長頸壺・提瓶・甕が出土した。この他にJ－7グリッドからなつめ玉が1点出土した。須恵器は破片で出土したものが多く、原位置であると確認できるものはない。

なお、石室内部の土を洗浄したが、玉類などの副葬品や人骨は確認できなかった。

(2)　出土遺物（第91図）

土器（第91図1～15）　杯蓋は、内面に返しを有する杯蓋（1）と口縁端部を折り曲げる杯蓋（2）の二つの形態が見られる。いずれも破片で個体数は確認できないが、両者とも1または2個体分である。杯は口径9.7cmの小形のもの（3）、口径が11.7cm～12.0cmで底径5.0cm～5.5cmの中形で底径の小さなもの（4～7）、口径約13.0cm、底径9.0cmの大形で底径の大きなもの（8・9）の3法量認められ、技法・焼成・色調においても各法量毎に異なっている。詳細は遺物観察表を参照。高台付き杯（10）はほぼ完形で、底部にヘラ記号が見られる。短頸壺（11・12）は橙色で土師質であるが、いずれもロクロ成形で須恵器の焼成不良のものと考えられる。長頸壺（13）は胴上半部に数条の沈線が巡り、底部付近では横方向のケズリが見られる。甕（14）の内面は当て具痕が見られるが、青海波文は見られない。提瓶（15）は側面中央部に2条の沈線と同心円状のカキ目が見られる。胴下半部のみであるが、内面の自然釉の大きさから、頸部の口径は約5cmと推定される。

上記の他に杯蓋、杯、長頸壺、大甕の破片が出土した。大甕の破片に青海波文が見られるものがある。これらの須恵器はJ－1・2・6・7グリッドに集中している。

金属器（第91図16～22）　鉄鏃（16～20）と刀子（22）が石室内から出土している。鉄鏃は全て長頸鏃

で、鏃身の数から最低4本は確認される。鏃身の遺存状態が悪く断言はできないが、全て片丸造鑿箭鏃であると推定されるが、18は片刃鏃の可能性がある。また、出土した鎧被部はすべて棘鎧被である。刀子は刃部がかなり砥ぎ減っている。これらの他に、古墳の北西側のD－25グリッドで両端が欠損した棒状の鉄製品（21）と青銅製の鞘金具（ＰＬ35）が出土した。いずれも時期は不明であるが、古墳の副葬品である可能性がある。

石製品（第91図23･34）　棒状石製品（23）１点、なつめ玉（24）１点が出土した。棒状石製品は墳丘部付近から出土したものであるが、当該期の古墳には出土例はなく、古墳の封土から縄文土器が出土していることなどを勘案すると、縄文時代の遺物である可能性が高い。なつめ玉は開口部から南へ６ｍの所から出土したもので、石室内の副葬品であった可能性が高い。

5　小結

須恵器の多くは墳丘及び墳丘周辺から出土しており、杯蓋・杯・長頸壺の形態的特徴と提瓶が存在することから、７世紀末から８世紀前半の早い時期に生産されたものと判断される。石室以外から出土したほとんどの須恵器は古墳周辺で出土していること、また他に当該期の遺構が本遺跡では確認されないことから、出土した須恵器は風呂屋古墳に関わる遺物であることが確認できる。石室は上部が破壊され、石室内に副葬されたと推定されるなつめ玉が遺構外から出土しており、石室内部の遺物が持ち出されたことが想像され、墳丘周辺から出土した須恵器は石室内に副葬されていた可能性は高い。これらの須恵器の生産された時期には若干の時間差は想定されるものの、生産時期と埋葬時期の差を考慮すれば一括して副葬されたとしてもそれほどの矛盾は生じないであろう。追葬がなかったとは断言できないが、同時期の副葬品と考えておきたい。追葬を考慮しても、本古墳の築造年代は７世紀末から８世紀前半と推定される。鉄鏃は棘箙被片丸造鑿箭式を主体としており大室第23号墳と類似している。大室23号墳は鉄鏃の形式から７世紀前葉と位置付けているが、本古墳では１・３・15の須恵器が古い様相を持っているものの、７世紀前葉まで遡るとは確認できず、鉄鏃の近くで出土した須恵器も古く見ても７世紀前葉には遡らない。したがって鉄鏃は７世紀末～８世紀前半期に副葬されたものと判断したい。

なお、本遺跡より約５㎞下流の千曲川に面した扇状地上の豊野町山崎古墳は、墳丘・石室の構造が非常に類似している。出土遺物から本古墳と築造時期が同じであると思われる。（豊野町教育委員会1982）

参考文献

長野県埋蔵文化財センター　1997　『清水製鉄遺跡・大穴遺跡』㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書25

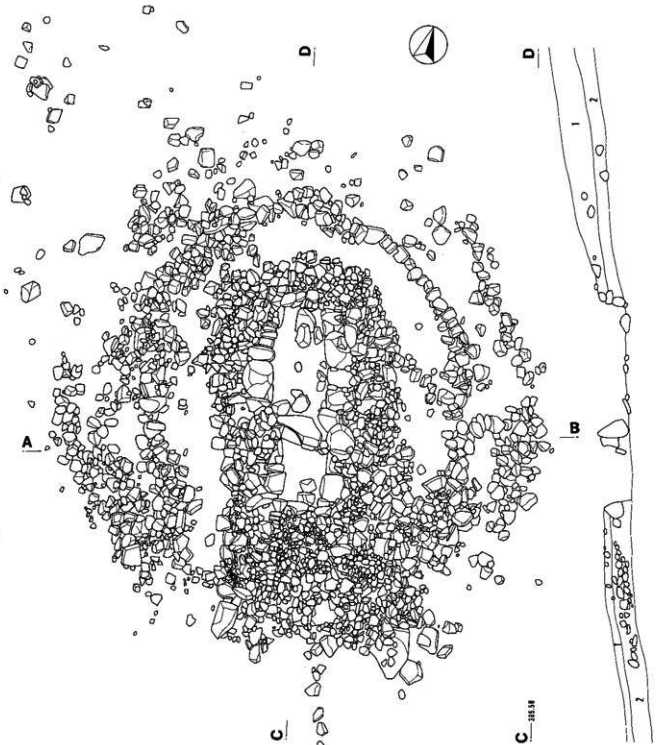
長野県埋蔵文化財センター　1991　『大室古墳群』㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書13

松本市教育委員会　1990　『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡』松本市文化財調査報告74

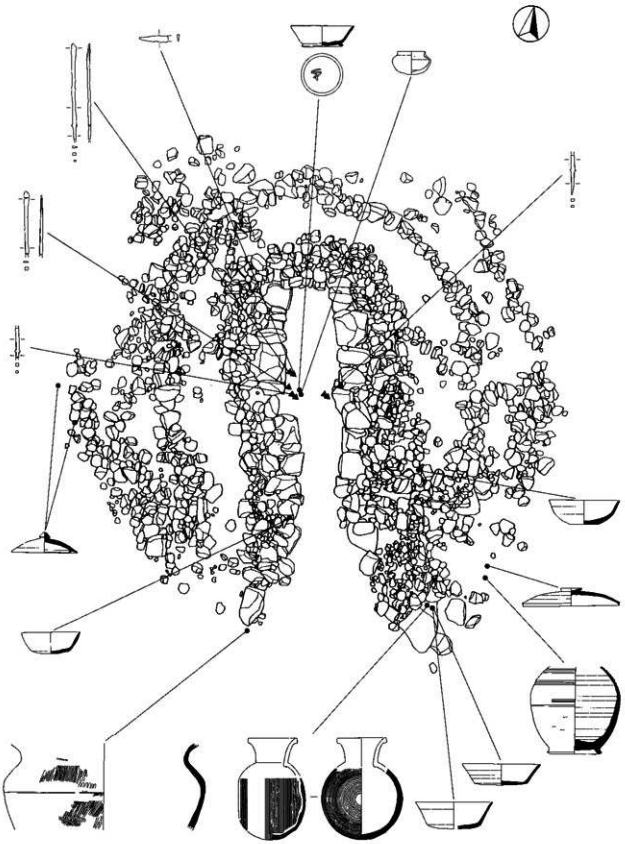
松本市教育委員会　1983　『松本市新村秋葉原遺跡』松本市文化財調査報告26

杉山秀宏　1988　「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八

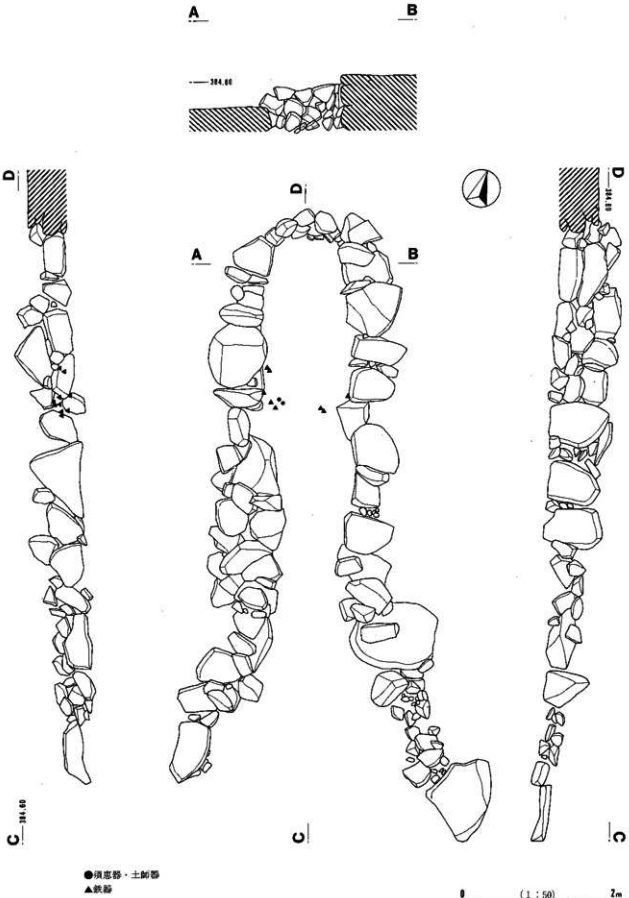
豊野町教育委員会　1982　『上茂野』



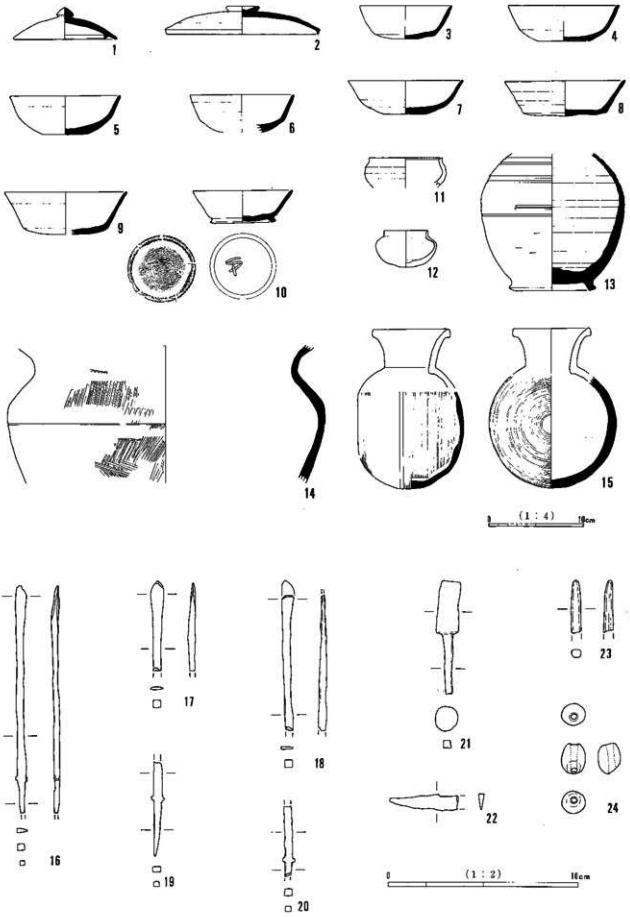
第88図　風呂屋遺跡　古墳平面図(1)



第89図　風呂屋遺跡　古墳平面図(2)



第90図　風呂屋遺跡　古墳石室



第91図　風呂屋遺跡　古墳出土及び古墳関連遺物

第４表　風呂屋遺跡　古墳関係金属器一覧表

図版番号	出土地点	器種名	備　　考	整理番号	取上げ番号
第91図-16	石室	鉄鏃	ほぼ完形（茎部欠損）	5005	5
第91図-17	不明	鉄鏃	鏃身・頸部	5001	
第91図-18	石室	鉄鏃	鏃身・頸部	5004	4
第91図-19	石室	鉄鏃	頸部・茎部	5007	10
第91図-20	石室	鉄鏃	頸部・茎部	5006	7
第91図-21	D-25	不明	時期不明	5003	162
第91図-22	石室	刀子		5002	6
第91図-23	J-2	棒状石製品	滑石製。時期不明	5013	15
第91図-24	J-7	なつめ玉	滑石製。両面穿孔。	5012	480
	D-25	銅製釉金具？	時期不明	5009	
	石室	鉄鏃	茎部		
	石室	鉄鏃	茎部		9
	石室	鉄鏃	鏃身・頸部		8

風呂屋古墳関係遺物観察表

図版番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法などの特徴	色調	焼成	備　　考	整理番号
第91図-1	J-1・6・7	須恵器杯蓋	11.0		3.4	返り有り	灰色	良好		31
第91図-2	J-2	須恵器杯蓋	16.2		3.0	口縁端部を折り曲げる	灰色～灰白色			36
第91図-3	J-2	須恵器杯	9.8		3.6	底部回転ヘラ切り後ナデ	灰色	良好		30
第91図-4	J-1	須恵器杯	11.8	5.4	3.8	底部剥落して観察不能	灰白色	やや軟質		48
第91図-5	J-2	須恵器杯	11.8	5.0	4.1	底部回転ヘラ切り後静止ヘラ削り又はナデ	灰白色	やや軟質		37
第91図-6	J-7	須恵器杯	11.1			底部回転ヘラ切り後ナデ？	灰白色	やや軟質		35
第91図-7	J-1	須恵器杯	12.3	4.7	3.5	底部回転ヘラ切り後ナデ	灰白色	やや軟質		32
第91図-8	J-7	須恵器杯	13.2	9.0	3.6	底部回転ヘラ切り	灰褐色	良好		38
第91図-9	J-7	須恵器杯	13.2	9.0	4.5	底部回転ヘラ切り	灰褐色	良好		39
第91図-10	石室	須恵器高台付き杯	10.6	7.0	3.4	底部ヘラ削り	灰色	良好	底部にヘラ記号	44
第91図-11	J-2	無頸壺	7.9			ロクロ成形	橙色	やや軟質	胴部に２条の沈線か。須恵器？	2
第91図-12	石室	無頸壺	4.6		3.9	底部回転ヘラ切り	橙色	やや軟質	須恵器？	29
第91図-13	J-2・7	須恵器長頸壺		9.2		胴部上半に数条の沈線	灰色～灰白色	良好		26
第91図-14	J-1・6・7 G-1	須恵器甕				胴部タタキ、肩部に１条の沈線	灰白色	良好		27
第91図-15	J-6・7	須恵器提瓶				２条の沈線と同心円状のカキメ	灰色	良好		25

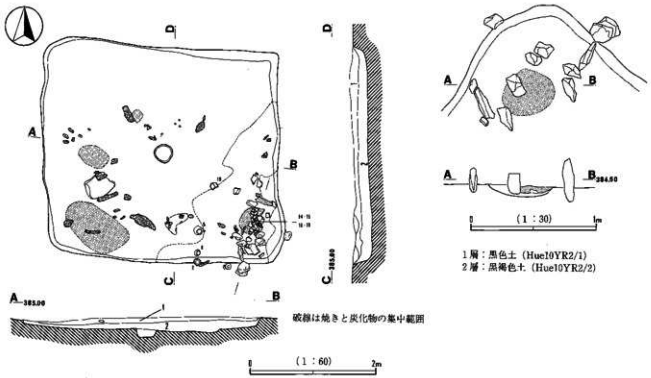
第4節　平安時代他の遺構と遺物

1　平安時代の遺構と遺物

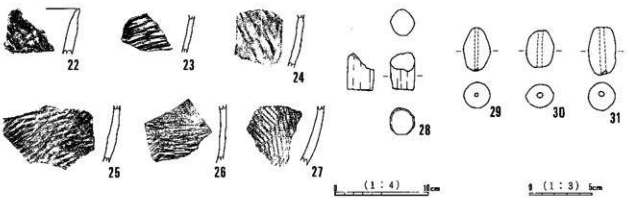
竪穴住居址が1棟確認され、他に当該期の遺構は検出されなかった。

ＳＢ０１（１号住居址）（第92～94図）

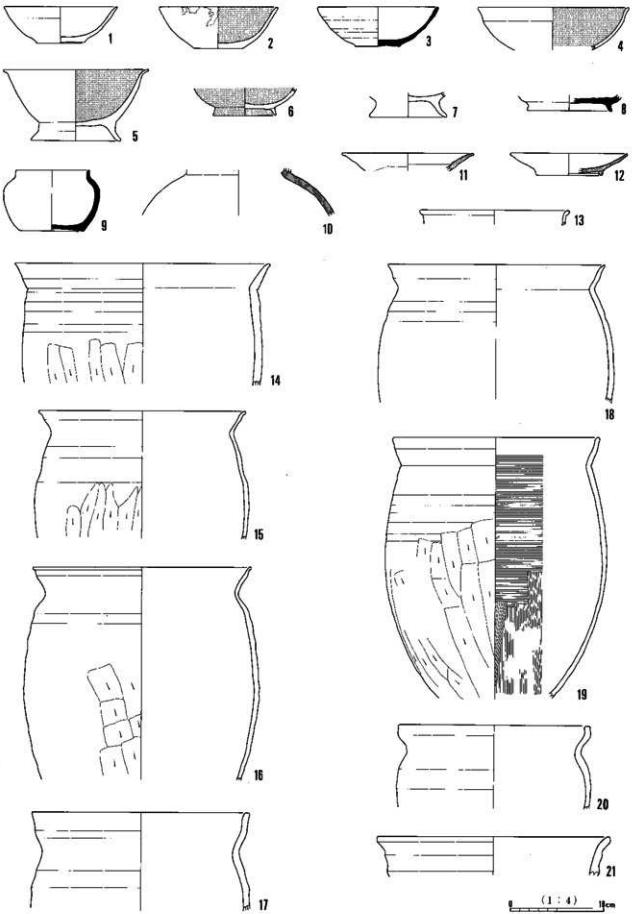
遺構の構造（第92図）：黒色土の地山に黒色土の覆土であるため、遺構の確認は困難であった。５ｍ×５ｍの隅丸方形で、検出面から床面まで深いところで約30cmを測る。中央部のピットは直径30cm、深さ30cmであり、他にピットは確認されなかった。南東角に石組の竈があり、袖石が部分的に残存していた。周辺には竈の芯材と思われる石が散在している。火床面の中央からやや壁よりに支脚石と思われる長さ18cmの四角柱の石がある。また、第92図に焼土と炭化物の集中範囲を示した。



第92図　風呂屋遺跡　ＳＢ01



第94図　風呂屋遺跡　平安時代出土遺物(2)



第93図　風呂屋遺跡　平安時代出土遺物(1)

西側の床面には大型の平石が据えられたように出土しており、台石など本遺構に関わる施設であろうか。この石の周辺には炭化材と焼土が分布する。焼失家屋の可能性も指摘される。

遺物出土状況：竈周辺には、完形もしくは残存率の高い遺物が集中して出土した。特に竈を覆うように4から5個体の土師器甕の大きな破片が出土した。これらは出土状況及び遺物の状態から芯材ではなく煮沸具として使用されたものと判断される。竈付近の南壁にはほぼ完形の杯・短頸壺が出土した。

出土遺物（第93・94図）：平安時代の遺物はＳＢ０１とその周囲に集中しており、これらはＳＢ０１に関わる遺物と判断できるため、遺構内と遺構外のものをまとめて報告する。なお、３・４・６・７・８・10・11～13・24～31は遺構外出土、他はＳＢ０１より出土したものである。

１は土師器杯、２は内面黒色処理された土師器杯、３は須恵器杯である。４・５は内面黒色処理された土師器椀、６は両面黒色処理された椀、７は土師器椀である。８は須恵器高台付き杯である。９は須恵器の10は灰釉陶器の短頸壺である。11・12は灰釉陶器の皿である。13は土師器の小型甕の口縁部である。14～21は土師器ロクロ甕である。14～16・19は胴部に縦位のヘラケズリ調整がみられる。19には内面に胴上半部にカキ目、下半部には縦位のハケメ調整が行われている。14～21のロクロ甕は胴部があまり張らない長胴の甕である。口縁部形態はくの字に外反するもの、やや内湾するもの、受け口状になるもの、などがみられる。22～27はロクロ甕のタタキ調整のある破片である。22は口縁部にタタキ調整の残る破片である。28は脚部または把手と思われる。29～31は土錘である。

時期：須恵器杯底部は回転糸切り未調整であり、土師器の杯も底部回転糸切り未調整である。須恵器も土師器も杯の形態が類似している。また須恵器高台付き杯も底部糸切り未調整で高台が付けられている。須恵器・土師器・灰釉が共伴している。また須恵器の短頸壺と土師器ロクロ甕が共伴している。遺物の時代の新しい要素としてロクロ甕の口縁部が受け口状になったものがみられ、ロクロ甕もタタキ調整のものとヘラケズリのものがみられる。土師器両面黒色処理されたものがみられることなど、平安時代中頃から後半にかけての様相がみられる。しかし須恵器を若干共伴すること、長胴甕の胴部が長く（18）短胴化してきていないなど、平安時代中頃の時期とみられる。

2　その他の出土遺物（第95図）

弥生時代中期の甕（Ｄ－25グリッド）と中世の古瀬戸の香炉形土器（Ｅ－21グリッド）が出土した。香炉形土器は脚部と口縁部が欠損している。これらの時期の遺構は調査区内では確認されなかった。

第95図　風呂屋遺跡　遺構外の出土遺物

第5節　成果と課題　－風呂屋遺跡縄文時代中期の土器について－

早期から後期まで時期的には広い範囲の遺物が出土している。しかし、大半は中期の土器で占められており、これについての若干の検討を加えてみたい。

1　風呂屋遺跡出土土器の特徴

(1)器形

概観した場合いわゆる深沢タイプの土器（または仮称“深沢式土器”高橋保1989）に大きな類似性を持つと考えられる。しかし、深沢遺跡と比較した場合、より多様な器形を示す。その中でも波状口縁を持つ土器は、深沢タイプでは平口縁または小波状の突起が付くものが一般的な中で注目すべきものであると思われる。

深沢遺跡の土器が成立するに当たって、北陸地方の「新崎式土器」が深く関わると考えられる。新崎式土器は、文様とともに器形を変化させていることが知られている。しかし、この器形の変化については新崎式土器の変遷に沿って深沢遺跡の土器が変化したとはいえない。

深沢遺跡の土器の主たる変化は文様の変化で、3類に至っても、古いタイプの器形も残り大きな変化をみることはできない。時期的な器形の変化を大きく示さない深沢遺跡の土器と近い関係にあると予想される風呂屋遺跡の土器も、その時期的な変遷が器形の変化に現れている可能性はそう高くはないと思われる。

(2)施文方法

大きく3分類が可能かと思われる

Ⅰ：竹管文を中心とするもの

Ⅱ：縄文施文のみのもの

Ⅲ：指頭圧痕文の見られるもの

Ⅰは、第2類として分類した「半截竹管による施文を持つ土器」である。中期初頭の中部高地に多く見られる単沈線施文の土器、交互刺突による鋸歯状文を施文した土器、平行沈線を施文した土器と、その後の時期に位置付くと思われる半截竹管の腹側を用いた半隆起線による施文が中心になる土器とが見られる。この半隆起線による施文が中心になる土器は、いわゆる深沢タイプの土器（仮称“深沢式土器”）である。そしてこれが3種類の施文方法の中心を占めるものである。また同じ第2類にあっても、第2類－B－a－3「蓮華状文を施文した土器」は特に北陸地方の新崎式土器様式の影響を色濃く感じさせる。

一方全面に縄文を施文した土器は、胎土や器形から推察して深沢タイプの土器と同時期と思われる。またこれらの土器群とともに第4類「指頭圧痕を施文した土器」が出土している。これは「東関東地方の阿玉台式土器の影響をうけ、指頭圧痕文を多用する土器が在地の土器として定着」（飯山市史）したものと思われる。量的には多くを占めないものの、第2類が半截竹管を中心の施文具としているのに対してほとんど竹管を用いておらず、竹管文を持つ土器とは違った土器文化圏の影響を示すものと考える。更に風呂屋遺跡では、動物と思われる具象的な形態の突起を有し、楕円形の区画文を口縁部より重ね、内部を斜沈線で充塡する土器が存在する。これは斜行沈線文土器としての特徴を持つもので、かならずしも東関東の影響のみに限定されるとは言えない要素を孕む点注意が必要であると思われる。以上3種類の施文方法は、中部高地、北陸地方から関東地方の広い範囲の土器文化の影響を認めうる。つまり東西の土器文化の接点又は連結部のような地域像がここから伺える。

(3) 文様構成

出土土器の中心的な位置を占める深沢タイプの土器の文様について、代表的なものについて記述したい。文様の構成は、大きく口縁部文様帯と胴部文様帯とに分けることができる。その間に横位無文帯を持つ頸部が両方の文様帯を分ける役割を果たしている

＊口縁部文様帯

口縁部文様帯の文様構成は、基本的には横方向である。口縁部には縦位に半隆起線を密に施文したもの、その半隆起線を同じ半隆起線によって、U字状又は逆U字状に区画しているものが特徴的である。それを継手文等の隆帯が区切っているものがある。また数条の半隆起線を横走させるものもある。また口縁部の上端にはかなりの率で、突起が付けられていたものと思われる。その突起を口縁部から胴部へと区画する目印または起点としているものが見られる。

口縁部から頸部にかけては横位無文帯または横位縄文帯（南久和1976）が見られるものが多い。深沢タイプの土器は、この横位無文帯または横位縄文帯が楔形刻目文を持つことはなく、共に出土した新崎式類似の土器は楔形刻目横位無文帯を持っている。またこの口縁部と胴部との境目には、胴部を下降して区画する隆帯、半隆起線の起点となる突起状の文様が付けられる。

＊胴部文様帯

胴部は下降する半隆起線または隆帯によって縦に区画される。また縦方向の文様構成を基本にする。

この原則は結節縄文が縦に施文されている事にも見出されるように思われる。一般的に胴部を区画する半隆起線または隆帯は、その施文方法によって幾種類かに分けることができる。直線的に下降するものも見られるが、途中に区画に近い部分を持つものが多い。また継手文を持つものでも半隆起線による装飾が付加するもの、B字状文が付加するものなど多くの種類を持つ。

2 「深沢タイプ」土器について

(1)「深沢タイプ」の定義

西沢隆治氏は長野県史（昭和63年）において深沢遺跡出土土器を分析し、三類に分類しそれらの編年的な位置づけと施文の特徴を整理された。それによると

1類は下島式直後式とされている時期で、沈線文と半隆起線文によって文様が構成されている。

2類は前葉から中葉にかけてのもので、地文に縄文を使用し、隆起線文を多用している。

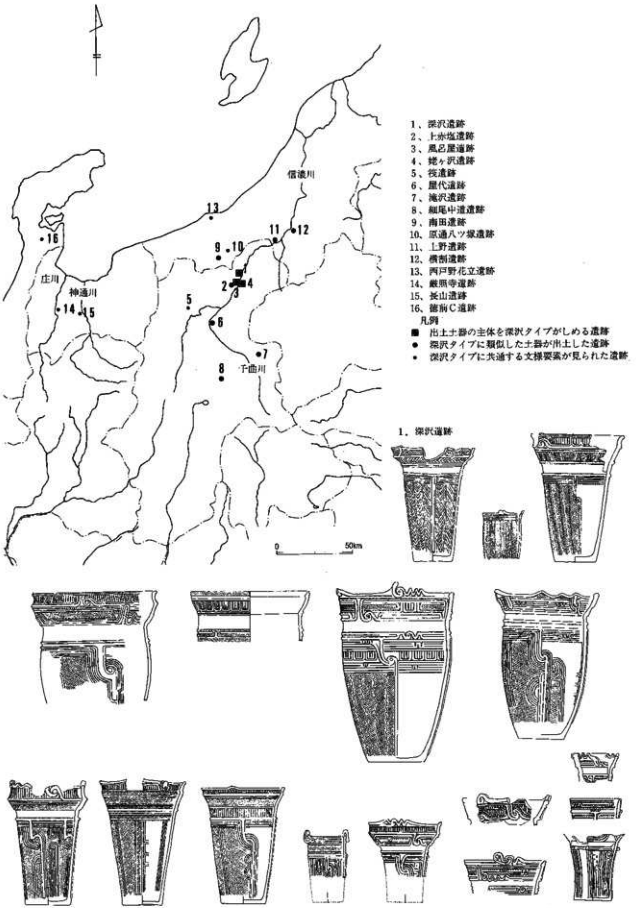
3類は中葉のもので、地文に縄文が使われなくなり、隆起線文と特に刺突文が多用されている。

とあり、ある程度の時期の幅と施文方法の変遷を捉えている。さらに高橋保氏は、その2類について以下のように仮称“深沢式土器”を設定され、特徴を端的に示された。

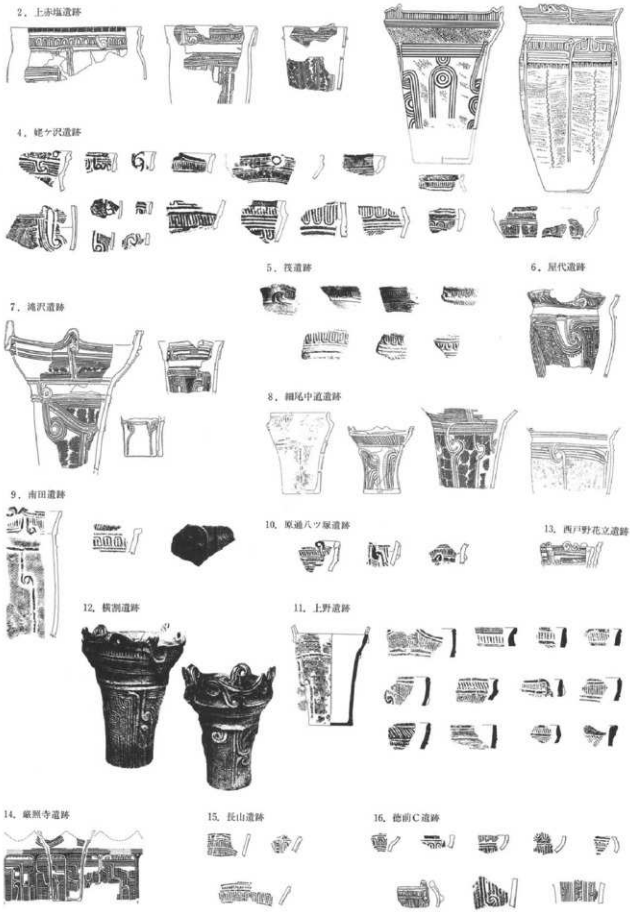
（深沢遺跡出土土器2類にあたるもの）

器形－直線的にゆるく外方にのびる胴部にくの字状に開く口縁部を持つものと、口縁上端が再び直立するものがある。また口縁部は断面三角形に肥厚する。胴部にややふくらみを持つものもある。

文様－口縁部文様帯と胴部文様帯を無文帯と隆帯により明確に区分する。口縁部文様帯には、半截竹管文による縦位の半隆起線が密に施され、それを渦巻きとなりえない入組状の隆帯が区切っている。口縁上端は平口縁と小突起（把手）を持つものとがある。以上の文様が最も特徴的であるが、他に口縁部には、横位の半隆起線束や交互刺突による鋸歯状文等が巡る。頸部に無文帯を持つこと、半隆起線の沈線端部にそってキザミを施す等は、北陸の新崎II式に共通する。胴部は縄文（羽状、結節を含む）を地文とし、入組状の隆帯が垂下するが、隆帯の両脇に半隆起線を添えるものもある。（高橋保　1989）



第96図　深沢タイプ土器の分布(1)



第97図　深沢タイプ土器の分布(2)

以上のようにかなり具体的にその特徴を示された。また編年的な位置づけについては「およそ、五領ヶ台直後型式およびその前後に位置づけられるものと考えられる。」として現在の状況をまとめている。また3類の位置づけについての検討の必要性を指摘されている点は注意しておきたい。

以上が深沢遺跡出土土器を考える現在の基準と言えるものと思われる。2類以外は明確に規定しきれないものではあるが、1類と3類は今回の調査では出土量が少なく、まず高橋氏の仮称“深沢式土器”を中心に深沢タイプについて考えたい。

(2)「深沢タイプ」の分布域

長野県内で深沢タイプの土器が、縄文時代中期の出土土器の主体をなしている遺跡は、千曲川流域の飯山市深沢遺跡と、中野市姥ヶ沢遺跡・安源寺遺跡、豊田村風呂屋遺跡などが挙げられると思われる。また屋代遺跡で一例、深沢タイプに近い土器（ＳＢ5412埋甕－センター年報11）が発表されている。さらに上流域では量的に少なくなるものの御代田町滝沢遺跡、望月町後沖遺跡、和田村細尾中道遺跡等が挙げられるであろう。また犀川水系では上水内郡小川村筏遺跡に、少量ではあるが見られる。以上のように現時点では、主に北信地方の千曲川下流域に中心的に分布し、東信地方にも及ぶように思われる。

また新潟県内では、信濃川上流域の津南町上野遺跡、関川流域の中郷村南田遺跡、新井市原通り八ツ塚遺跡等に中心をなすものとは言えないが見ることができる。また高橋氏（前掲1989）によれば中里村森上遺跡（中里村史専門委員会1985）吉川町長峰遺跡などに良好な資料が見られるとのことである。なお3類と思われる資料は十日町市横割遺跡、上越市西戸野花立遺跡（破片表採資料）などで見られる（数は極めて少ない）。そこからその分布域は千曲川下流域（信濃川上流域）と関川流域（上越地方）とに限定されている様子がうかがえる。

以上の状況から、千曲川流域の長野・新潟県境を中心にした地域と上越地方の山間が分布中心域として想定されるが、関田山地を挟んでその南北の裾に広がる地域として捉えることが可能である。

(3)「深沢タイプ」の編年的位置づけについて

管見の範囲では「深沢タイプ」の編年的な位置づけに触れた論を第5表にまとめた。

以上大方は縄文時代中期初頭ないし前葉から中葉にこれら土器の編年的な位置づけがなされる。今調査によって得られた資料も同様であろう。

長野県史では、1類から3類に細分し（西沢隆治1982）時期差を持って位置づけられている。しかし、細分、編年とその型式内容を示すにはいまだ充分な資料を得たとは言えない。

この深沢タイプの土器（仮称深沢式土器2類）の成立に関わったとされる“新崎式土器”について以下に挙げたような論がある。また、野村一寿氏は勝坂式土器と新崎式土器との長野県（信州）における伴出事例を追いながら「勝坂Ⅰ式前半期に・・・新崎Ⅰ式土器が入り込み」「勝坂Ⅰ式後半期に新崎Ⅱ式（類似）土器が存在する」と指摘している（野村1989）。本調査区においても新崎Ⅱ式土器に類似性の極めて高い土器が出土している。深沢遺跡では、深沢2類と阿玉台式土器に類似した土器が伴出している。さらに風呂屋遺跡では、斜行沈線文土器の特色を備えた土器が伴出している点が注目される。

宮遺跡（中条村）では、深沢タイプとの直接的な比較ができないが、新崎式土器を縄文時代中期前葉に、斜行沈線文土器を中期中葉に位置づけ、二者に時間差を見ている。この遺跡は中期後葉の土器も多く注意すべきと思われる。しかし、北信地域での縄文時代中期中葉の土器の姿が明確になっていない現在、これらの土器と深沢タイプの土器との明確な時間的前後関係も判断する材料に乏しい。ただし、全体的な傾向としては、深沢タイプの土器に比較して、新崎式土器はやや新しい時期に位置づけられている。

一方、深沢タイプとこれら指頭圧痕文を持つ土器群とが時期的に共存する可能性も否定しきれない。第70図277は胴部に指頭圧痕文を持つが、口縁部の楕円区画文の内部を半裁竹管の半隆起線を縦に密に施文

第5表 「深沢タイプ」の編年的位置づけ一覧

書　　名	著者名	発行年度	土器分類	時　期　区　分
長野県史考古資料編全1巻（二）主要遺跡（東・北信）	西沢隆治	1982	深沢遺跡1類	下島式直後式とされる時期
			深沢遺跡2類	前葉から中葉にかけてのもの
			深沢遺跡3類	中葉のもの
長野県史考古資料編全1巻（四）遺構・遺物	三上徹也	1988	深沢遺跡2類	中期中葉Ⅰ期
飯山市史	黒岩　隆	1993	深沢遺跡1類	中期前葉なかごろの時期
			深沢遺跡2類	前葉から中葉にかけてのもの
			深沢遺跡3類	中葉のもの
姥ヶ沢遺跡（中野市）	壇原長則	1983	第三群（深沢遺跡2類と思われる）	中期第Ⅱ期土器　中期前葉よりやや後
			第五群（深沢遺跡2類に共通要素が多い）	中期初頭から藤内式併行期
安源寺遺跡（中野市）	壇原長則	1987	深沢遺跡2類	五領ヶ台式後半＝御前C式
茂遺跡（上水内郡小川村）	寺内隆夫	1991	第2・21号住居	五領ヶ台期
			第5C・10類土器	五領ヶ台期から勝坂期
滝沢遺跡（御代田町）	寺内隆夫	1997	J－12住	五領ヶ台Ⅱ式の新しい段階から中期中葉直前段階
細尾中道遺跡（和田村）	児玉卓文	1993	細尾中道類	梨久保第Ⅱ段階
上野遺跡（新潟県中魚沼郡津南町）	江坂輝弥ほか	1962	第10類D	五領ヶ台式土器の後半
			第10類D	勝坂式土器
原遺り八ツ塚遺跡（新潟県新井市）	甘粕　健ほか	1982	第1類	新崎古式
南田遺跡（新潟県中頸城郡中郷村）	親跡　喬	1988		中期前半
「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」（新潟考古学座談会会報第4号）	高橋　保	1989	仮称“深沢式”2類	五領ヶ台直後型式およびその前後

第6表 「指頭圧痕文のある土器」の編年的位置づけ一覧

書　　名	著者名	発行年度	土器分類	時　期　区　分
長野県史考古資料編全1巻（二）主要遺跡（東・北信）	西沢隆治	1982	深沢遺跡2類に伴う阿玉台式土器に類似した土器	前葉から中葉にかけてのもの
長野県史考古資料編全1巻（四）遺構・遺物	三上徹也	1988	深沢遺跡2類に伴う	中期中葉Ⅰ期
茂遺跡（上水内郡小川村）	寺内隆夫	1991	第7類B	阿玉台直前型式へ 阿玉台1式の影響を受けて成立
後沖遺跡（望月町）	福島邦男	1983	第6号住居址出土土器	狢沢期
姥ヶ沢遺跡（中野市）	壇原長則	1983	第6群土器（A）	中期第Ⅱ期、諏訪では、狢沢新道式に編年されている
			第6群土器（B）	中期第Ⅲ期、新道系、新崎系と新道系阿玉台系の影響の見られる融合の産物
			第6群土器（C）	中期第Ⅱ期から中期末葉まで

第7表「斜行沈線文土器」の編年的な位置づけ一覧

書　　名	著者名	発行年度	土器分類	時　期　区　分
斜行沈線文を多用する土器群の研究（長野県の考古学　1996年）	寺内隆夫	1996		勝坂Ⅰ式に平行して発達し、勝坂Ⅱ式段階で終末を迎える
姥ヶ沢遺跡（中野市）	塩原長則	1983	第6群土器（A）	中期第Ⅱ期、諏訪では、狢沢新道式に編年されている
宮遺跡（中条村）	森嶋稔ほか	1993	斜行沈線文土器	中期中葉

して充塡している。同じく278は半截竹管による半隆起線を施文している。これは深沢タイプの施文方法である。また姥ヶ沢遺跡には蓮華状文をもつ土器の胴部に指頭圧痕文が施文されるものがある。少ない例であるが、異なる系統と思われる文様要素が一つの器面上に共伴する事実は、これらの土器に施文された文様が時期的に隔絶して施文されていたのではないことを示唆してはいないか。

(4)「深沢タイプ」と北陸地方の土器

深沢タイプの土器の成立に深く関わった北陸地方の土器と深沢タイプの土器との関連性について若干の考察をしておきたい。

＊文様要素における共通点

・文様帯が口縁部文様帯と胴部文様帯に分かれ無文帯と隆帯によって区分される。

・胴部が縦区画の文様帯を持つ。

・半截竹管による半隆起線を用いる。

以上のような北陸地方の土器に一般的な文様要素が深沢タイプの土器に見られると指摘できる。逆に、深沢タイプを特徴づける文様要素が北陸地方の土器に見ることは少ない。そのために却ってそれら文様要素が、際だって見える。個別要素を取り上げることにより両地域の土器様相を捉えられるとは思えないが、重要な視点を提供しているようにも思われ北陸に見られる深沢タイプ的文様要素も以下に示した。

(1)U字状、逆U字状文

富山県八尾町長山遺跡（第15図6）　中期前葉の土器

富山県礪波市厳照寺遺跡（第13図2）蓮華状文と逆U字状文の共伴　厳照寺第Ⅱ期

石川県鹿島町徳前C遺跡（第5群土器）

石川県能都町真脇遺跡（第5図35・36・37）　第8群Ⅱ期

(2)口縁部付近に縦位に半隆起線を密に引き並べたもの

富山県八尾町長山遺跡（第15図5）　中期前葉の土器

石川県鹿島町徳前C遺跡（第3群土器1類C）　新崎式第1形式

(3)半隆起線に挟まれない（片方のみ接している）B字状文　厳照寺第Ⅰ期

富山県礪波市厳照寺遺跡（第7図5）

この中で石川県鹿島町徳前C遺跡（第5群土器）については、西野秀和氏（1983）「中部高地との交流を別の視点で見ることができると思われる。半截竹管を逆U字状に引く蓮華状文の祖形としてとらえられる。」として注目している。しかし、富山県礪波市厳照寺遺跡（第13図2）（神保孝造ほか1977）の蓮華状文と逆U字状文の共伴の状態を見ると「蓮華状文の祖形」或いは、蓮華状文との時期的な重複の可能性もあるように思われ、一方向への伝播ではなく土器文化圏相互の影響下に作られた土器とも捉えられはしないか。

一方、本調査区で出土した新崎式土器類似土器（第60図97・98）と北陸地方の新崎式土器とを比較した

場合、幾つかの相違点が挙がる。（富山県埋蔵文化財センターの方々の御教示による）

・施文が浅い……半隆起線を施文した場合、半截竹管が浅く引かれ文様の彫り込みが浅く平面的な傾向が強い。同様の指摘は、寺崎裕助氏（新潟県埋蔵文化財事業団）が深沢タイプに指摘された点でもある。

・蓮華状文の２段重ね……横位無文帯と口縁部との間に蓮華状文が２段施文されることが北陸地方ではなく、新崎式類似土器にはそれが見られる点は、類似であって同一ではないことを示し重要であると考える。

・横に流れる蓮華状文……蓮華状文がやや崩れて縦方向の沈線が斜行沈線に置き換えられて施文されているものも北陸地方にはないこと。これも土器の雰囲気を模倣しつつ、在地の土器製作の伝統の中で作られていることを示す点と考える。

・木目状撚糸文が地文として用いられていない。

以上のように、北陸地方の土器との相違点が挙げられるが、新崎式土器の雰囲気をほとんど再現した様な土器を、在地の胎土と技術を用いて製作していることは、土器が搬入されたのではなく、人的な交流がなされ情報が伝達されたことを意味している。そして、新崎式土器の模倣への相当な熱意が感じられ、文化的なつながりまたは傾斜の強さが何える。

また、たとえば97は前述したが、後沖遺跡（望月町1983）の19住居跡出土の土器（報告書第24図４）に、横位無文帯の上に２段の蓮華状文を施文する点、胴部の地文に正格子目文を施文するなど共通する要素が多く見られる。千曲川の流れに沿って展開する土器文化圏を暗示しているように思われる。

３　風呂屋遺跡の深沢タイプの土器について

(1)継手文（継手状渦巻き文）

深沢タイプの土器には、口縁部から胴部にかけて「継手文（継手状渦巻き文）」（壇原長則1983）と呼ばれる文様を持つものが多い。この文様要素は、ほかの地域で多用される例が少ないため深沢タイプの一つの指標となりうると思われる。しかし、この文様要素についての呼称は一定していない。ここでは「継手文」が最も早い時期に命名されていると思われるので、これを用いる。この文様要素は、和田村細尾中道遺跡報告書において「胴部を縦区画する『し』の字と逆さ『し』の字、及び『J』の字と逆さ『J』の字を鎖状連結させた意匠、さらにはそれを渦巻き状に入り組ませた意匠」（児玉卓文1993）とされ、また滝沢遺跡（御代田町）報告書において「連結部を有する継手隆線」（寺内隆夫1997）との記述で表現されているものである。

北陸地方では、石川県鹿島町徳前Ｃ遺跡（第８群土器Ｂ）に見ることができる。ここでは「半隆起線の端部が『し』の字状にカーブし、それを『の』の字状にかみ合わせて受けるもので渦巻き状をなす。」と記述される。点数は少ないが類似性は高い(註1)。編年的な位置づけは新保期に入るものであると考えられる。

継手文（継手状渦巻文）を見る場合に、上下にのびる半隆起線（隆帯）を文様の不可欠な一部として考える場合と渦巻き状の文様を中心にして考えるかによって相違が生じるが、今回の調査によって得られた資料では、その類似性から渦巻き状の文様を中心にして施文の状態を検討したい。

施文部位では、口縁突起に115・300、口縁部に55・56・95・106・116・135などが見られる。やや下がって口縁部と胴部の境目の頸部に施文されたものには96・97等が見られる。最も多く施文されているのは胴部である。胴部には95・125－Ｂ・184・186～193・202－Ａ・227等が見られる。

次に施文の方法の相違点であるが、単純な構成を見せるものは、上下ともに１本の隆帯で構成されてる

もので97・184が挙げられる。同じように施文されたものは口縁部の55・56・106や口縁突起115にも見られるが胴部とは施文効果に相違が見られ単純な比較はできないのではないかと思われる。胴部には半隆起線のみで構成されているものが見られ、227は1本の半隆起線で構成される。186は渦巻きより上が1本の半隆起線、下半部が2本の半隆起線によって構成され、さらにB字状文と隆帯との関連で複雑化した施文の中に見られているが、190は2本の半隆起線によって上下ともに構成されている。

次に、隆帯に半隆起線が多数沿う形のものやB字状文に伴うものは187・188など比較的多く見られる。これらは隆帯が2本平行しているものはない。98もその変形された形態の一つと思われる。

2本に分かれる傾向を見せるものは、胴部では95・202の上半がある。2本の明瞭な隆帯が平行しているものは135・300、であるが、135は口縁部の施文との関係で二本の隆帯を平行に施文した可能性もある。

この文様については「隆線2本一対化への動きである。五領ヶ台Ⅱ式前半期には一本であった隆線に、平行沈線（半隆起線）が多数沿うようになり、次段階には隆線が2本平行して貼付される傾向が生まれ、3類に至る（寺内隆夫1997『滝沢遺跡』）と言う変遷についての指摘がある。この原則によって風呂屋遺跡出土の土器を見た場合、隆線が2本平行して貼付されるものは少なく3類の段階以前の文様が多い事が指摘できる。

(2)交互刺突文

北陸地方の新崎式土器の場合、口縁部から頸部にかけて横走する半隆起線には、交互刺突文を施文しないことが一般的であると思われる。一方、風呂屋遺跡の土器では、かなり高率で交互刺突文を施文している点に特徴がある。

この施文には幾つかの特徴が見られる。まず狭い範囲に限定して施文をしていることが挙げられる。それは口縁部付近に横走する半隆起線を数本引き並べたものに見られ、半隆起線（4ないし6本程度）のうちの1本から3本程度にわたり、上方から3ないし4、下方から3程度の刺突をして組み合わせているものが多い。全体像が把握できないために確証はないが、土器の文様の単位と対応して施文されているのではないかと思われる。この場合使用している工具は、丸みを帯びた棒状のものである。深沢遺跡出土の土器を観察すると、この施文方法は2類の段階に見られる。

これに対して半隆起線の全てにわたって交互刺突文を施文するものに、137－A・137－Bなどが挙げられる。また26の胴部の横に引かれた半隆起線に施文されたものも施文範囲が長く、この部類に属していると思われる。これらは1本の半隆起線を両方向から交互刺突している。これらは深沢タイプとは雰囲気を異にしている。

またこの施文方法とは少し異なる方法で施文される交互刺突文がある。それは沈線際の刺突又は刻み目文に伴って施文されるもので105・106・108・223などに観察できる。交互刺突文は2本の半隆起線を跨いで施文され、沈線際の刺突又は刻み目文は2本の半隆起線の中央部にあたる沈線に沿って連続的に施文される。この施文の方法は深沢遺跡の3類に多く見られる。当遺跡においてもこのタイプの交互刺突文の施文工具はやや丸みを失い、棒状であっても先端は尖っている物のように思われる。ただし深沢遺跡3類の施文が106に施文された物に類縁性を感じさせるが、施文工具が丸みを帯びている点や半隆起線上の刻みに近い特徴を持つ。これに比較して風呂屋遺跡の物は多くが沈線際の刻み目文に近い特色を有する点に相違が見られる。（このように沈線際を刺突又は刻み目文を施文するものは125・126・130・133・149・151にも観察される要素である。）

(3)刺突文

当遺跡の出土土器には口縁部と頸部又は頸部と胴部との境目に当たる部分の半隆起線の際（直下）に一定の間隔を置いて刺突文を施文するものが多く観察される。55・56・59・62などは口縁部文様帯と頸部の

横位無文帯又は横位縄文帯の境目に、95・183・184・161などは頸部と胴部との境目に刺突文が施文されている。この刺突文は円形又は半円形のもので棒状具又は半截竹管の背を利用して施文され、刻み目文とは区別できる。これと同じような文様を姥ヶ沢遺跡の土器の深沢遺跡の2類と思われる土器に見ることができるが、北陸地方の土器には見られない。一方、滝沢遺跡（御代田町1996）のJ12号住居址の№164土器の刺突文に強い類縁性を感じる。この刺突文は、横走する半隆起線に伴って施文されたものであるが、204は横位と縦位の半隆起線にも見られる。更に胴部の縦位に施文された半隆起線に沿って施文される破片資料としては167・171・181・178など棒状の工具によるものがある。また施文方法には幾種類かのものが見られ半截竹管の切り口を垂直に押しつけたもの、楔形刻み目文に類似したものが見られる。(注2)

さらに97のように横位無文帯に楔形刻目文を施文するものは横位楔形刻目無文帯（真脇遺跡）と大変に類似する。これも胴部の正格子目文とともにこの土器の編年的位置づけに大きなヒントを与えている。202は『無地縁辺に楔形刻目文を充填したもの』に類似する部分が胴部に見られ、横位無文帯が水平方向の規則性を崩した時期に相当するかと思われた。

(4)深沢タイプと共伴する指頭圧痕を持つ土器について

深沢タイプと共伴する指頭圧痕を持つ土器については、「搬入されたと考えられる関東地方の阿玉台式土器に類似した土器」（西沢隆治1982）とされ深沢遺跡2類に共伴する。しかし、資料を拝見させて戴いたときの印象で、正確な数量的な比較ができないが姥ヶ沢遺跡、風呂屋遺跡、深沢遺跡の順に混入率が下がり、特に深沢遺跡の土器の中には指頭圧痕を持つ土器が少ない様に思われた。

＊指頭圧痕を持つ土器の特色

指頭圧痕文を持つ土器にも前述のように、数種類のものが見られる。これらには、この地域に影響を与えた幾つかの土器様式の特徴を見ることができ、阿玉台式にのみ影響を受けて成立したものではないと思われる。また風呂屋遺跡で最も大きな径を持つ土器が、この指頭圧痕を持つ土器であり搬入とするには大きすぎる点に注意が必要ではないか。

以下幾つかの特徴的な個体について姥ヶ沢遺跡のものも含めてふれたい。

口縁部に楕円区画文を持つもので区画内に半截竹管による半隆起線を縦位に引き並べたものがある。これは深沢タイプと阿玉台式土器のそれぞれの文様要素の融合と考えられる。また姥ヶ沢遺跡の<第六群>B土器は「口縁部文様帯は、新道式系、新崎式系、胴部は、新道式系阿玉台式系の影響の見られる融合の産物の土器」と指摘されているように、胴部に指頭圧痕文を持ち口縁部に蓮華状文を持つものもあり、この地域の土器文化を考える際に重要な要素として留意すべき点であろう。

千曲川流域の土器として注目されている斜行沈線文土器（寺内隆夫1995）が風呂屋遺跡最大の土器である。この斜行沈線文土器の研究成果をふまえて見直すとき、阿玉台式以上に千曲川上流地域の土器の強い影響を考えねばならない。また口縁部の楕円区画文内部の斜行する沈線を押し引き（角押し文）で施文して充填する方法も姥ヶ沢遺跡出土土器に見られるものの一つで、中部高地の土器の文様要素の影響と見ることができるのではないかと思われる。

以上のように、指頭圧痕を持つ土器の一群にも幾つかの要素の混合を見る。千曲川下流域と言う地理的な位置が、千曲川の上流にも下流にもつながる利点を持ち、様々な要素を吸収しながら土器を生産したと言う事ができると思われる。

(5)浅鉢

深鉢形土器には北陸から関東地方までの広範な地域からの影響を見ることができた。それは各地域の土器様式がその個性を残して、この遺跡に存在するということで、ここで各地の特色が融合した土器が成立したということではなかった。いわゆる深沢タイプの深鉢も分布地域が限定される。

ところで内面に施文された縄文時代中期の浅鉢は、深鉢に比較して、大石遺跡など八ヶ岳西南麓の地域にまで分布域を確認できる。さらに関東地方から東北地方南部に広がりを見せるものと思われる（寺内隆夫氏の御教示による）。しかし、この分布域は深沢タイプの土器分布域とは重複しない。

(6)風呂屋遺跡出土土器の胎土について

風呂屋遺跡の土器の胎土には「雲母」が多く使用されているのに対し深沢遺跡、姥ヶ沢遺跡の土器には雲母が少ない。

4　土偶について

総数30点、接合したもの2点、資料数の少ない北信地区では比較的まとまった重要な資料と思われる。

(1)大きさ

土偶の胴部のみの比較をした場合1・2・3・9・11・12等は大型に、10・13・14・15・16・17・18等は小型に分類できる。脚部・腕部・頭部もおおよそ大小2種に分けられる。

(2)形態

頭部は3点ともやや歪んだ逆円錐状で、頭頂部は平坦で側面の一部を平らにして顔面をつけている。顔面が正面を向くと後頭部がかなり下がるために、頭頂部の形態は後ろにかなり傾斜する。1・4は後頭部と側頭部に貫通孔を持つが5のみ頭頂部に結髪の表現のためにか、環状の隆帯が貼り付けられて貫通孔を持たない。眉が半円形を2つ連ねたような隆帯で表現され、目と口が刺突で施文され鼻をつけない点も共通する。

腕はほとんどが水平に張りだすか、やや上を向き左右対称に付けられている。先端の丸い四角錐状の形態で、断面形は隅丸方形又は楕円形に近く写実性には乏しい。

胴部は他の部位に比較して写実性が高い。胸部は板状に近いが3・17などは体側部に丸みを帯び、写実性に優れる。腹部は立体的で張り出し、臀部には張り出しは見られない。

脚部は円柱状または円錐と円柱の組み合わせられた形態が多い。

これらは、有脚立像土偶の部分がほとんどであると思われる。中野市姥ヶ沢遺跡出土の土偶（No.29）の像高はこれらから推定されるよりも2倍以上あろうかと思われるが、各部分の形態はよく似ており、全形も類似するものであろう。また飯山市深沢遺跡出土の土偶とも形態的に類似する。

しかし19のみは他のものとは異なって、座像形土偶と思われる。腹部から下肢にかけての右半分のみであるが、膝を曲げしゃがんだ姿勢を表現しているものと想像される。腕の部分は破損しており形態は不明である。側面形と背面形は岡谷市広畑遺跡出土の土偶に類似している。また曲線を巧みに表現している点に松本市生妻遺跡やエリ穴遺跡出土の土偶との相違が見られると思われる。

（土偶の形態については「中部高地をとりまく中期の土偶」＝「土偶とその情報研究会主催」の『土偶シンポジウム4長野大会　中部高地をとりまく中期の土偶』資料集の図版を参照した。）

(3)施文

沈線文、半裁竹管による平行沈線の施文である。棒状工具の刺突文は目と口のみで眉や身体部分への施文には見られない。半裁竹管の刺突文は1にのみ認められる。

(4)構造（製作過程における特徴）

出土した土偶は全て中実土偶である。内部の構造及び製作過程における特徴を挙げておきたい。

3・9・10・11・16の胴部には、脚を接合するための穴が穿たれている。中でも16の穴は底部に爪と思われる痕跡を観察できる。

ここから脚部の成形は円錐状または円柱状の芯を胴部の穴に差し込み、その上に更に粘土を巻いたと思

われる。いわゆるソケット式接合である。また3・11のX線撮影の映像（第73図）では、脚部の差し込み部分がかなり深く胴部に入り、胴部と密着している様子が観察できる。この密着の状態から脚部の芯になる部分を先に作り、それに胴部や脚部の肉付けをして成形していく方法も予想される。しかし、3の胴部に穿たれた穴の形態は断面から観察すると指の形に大変よく似ている。また16の穴の底部には爪の跡と思われる痕跡がみられ、胴部成形時、指などで穿孔し脚部の芯を棒状の粘土で作って差し込む方法の可能性も大きいと思われる。

また11は脚部を接合する「穴」をあけられた上部に胴部の芯になる粘土塊の境界部分の剝離痕が横方向に明瞭に見られる。これは勝坂式期土偶の分割塊製作法（小野正文1986「縄迦堂Ⅰ」）に類似する。いずれの方法の場合も胴部と脚部を別に作って成形することに構造上の特徴がある。

また、胸の中央部付近にあまり大きくはないが「穴」をあけられた部分を持つ。この穴は位置から推定して首が差し込まれたと考える。ただし首が接合した1はX線撮影の結果でも内部の構造が明らかにならず、実例を示すことができない。

また中信や千曲川上流域の土偶に見られる芯棒接合を示す資料は認められなかった。

(5)土偶の系譜と時期について

以上のように、頭部、胴部、脚部などの形態的特色は中野市姥ヶ沢遺跡出土土偶に最も類似する。また飯山市深沢遺跡出土土偶にも近似している。金井汲次氏は、上野遺跡、沖ノ原遺跡（新潟県津南町）出土土偶への近似性、縄文中期中葉への位置づけ、新崎遺跡（能登）を源流とする等重要な指摘をされたが（姥ヶ沢1983）、この指摘は今調査の出土遺物にもあてはまろう。また小林康夫氏は、長野県の土偶は中期中葉（狢沢式期から井戸尻式期）に「最もバラエティーに富む」ことと「地域性が顕著になる」こと、そして北信地域では姥ヶ沢遺跡出土の土偶に見られるように河童形土偶を主体に、中空土偶（深沢遺跡）、小形土偶が出現し新崎式土器との関連が強い（小林康夫1996）と言う指摘をされている。また守矢昌文氏も姥ヶ沢遺跡出土土偶の時期を「中期前葉第Ⅱ段階－狢沢式期から藤内Ⅱ式期まで」（1996）としており今調査出土の土偶もほぼ同じ時期に位置付けられよう。また座像形又は座産形土偶の存在からは、中信地区との関連性も考えねばならないだろう。

以上のような諸氏の研究成果からも本遺跡出土の土偶は新崎式土器と強い関連性を持ち、中部高地の土器文化の影響も受けており、それは土器様相に見られる北陸や中部高地、東関東地方との関わりに対応しているものと思われる。

註

1　第36図335・336（徳前C遺跡報告書）の2点である

2　これは南久和氏が上山田遺跡出土土器について分析（南久和1985）の中で連続刺突沈文と区別して扱った、『半截竹管の垂直刻印による馬蹄形の文様』や『無地縁辺に楔形刻目文を充填したもの』に類似する。また、半截竹管の切り口を垂直に押しつけたものについては諏訪郡原村の大石遺跡（昭和50年長野県教育委員会）の縄文時代中期中葉土器、和田村の縄瑤中道遺跡出土の中期初頭の土器などに多くの類例を見る。

参考・引用文献

甘粕　健ほか　　1982『厚通り八ツ塚遺跡』新井市教育委員会

石川県立埋蔵文化財センター　1983『鹿島町徳前C遺跡調査報告書（Ⅳ）』

石原正敏・菅沼　亘1996「横割遺跡」『十日町市史』十日町市史編さん委員会

江坂輝彌ほか　　1962『上野遺跡』中魚沼郡津南町教育委員会

児玉卓文　　1993 『細尾中道』和田村教育委員会

黒岩　隆　　1993 「深沢遺跡」『飯山市誌』　飯山市教育委員会

高橋　保　　1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」「新潟考古学座談会会報」第４号

塩原長則　　1983 『姥ヶ沢遺跡』中野市教育委員会

塩原長則　　1987 『宏源寺遺跡』中野市教育委員会

親跡　裔　　1988 『南田遺跡』中頸城郡中郷村教育委員会

寺内隆夫　　1991 「第10類土器」『茂遺跡』小川村教育委員会

寺内隆夫　　1991 「長野県上水内郡三水村・上水塩遺跡出土の縄文中期土器について」「長野県考古学会誌61・62」

寺内隆夫　　1994 「屋代遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報』11

寺内隆夫　　1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」「長野県の考古学」（財）長野県埋蔵文化財センター

寺内隆夫　　1997 「御代田町滝沢遺跡出土の縄文中期前葉（滝沢Ⅳ期）の土器について」「滝沢遺跡」御代田町教育委員会

寺崎裕助　　1990 「上越市西戸野花立遺跡の中期縄文土器」「新潟考古学座談会会報」６

富山県教育委員会　1977 『厳照寺遺跡』

富山県八尾町教育委員会　1985 『長山遺跡』

豊田村誌刊行会　　1963 『豊田村村誌』

長野県史刊行会　　1981 『長野県史考古資料編全一巻（一）遺跡地名表』

中村由克・中村敦子1995 「貫ノ木遺跡・日向林Ｂ遺跡発掘調査報告書」　信濃町教育委員会

新潟県教育委員会　1992 「五丁歩遺跡・十二本遺跡」

西沢隆治　　1982 「深沢遺跡」「長野県史考古資料編全一巻（二）主要遺跡（北・東信）」長野県史刊行会

西野秀和　　1983 「第５章第３節縄文時代について」「鹿島町地前Ｃ遺跡調査報告書（Ⅳ）」石川県立埋蔵文化財センター

能都町教育委員会真脇遺跡発掘調査団　1986 『真脇遺跡』

野村一寿　　1989 「「縄文土器大観」の勝坂式土器関連解説を読んで」「下総考古学第」11

伊　信夫ほか　　1975 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その１、富士見町その２　大石遺跡」74

福島邦男　　1983 「後沖遺跡」　望月町教育委員会

三上徹也　　1988 「中期中葉土器」「長野県史考古資料編全一巻（四）遺構・遺物」長野県史刊行会

南　久和　　1985 「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」「南久和著作集第１集」

南　久和　　1985 「北陸の縄文中期に見られる連続刺突沈文について」「南久和著作集第１集」

森嶋稔ほか　　1993 「宮遺跡」中条村教育委員会

土偶とその情報研究会　1996 『土偶シンポジウム４長野大会　中部高地をとりまく中期の土偶」資料集

小野正文ほか　　1986 「沢海盆Ⅰ」山梨県教育委員会

小林康夫　　1996 「長野県の中期土偶」「中部高地をとりまく中期の土偶　シンポジウム発表要旨」

守矢昌文　　1996 「長野県における縄文中期前葉の土偶の様相」「中部高地をとりまく中期の土偶　シンポジウム発表要旨」

第６章　対面所遺跡

第１節　遺跡と調査の概要

１　歴史的環境

対面所遺跡は長野県上水内郡豊田村大字豊津字対面所637番地、ＪＲ飯山線替佐駅の西500ｍ、中世山城である替佐城（別名対面城、標高463ｍ）が築造されている替佐城山の東南斜面の中腹に立地する。千曲川を挟んだ対岸には、長丘・高丘丘陵が南北に延び、その北部には壁田城がある。壁田城は対面所遺跡から北東側、直線距離で約３㎞に位置する。

遺跡の上方に位置する替佐城は階段状に並んだ3つの郭を有する城で、各郭は堀切りによって区分されている。南東郭に馬出しと称する大手門があり、北西側に裏門がある。築城年代は不明であるが、小畑上総介の居城といい、堀の傍に小畑上総介墳墓の石碑がある。また、城郭の形態・大きさなどから戦国末期の修築と考えられている（新人物往来社1980）。替佐城は標高約460ｍにあり、約100ｍの比高差、大手門から東へ約300ｍ斜面を下ったところに対面所が位置する。

また替佐城から450ｍ北東側、対面所から小谷を挟み450ｍ北側に中世の塚が発見された飛山遺跡がある（第98図）（飛山遺跡の詳細は第７章参照）。

さらに、遺跡の約1.5㎞南東には今井城跡（北城山）、南約１㎞には今井館跡（風呂屋敷跡あるいは内堀館）が存在するが発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。今井城は今井四郎兼平（～1181?）在城と言われているが定かではない。今井館跡も今井兼平の館跡という伝承がある。今井館跡北方約120ｍの地点から応仁元年（1467）の銘のある宝篋印塔が発見されている。

２　調査の概要

(1)　調査範囲と調査方法

第98図に調査範囲を示した。調査地の斜面上方は道路の建設工事が進行しており、五輪塔の分布範囲であったか否かは不明であるが、地表で五輪塔を確認したところを調査範囲とした。また、整理作業にあたり、調査時の調査地点の名称（五輪塔採集地点名）を次のように変更した。

第１地点（旧８区）、第２地点（旧５区）、第３地点（旧６区）、第４地点（旧９区）、第５地点（旧７区）、第６地点（旧11区）、第7地点（旧10区）、第8地点（第12区）、第９地点（旧Ｂ群）、第10地点（旧４区）、第11地点（旧Ａ群）、第12地点（旧２区）、第13地点（旧１区）、第14地点（旧３区）。また五輪塔群に番号を付し、第３地点を第１、第10地点を第２、第６地点を第３、第４・５地点を第４五輪塔群とした。

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い設定した。第99図に大地区と五輪塔採集地区と遺構群との関係を示した。調査区内の方眼交点の座標は次の通りである。

ⅡＫ01（小グリッド）　Ｘ＝85120.000　Ｙ＝－16000.000

ⅡＰ01（小グリッド）　Ｘ＝85080.000　Ｙ＝－16000.000

(2) 調査経過

高速道路用地外では替佐城（対面所城）が知られていたが、今回報告する対面所遺跡は確認されていなかった。替佐城山麓の高速道工事用道路工事中に第99図第１地点から第14地点で五輪塔が発見され、遺跡の存在が確認され、調査するに至った。

調査は五輪塔の表採された地点を中心に、既に削られた工事用道路を除く地点で以下の手順で進めた。

表土を重機で除去し、五輪塔が多く出土している地点にトレンチを設けて遺構検出にあたった。調査は五輪塔の出土量が多かった標高の低い地点から斜面上方に向かって進めた。地山である黄褐色土層上に残る五輪塔を調査し、空測の後取り上げた。その後下部施設の検出を行い、やはり空測により実測を実施した。なお遺跡中央部第５・６地点（Ｐ２・Ｐ７グリッド）西側は調査中に斜面上部の盛り土が崩落する危険性があり、第３五輪塔群と第４五輪塔群の調査は中途で断念せざるを得なかった。また、その西側の斜面上部では工事用道路建設が始まっており、調査範囲外の遺構の広がりは確認できなかったが、表採状況や掘削面の観察からすれば、用地内での広がりは、調査範囲内にほぼとどまるものと考えられる。しかし対面所遺跡全体としての五輪塔群およびその他の遺構の分布範囲が用地外に及んでいる可能性は否定できない。

替佐城周辺で発見された五輪塔は、現在、替佐城山の南東側中腹の墓地に移築された風呂屋古墳と共に保存されている。替佐城麓の住宅の庭先にも、対面所遺跡で出土したと同様の五輪塔が数基みられ、地元住民の話では、替佐城麓の畑に転がっていた五輪塔を庭先に供養しているという。多数の五輪塔が中世当時の墓地にあったものと想定される。また五輪塔の分布範囲は、替佐城東斜面中腹から麓にかけて広がっていたことが想定される。その一部は現在も墓地であり、高速道工事に伴い改葬・移築された。

工事により、五輪塔は第１地点から第14地点のいずれの場所においても滑落していた。特に第14地点では滑落した五輪塔の数が多く、周辺で採集された五輪塔が工事関係者によりまとめて置かれていた。

調査は五輪塔群の原位置及び分布状況を調べるため、これら五輪塔が散布した部分を中心にトレンチを設定し、調査を行った。

その結果第３地点から第６地点、第10地点において五輪塔が確認されたが、原位置をとどめたものは少なかった。その中でも第３地点は原位置をとどめるものがみられた。第５・６地点では五輪塔とともに火葬骨埋納ピットも検出されたが、調査区外は工事が既に進み、斜面の上方は盛土されていた。この地点を掘り下げると土砂崩壊の危険性があり、第５・６地点の斜面上部の調査は断念した。

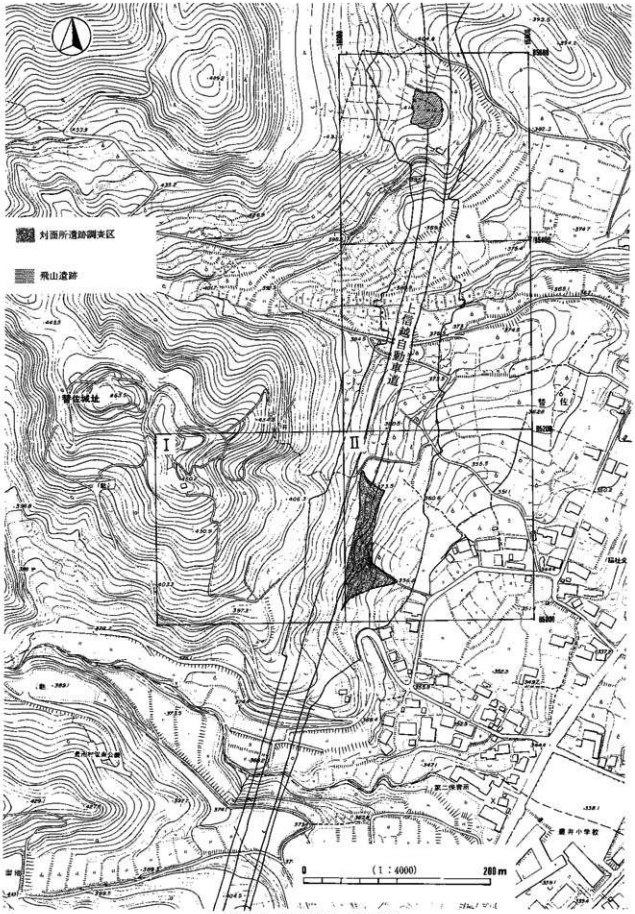
調査日誌抄

調査機関　平成7年4月3日～同年5月17日

4月３日　重機による表土剥ぎ開始。
4月５日　発掘開始式。
4月６日　第10地点にて五輪塔と焼骨出土。
4月７日　祓清式
4月13日　第６地点にてピット内に埋葬された焼骨確認。
4月20日　第３地点の土抗調査開始。
4月24日　第３地点より焼骨多数出土。
4月26日　墨書文字が書かれた空風輪発見。
4月27日　空撮・空測実施（株式会社こうそくに委託）。豊井小学校６年生見学。
豊田村ローカルＴＶ取材。
5月２日　第３地点のピット26・35から古銭出土。火葬施設（ＳＫ０４）の調査開始。
5月10日　五輪塔を調査事務所に搬出。
5月11日　器材撤収し、牛出遺跡へ引越し。
5月13日　空測・空撮実施（株式会社こうそくに委託）。
5月16日　一部を残し牛出遺跡の調査に移る。五輪塔取り上げ。
5月17日　対面所遺跡調査終了し、牛出遺跡の調査に合流。

(3) 調査結果の概要

五輪塔群は標高約367ｍから378ｍまでの間で検出された。第1地点から第８地点までは約30度の急斜面である。調査時には遺跡を南北に縦断して工事用道路が作られ、幅約５ｍほどの範囲が削平されていた。



第98図　対面所遺跡　調査範囲

五輪塔の固まって多数出土した地点を「五輪塔群」とし、第1から第4五輪塔群とした。また第1五輪塔群は斜面にテラスが2段あり、それを上段と下段テラスとした。

それぞれの五輪塔群から発見された各五輪塔と火葬骨埋納ピットと火葬施設の概要は第8・9表の通りである。

出土遺物は五輪塔以外に、火葬骨埋納ピットから出土した古銭、鉄釘、表土中から発見された珠洲焼きの甕片、石臼などがある。

(4)　基本土層（第99図）

Ⅰ層　表土層

Ⅱ層　褐色土層（7.5YR4/4）。褐色粒子や黄色粒子を含む粒子の粗い土層。

Ⅲ層　暗褐色土層（7.5YR3/4）。暗褐色土に褐色ブロックを含むカリカリした水分の少ない粒子の粗い土層。

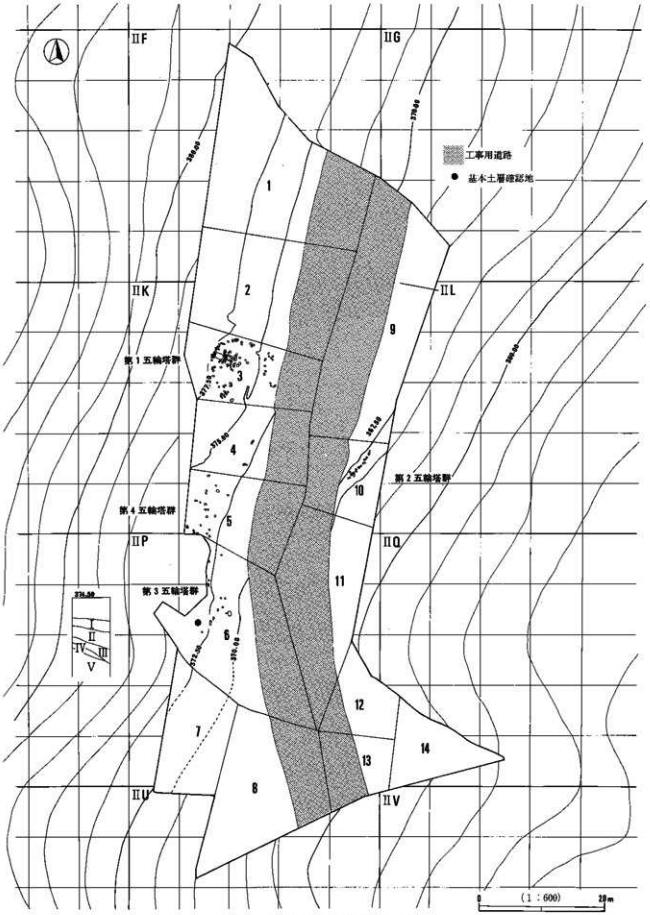
Ⅳ層　暗褐色土層（7.5YR2/4）。Ⅲ層に類似する。小石が混じり粒子が粗く、褐色ブロックを含む。

Ⅴ層　明褐色土層（7.5YR5/8）。小石と粘土混じりの砂質層。

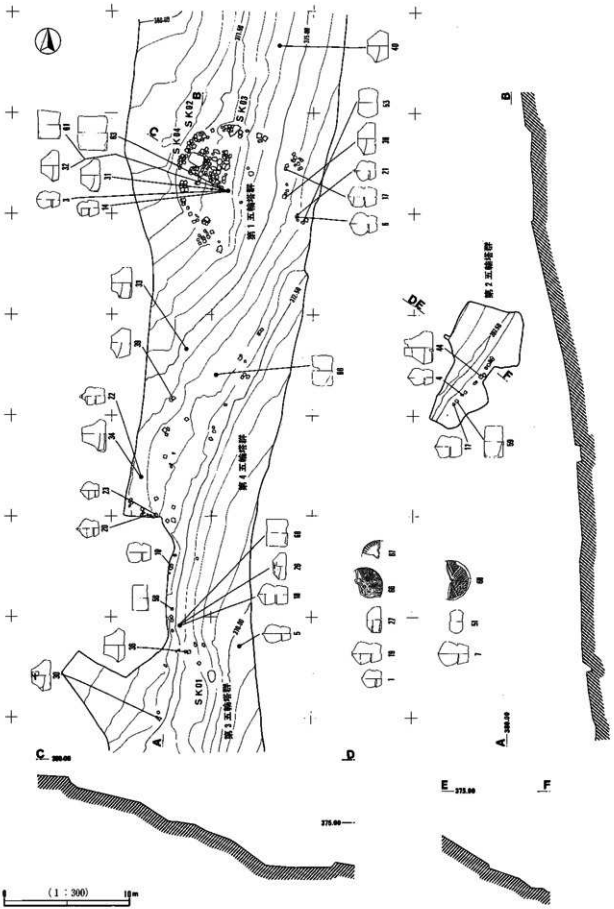
Ⅱ層からⅣ層は崩落層と思われる。

第8表　対面所遺跡　出土地点別五輪塔数と遺構数

/出土地	空風輪(点)	火輪(点)	水輪(点)	地輪(点)	台座(点)	五輪塔合計	火葬骨埋納ピット(基)	火葬施設(基)		
第1五輪塔群上部テラス	22	51	38	20	2	133	70	3		
下部テラス	6	6	3	0	0	15	11			
表採	4	4	2	3	0	13				
小計	32	61	43	23	2	161	81	3		
第2五輪塔群	7	2	2	1	0	12	0	0		
表採	1	2	0	2	0	5				
小計	8	4	2	3	0	17				
第3五輪塔群	4	5	3	4	0	16	8	0		
表採	9	10	5	1	0	25				
小計	13	15	8	5	0	41	8			
第4五輪塔群	6	9	7	6	0	28	9	1		
表採	5	23	1	3	0	32				
小計	11	32	8	9	0	60	9	1		
第2地点	1	2	2	1	0	6				
第9地点	1	2	1	0	0	4				
第14地点	6	13	11	2	1	33				
表採	2	0	3	1	0	6				
合計	74	129	78	44	3	328	98	4		



第99図　対面所遺跡　調査地点割図



第100図　対面所遺跡　遺物出土状況（数字は図版番号）

第9表　対面所遺跡　火葬骨埋納ピット一覧表

ピット番号	五輪塔群名	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	平面形態	出土遺物
1	第1上段	32×36	3	円形	焼骨片
2	第1上段	36×32	4	円形	焼骨片
3	第1上段	36×35	6	円形	焼骨片
4	第1上段	28×28	11	円形	焼骨片
5	第1上段	20×24	8	楕円形	焼骨片
6	第1上段	24×23	7	円形	焼骨片
7	第1上段	25×25	不明	円形	焼骨片
8	第1上段	22×23	19	円形	焼骨片
9	第1上段	20×20	14	円形	焼骨片
10	第1上段	24×22	10	円形	焼骨片
11	第1上段	23×24	9	円形	焼骨片
12	第1上段	19×20	15	円形	焼骨片
13	第1上段	20×20	16	円形	焼骨片
14	第1上段	28×31	4	円形	焼骨片
15	第1上段	25×27	10	円形	焼骨片
16	第1上段	23×22	15	円形	焼骨片
17	第1上段	22×20	4	円形	焼骨片
18	第1上段	50×36	11	円形が重複	焼骨片
19	第1上段	26×24	5	円形	焼骨片
20	第1上段	24×20	19	円形	焼骨片
21	第1上段	22×30	13	楕円形	焼骨片
22	第1上段	14×20	4	円形	焼骨片
23	第1上段	54×31	14	楕円形	焼骨片
24	第1上段	34×34	16	円形	焼骨片
25	第1上段	32×30	10	円形	焼骨片
26	第1上段	46×43	15	円形	焼骨片 古銭3枚
27	第1上段	34×43	11	円形	焼骨片
28	第1上段	26×25	13	円形	焼骨片
29	第1上段	35×30	17	楕円形	焼骨片
30	第1上段	26×26	8	円形	焼骨片
31	第1上段	30×30	4	円形	焼骨片
32	第1上段	21×20	不明	円形	焼骨片
34	第1上段	27×24	10	円形	焼骨片
35	第1上段	32×38	13	円形	焼骨片 古銭2枚
36	第1下段	27×25	10	円形	焼骨片
37	第1下段	35×32	18	円形	焼骨片
38	第1下段	22×16	7	円形	焼骨片
39	第1下段	28×25	9	円形	焼骨片
40	第1上段	24×27	4	円形	焼骨片
41	第1下段	30×28	10	円形	焼骨片
42	第1下段	35×38	7	円形	焼骨片
43	第1下段	20×25	11	円形	焼骨片
44	第1下段	22×25	15	円形	焼骨片
45	第1上段	34×34	10	円形	焼骨片
46	第1上段	23×24	12	円形	焼骨片
47	第1上段	32×33	21	円形	焼骨片
49	第3	18×17	6	円形	焼骨片
50	第3	20×17	10	円形	焼骨片
51	第4	22×23	11	円形	焼骨片
52	第4	26×27	15	円形	焼骨片
53	第4	30×33	12	円形	焼骨片
54	第4	30×33	5	円形	焼骨片
55	第4	30×27	7	円形	焼骨片
56	第4	26×30	7	円形	焼骨片
57	第4	22×17	8	円形	焼骨片
58	第3	60×48	不明	不定形	焼骨片
59	第3	38×20	不明	楕円	焼骨片
60	第3	26×33	8	円形	焼骨片
61	第3	25×25	不明	円形	焼骨片
62	第3	22×23	20	円形	焼骨片
63	第1下段	32×28	13	円形	焼骨片
64	第4	26×23	不明	円形	焼骨片
65	第1下段	50×52	25	円形	焼骨片
66	第1上段	28×28	14	円形	焼骨片
67	第1上段	28×30	15	円形	焼骨片
68	第1上段	22×20	9	円形	焼骨片
69	第1上段	30×30	9	円形	焼骨片
70	第1上段	41×40	22	円形	焼骨片
71	第1上段	26×24	7	円形	焼骨片
72	第1上段	22×17	9	円形	焼骨片
73	第1上段	22×22	12	円形	焼骨片
74	第1上段	24×40	14	楕円形	焼骨片
75	第1上段	24×32	16	円形	焼骨片
78	第1上段	26×24	6	円形	焼骨片
80	第1上段	26×31	9	円形	焼骨片
81	第1上段	26×27	8	円形	焼骨片
83	第1上段	41×30	18	楕円形	焼骨片
84	第1上段	30×27	5	円形	焼骨片
86	第1上段	41×32	12	楕円形	焼骨片
87	第1上段	27×26	9	円形	焼骨片
88	第1上段	28×32	7	円形	焼骨片
89	第1上段	26×26	12	円形	焼骨片
90	第1上段	33×30	10	円形	焼骨片
91	第1上段	23×22	5	円形	焼骨片
92	第1上段	21×21	5	円形	焼骨片
93	第1上段	24×26	8	円形	焼骨片
95	第1上段	45×32	21	楕円形	焼骨片
96	第3	30×30	25	円形	焼骨片
97	第3	22×23	12	円形	焼骨片
98	第3	28×22	13	円形	焼骨片
99	第1上段	28×25	5	円形	焼骨片 古銭4枚
100	第1上段	28×25	3	円形	焼骨片 古銭2枚
101	第1上段	22×20	9	円形	焼骨片
102	第1上段	24×26	5	円形	焼骨片

第2節　遺構

1　第1五輪塔群（第101～105図）

位置：第3地点

調査過程：第3地点では多数の五輪塔が斜面下工事用道路に滑落していた。原位置を追究するため、傾斜に沿ってトレンチを設定した。斜面上段のテラスでは配列した地輪が出土し、周辺から五輪塔および下部施設などが検出された。

覆土の堆積状況：褐色（粘土質）土層の上に配列した地輪があり、他の五輪塔の多くは焼骨や炭化ブロックを含む黒褐色土や暗褐色土中に堆積していた。造墓後3回の崩落があったと思われる。（第102図A－B）

遺構と出土遺物：

①テラス（第101～103図）

第1五輪塔群は上段テラスと下段テラスに大きく2分されたテラスが作られていた。

上段テラスは、標高375.5m～377.5m、標高差2m、南北約10m、東西約6mの半円形に削り出されたテラスであった。火葬骨ピットの配列や地輪の配列から7列の階段状の小テラスが造られていた。1～2列目は明確に階段状をなし、3列目は明確な階段をなさないが斜面に削りだしが行われている。5～7列目は約1mの比高差がある。削りだしは確認できなかったが火葬骨埋納ピットや遺物の検出状況から削りだしが行われていたと判断した。恐らく、削りだされた部分が崩落したのであろう。テラスの北側1～4列目には地輪や大きな礫が残っていたが、南半および5列目以下では地輪等が原位置を保つと思われるものはなかった。その部分が崩落したためと思われる。

下段テラスは、標高374.6～374.7m、幅1.1m長さ3.0mを測り南北に長い、平坦な部分を利用して削り出したと思われる。

②五輪塔（第101図）

1列目の小テラスでは、地輪4点（230・250・252・253）と台座2点（229・249）が横に並び、若干の弧状を成していた。この並びに近接する東側にも地輪（262）1点が検出された。また、その中央部の西側（斜面上方）から出土した地輪（240）の上部に水輪（235・239）、火輪（236・237）、空風輪（234・238）が覆いかぶさるように出土した。地輪は原位置をとどめているが、他の五輪塔は斜面上方から滑落したものと思われる。

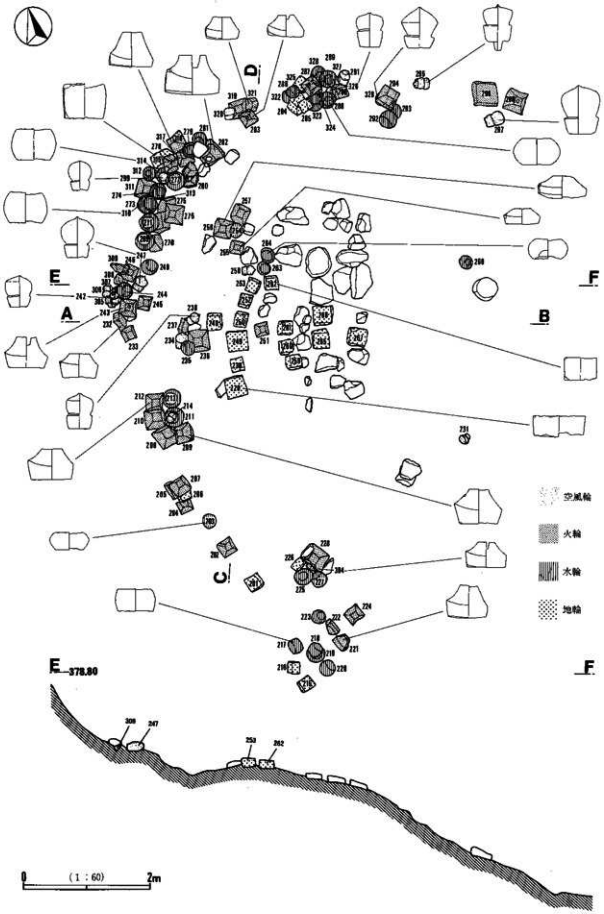
2列目小テラス中央に3点の地輪（259～261）が横に並んでいた。

3列目小テラスはわずかな段差がみられる。中央に2点の地輪（265・266）が横に並び、その北側に偏平な大形礫（約50～60cm×40cm）が2個横に並んでいた。

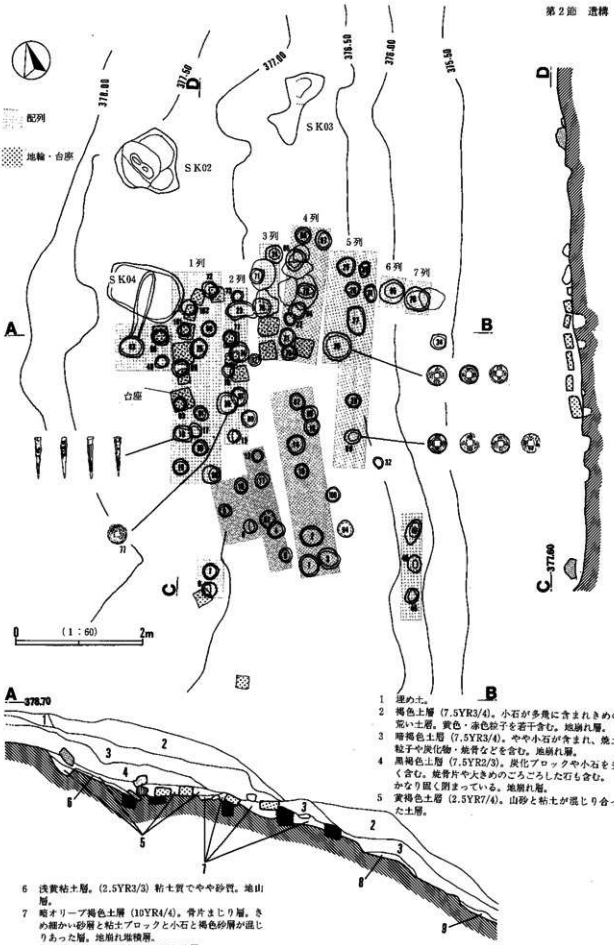
4列目小テラス北側に地輪（267）と偏平な大形礫3個（約50～60cm×30cm）が配されていた。地輪や大形礫の出土レベルは3列目のものより約5～10cm低い位置である。

5～7列目では、削りだしが崩落しており、ほとんどの五輪塔は斜面下方へ滑落したものと判断された。

以上の配列状態で出土した五輪塔以外は、テラス外周に弧状をなして出土した。南西側に地輪2点（201・215）、北側に地輪1点（284）が出土した。ほかに空風輪15点・火輪42点・水輪31点・地輪8点がテラス外周でいくつかのグループに分かれて出土した。これらは斜面上方の別の五輪塔群から落下（第



第101図　対面所遺跡　第１五輪塔群上段部遺物出土状況（数字は遺物番号）



第102図　対面所遺跡　第1五輪塔群上段部火葬骨埋納ピットの配列と土層（数字はピット番号）

102図5層）し、浅黄色粘土上に、堆積したと思われる。

下段テラス（第103図）からは、空風輪6点、火輪が6点、水輪3点がテラス上に出土したが、ピットの状況から上段斜面から滑落したものと思われる。

表土から出土した空風輪4点、火輪4点、水輪2点、地輪3点を加えると、空風輪32点、火輪61点、水輪43点、地輪23点、台座2点が発見され、第1五輪塔群は一番数の多い火輪から、少なくとも61組の五輪塔があったものと思われる。

③火葬骨埋納ピット（第102図）

火葬骨埋納ピットは81基あり、さきの小テラスに列状に並ぶ。その形態は径約25～30cm、火葬骨確認面から深さ約10cm前後の筒状の掘り込みを持つ。ピットは五輪塔や大形礫を取り上げた後に検出された。土層の色調の違いでは検出できず、焼骨・炭化物・焼土が多く混入することからピットであると判断した。五輪塔を取り上げた面から5cm以上掘り下げて、初めて焼骨等が確認できる例もあった（第9表参照）。第102図のピットの切合はピット番号の若い方が古い。

上段テラスでは、1列目西側中央に1基（P83）が単独で存在し、その東側に2基（P40・68）が横に並ぶ。東側には配列した地輪や台座と同じ並びにピット列（P18・19・93・69・101・102・72・85・25・91・17・88）が認められた。また、その列から南に1.5m離れて2基（P6・7）が確認できる。

2列目の小テラスには中央から北側にかけて二列平行して計9基（P13・35・79・74・77・23・73・97・80）が認められる。南側はピットが5基（P5・4・82・11・12）横に並び、その西側（斜面上方）に2基（P8・10）、さらにその西（斜面上方）に1基（P9）が確認された。

2－3列間は1－2列間より大きな段差を形成していた。3列目は北半にしかないが、3基（P76・71・24）認められた。テラス南側では2列目と4列目の間は空白になっている。

3－4列間は2－3列間よりも段差が若干大きい。4列目では北側に8基（P75・21・22・84・78・86・65・67）のピットが確認された。そのうち2基（P78・86）は大きな偏平礫の真下で確認された。

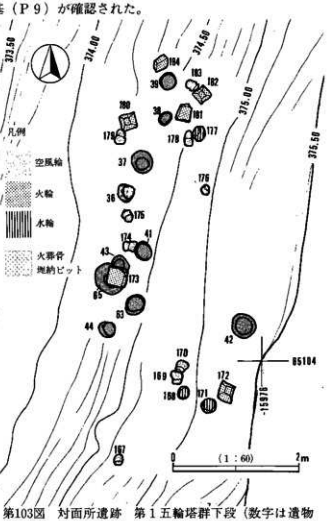
これらとやや間を置いて、中央部に5基（P14～16・87・89）さらに南に3基（P1・2・3）と2基（P94・100）が並ぶ。

5列目では北側に6基（P26～31）のピットが横に並び、中央部では3基（P20・99・32）のピットがやや間隔をあけて確認できた。

6列目では南側部分に3基（P45～47）のピットが並び、北側では5－6列目段差下に1基（P95）が確認された。このP95は7列目のP70と接している。

7列目では2基（P70、34）のピットが確認された。

下段テラス（第103図）では、テラス上に横並び



第103図　対面所遺跡　第1五輪塔群下段（数字は遺物番号）

8基（P36～39・41・43・44・63・64）と、テラスから南東側に下がった標高373.9mの位置に1基（P42）が確認された。しかし、火葬骨埋納ピット上部には地輪や大きな礫などは確認されなかった。いずれも火葬骨の小片だけが検出され、覆土は薄く、東側の壁面を失っていた。ピットの上部がかなり崩落してしまっていることが推察される。

以上のようにそれぞれのピットの火葬骨は1体分と思われる。火葬骨の量は遺体の大きさ・焼成時の火力等の違いで、その量に差があったと推察され、そのためピットの大きさにも若干の違いがみられるのであろう。

ほとんどのピットは筒状であるが、P18は角柱状であり、ピット内から釘が15本出土し、四角い木箱が用いられたものであろう。

また、銭が埋納されているものもある。P26からは火を受けた銭3枚（永楽通宝・紹聖元宝・祥符元宝）が出土している。P35からは銭2枚が出土しているが、火を受けて銭種不明である。P99からは銭3枚（絽寧元宝・政和通宝・紹定通宝）、P100からは銭2枚（洪武通宝・元祐通宝）が出土している。

④火葬施設

ＳＫ０２（第104図）

位置：第1五輪塔群北西外周部（Ｋ０７）。

調査経過：第3地点の五輪塔群は横に並ぶ五輪等群を囲むようにテラス山側に五輪塔が積み重なっていた。

その積み重なった五輪塔の上層で、約100cm×100cmの範囲に焼骨を含む黒褐色土層の広がりを確認した。

切り合い：ＳＫ０２の掘り込み内から出土した五輪塔の上に焼骨や焼土が載っており、五輪塔はＳＫ０２の壁面として利用されていた。

形状規模：長軸約120cm短軸約80cmで中央部南側に20cm×30cmの張り出し部がある。東西方向に長く、東側では深さ50cmで床面は平らであるが、西側の壁はほとんど立ち上がらない。張り出し部は焼土化が著しい。張り出し部の左右には礫が1ヶずつ配されていたが、ふたつとも被熱している。土坑底面中央部には底面の凸凹した溝があり、張り出し部につながっている。

覆土堆積状況：上方から崩れ落ちた五輪塔の堆積面に土坑を掘り、五輪塔の露出した部分を土坑の壁面に用いている。また、五輪塔は壁面の位置によって被熱の程度が異なっていた。炭化物・焼骨が多く認められ、火葬施設と考えられる。

出土状況と遺物：ＳＫ０２の底面の下層から火輪（316～318）地輪（315）などが出土しているが、これらはＳＫ０２の構築以前のものと思われる。その他に279（水輪）・280（火輪）・281（水輪）・282（火輪）・318（火輪）が出土した。282の火輪の笠部分は火を受け、割れている。土坑西側に位置した278の火輪笠には炭化物と焼土が付着している。

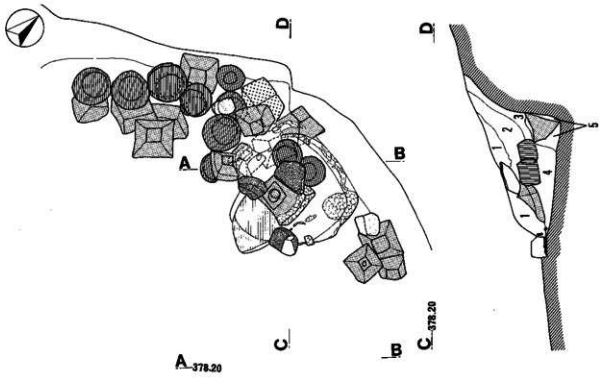
ＳＫ０３（第105図）

位置：第3地点、第1五輪塔群北東側。

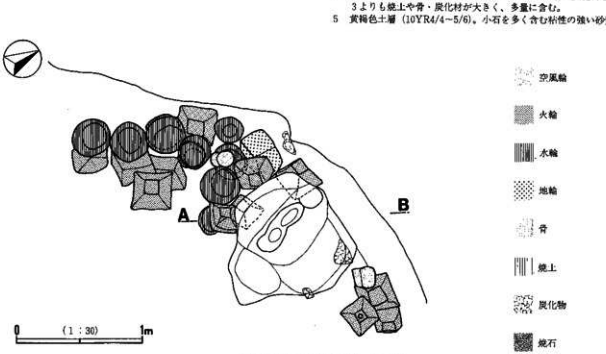
調査経過：第1五輪塔群の北西側に五輪塔の各部分がまとまって検出された。この部分の検出過程で焼土や炭化材を埋土に含む土坑を検出した。掘り下げたところ土坑壁の大半は崩落していたが、底面の一部が残存していた。

形状規模：本来の形状は不明であるが、底面と思われる焼土や炭化材の残る面は120cm×50cmほどの不定形を呈していた。

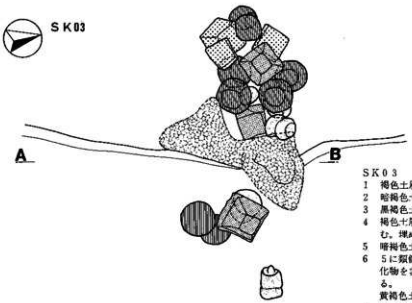
覆土の堆積状況：南側の覆土は5cmと薄く、東側では幅30cm深さ20cmの溝状の落ち込みが確認された

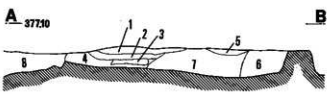


1　暗褐色土に黄褐色ブロックと焼土粒子、骨片混じり層。
2　黒褐色土層（7.5YR2/3）。炭化物を多く含み骨片と焼土ブロックを含む。
3　褐色土層。（7.5YR3/3）。焼土ブロックや炭化材を含む。
4　褐色土（10YR4/4）。粘性が強く焼土ブロックや骨・炭化材を多く含む。
　3よりも焼土や骨・炭化材が大きく、多量に含む。
5　黄褐色土層（10YR4/4～5/6）。小石を多く含む粘性の強い砂質地盤層。



第104図　対面所遺跡　ＳＫ02





空風輪

火輪

水輪

地輪

SK03

1　褐色土層　(7.5YR4/3)

2　暗褐色土層　(7.5YR4/3)

3　黒褐色土層 (7.5YR3/2)

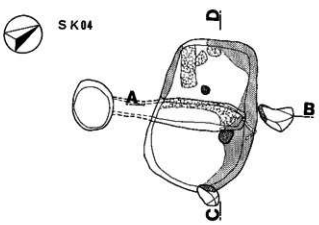
4　褐色土層。小石を含む赤褐色粒子、黄褐色土粒子を含む。埋め戻し土。

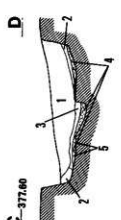
5　暗褐色土に炭化物焼土骨片を含む。

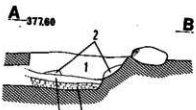
6　5に類似。暗褐色土に大きい焼骨片と焼土ブロック炭化物を青雷に多く含む。炭化物は木炭片のようである。
黄褐色土が混入している。

7　黄褐色粘土層。小石が多く混入している。

8　暗褐色土に黄褐色粘土ブロックと小石が斑に混入。







骨

焼土

炭化物

焼石

SK04

1　褐色土層 (10YR4/4) 炭化物焼土粘土ブロックを含む。
埋め戻し土と思われる。

2　黄褐色粘土ブロック (2.5YR5/6)。

3　灰オリーブ色 (7.5YR4/2) オリーブ黄色のブロック粘土を含む。灰が溜った層。焼骨片を含む。

4　黒色層 (炭化材の層)。

0　(1：30)　1m

第105図　対面所遺跡　SK03・04

（第105図土層6層）。覆土6層は焼骨片・焼土・炭化物を含む。また西側部分では窪みに五輪塔の部分などが堆積した状況を示し、炭化物・焼土などの混入した暗褐色土が堆積していた。

遺構と出土遺物：焼骨片は多いがほとんど細片である。土坑西側、上面から空風輪（291）、火輪（287・290）、水輪（286～289）、地輪（284・286）が出土し、その下位から空風輪（291・326・327）水輪（322・323・328）地輪（325）が出土した。

西側の五輪塔がまとまっていた部分から焼土炭化物面までが火葬施設であったと思われるが、土抗が廃棄された後、その窪み部分に五輪塔がまとまるように堆積したものと思われる。

ＳＫ０４（第105図）

位置：第３地点、第１五輪塔群の第１列目の地輪の北側。

調査過程：第１五輪塔群を検出中に黒色土の方形のプランを確認。五輪塔群の全体を確認した時点で四割りにして調査した。

形状規模：規模は120cm×80cm、深さ25cmで、東西を長軸とする、長方形の土抗で中央に幅25cmの溝が南側に貫通し、Ｐ83につながる。

覆土の堆積状況：底面上に炭化材層、その上層に焼骨を含む灰層が堆積する。炭化材との関係からすれば灰は骨灰であろう。また、覆土全体に焼骨が散在していた。

出土状況と遺物：少量の焼骨片と多量の炭化物片が底面にみられ、溝内には棒状の炭化材が出土した。

以上からＳＫ０４は火葬施設と思われる。中央のトンネル状の凸部や溝は熱効率を上げるための煙道と思われる。溝中の炭化材は、その部分に棒状の燃料が落ちた状態で残ったものであろう。

2　第２五輪塔群（第106図）

位置：第10地点。第１五輪塔群の斜面下。標高約367.5mに位置する。

調査経過：第10地点の斜面に直交する形でトレンチを入れ、五輪塔が横並びで検出されたため拡張し、五輪塔群を確認した。斜面の上部は仮設用道路で削平されていた。

覆土の堆積状況：五輪塔を埋没させている堆積層は骨片や焼土炭化物を含む崩落土層である。地輪（128・136）は基盤層の上にあるが他の五輪塔の各部分も地輪と同一レベルで出土しており、礫と共に斜面上方から落下したものと思われる。

遺構と出土遺物：

①テラス

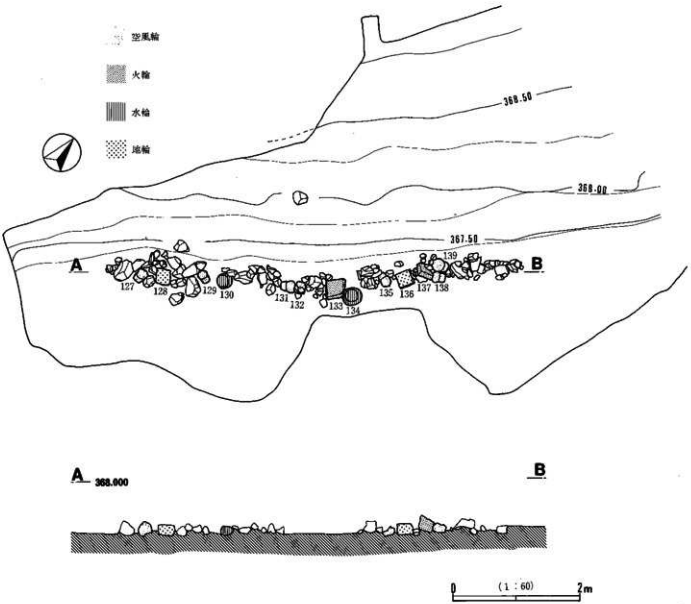
長軸6.6m、短軸約１～1.2mの南北に細長いテラスである。長軸方向の両端は崩落しており、南北方向にさらに続いていた可能性がある。工事前の地形図によると現在の果樹園を区画する主に南北に走る石垣（段切り部分）があり、第２五輪塔群の部分は石垣が崩落している部分にあたる。造墓の頃、段切りされた参詣路があり、その通路が崩落し一部小テラスとして残存していた可能性がある。その通路の段切り地形が現在の果樹園の区画として利用されていると推測する。

②五輪塔

テラス上に五輪塔と礫が南北一列に並べられたように検出された。

空風輪（127・129・131・132・135・138・139）７点、火輪（133・137）２点、水輪（130・134）２点、地輪（128・136）２点が覆土から出土した。その他にこの地点付近の表土層から空風輪（40）１点、火輪（39・44）２点、地輪（56）１点が発見されている。全体では空風輪８点、火輪４点、水輪２点、地輪３点となり、少なくとも組み合わせ五輪塔が８組あったことになる。

③火葬骨埋納ピットは検出されなかった。



第106図　対面所遺跡　第２五輪塔群（数字は遺物番号）

④火葬施設は検出されなかった。

このように第２五輪塔群は、下部施設や火葬施設がなく、地輪に対して空風輪の数が多く、地輪と空風輪・火輪・水輪が同一レベルで検出され、組み合わせを規わせるような集合がみられない。以上からこの五輪塔群は、斜面上方から落下した五輪塔がテラス状になった部分に横一列に礫と共に堆積したものと思われる。斜面上部には第１五輪塔群があり、ここから崩落したものが堆積した可能性があるが、既に削られてしまった仮設道路の部分に五輪塔群があった可能性もある。

3　第３五輪塔群（第100・107図）

位置：第６地点。標高約373・0ｍに位置し、第３五輪等群の火葬骨埋納ピットは第4五輪等群のそれより50cm以上低い位置にある。また、ＳＫ０１の火葬施設は斜面上段にある火葬埋納ピットより約1.7ｍ斜面下段にある。

調査経過：第６地点の表土剥ぎを行ったところ五輪塔を表土中から検出。Ｐ７グリッドでは斜面に沿っ

てトレンチを入れたところ、斜面上段から落下したと思われる五輪塔を出土したが、遺構の検出はなかった。しかし、斜面中段部にあたる急斜面から、焼土と炭化物が大量に混ざった黒褐色土を覆土とするＳＫ０１が検出された。Ｐ２グリッドの西側の斜面上部は先述した理由により調査できなかった。

覆土の堆積状況：焼土粒や焼骨片などが堆積層中に散在していた。斜面上部にあったものが崩落によって五輪塔と共に堆積したものと思われる。

遺構と出土遺物：

①テラス

明らかにされた範囲は南北12ｍ、東西約１ｍの範囲であり、削り出されたものと思われる。第１五輪塔群のように広がりを持つものもあり、斜面上段の第４五輪塔群の火葬骨埋納ピットもあわせ、未調査部分である斜面西側上段部に五輪塔と火葬骨埋納ピットが広がっていた可能性がうかがえる。

②五輪塔

地輪は火葬骨埋納Ｐ60とＰ61の間に出土したが、斜面上段から滑落したような、原位置から動いている状態であった。その他の五輪塔も滑落したものと思われる。

表土からは空風輪９点、火輪10点、水輪５点、地輪２点が出土している。滑落した覆土からは空風輪４点、火輪４点、水輪３点、地輪３点が出土した。合計空風輪13点、火輪15点、水輪８点、地輪５点が出土しており、組み合わせ五輪塔が少なくとも13組あったことになる。

③火葬骨埋納ピット

火葬骨埋葬ピットは７基（Ｐ49・Ｐ50・Ｐ58～62）で、焼骨が各ピット内から確認された。ピットの大きさは直径約30cmで、深さは浅いもので約５cm深いもので20cmであった。第１五輪塔群同様形状は簡型である。

④火葬施設

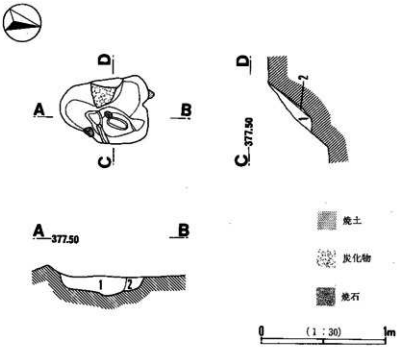
ＳＫ０１（第107図）

位置：（Ｐ２・Ｐ８の境界）第６地点。第３五輪塔群南東側。標高約371.3ｍに位置する。

調査過程：第３地点の五輪塔が滑落している地点を調査中に黒褐色の楕円形プランを確認。東西南北に４つ割にして調査を行った。

規模形状：70cm×52cm深さ15cmであり、南北にやや長いいびつな楕円形であった。

覆土堆積状況：上面を地滑りで失っており、浅い土抗を検出。焼土や炭化材が壁面にみられ、焼石・焼骨片を検出。崩落部分があり全体の構造は不明。



第107図　対面所遺跡　ＳＫ01

急斜面で崩落しており全体の構造が明確でないが、堆積状況などから火葬施設と思われる。

4　第4五輪塔群（第100図）

位置：第4・5地点東側斜面。標高373.3～374.3mに位置する。

覆土堆積状況：K22グリッドでは多くの五輪塔が覆土中に検出されたためトレンチで土層観察を行ったが、数回にわたる崩落により遺構全体が崩壊していると思われる。

遺構と出土遺物：

①テラス

標高374.4～373.3mの標高差約1mの所に、階段状のテラス3段が設けられている。その南側は未調査区のため規模は不明である。

②五輪塔

覆土中からは空風輪6点、火輪9点、水輪7点、地輪6点が出土している。しかし、いずれも原位置になく、斜面上段からの滑落によるものである。表土層では第5地点から空風輪3点、火輪23点、水輪1点、地輪3点が出土している。第4地点からは空風輪2点、火輪6点、水輪1点、地輪2点が出土している。合計空風輪11点、火輪32点、水輪8点、地輪9点が出土しており、32組の組み合わせ五輪塔がこの傾斜面にあったと思われる。

③火葬骨埋納ピット

火葬骨埋納ピット7基（P51～57）の中から火葬骨片出土。ピットの大きさは約30cm径のものが多く、遺構確認面から深さも5～10cmほどで、ほぼ円形であり、大きさ形状は第1から第3までの五輪塔群のものとかわりはない。

④火葬施設の検出はなかった。

第4五輪塔群の南東側の火葬骨埋納ピットのある面はテラスの崩落がなく、階段状のテラスが3段確認できたが、未調査部分もあり、五輪塔群の形状は不明である。第3五輪塔群のテラスも第4五輪塔群の直下にあり、テラスが第3五輪塔群と階段状に続いていた可能性がある。五輪塔は32組み以上あり、第1五輪塔群に相当する規模の五輪塔群が存在していた可能性がある。

第3節　出土遺物

1　五輪塔（第108～110図、第10～13表）

対面所遺跡の五輪塔はすべて四石五輪で造られている。地輪下になる台座2点がみられた。すべて安山岩製であるが、石材の質には若干の差はみられる。

五輪塔は対面所においては次のように分類した。

(1)　空風輪（第108図、第10表）

A．空風輪の境のくびれが少なく頂部が尖り、空輪側辺に丸みを持つ形態。栃の実型（第108図1）

B．　空輪の形態が丸みを帯び、最大径が空輪の中央部にあり、キュウピー頭型のもの。宝珠形。（第108図2・3・6～8）

C．空輪の頭部がやや潰れたようになったもので、側辺丸みを残す。（第108図9～12）

D．空輪頭部が三角錐であり、稜線があり、側辺が直線的なもの。（第108図15～19）（16世紀中ごろ）

E．空輪が算盤玉形であり、最大径空輪の方が風輪よりもかなり大きなもの。（第108図23・24）

F．風輪高がかなり低く、空輪の側辺や頭部に丸みを持ち頂部が角のように太く尖るもの。（第108図20・21）

G．空輪の頭部が平らであり、頂部が短く尖がり、風輪は空輪よりもやや大きくその下にホゾ部（舌部）を持つ。（第108図13）

J．最大径が風輪よりも空輪の方がかなり小さく、空輪の最大径部に稜を持つ。空輪の頭部は三角錐状である。D形に空輪は類似する。（第108図14）

I．空輪が細長く空輪の最大径が上部にあり、頂部は僅か尖る（第108図4・5）。B形に類似する。（第108図12）の空輪側面には梵字が4面にわたって墨書が描かれていた。しかし、調査時では明確であった墨書が時間の経過と共に不鮮明となり、解読困難となってしまった。五輪塔に梵字が彫られている例や、描かれている例の多くは東西南北の仏の名称であり、この空風輪の墨書も東西南北の仏の名称であったと思われる。中野市推定本誓寺跡から発見されている空風輪(註1)では梵字が彫られている。遺物番号297と形態など類似する。

第10表　対面所遺跡　空風輪の形態と出土地点別個数

形態 / 出土地	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合計
第1五輪塔群	0	11	9	3	2	0	1	0	5	1	32
第2五輪塔群	0	4	2	0	0	1	0	0	1	0	8
第3五輪塔群	0	6	5	1	3	0	0	0	1	0	13
第4五輪塔群	0	2	3	0	0	1	0	1	1	0	11
第2地点	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
第9地点	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
第14地点	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	6
表採	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	1	26	21	5	6	2	1	1	9	1	74

(2)　火輪（第109図、第11表）

I　軒の薄いもの

A．屋根が低く、流れも軒先の反りも少ないもの。（第109図25～28）

B．屋根がやや高く、屋根の流れが直線的なもの（第109図29～32）

C．屋根が高く、屋根の流れが弓なりになり、軒先の反りがあるもの（第109図45）

D．屋根が軒に比べ高く屋根の流れ上部が直線的なもの（第109図36・44）

E．屋根が軒に比べ極端に高いもの（第109図34・35）

II　軒の厚いもの

F．屋根の流れが非常に弓なりで、軒先がそりかえるもの（第109図33・48）

G．屋根が低く、屋根の流れが弓なりになり、軒先が反り上がるもの（第109図37・38）

H．屋根が若干高く、屋根の流れが弓なりになり、軒先が反り上がるもの（第109図41・42・46）

I．屋根が低く、屋根の流れが弓なりで軒の傾斜の急なもの。軒先の反り返りの激しいもの。（第109図39・40）

J．屋根が若干高く、屋根の流れが弓なりで軒の傾斜が急なもの（第109図43・47）

第109図44～48は火輪の上端にホゾ穴がある。第109図44・47・48はホゾ穴が大きく空風輪の凸部（第

108図13）が組み込む。第109図45・46はホゾ穴が細く、棒状の芯を入れ、空風輪の底面にもホゾ穴を設け組み合わせたと思われる。しかし今回の調査では空風輪の底面に穴の開けられたものは発見されなかった。

また（第109図26・30）には十字形の線刻が屋根上端にある。記号であるか、文字であるか不明である。

第11表　対面所遺跡　火輪の形態と出土地点別個数

形態／出土地	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合計	
第1五輪塔群	5	18	2	2	7	1	8	8	5	4	1	61
第2五輪塔群	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	1	4
第3五輪塔群	6	4	1	1	0	0	0	1	2	0	0	15
第4五輪塔群	0	4	4	0	5	1	6	2	5	3	2	32
第2地点	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
第9地点	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2
第14地点	3	5	3	1	0	0	0	0	1	0	0	13
合計	14	31	11	4	12	3	14	13	14	8	5	129

(3)　水輪（第110図、第12表）

A．高さが低く、中央部に最大径であるが水輪の上面中央部下面の横幅の差あまり無いもの（第110図52）

B．横幅があり高さがなくやや潰れたような形態（第110図51・54）

C．高さの割合に横幅がないもの（第110図53）

D．高さが高く、その割合に横幅がないもの（第110図55・56）

E．潰れたような算盤型のような形態（高さが低く横幅がある）（第110図49・50）49では側面に石を切り出した端面が認められる。

F．最大径が水輪上部にあり、下部がすぼまった高さのある形態（F類は今回調査では出土していない。）

第12表　対面所遺跡　水輪の形態と出土地点別個数

形態／出土地	A	B	C	D	E	不明	合計
第1五輪塔群	2	8	26	2	5	0	43
第2五輪塔群	0	1	1	0	0	0	2
第3五輪塔群	0	2	6	0	0	0	8
第4五輪塔群	1	3	4	0	0	0	8
第2地点	0	0	0	1	1	0	2
第9地点	0	0	1	0	0	0	1
第14地点	0	4	5	1	0	1	11
表採	0	1	2	0	0	0	3
合計	3	19	46	3	6	1	78

(4)　地輪（第110図、第13表）

A．横幅に対して高さが非常に低いもの（横幅／高さの比が1.6以上）（第110図59）

B．横幅に対して高さが低いもの（横幅／高さの比が1.5前後）（第110図58）

C．横幅と高さの比が1.4前後のもの（第110図57・64）

D．横幅と高さの比が1.3前後のもの（第110図61）